
魔法少女リリカルなのはDYNAMIC 新章！マリアージュ編

リリカルZ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはDYNAMIC 新章！マリアージュ編

【Nコード】

N2299R

【作者名】

リリカルZ

【あらすじ】

前作、「魔法少女リリカルなのはDYNAMIC」から三年後が舞台

突如として起こった怪事件に新たな組織「Dフォース」が挑む
サウンドステージの知識が殆ど無い為オリジナル要素満載になる危険性がありますが勉強しながら更新していく予定です

プロローグ（前書き）

知識不足は文章で補う・・・なんてカッコイイセリフが言えたら良いナア

プロローグ

機鋼帝国との戦いが終わって数年

ミッドチルダと地球の双方は目覚ましい発展を遂げていた

それはミッドには地球の技術

即ち「光子力」と「超合金Z」が送られてきたのだ

そして地球には「魔法」「デバイス」「バリアジャケット」等の技術がお互いに送られる事になる

双方科学と魔法の共存と言う形で発展を遂げている一方で、それを悪用する組織も少なからず存在した

多発するデバイスをを使用した犯罪に加えて近年増加してきたロボット犯罪

それに対抗する為旧機動六課を改め新たな部隊を設立する事になった
あらゆる犯罪に瞬時に対応する為魔道士、スーパーロボット、あらゆる面でのエキスパート達を選びすぐった精鋭部隊

その部隊の名は、かつて起こった大戦「オペレーションダイナミックウォーズ」を勝利に導いたメンバーと言う事で尊敬も込めてこう呼ばれていた

『Dフォース』と

『魔法少女リリカルなのはDYNAMIC 新章！マリアージュ編』

ブログ（後書き）

更新は非常に不定期になる危険性がありますが応援宜しくお願いします

第1話 新部隊 その1

暗く、じめじめした場所・・・と言うのが似合いそうな所であった
それ自体で此処が地下にあると推測出来た

そして、その中には無数のカプセルがあり、その中には女性が眠っ
ているように浮んでいた

更に奥に進むと其処には一人の科学者が忙しそうにキーボードを打
っていた

「フッフ、お待ち下さい、機鋼王様・・・貴方の野望・・・このド
クターキュラスが実現してみせますぞお！アアアアアッハハッハ
ッハ！！！」

天を仰いでキュラスと名乗った科学者が声高らかに笑った
そして、彼の口からはハッキリとそう告げられたのだ

機鋼王と

回りを美しい海で囲まれた場所

其処はかつて機動六課の隊舎であった

しかし、今は機動六課は解体され全く別の組織として活動していた
それが此処「Dフォース」である

正式名称「DYNAMICフォース」略してDフォースである
数年前に起きたオペレーションダイナミックウォーズを勝利に導いた
機動六課を再編成する折に市民達が尊敬を込めてこう呼んだのだ
と言っても、まだ設立して間も無い為人員はほぼゼロに等しい状態
なのだが

そのDフォースの海岸にある訓練場ではまだ少ない訓練生が一人の
女性仕官にこっぴどくしごかれているのが見えた

「どうした？それでも管理局期待のエースか？情けないぞお前ら」

青と紫をあわせた色のショートヘアで姉御肌の女性が訓練着を身に纏って新人達を叱咤していた

その前では大勢の新人達が肩で息をしている
相当ハードなトレーニングなのだろう

そして、それを隊舎の中から見つめる者も居た

「うわあ、相変わらずトーレ姉は厳しいツスねえ」

「まあな、あの兄貴仕込みだからしょうがねえって言ったらしょう
がねえけどよ」

同じ赤い髪の二人が見下ろしていた

そう、現在新人達に訓練を仕込んでいるのはDフォース所属のトー
レである

元ナンバーズのメンバーであったが機動六課解体の折に新たに設立
された部隊Dフォースに就任する事になったのだ

現在は彼女が新人達の教育を一手に引き受けているのだが、これま
た余りの厳しさ故に「鬼教官」とか「剣教官の再来」とも言われて

いる

因みに先ほど出た兄貴と言うのは言わずとしたあの男である

「まあ、鉄兄も今じゃ元の世界で教官やつてるみたいツスからねえ」
「甲児達も最後に来たのって半年前だよなあ」

そう言つて其処に居た赤髪の一人ノーヴェは呟く
すると隣に居たウエンディは溜息をついた

「はあ、次甲児さん達が来るのは何時ツスかねえ」
「次元渦の安定とかもあるから次に来るのは最低一ヶ月先だつてよ」
「あうう・・・一ヶ月も甲児さんに会えないツスかあ・・・寂しいツス」

これまた非常に残念そうにウエンディが呟く
それを横目で見ていたノーヴェが呆れる

「お前なあ、まだ甲児の事思つてたのか？あんなスケベつたらしの何処が良いんだよ？」
「そう言つてるノーヴェも満更じゃなさそうな顔してるツスけどお」
「ば、馬鹿！そんなんじゃねえよ！あたしは別にあんな奴に会えなくたってカマワネエしよお」

そうは言つが顔は真っ赤である
それを見てウエンディが面白そうな笑みを浮かべる

「ツンデレツスねえ、ティアナと同じで可愛いツスよお」
「一辺張り倒すぞてめえ！」

ニヤけるウエンディにノーヴェが拳を握り締めて怒鳴る

『お前ら、暇なら訓練に付き合え』
「「うっ！」「」

そんな二人にトーレの念話が響いた
見ると二人の方をトーレが見ている
かなり怖い顔で

『こっちはDフォース設立したてで人員が不足してるんだ！少しは
手伝え』

「りよ……」

「了解……ッス」

二人は渋々了解した
どうやら彼女の特訓は鉄也仕込な為かなり厳しい様子である
そして、その後二人はボロ雑巾になるまで訓練に付き合わされたの
は言うまでもない事実である

目を瞑ると決まってあの夢を見る
紅蓮の炎の中で大勢の人々が倒れている光景
そして、その奥に黒き漆黒の鎧を身に纏ったおぞましき姿の魔神
その魔神の手は血で汚れていた

そして・・・その魔神の目には涙が流れていた

「また・・・あの夢か・・・」

目を覚まして、スバルは自分の右腕を見た

何時の間にかスバルの右腕にはアームデバイスが起動していた
しかし、その姿は見慣れた姿の「リボルバーナックル」ではなかった
その姿は黒く尖った爪を持ち腕が肘辺りまで侵蝕さる形で取り付け
られた姿である

そして、その手の甲には一文字「魔」と書かれていた

「最近になって頻繁に夢を見るようになったなあ・・・何か嫌な予
感がするけど」

そう言っただけは左手の甲を見る

手の甲には何の変哲のない手であったが、手の甲には一文字、こう
書かれていた

「神」と・・・

「ゼノン・・・まだ私を守ってくれてるんだね」

左手を見てスバルは微笑んだ

もし、この左腕が無ければきっと自分はデビルに全てを侵蝕されて
いた筈である

自分の中には二つの魔神が眠っている

「神」と「悪魔」

二つの魔神が自身の所有権を巡って激しい争いを繰り広げている

その争いは時折激痛になって襲い掛かって来る事がある
もしそれで自分が負ける事があれば・・・恐らく自分は人間の姿を
失う事になる筈だ

『どうした？お主にしては気弱だなあ』

「リュウコン・・・アハハ、あたしらしくないね」

隣に置かれていた棒型デバイスの「リュウコン」が呟いた
それを見てスバルが薄笑いを浮かべる

『当然だ、お主はワシの主の身なんだ！少しは気を強く持って貰わ
ねば困るのだ』

「・・・御免、リュウコン」

そう言って再び俯く

すると突如リュウコンが一人で飛び上がりスバルの脳天にキツイ
一撃を当てる

スバルの頭には大きなタンコブが出来上がりそれを抑える

『だからさつきも言っただろう！気弱になるなと！』

「あうううう・・・ごめ〜ん」

涙を浮かべてスバルが頷く

『ほれ、そろそろ時間だろう？起きないとまたあのオッサンに叱ら
れるぞ』

「ヴォルツ指令の事だね・・・分かってるよ」

そう言ってスバルは立ち上がる

そして、自身の右腕のデバイスを解除する

だが、その手の甲にあった「魔」の文字は消える事は無かった
そして、それは左手の甲にある「神」の字も同様であった

ミッドチルダの研究施設で一人の科学者とユニゾンデバイスが研究
資料に目を通していた

「やれやれ、今更光子力のお披露目なんぞしなけりやならんとは面
倒臭いのお」

「そうは言わないでおきましょう、お父さん」

ユニゾンデバイスである「兜十蔵」と「兜剣造」が資料に目を通し
ていた

それは次回の学会で発表する予定の光子力と超合金Zの資料である
それを学会のメンバーに分かり易く発表する為に資料の整理をして
いたのだ

「光子力や超合金Zが平和利用される日を一日でも早くする為にこ
うしてやっているんじゃないですか」

「はぁ・・・相変わらずマジメじゃのお」

溜息をつきながらも十蔵は資料に目を通していている

「ドクター、これが今度の学会で発表する予定の資料です」
「まだまだ沢山ありますよお」

其処に二人の女性がドサリと資料を机の上に置く
それを見て剣造は頷き十蔵はゲンナリしていた

「何じゃア！この量はあー！」

「今度発表する予定の量産型マシンガーについての資料です」

「でも凄いですよねえ、ついこの間までチンプンカンプンだったマシンガーが今では此処で量産ミニチュラが出来るんだから」

剣造の手伝いをしていたウーノとクアットロが呟いていた

「全く、これじゃオチオチゆっくりする事も出来んわい・・・はあ、こんな時に甲児が居てくれれば話しが早いんじゃがお」

「無理を言うのは良くないですよ。甲児だって元の世界で学者勉強に忙しい筈なんですから」

「はあ・・・全く、老骨に鞭打ちおって！この親不孝者」

「そりゃどうも」

十蔵の愚痴を軽く聞き流して剣造は再び資料に目を通す

第1話 新部隊 その2

此処はミッドの広大な海上

その中を三機のマシンが高速で飛行していた

青、赤、緑の三機のマシンである

それらが既にマッハを越えるスピードで飛行していた

「翔、凱！ゲッター號に合体するぞ！」

「何時でも良いわよ號」

「任せてくれ！」

翔と凱が頷く

それを聞いて號がニツと微笑む

「ようし、行くぞ！チェンジゲッターアアア號！！！」

號が叫び三機のマシンが上空で一体のロボットになる

そして海上の中にあつた小島に降り立つ

青い体をした小柄なロボットである

神隼人が製作した後期型ロボット「ゲッターロボット」である

『合体プロセスは問題ないみたいですね、一文字三等陸尉』

「あつたぼうよお！合体とかは竜馬さん仕込みだからなあ」

トレーニングを見守っていた局員が呟く

そして一文字號三等陸尉がある人物の言葉を呟く

【流竜馬】

ゲッターロボのパイロットであり號達の直属の先輩に当たる

現在は地球で道場の師範をしているそうである

しかしゲッター操縦の腕前はかなりの物であり先輩としてもかなり出来た人間である

ミッドでの階級は三等空佐クラスでもあるが本人は大して気にしていない様子である

『それでは今からターゲットを展開しますので各個撃破して下さい』
「了解！んじゃ・・・行くぜえ！」

號が叫びレバーを握る

すると目の前のモニターにカウントが表示されそれが「0（ゼロ）」になると同時に複数のターゲットが展開される

「来た来たあ！行くぜえ、ナックルボンバアア！」

ゲッター號の両腕がジェット噴射を上げてターゲットを次々と撃破していく

腕が戻るとすぐ背後にターゲットが現れる

「それじゃ今度は、ブウウウメラソオオオサアアア！！！」

背中ファンを両手に持つ

するとファンからブレードが展開されてそれを投げつける

投げつけられたターゲットがブーメラソオオにより両断される

そしてその後すぐにまた別のターゲットが展開される

「今度はこいつだあ！マグフオオオオサンダアアアアア！！！」

「てて今は無いんだよな」

『そうなんですか』

局員は少し残念そうな顔をした

「どうやら真ゲッターを見たかったのだろう」

「まあ、今の状況だと真ゲッターなんて使う機会は無いからこのゲッターロボ號で充分よねえ」

「自分もこのゲッターロボは好きです」

「ま、何が来たって俺とゲッター號で叩きのめしてやるからよお」

號は上機嫌に鼻を鳴らす

其処に翔と凱がツッコミを言う

所変わり此処はミッドチルダ港湾警備隊の本部前

其処には大勢の小学生が社会見学の為にやってきていたのだ

それを指導員が指示する

その光景を窓越しで見つめる二人の女性局員の姿があった

一人は3年前にミッドで起こった戦い「ダイナミックウオーズ」を勝ち抜いた元機動六課所属で今は執務官をしているティアナ・ランスターである

そしてもう一人はそんな彼女の補佐を担当しているルネッサ・マグナスである

「社会見学みたいですわね」

「そうね、皆3年生位かしら」

窓越しに映る少年少女達を見て二人は呟いた

現在二人は此処の防災指令と会う約束をしていたのだ
そして、今はその指令の到着待ちである

「待たせたな」

扉を開けて入ってきたのは港湾警備隊の防災指令であるヴォルツ・スターンである

「いえ、それほど待つてませんよ」

「私事です」

気を利かせて言ったヴォルツに二人はかぶりを振った
それを聞いて安堵するヴォルツ

「おっと、失礼。港湾警備隊のヴォルツ・スターンだ」

ヴォルツは二人に軽く自己紹介をする
そして二人の前にある椅子に腰を掛ける
ふと、ヴォルツは部屋の回りを見回す
どうやら誰かを探しているようである

「あれ？ナカジマと暗黒寺はまだ来てないのか？」

「ええ、まだ到着していないみたいです」

「まったく、あいつは・・・」

思わずヴォルツは愚痴る

勿論ナカジマが遅れる事はまずない
遅れる原因というのは決まって

「すみません！遅くなりました」

勢い良くドアを開けて二人が入ってきた
ギンガ・ナカジマともう一人

「まったく、そんなにせかさなよお、こっちは夜勤明けでまだ眠いっ
つうのによお」

大きな欠伸をしている男、暗黒寺である
今はギンガと暗黒寺でコンビを組んで事件の捜査を主立っている

「またお前が原因か、暗黒寺」
「うっせえ、人を勝手に呼びつけたんだ。少し位遅れてもバチはあ
たらんだろっ」

ヴォルツの言葉に返すように言う暗黒寺
全く悪びれた様子は感じられない
それを見てヴォルツは溜息をつく

「んで、俺らを呼んだって事は・・・礼の事件ヤマか？」
「ああ、その通りだ」

さっきまでとは打って変わって重い表情を浮かべる一同
そう、その事件こそティアナが今回ミッドに帰って来た理由の一つ

であるのだ

「んじゃまずは資料と行くか・・・」

暗黒寺はそう言って懐から数枚の何かを取り出す
それを一同が眺める
だが・・・

「あ、暗黒寺さん」

「お前・・・」

「な、何ですか？・・・これは」

「・・・」

暗黒寺が出した物を見てティアナとヴォルツは暗黒寺を睨みルネツ
サはどう対応すれば良いのか困った顔になりギンガは固まっていた

「あん？どした」

一同の状況に気づいた暗黒寺が皆を見る
すると皆は黙って暗黒寺が出した物を指差した
其処には写真ではなく・・・キャバクラや風俗などの会員券やチケ
ットの束であった

「どわあ！違う、違うぞ！これは断じて受け狙いでやった訳じゃな
いからな！」

慌ててそれを仕舞い今度はちゃんとした写真を机に置いた
其処には無残な姿で殺された局員達と奇妙な姿で死んでいる被害者
達の写真であった

「局員達の死因は鋭利な刃物による斬殺・・・だが、どうにもこっちの仏さんの死に方が分からねえ」

「この被害者の死因は喉下に刃物を突き刺す・・・しかも自分でです」

ギンガが付け足すように言う

それを見て更に険しい顔になる一同

「自殺・・・ですか？」

「只の自殺なら別に大した事件じゃないんだが・・・こつも大勢の局員が仏にされてるんだ。只の事件って訳じゃないだろう？」

「暗黒寺の言うとおりだ。どうもきな臭い事件だな」

ヴォルツが腕を組んで不機嫌な顔をした

無理もない

こうして若い局員達が犠牲になっているのだからだ

そして、ティアナ、ギンガ、暗黒寺の三人が心にある事を思っていた

また、あの時のような戦いが始まるのかと

そう思っていたのだ

そんな時であった

窓の外から子供達の声が響く

何だと思つて一同はとりあえず事件の事は置いておいて外を見る

第1話 新部隊 その3

海岸では大勢の子供達が一人の隊員に釘付けであった

青いポニーフィッシュな髪型に鉢巻を巻き、左手には長い棒・・・
嫌、棍を握り締めた少女である

港湾警備隊防災課特別救助隊所属のスバル・ナカジマがローラーブ
ーツ型デバイスのマツハキャリバーを用いて水面を高速移動してい
るのだ

それを見て大勢の子供達が声を上げていた

その声が微かに聞こえたスバルは少し嬉しかった

「うーん、やっぱり良いなあ、こういうの・・・んじゃ、もう一丁
やるよお」

『あんまり調子に乗るなよ』

「分かってるって」

リュウコンに釘を刺されつつもそれを頷き更に速度を上げる

水面の水が更に勢い良く舞い上がる

それを見て見学していた子供達のテンションは更にヒートアップし
ていた

しかし隣で見ていた指導員は少し呆れた顔をしていた

（あんまり調子に乗るなよ、スバル）

（アハハ、了解）

指導員の念話を聞きスバルが反省する

そして一通り見せた後早速皆の元へターンして戻ろうとした時であ
った

ドクン

そう、響く音がした

それは正に心臓の鼓動のようであった

その音を聞いたとき、スバルはハツとした

見ると、さつきまで展開していなかった右腕には一人でにアームドデバイスが取り付けられていた

しかも、その姿は以前と同じ禍々しい悪魔の腕を思わせていた

そして、その手の甲に禍々しい色で「魔」と書かれた文字が浮き上がったのだ

それとほぼ同時に左手の甲には神々しい色で「神」と書かれた文字が浮き上がる

その二つが激しく発光しだしたのだ

そして、その発光はスバルに激しい激痛を与える

(こ……こんな時に！)

その激痛はスバルの意識を刈り取るほどでもあった

視界がどんどん曇っていく

まともに立っているのも辛くなってきた

そして、大勢の子供達の見ている前でスバルは水面化に沈んで行った
それを見た子供達が騒ぎ出す

「え、今度は潜水の実演です。今の隊員は水面化の救助活動も可能なんですよお」

子供達を安心させるように指導員が上手いごまかしを言う

それを聞いて皆が安心する

だが、そんな子供達から視線を外し、念話を掛けたときの指導員の顔は曇っていた

(スバル、一体どうした？応答しろ！スバル！)

指導員が必死に叫ぶ

その頃、意識を失ったスバルは深い海の底を漂っていた
未だに両手の甲が輝いている

(痛い・・・体が・・・引き千切られそうに痛い・・・)

体に走る激痛に顔が苦痛に歪んでいく

それに加えて水中だと言うので息苦しさも加わっていく
最初は我慢していたがやがて限界に達し大きな気泡を吐き出す
必死に這い上がろうとするも体の痛みでまともに動く事すら出来ない
やがてスバルの意識は徐々に薄れてきていた

『時八来タ』

「だ・・・誰？」

『我が半身ヨ・・・今こそ目覚メノ時ダ』

そう言つてスバルの前に現れたのは漆黒の姿をした魔神であった
その姿は神とはいえない、むしろ悪魔その者であった
禍々しい風貌をした悪魔がスバルを見下ろしている

『サア、今こそ人ノ姿ヲ捨てテ魔神ニナレ！』

「い・・・嫌だ！」

『何ダト？』

「嫌だ！・・・私は魔神になんかなりたくない・・・もう・・・あんな恐ろしい力なんか欲しくない！」

スバルは魔神の言葉に拒否の姿勢を取った

その目は先ほどの輝きを失った目ではなく強い闘志を滾らせた目に変わった

それを見て魔神が溜息をつく

『マダソノ時デハ無イト言ウノダナ・・・イイダロウ、ダガイズレオ前ノ体ハ俺ノ物ニナル・・・忘レルナ!』

そう言い残して魔神は消えた

すると右手のアームドデバイスも消えていき元の腕に戻った

そして痛みが消え意識がはつきりしたした途端物凄い息苦しさを感じた

(忘れてた!今海の中だったんだっけ!マツハキャリバー!)

スバルが念話で命じる

するとマツハキャリバーから魔法で出来たレールが放たれる

ウイングロードである

その上をマツハキャリバーが高速で滑走する

そして海面を勢い良く突き抜けて再び大勢の子供達の前にスバルが現れた

それを見て子供達の歓声が響き渡る

隣では指導員が安堵したような顔をしていた

そして、そんな子供達に向かってスバルがやんわり微笑みながら手を振った

窓越しからスバルの実演を見ていたルネッサは感動したような驚いたような目をしていた

「凄いですね、実演では水面化の事まで見せるんですね」

「……………」

「計算していましたが、実に10分以上も潜っていましたよ……相当鍛えているんですね」

ルネッサが何時の間にか計っていたのか腕に付けた時計を見てそう言
った

だが、

「違う……今のは実演なんかじゃない」

「え？」

ティアナがそれを否定した

その時のティアナの顔は非常に引き攣った顔になっていた

「まさか……またあの時のようになるの？スバル！」

ティアナは恐怖していた

またあの時のような惨劇が起こるのではないかと

そう思っていたのだ

そして、それこそが、

これから起こるであろう戦いの幕開けになるとはまだ誰も知らなかつたのだ

次回予告

スバル

「私の中で激しく戦い会う神と悪魔
でももうちょっと時間を考えてよお、これじゃ仕事にならないよお
え？次元の穴を破って誰か来たって？
何か胡散臭い人達なんだけどお！」

次回『登場、テキサスマック』

次回もこの小説にテイク・オフ！」

第1話 新部隊 その3 (後書き)

感想などお願いします

皆さんの一言が作者の力になります

詳細設定 その1 (前書き)

ちよつとだけ紹介します

詳細設定 その1

第1話の主な登場人物（前作から）

スバル・ナカジマ

港湾警備隊所属の隊員

魔道士の中では珍しく三つのデバイスを使用している
しかし、最初に使用していたリボルバーナックルはる事情から封印
している

その為主に使用しているのはローラーブーツ型デバイスのマツハキ
ヤリバーと棍型のデバイスであるリュウコンである

その正体は過去にデビルマジンガーが作り上げた魔神戦士でありマ
ジンガーになれる素質を持つ

だが、物語上部にて四千年前の過去に飛ばされ、其処でゴッドマジ
ンガーであるゼノンと出会い相思相愛の関係になる

だが、そんな二人を悲しい運命が引き裂く結果となってしまう

その時過去移動の影響で魔力が著しく低下していたスバルは敵の機
鋼獣を相手に瀕死の重傷を負ってしまう

そんなスバルを助ける為にゼノンはスバルと一体化した

それによりスバルは二つの魔神の力を手にしたのである

だが、それは同時に彼女に終らない苦しみを強いるという皮肉な結
果になってしまった

ティアナ・ランスター

時空管理局執務官

かつて使用していたクロスミラージュと兄ティータ・ランスターが手渡してくれたアンカーガンを使用する
当初は魔力は並であったがDYNAMIC編で自身の中で眠っていた魔神の魂が覚醒し、その際に魔力も上昇
結果として第一線を戦える程にまで成長した
射撃のセンス、戦術、体術などあらゆる面で抜きん出ている
スバルの事情を理解しておりどうか力になりたいと思っている
また、何故自分に魔神の魂があるかはまだ分からない
魔神戦士であるスバルと非常に相性が良く、二人のコンビネーションはほぼ最強とまで言われている
射撃戦がメインだがクロスミラージュをガンブレードフォームにすれば格闘戦もこなせる

ギンガ・ナカジマ

時空管理局所属の陸士
スバルの姉であり「タイプゼロ」と呼ばれる戦闘機人
IS「振動破碎」を所持しており戦闘力は高い
現在は敏腕刑事の暗黒寺とコンビを組んで数々の難事件を解決している
しかし、今回の事件の捜査に際し再びティータ達とタッグを組むことになった
本人は至ってマジメだが、暗黒寺に良く振り回されている

暗黒寺

時空管理局の刑事
魔力は持って居ないが持ち前の勘と経験で多くの事件を解決してきた
ティータの兄であるティータとは当時コンビであったが、今はギン

ガとコンビを組んでいる

年上の女性が好みでありギンガは只のパシリとしか思っていないと言いつ張っているが何かと彼女を気遣っている所も見られる

過去に上司を殴り倒した上に発砲しそうになった為殺人未遂を掛けられ一時は刑事を辞めようとまで思っていたらしいが機鋼獣の襲来に際し管理局がギンガをお目付け役につけると言う条件を元に一時釈放した

その後は機動六課メンバーと共にオペレーションダイナミックウオーズを勝ち抜いた

兜剣造

時空管理局の科学者

かつて機鋼帝国と戦っていたが現在は第一線を退いて科学者の道を進んでいる

ミッドチルダに光子力と超合金Zを平和利用出来るようにする為に日夜奮闘している

また、その傍らでは来るべき新たな侵略者に備えての計画「マジンガー計画」が進行されている

兜十蔵

剣造と同じく時空管理局の科学者でありユニゾンデバイス

片目をなくしており、その顔も初めての者が見たらまず怖がるだが、本人は至って優しい老人であり子供には優しい

だが、少しスケベなのが玉に瑕と言う所である
現在は剣造の補佐をしている

関連用語

・オペレーションダイナミックウオーズ

ミッドチルダを巻き込んだ人類と機鋼帝国の戦い

その際に人類を救ったのは人類の英知が生み出した巨大な鉄の巨人、通称「魔神」のお陰である

それを皮切りに地球とミッドチルダは互いに貿易を行う事になった

・Dフォース

正式名称「DYNAMIICフォース」

オペレーションダイナミックウオーズを勝利に導いた機動六課を再編成する折に市民達が尊敬を込めて呼んでいた為そのまま部隊名にした

魔道士、マジンガー、あらゆる面でのスペシャリストを集めた機動部隊である

近年増加する魔道士犯罪とロボット犯罪の鎮圧を目的として活動している

しかし設立されて間もない為人員は少ない

・伝説の五大魔神

ミッドチルダを救った五体の魔神

「マジンガーZ」「グレートマジンガー」「ゲッターロボG」「鋼

鉄ジューグ」「グレンダイザー」

この五体を総じてそう呼んでいる

・魔神戦士

スバルの正体である

自我を持ったマジンガーが生み出したいわばコピーである
だが、スバルの場合はその際に自我が芽生えてしまい離反
結果として失敗作とみなされる

魔力は平均的だが能力はかなり高い

また、魔神戦士は皆マジンガーになれる能力を持つ

だが、スバルのように二体の魔神の能力を持つ者は極めて稀である

・戦闘機人

機鋼帝国が魔神戦士を模して作り上げた人造人間

だが、その殆どが失敗に終り全て失敗作として処分される予定であ
ったが機鋼帝国壊滅の折に兜家が総力を挙げて全ての戦闘機人に更
正プログラムを施し今では普通の生活に溶け込んでいる

・ナンバーズ

正式名称「ロストナンバーズ」

機鋼帝国が作り上げた最初の戦闘機人

だが、感情が芽生えてしまい結果として全て失敗作とされこのよう
な不名誉な名前を付けられた

廃棄処分を待つ身であったが創造の手により救い出され以後彼と行
動を共にする

現在Dフォースのメンバーは殆ど彼女達である

主な人員の転属先

ウーノ、クアットロ

創造の元で光子力と超合金Zの平和利用の為の研究

ドゥーエ

諜報部員として活動中

トーレ、ノーヴェ、ウエンディ、ディエチ、チンク、セツテ
Dフォースの隊員

セイン、オットー、ディード

聖王教会に所属

・次元の穴

地球とミッドチルダを繋ぐ唯一の通り道

次元が不安定であり半年に一回しか行き来できない
その為現在急ピッチで新型次元航行船の建造を急いでいる

・機鋼帝国

かつてミッドチルダを滅ぼそうと暗躍した巨大帝国

機鋼王こと兜原蔵を中心に大型AMFを内臓した機械の獣「機鋼獣」
を駆使して暴れまわった

だが、其処へ現れたマジンガー達の活躍により機鋼帝国は陥落、人
類は勝利するに至った

・プロジェクトF

兜翼が自身のクローンを作る為に立ち上げたプロジェクトだが、それを未来で悪用し生まれたのがフェイトとエリオ、そして甲一であった

三人は普通に年をとっているが翼のクローンである錦織翼は完成度の高いクローンである故か年を取らない
その為彼女は既に千年以上は生きている

第2話 登場、テキサスマック その1 (前書き)

今回少しグロイ活写があります
ヤバイ人は気をつけて下さい

第2話 登場、テキサスマック その1

ティアナとルネッサ、ギンガと暗黒寺、そしてヴォルツが見守る向こうの海辺ではスバルが大勢の子供達に港湾警備隊について色々と言っていた

と、言うかそう言う風に見えたのだから実際にはこちらまで聞こえる筈がないまあ聞こえたらそれは問題だが

すると話しを終えたのか今度は指導員が子供達を連れて港湾警備隊の中を案内しだした

スバルは其処で子供達と別れて別の入り口から隊舎の中に入っていく

「ちよつと、様子を見てくるわ」

ティアナが少しスバルが心配になったのか一人部屋を出て行くそんなティアナをギンガ達が見ていた

「あの・・・スバル隊員には過去に何かあったのですか？」

状況を理解出来て居ないルネッサが一同に問うたすると顔を暗くしながら暗黒寺が口を開く

「お前さん、数ヶ月前に起こった凶悪強盗事件は知ってるな？」

「はい、数名の武装グループが銀行を襲撃して、次々と人質を殺害するという忌まわしい事件であった事は覚えています」

ルネッサでも知っている事件

それは、今から数ヶ月前にとある銀行で起こった事件であった

当時、仕事帰りだったスバルが近くに居た為その救助を行ったのだ

その時は何分多方面からの要請もあり同員達が到着するのにはかなり時間が掛かったのだ

その間も犠牲者が次々と出ていた

スバルは必死に犯人を説得していたが犯人達は聞く耳を全く持っていなかった

そして、悲劇は起こった

「大人しくしゃがれ！」

武装グループのリーダーと思わしき男が引つ張り出してきたのはまだ年端もいかない子供であった
年齢からして5歳位の子供である
目には恐怖の余り止め処なく涙が溢れており終始泣き喚いている
そんな少年の後頭部に銃口を突きつけた

「良いかバカ共！よく見やがれ！これが俺達のやりかたよお！」

男が下卑た笑みを浮かべた

そして・・・少年の後頭部に押し付けられた銃から発砲音が響いた
少年の額には小さな穴が開き、其処から噴水の如く血が吹き出たのだ
そしてだらしなく前のめりに倒れる
スバルの目の前にであった

「どうして・・・どうして殺したんですか！この子はまだ子供だったんですよ！」

残虐極まりない行為であった

それに耐えかねたスバルが叫ぶ

だが、その男の返答はこうであった

「そんなの知るか！殺したいから殺したんだ！文句あつか！」

その時の犯人達はスバルが港湾警備隊の隊員だからと言う理由で完全に舐め切っていた

そしてニヤニヤしながら今度はスバルに銃口を突きつける

「お仲間を呼ばれると厄介なんでな、今度は嬢ちゃんの眉間に風穴開けさせて貰うぜ」

男がそう言つて引き金を引く……だが、弾丸は出なかった

それもその筈である、その時既に……男の腕は無かつたのだから

「ひ……ヒエエエエエエエ！」

男は自分の腕がなくなつていたことに気づき血の気が引いた顔になる
その腕のあつた箇所は鋭利な何かで切断されたようであつた

そして、目の前には右腕に悪魔を思わせる腕をしたスバルが立っていた

「許さない……お前らは……絶対に許さない！」

そう言つてスバルは犯人達をにらみつけた

その時のスバルの目は真っ赤になつており、正に悪魔を思わせる顔であつた

「ひいひい！や、野郎共！何ぼけつとしてるんだ！さつさとこいつを殺せえ！」

男が命じた直後、数名の犯人達が一齐に発砲する

銃から放たれた無数の弾丸は真っ直ぐスバルに向かって飛んでいく

だが、それをスバルは右腕を翳しただけで防いでしまった
弾丸の前にまるで見えない壁があるかの如くその場で止まってしま
ったのだ

そして、そのままフツと手を押すような仕草をした

すると止まっていた弾丸は一斉に撃った犯人達の元へ戻っていった
全員が正に蜂の巣状態になってしまった

そしてバタバタと倒れていく

最早残っているのは腕を失った男だけであった

「た、頼む！自主する！罪を償うから命だけは助けてくれ！」

男がスバルの前で土下座して命乞いした

だが、スバルはそんな男の残った腕を無情にも踏み潰した

グシャツと嫌な音が辺りに響き渡り男の手は潰れ、指が四散した

「ぎゃあああああああああああああああ！」

男が潰れた手を見た

そして絶叫した

痛みが全身を駆け巡っているのだ

痛みで気絶しそうである

殺される

そう思えた

何故なら、目の前のスバルは・・・笑っていたのだから

不気味な笑みを浮かべたスバルが右腕についた血糊を舐める

「不味い血だ・・・」

吐き捨てるようにそう言う

そして腕を振るった

今度は男の片足が無くなった
足は宙を舞いそのまま地面に落ちる

「があああああああああああああ！」

男がまた叫ぶ

そしてそのまま逃げ去ろうとする
その格好は余りにも無様であつた
まるで芋虫である

そんな男の足をスバルの右腕が掴む

「無様な芋虫にこんな物は必要ないね」

そう言つて男の残つていた足を強引に引き千切る
血がまた噴出す

男の目には涙が溢れ出ていた
助けてくれ！誰か助けてくれ！

そう叫んでいたのだ
だが、残つていた人質も興味本位で見に来ていた野次馬達も凍りつ
いた顔をしていた

無理もない

極悪な犯罪者を手玉に取っているのはまだ二十歳にもなっていない
少女なのだから

そして、右腕で男の顔を掴むとそのまま自身の元へ引き寄せた
マジマジと男を見つめる

男はガタガタ震えて言葉が出ない状況なのだ
いや、もしかしたら出血多量で喋る事も出来ないのかも知れない
そんな男に向かつてスバルは最後にこう言い放つた

「あの時お前はこう言つたな？『殺したいから殺した』……と……」

それを・・・その声を聞いたスバルは何も考えられなくなった
殺す、殺す、もつと、もつと殺す

そう呟いていたスバルが今度は人質達の方を向く
あつちにまだ生きてる奴等が居る・・・あいつらを殺せば・・・き
つともつと楽しくなる

そう思っていたのだ
だが、

『いけない、そんな事をしてはいけない！』

「！！！！、今の声は・・・」

脳裏に別の声が響いた

男の声であった

それはスバルが聞き覚えのある人物の声であった
知っている

スバルはその声の主を知っているのだ

『マタ貴様力？』

『もう止める！これ以上はスバルが悪魔になってしまつ』

『都合ダ！悪魔ニナレバモットオオクノ人間ヲ殺セルンダカラナ』

『そんな事はさせない』

スバルの頭の中で神と悪魔が激しくぶつかりあっていた

その衝撃はスバルに激痛となって襲い掛かる

「くうう・・・うああああ・・・あああああああああああ
！」

やがて、大声で絶叫した

目を大きく見開き視点がおぼつかない

声がかれるまで出続けた

そして、声が出なくなつた直後、スバルはその場に倒れた
右腕と左腕の文字は消え、右腕も元に戻っていた

それから少ししてティアナと数名の局員達が駆けつけたが、其処は
正に地獄絵図であつた

犯人と思わしきグループは全員死亡

中でもリーダー格の男の死の様はそれは無残な物であつた

両足、片腕がなく、残っていた腕も指が親指しかない状態であつた
そして、頭部が無い、まるで力任せに握りつぶされたかのようにあ
つた

「うっ！」

思わず口元を抑えた

胃の中の物が一齐に吹き出そうになる
しかしそれをぐっと堪える

固唾を飲み込んだティアナは近くで倒れていたスバルの元へ駆けつ
けた

「スバル！起きなさい！スバル！！」

ティアナがスバルを抱き起こして必死に揺らす

だが、スバルはティアナの声に答える事は無く、その顔は苦痛に歪
んでいた

その後、人質は無事に解放され、スバルはティアナが要請した救急
車で直ちに病院に搬送された

病院の一室でスバルは眠っていた
以前のように苦痛の顔こそしていなく、静かに眠っていた
そして、病室にはティアナの他に、ナカジマ家と兜剣造と十蔵が来ていた

「剣造さん、スバルは一体どうしてしまったんですか？」

ティアナが剣造に聞く
心配なのだ

共に戦った仲間であり相棒であるスバルの身に一体何が起きたのか
知りたかったのだ
そんなティアナに剣造はこう告げた

「恐らく、今彼女の中で「魔神化」が始まったんだ」

「魔神化？」

「剣造さんよお、スバルは目を覚ますのか？」

ゲンヤが聞く

同様にクイントとギンガも心配になった

「目は覚ます、だが、恐らくこれから先彼女には己自身との戦いが待っている筈だ」

「己自身との・・・戦い？」

「君達も知っての通り、スバルはあのデビルマジンガーが作り出し

た『魔神戦士』だ。だが、その彼女の中には同時に『ゴッドマジ
ンガー』が眠っている。それが互いに争いあっているんだ」

「一つの体に二つの魔神が居るのは事実上不可能な事じゃからのお」

剣造と十蔵がそう言った

「そ・・・それじゃ！もしスバルが・・・スバルがそれに負けたら
どうなるんですか？」

「その時は・・・彼女は人間ではなくなり・・・魔神になる」

剣造が重い顔でそう言った

それを聞いた一同の顔が重くなる

「なあに、ようは負けなけりや良いんじゃ！その為にはあんたらが
支えてやれば良いんじゃよ」

「そうね・・・私達は家族だもんね」

クイントがギンガとゲンヤを見た

そして、ティアナも拳を握り締める

「世話が焼けるけど、私には大事な相棒だからね」

「すまないな、ティアナちゃん。迷惑掛けちゃってよ」

「もう慣れました」

ゲンヤの謝罪にティアナは笑って答えた

第2話 登場、テキサスマック その2

「そんな事があったのですね・・・」

ギンガと暗黒寺の言った事をルネッサとヴォルツは聞いていた
実際にヴォルツがこの話しを聞くのは二度目になる

戦闘機人よりも前に魔神により作られた戦士
魔神戦士

恐るべき力を持ちながらもその力に苦悩する者
それが魔神戦士であつたのだ

「さあてと、どうする？ 執務官が居なくても話しは出来るが・・・」
「話しは私が話します、続きをお願いします」

ルネッサが暗黒寺に話しを続けるように進める
凜としたその顔からは多くの修羅場を潜り抜けた顔が見て取れた
暗黒寺はそれを瞬時に見抜いていた

(どうにも、今回の事件は只じゃすまなそうだな)

帽子を軽く動かし暗黒寺は内心そう愚痴っていた

その頃、ティアナは一人ある場所に向かっていた
それは、港湾警備隊が先ほど子供達に実演を見せていた海岸沿いで
ある

そして、其処ではバリアジャケット姿のスバルが壁を背にして右腕
を押さえていた

スバルの右腕には無数の血管が浮かび上がっておりそれを痛そうに
抑えている

「スバル」

「あ、ティア！」

ティアナを見たスバルは咄嗟に自分の右腕を隠して作り笑顔を見せた
ティアナもそんなスバルの気持ちを察したのか笑顔を見せる

「久しぶりね」

「うん、こうして会うのって何時振りかなあ？」

「甲児さん達が来た際に一度集まったから・・・」

「うわあ、半年振りだねえ」

甲児達が来たのが約半年前なのでそう言う計算になった
今甲児達は元の地球に居る

そして今の時期は地球とミッドを繋ぐ次元の穴の具合が非常に不安
定な為次に安定になる一ヶ月後まで来れないのだ

今現在急ピッチで新型の次元航行船の製造を行っているがあの強力
な次元渦を切り抜けるのは難しいらしく難航している

「此処に来たのも仕事？」

「まあね、あんたも随分その役職さまになってきたじゃない」

「そう言うティアこそね」

「有難う」

スバルの褒め言葉に少し嬉しそうな顔になりながらも返す
懐かしい会話である

機動六課に居た頃はお互いすぐ近くに居たからこうして語り合えた
が今は皆それぞれの道を歩んでいる

スバルは港湾警備隊に

ティアナは念願の執務官に

エリオとキャロは自然保護官に

號達はDフォースの機動部隊に入っている

他にも大勢の仲間達が居た

皆それぞれの道を行っている

スバルが頻繁に連絡を行うので皆別に懐かしむ事もないのだが

「それでも向こうの甲児さん達に連絡できないのが少し寂しいねえ」

「まあ、仕方ないわよ。まだ次元空間の通信も普及してないからね」

そうなのだ

次元の向こうに居る地球とは未だに連絡は取れないため非常に不便
なのだ

不安定な次元空間を無理矢理行こうとすれば次元の渦に巻き込まれ
てしまい二度と出られない危険性もある

それに次元空間は未だに道な部分が多い為解明に大勢の科学者が動
員しているが未だに解明には時間が掛かっている

「ところでスバル・・・右腕・・・大丈夫？」

「え？ああ、大丈夫大丈夫！もう全然平気だよ」

スバルは大きく右腕を振るって見せる

既に右腕には血管は浮き出ではおらず元の腕に戻っていた

だが、ティアナは見ていたのだ
実演中にスバルの身に起こった事を

また中で二つの魔神が争っていたのだ

それが今スバルを苦しめている要員である

魔神化

魔神戦士にのみ起こる現象である

魔神になってしまう現象

これにスバルが負けた場合、スバルは人間の姿を失い魔神になってしまう

そうなれば恐らく自我をも失い破壊の化身となる事は見て取れた

「ねえ、ティア・・・ティアのやってる仕事って・・・例の事件？」

「そうよ」

「・・・また、あんな事件になるのかなあ？」

スバルの顔が重くなる

それはティアナも同様であった

3年前の事件

機鋼帝国との戦いであった

大勢の人が無くなった

そして、その戦いで異世界の住人である者達と出会えた

それが兜甲児達であった

鉄の巨人であるマジンガーやゲッターを駆使して機鋼帝国と戦い苦

しい戦いの末にそれを打ち破る事が出来たのだ

その後、甲児達は各々の道へと戻って行った

兜甲児は元の科学者への道へ進み

剣鉄也はDフォース、並びに防衛隊の教官を務めることになり

流竜馬はミッドと地上の二つの間で道場を経営しており、半年間ご

とに交代で師範を行っているかなり忙しい身である

同じくチームメイトである神隼人は新型ゲッターの製造に携わる事

になる

車弁慶はそのテストパイロットを勤める事になる

宇門大介はフリード星の復興の為に一度フリード星に戻った

草薙剣児はレーサーとなっていた

皆それぞれの道に進んでいた

ミッドでは彼等を尊敬の念を評しこう呼ばれていた

「伝説の五大魔神」と

「犯人の目星はついてるの？」

「犯人は自分を「マリアージュ」と名乗っているわ」

「マリアージュ・・・かあ」

スバルがふとそう呟いた

そんな時であった

突如海上付近の上空で巨大な次元の歪みが現れた

「何！」

「次元湾曲！まさか」

二人がそれを見た

そしてその中から一体のロボットが現れた

ロボットはそのまま海上に落下した

巨大な水しぶきを上げて海に落ちる

「あれって・・・」

「ロボット！！！」

二人が見た感想であった

大きさは20m以上はあるであろうロボットであった

そのロボットが突如海上で起き上がる

その姿は明らかに異質であった

まるで古き時代のテキサスに居そうなガンマンを思わせる格好であった

「ティアナ執務官！」

「スバル！」

「おいおい、何だよありゃあ！」

海上に落下した衝撃を聞きつけてルネッサ、ギンガ、暗黒寺の三名が駆けつける

そして更に見学に来ていた子供達もやってきた

そんな中、テキサスロボットがズシンズシンと海上を歩いてやってきた

思わずスバル達が構える

しかし陸地に出る前にロボットは其処で立ち止まった

そして下に居た一同を見た

『OH、小サナボーイエンドガール。驚カセテシマツテソーリーネイ』

ロボットから聞こえたのは奇妙ななまりをしたアメリカンな話し方をした男の声であった

『ダーイジヨウブダイジヨウブネイ、ミーはユー達のフレンドネイ。アンダースタンド？』

ロボットから発せられた言葉は日本語と英語の合わさった奇妙な話し方であり理解に非常に苦しむ物でもあった

回りで見ていた子供達は巨大ロボットが現れた為に更にテンション

が上がる

そんな中、ロボットの帽子が突如浮上して陸地に降り立つ
そしてその中から二人のパイロットが現れた

二人共やはり西部劇で出てきそうな格好をした姿である

「ヘロー、エブリバディ！ミィの名前ハ『ジャック・キング』コノ
ロボット『テキサスマック』ノパイロットシテマース。宜シクデー
ス」

ジャックが子供達に向かって自己紹介をする
すると子供達も返すように返事をする

「ハジメマシテ、私ハ妹ノ『メリー・キング』デース。宜シクオ願
イシマース」

続いて隣に居た女性も自己紹介をする
それをスバル達は黙って見ていた

「難だろっ？あの人達・・・」

「初めて見る人達だね」

「お知り合い・・・ではなさそうですね」

「私達もああ言うのは初めて見るわ」

ルネッサの言葉にティアナは返した
そんな一同の向こうではジャックとメリーが子供達に質問攻めにあ
っている

だが、二人は何処か楽しそうである

流石ロボット乗りは肝っ玉が据わった連中が多い
そう改めて実感出来た

第2話 登場、テキサスマック その3

「オウ！スルトユー達はアノゲッターチームノフレンドナンデスカア？」

「ま、まあそうですね」

その後、ジャックとメリーは先ほど居た部屋に戻り二人と話しをする事になった

しかし相変わらず話し方が変わってる為に聞き取るのが大変であった

「ねえ、その話し方何とかならないんですか？」

「トクデスカア？コレハ生キ様デスカラカエラレマセーン。ソーリーネイ」

「モウ、兄サンツタラ」

ジャックのジョークにメリーは笑みを浮かべる

しかし一同は笑えていない

「何か変な奴がやってきたなあ」

「こんな人達がああ、竜馬さん達とお知り合いだったなんて」

「竜馬さん達の世界って一体どうなってるんだらう？」

実はティアナ達はまだ甲児達の世界に行った事が無いのだ

その為甲児達の地球に興味があるのだ

その上こんな変わり者の二人が来たら更に興味が沸いてしまうのも無理はないのだ

「ねえねえジャックさん！甲児さん達って元気になりましたかあ？」

スバルが身を乗り出して聞いてきた
それにジャックは答える

「元氣モ元氣、モー滅茶苦茶元氣デシタヨオ、特ニボス辺リ何カ」
またミッドにいきでえええ！』ツテ騒イデイタ程デスカラネエ」
「ホントホント、皆樂シミニシテルワヨオ」

相変わらず変な口調で二人は話す

だが、甲児達が元氣だったのを聞けただけでも良かった
たった半年ではあるがそれでも心配になっってしまうのだ
しかし、そこで問題が浮上した

「それじゃ、どうして貴方達はこちらに来られたんですか？確か今
次元空間は大荒れに荒れてて移動は出来ない筈ですけど」

「ソレガ全クワカラナイデース」

「氣ガツイタラ此処ニイマシタ」

二人共お手上げであった

それは二人が早乙女研究所を飛び立った直後であった

突然次元湾曲が起こりそれに吸い込まれてしまったというのだ
そして気がつくとは此処ミッドチルダに転移していたと言うのだ

「それって・・・」

「また、デビルマジンガーの仕業じゃあ！」

スバルとティアナは互いに見合った

暗黒寺とギンガも不安の顔になる

ルネッサはそのデビルマジンガーと言うのを知らないのだが顔つき
が重くなる

デビルマジンガー

ミッドチルダを混沌の危機に陥れようとした張本人であり恐ろしい力を持った魔神である

それは異世界にいた筈の甲児達をこちらに呼び寄せられる程の力を有していたのだ

だが、そのデビルマジンガーは3年前に兜甲児の操る魔神「マジンカイザー」で倒された筈である

もうこの世に存在しない筈なのだ

それなのに何故

そう思えた

「とにかく、此処じゃあんな大きなロボット置けないよねえ」

スバルが呟いた

その通りだ

ミッドと地球が貿易を行うようになったのは良いが未だにミッドには巨大ロボットは普及してないのだ

その為港湾警備隊にはテキサスマックのような巨大ロボットをしまうスペースなど何処にもないのだ

うーんと皆が悩む中、ティアナがデバイスの通信システムを使い誰かに連絡を送った

その相手とは

「號、聞こえる？」

號だった

『何だよティアナ？こっちは訓練中なんだ、手短に頼むぜ』

「今からこっちに来れない？ちょっと話したい事があるんだけど」

『話したいこと？デートの誘いだったら何時でもOKだぜ』

「バカ」

號のお決まりのジョークにティアナが冷たく言い切った
それに対し號が「ヒデ〜」と唸ったのは言うまでもない

「ちょっとあなたに預かって欲しい物があるのよ、それで来て欲しいの」

『預かって欲しい物？何だよ』

「来れば分かるわよ」

『つたく、分かったよ、んじゃさつさとそっち行くからよ』

そう言って通信が切れた

「今のつて號君達？」

「そうですよ、今の所ロボットを格納できるのは此処ドミじゃDフォー
スしかないですから」

「Dフォース・・・ああ、確かお前らが以前いた機動六課が元だっ
た場所だったよな」

「うん、懐かしいなあ」

スバルは思い出す

なのはや鉄也達にしごかれた毎日

甲児や剣児達が度々自分達の入浴を覗いていた日々

そしてその後さやかやつばきに半殺しにされた日々

甲児の目を盗んでマジンガーに乗ってパイルダーオンしようとして
失敗した日々

ゲッターの合体しようとしたら目が回ってそのまま墜落してゲッター
チームにこっぴどく怒られた日々

色々な思い出が詰まった場所なのだ

「其処でなら貴方達のロボットも格納出来ると思います」

「助カリマース」

「ドウモアリガトウデース」

二人がそう言う

するとそれから少しして三機のマシンが海岸に降り立った

青と赤と緑のマシンである

丁度その頃、見学していた子供達は宿舎内でお弁当を食べていたがその三機のマシンを見るや否や一目散に海岸に飛び出していったそしてそのマシンを見る

ふと、生徒の誰かが叫んだ

「ゲッターロボだ！」

そう、これこそミッドで開発されたゲッターロボ
ゲッターロボ號なのだ

「よう、出迎えご苦労」

ゲットマシンから降りてきた號が子供達に手を振る
それに答えるように子供達も大きく手を振る

「ほら號、早くしないとティアナが怒るわよ」

「自分もそう思うよ」

「分かってる分かってるって」

赤い髪的女性である翔にと茶色の角刈りの凱に言われて號は渋々歩いた

子供達は未だにゲッターロボとテキサスマックに群がっている

まあ子供としてはこんな大きなロボットが目の前に居るのだから騒

がない筈がないのだ
何処の世界でも子供達は巨大ロボットが大好きなのだろう

「うっす、来たぞお」

ティアナ達の居る部屋の扉を開けて號達が入ってきた
それにティアナが相変わらずだなあと聞いたそんな視線で號を見る

「久しぶりね、ティアナ」

「翔もホント久しぶりね」

そんな號は放っておいてティアナは翔と握手を交わす
同じ女性同士なので話しが合うのだ
そして隣に居た凱とも握手を交わす

「夢が叶ったんだねティアナ」

「まだただだけどね」

そう言ってお互い笑みを浮かべる

「なんだよ、俺には無しかよお」

一人仲間はずれにされた號が不貞腐れていた

「あんたは別に良いでしょうが」

「そうそう、それに號とティアは後でお楽しみがあるんでしょ？」

「ナ！！！」

「え、マジ？」

スバルの何気ない一言にティアナは顔を真っ赤にし號は少しだが鼻の下を伸ばした

そんな號には鉄拳を顔面に当てて、スバルにはそのまま踵落としを決めた

「何脈絡のない事言ってるじゃおのれはあああああああ！」

「あつうつうつ！そんな怒らなくても良いじゃん~~~~、ちよつとしたお茶目だよお」

「うっさいわポケエエエエエエエ！」

そう言つてその後スバルに固め業を決める
地球で言うコブラツイストだ

「いだだだだだだだ！ギブギブ！ティア、ギブ~~~~」

「うっさい！一辺マジで頭冷やせええええええええええ！」

「うぎゃあああああああああああああああああ！」

スバルのギブアップサインを無視してティアナが更に締め上げる
そろそろ止めないとヤバそうだが、誰も止めに入る気はない
スバルの自業自得なのだからだ

「フフ、相変わらずねえ二人は」

「元氣そうで自分も安心しましたよ」

「あいててて・・・ヒデエ目にあっただぜ」

三人はそう言つてスバルとティアナを見ていた

「あの、ティアナ執務官と彼等はお知り合いなのですか？」

ルネッサがゲッターチームを見る

「おう、何せ俺とティアナは恋人同士『喧しい！』ガハアツ！」

號が説明しようとした矢先に何時の間にかスバルをその辺に置いていたティアナの飛び蹴りが號の後頭部に命中しそのまま床に倒れるそして今度は號にチヨークスリーパーを掛けるギリギリと號の首がティアナの腕で締められる

「いででででで！ティアナ、幾らなんでもやり過ぎだああああああああ！」

「うっさい！あんたも相変わらずで安心したわ！」

額に青筋を浮かべながら言うティアナ
そして締められる號

だが、其処で皆は気づくだろうが

今ティアナと號は密着しているのだ
即ち

「ん？ティアナ・・・お前胸大きくなつたなあ」

「な！」

「いやあ、最初はスリーパーで気づかなかつたけど・・・結構ボインじゃんお前」

「黙れええええええええええ！」

今度は顔を真っ赤にしたティアナが號を思い切り壁に叩きつける
顔面から叩きつけられた號が「ギャア」と声を上げてそのまま床に
崩れる

その一部始終をジャックとメリーは見ていた

「二人ハトツテモ仲良イデスネイ」

「ホント、才似合イヨオ二人共」

「ななな！」

今度はジャックとメリーに言われて更に顔を紅くするティアナ
最早完全に皆に玩具にされてるティアナであつたりする

「んでよお、俺達に預かつて欲しい物つて何だよ？」

鼻っ柱を抑えながら號が尋ねた

それに対しティアナがジャックとメリーを……そして外にあつた
テキサスマツクを紹介する

「はあ！あれを預かれつて言うのか？」

「Dフォー・スなら簡単でしょ？」

「無茶言つなよ！トーレ隊長にどやされるの俺達なんだぞ！」

「正しくは號だけだけどね」

「その通りだ」

「ひ、ヒデエ……」

號は一人真っ青になった

すると突然號の通信機に通信音が入る

號はそれを開くと其処には見覚えのある顔が映つた

『號、何時まで油を売っているんだ？』

「ゲエツ！トーレ隊長！」

『こっちは人手不足で困ってるんだ！早く戻って来い、それともまた特訓のメニューをプラスされたいのか？』

「め、滅相もない！」

號は物凄い勢いでかぶりを振った

トーレの特訓メニューは只でさえキツイのにその上更にプラスなどされたら体がもたないのだ
それを號は知っていたらしい

「トーレさん、お久しぶりです」

『ん？其処に居るのはティアナにスバル、それにギンガに暗黒寺か』

「お久しぶりです」

「よお」

「お久しぶりですね、トーレさん」

ティアナ達が通信機から映るトーレに言葉を送る
それにトーレも頷く

其処でティアナの頭の電球に明かりがついた

「トーレさん、そっちにロボットって預けられますか？」

『ドックに開きはあるが・・・何があつたんだ？』

「実は・・・」

ティアナは突然空を開いて落ちてきたテキサスマックとジャック、
メリー兄妹の事情を話した
それを聞いたトーレは黙って聞いていたが、やがて

『成る程な、こちらとしても巨大ロボットの戦力は欲しい、今の所甲一もフェイトお嬢様と共に別任務で居ないし、こちらは一向に構わないぞ』

「有難う御座います」

『それから、もしミッドに来ているのならたまにはDフォー스에顔を出して行け。妹達もお前達に会いたがっているからな』

「はい、近い内にお伺いいたします」

『待っているぞ』

そう言つてティアナ達から號に視線を移す

『號、今から5分以内に戻つて来い。でないと特訓メニューにプラスをつけるぞ』

「今すぐ戻ります！」

綺麗な敬礼ポーズで號は承知した

そして通信機が切れる

「急げえ！」

真つ青な顔になつた號が急ぎ部屋を出て行く

それも一目散にである

それを見て呆れる一同

「そ、それじゃ、ジャックさんとメリーさんは僕達についてきてください」

「ワツカリマシタア」

「感謝シマアス」

そう言つてジャックとメリー、そして翔と凱も出て行く

それを見て肩の荷が降りたと思うティアナであった

「執務官も大変ですね」

「古い付き合いが多いつても考え物よ」

同情するルネッサにそう呟くティアナ

そんな中、ふとスバルは空を見上げて呟いた

「エリオ達・・・今頃何してるのかなあ？」

スバルが見た青空には急ぎ港湾警備隊を後にしようとしている號のマシンとその後を追うように飛び立つ翔と凱のマシン、そしてテキサスマックの姿があった

次回予告

號

「別世界で環境保護隊として活躍していたエリオとキャロ
そんな二人の前にも次元の歪みが起き何かが振ってきた
その人物とは？」

次回『極悪一家！その名は『あばしり』』

次回もこの小説にチェンジゲッタアアアアアアアア！

第3話 極悪一家！その名は『あばじり』 その1（前書き）

今回はエリオ、キャラロ中心です

第3話 極悪一家！その名は『あばしり』 その1

ミッドチルダとは違った世界の環境保護区域

其処では今一人のハンターが必死に逃げ回っていた

「冗談じゃねえぜ！こっちは楽しくハンティングをしてたつてのによお」

ハンターがそう呟きながら逃げていた

どうやらこのハンターは違法ハンティングをしていたようである
そしてそれを追い掛けるのは・・・

「待ちなさい！此処での狩猟行為は禁止されています。直ちに武装を解除してください」

ハンターの上を追い掛けるのは成熟した竜に乗った少女である

「竜って・・・原始時代かよ！」

ハンターがそう呟く

因みに言うが・・・原始時代にだって竜は居ないぞ
とツッコミを入れるがそれが今のハンターや少女に聞こえる筈はない

「悪いがよお・・・落ちて貰うぜ嬢ちゃん」

ハンターがデバイスの銃口を竜の上に乗った少女に狙いを定める
その時であった

大地を高速で駆け抜ける音がした

「な、何だ！」

音がした方を見た

其処には赤い髪をして身の丈以上はあるであろう大太刀を両手に持った少年が迫ってきていた

「こ、此処にも・・・管理局の魔道士が」

驚き狙いを少女から少年に変えて弾丸を撃つ

しかし、少年はそれを軽々と払い除ける

「馬鹿な・・・太刀で弾丸を！」

「動かないで下さい！」

少年が自身の太刀型デバイス「ザンクーガ」の先端を構えてハンターを睨む

それには全く動けなかった

少しでも動けば真つ二つにされるだけであった

その為に動けなかったのだ

「直ちに武装を解除して下さい、抵抗しなければ、弁護の余地がありません」

「・・・分かった・・・だから命だけは助けてくれ・・・」

ハンターは観念したのかデバイスを放り投げてその場で頭を下げた直ちにそのハンターにはバインドが張られ拘束された

「こちらエリオ・モンディアル」

「同じくキャラ・ル・ルシエ。ハンターを只今逮捕しました」

『お疲れ様。すぐにそのハンターは仲間の局員が確保に向かうから

安心してね』

通信を送っていたのは二人の上司であるミラ・バーレットである

『それで直ぐにで悪いんだけど二人にはすぐに今指定したポイントに向かつて欲しいのよ』

「何かあったんですか？」

『実はそのポイントに謎の次元反応が起こってね。すぐに調査して欲しいの』

「わかりました、すぐに向かいます」

エリオとキャロはそれに頷く

ミラも少し申し訳なさそうな顔をしているが頷き通信が切れた

「謎の次元反応って何だろうね？」

「また甲児さんの知り合いの人が来たのかなあ？」

「それだときつと良い人達だよ」

キャロがそう言う

実際二人はまだ甲児達の世界に行った事がないのだが甲児の人柄から察するにきつと皆良い人達だと思っっているそうである

しかし、二人はまだ知らない

これから会う一家は天下無敵であり、史上最強の極悪一家だと言う事を……

エリオとキャロ、そしてフリードは報告のあった場所に来ていた

「此処がそうみたいだけど・・・」

「うん」

二人はその箇所を見て見た

其処には小さなクレーターが出来ており其処には何も無かった

いや、クレーターの中心点に一つ、人の手が埋もれていたのであった

「エリオ君！アレ！！」

「た、大変だ！」

エリオはすぐさまそのクレーターの中心地点に埋もれていた腕を掴む
すぐさま引き上げて助けようとしたのだ

だが、その時であった

直後その腕が伸びてきてエリオの顔を掴み上げたのだ

「なっ！！」

「うおおおおおおおりゃあああああああ！！」

そしてクレーターから出てきたのは2m程はあるであろう大柄の青年であった

その青年がエリオの頭部を掴み上げていたのだ
凄まじい力だ

軽く人の頭を握りつぶせる程の

「くっ！！」

体を捻ってその拘束を抜けたエリオが地面に降り立ちザンクーガを構える

「おうおう、ガキが刃物振り回すなんざ物騒じゃねえか！」

「貴方達は一体何者ですか？」

エリオが青年に向かってそう言う
その時であった

「キヤアアアアアア！」

「キヤロ！」

突如上空から悲鳴がした

上を見上げるとフリードの上にキヤロともう一人見慣れぬ男が居る
そして男が手に持っていたのは……

「ウヒヒ〜、年相応の可愛い柄のパンティーを履いてるのねえ〜ん
僕ちゃん惚れちゃったかもお」

そう、男が握っていたのはキヤロのパンツであった
それを見たエリオは目が点になっていた
そして後ろの青年は顔を手で覆っていた

「またやってるよ兄貴の奴」

「えっと……兄弟なんですか？」

「まあな」

青年が答える

その刹那であった

エリオは背後に殺気を感じた
そして咄嗟に振り返りザンクーガを前に構える
其処に細身の太刀が当てられた
太刀と太刀がぶつかり火花が舞い散る
その目の前には一人の女性が居た
ショートヘアの髪に鋭い眼光をした細身の女性である

「やるじゃねえか。俺の太刀をかわしたのはお前が始めてだよ」

「さ、三人！」

「いや、三人じゃないぞい！」

「え？」

また声がした

今度は老人の声にも思えた

其処には更に二人の男が居た

一人は背丈の低い、恐らく小学生を思わせる

しかしその顔は黒い覆面を被っていた

そしてその隣にはダンビラを持った老人が立っていた

その二人の元に彼等は集まる

キヤロもエリオの隣に降り立ち、フリードも同様に降りる

「教えてください！貴方達は一体何者なんですか？」

「小僧、知りたきや死ぬ覚悟をしな」

「死ぬ・・・覚悟？」

老人が呟いた言葉にエリオは首を傾げた

「左様、我等天下に名高き悪行一家、殺し、窃盗、痴漢、何でも御座れの極悪一家、その名も『あばしり一家』とはわしらの事よお」

まるで歌舞伎の舞いのように老人がそう叫んだ
だが、それを聞いてエリオとキャラコが更に首を傾げた

「えっと・・・あばしりって・・・」

「なぬ？お主わし等を知らんのか？」

「はい・・・全く知りません」

「な、何ジャとおおおおおおおおおお！」

その一言を聞いて老人は愚か男達はカルチャーショックを受けた
それほどまでに衝撃的だったのだろう

「し、信じられるか？親父」

「俺達を知らないなんて一体どうなってるのねん？」

「あばしり一家って聞いたら大抵の奴等震え上がって失禁する筈だ
ぜ」

「可笑しいのぉ、一体どうなっておるんじゃ？」

ヒソヒソと話し合っていた

しかし、その中でも一人は違っていた

「そんなこたあ俺はどうでも良いさ」

それはさきほどエリオに太刀を当てた女性である
その女性が一步前に出てエリオに太刀を向けた

「おい、お前・・・名前は？」

「時空管理局所属、環境保護団体隊員、エリオ・モンディアルです」

「何だ？それ・・・長ったらしい名前だなあ？」

女性は片眉を上げる

それは後ろに控えていた一堂も同じであった

「時空・・・なんじゃ？」

「聞いたことないなあ」

「此処の警察じゃねえのか？」

老人と男達がそう言い合っていた

しかしそんな事を女性が気にしていなかった

「まあそんなことあどうだって良い。お前、俺の太刀を受け止めたんだ、結構な腕前だそうじゃねえか？」

「ど、どうも・・・」

褒められたのかと思いいリオは軽く頭を下げる

しかしそんな女性が言ったのは思いもしない一言であった

「あばしり一家の紅一点『あばしり菊の助』お前とサシで勝負がしてえ」

「しょ、勝負！！！」

いきなりの一言にエリオは驚く

「どうした？怖気づいたのか？」

「何を言ってるんですか？僕には貴方と戦う理由なんてありませんよ！」

「だったらその理由を作ってやらあ！」

菊の助の言葉と同時に再び太刀が振られた

そして再びエリオがそれをかわす

凄まじい速度の太刀であった

並みの人間であれば交わす事など出来なかった
だが、それをエリオが交わしたのだ

(偶然じゃねえ・・・こいつ俺の太刀をかわしやがった・・・並の人間じゃねえってのは確かだな)

菊の助は再び自分の一撃をかわしたエリオを見てそう察していた

「ほほう、あの菊の助の太刀を交わすとはあの小僧中々やるのお・・・
・じゃが、あの小僧まるで闘気が無い・・・これではサシにならない
のお・・・仕方ない」

老人がそう言うのと隣に居た少年に指示を送る

「吉三!」

「あいよ!」

老人の指示に吉三と呼ばれた少年は頷く
すると自身の顔を覆っていた覆面を取り払いそれを生き物のように
伸ばす
その先には

「はっ、キャロ!」

そう、キャロであった

キャロは吉三の伸ばした覆面に囚われ木の上に縛られてしまった
フリードも同様に雁字搦めにされて木に縛り上げられてしまった

「な、何でこんな事をするんですか?」

「おっと嬢ちゃん動かない方が身の為だぜえ」

吉三の顔が突如強張る

「左様、爆破の天才あばしり吉三の身に纏う服は全て爆薬の混ざった服、即ちそれは爆発する服なのだよ、少しでも衝撃を与えよう物ならその娘とトカゲは木っ端微塵よ」

「くっ、今すぐキャロを離して下さい！」

エリオが老人に叫ぶ

するとその前に菊の助が立ちはだかる

「だったら、俺と勝負しな」

「なっ！」

「ダチを人質にとりゃ嫌とは言えないだろう？ダチの命が惜しかったら闘え！」

菊の助がエリオに向かって太刀を向ける

「早く決めた方が良いよお、でないと君のお友達を生首で迎える事になっちゃうかもよお」

吉三がそう言つて覆面を握る力を強める

あと少し強く握れば爆発するだろう

それを見てエリオは覚悟を決めた

「わかりました・・・この勝負、受けます」

「ハン、それでこそ男だぜ」

菊の助はニヤリを笑う

反対にエリオは険しい顔をしていた

そして、その戦いを四人の男達とキャロ、そしてフリードは黙って見ていたのであった

第3話 極悪一家！その名は『あばしり』 その1（後書き）

次回はエリオ対菊の助
どうなる？

第3話 極悪一家！その名は『あやしり』 その2（前書き）

エリ才対菊の助

開幕

第3話 極悪一家！その名は『あばしり』 その2

「ヘッ、久しぶりだぜ、てめえみてえな骨のある奴と戦えるなんざよお」

「僕が勝つたら、キャラを離して貰えますよ」

「勝てたらな」

菊の助とエリオの二人が太刀を交わす

太刀同士がぶつかり合い激しく火花を散らす

凄まじい一撃の応酬であった

音の無い森の中で金属のぶつかりあう音だけが響いていた

それをキャラとフリード、そして男達は見ていた

「すげえガキだなあ、あの菊の助の太刀を捌くなんざあ並の奴じゃ出来ねえぜ！」

「うむ、あの少年・・・相当修羅場を潜り抜けていたらしいなあ」

「凄まじいのねえん。このままじゃ菊ちゃんどうなっちゃうのねえん」

「黙っておれい！五エ門！あばしり一家の締めは代々一対一が掟、手出しはならん！」

「けどよお親父い！」

「直次郎、お前が菊の助を心配なのはよくわかる、だからじゃ！此処は菊の助に任せるのじゃ」

男達はそう言っ黙って見ていた

「エリオ君・・・」

キャラも同じようにエリオの戦いを見守っていた

「はああああ！」

「うおおおお！」

菊の助とエリオの太刀が再びぶつかり合う

しかし今度は無傷では済まなかった

お互いの肩を掠めたのだ

掠った肩から血が吹き出る

だが、致命傷ではない

「ちつ、只のガキだと舐めてたがどうやら本気にならねえとやべえらしいな」

菊の助はそう言うのと刀を投げ捨てた

そして慣れた動きで構えを取る

「刀を捨てた！」

「生憎、俺はこっちの方が性分なんでなあ、お前はそれで良いぜ」

菊の助はそう言った

だが、エリオはそれに反して自身もザンクーガをその場に突き刺す

そして自身も構えを取る

それを見て菊の助は少し驚いた

「お前……」

「昔、ある人に教わったんです。男の勝負は正々堂々で挑むって、貴方が刀を捨てたのに僕が刀を持っていたらその勝負は正々堂々じ

やなくなる、だから僕も素手で行かせて貰います」
「フツ、良い根性してるぜてめえ・・・死んだら骨くらいは捨ってやるよお！」

今度は拳の応酬であった

刀を握っていた時とは違い菊の助の拳の一撃は凄まじい物であった拳を掠ったエリオの頬からうつつすらと血が滲む
反撃にとエリオも拳を振るう

菊の助はそれを交わす

薄皮一枚であった

同じく菊の助の頬からもうつつすらと血が滲む

(こいつ・・・俺の拳を交わすどころか反撃しやがった・・・おもしれえ！)

今度は菊の助の膝蹴りがエリオの溝に決まった
体がくの字に曲がる

「くっ・・・うおおおおお！」

しかしその直後エリオの右回しが菊の助の顔面に迫る

それを片腕で防ごうとする

ミシミシと骨の軋む音がした

それに菊の助の顔が歪む

それからは激しい拳と蹴りの応酬であった

殴られれば殴り返し

蹴られれば蹴り返し

お互いの体からは血が流れていた

「エリオ君・・・お願い、もう止めてえ！」

キャラロが叫ぶ

だが、それで止める筈は無い

「お嬢ちゃん、幾ら叫んでも無駄だよ、こつなつた菊ちゃんは止まんないからさあ」

吉三が言う

すると目の前で菊の助が突如構えを変えた

「あの構え！まさか菊の助！」

「正直此処まで使わされたのは久しぶりだぜ」

菊の助が両手を前に押し出すような構えを取った

それはまるで某ストリートファイトゲームで鉢巻の男が撃つ技にも似ていた

「構えが・・・変わった！」

「見せてやる！一子相伝の殺人拳、『あばしり八神拳』その身で味わえ！」

菊の助が放った一撃

それが猛烈な気となってエリオに振りかかる

全身に痛みが走る

顔が歪んでいく

「エリオ君！」

キャラロが叫ぶ

だが、エリオに答えられる余裕などない

それは見ていた男達も同じであった

「あばしり八神拳・・・代々あばしり家に伝わる一子相伝の殺人技であり、それは触れずして相手を殺せる無敵の殺人拳よ」

老人が言う

「ぐ・・・ぐうああああ！」

エリオが苦しそうな顔をする

その向こうでは菊の助も同様に苦しそうな顔をしていた

「どうした？死にたくなけりゃ下がりな・・・それとも死にたいのか？」

「僕は・・・死ぬ気は無い・・・それに・・・負ける気も無い！負ける訳にはいかないんだああああああ！」

咆哮する

すると彼を覆っていた気を自身の魔力が弾いた

弾かれた気が辺りに四散する

そして、気を放った菊の助は片膝をついた

「菊の助！」

「「菊ちゃん！」」

「エリオ君！」

皆が一斉に叫ぶ

だが、それを菊の助が制した

「勝負は決した、吉三、約束どおりその子を離してやんな」

「あいよ」

吉三が言うとキャラロとフリードを拘束していた覆面が外れ二人は自由になる

「エリオ君！」

「キャラ・・・キャラ・・・良かった・・・た・・・」

キャラロがエリオの元へ駆け寄る

だが、エリオはキャラロの目の前で意識を失い倒れてしまった

「え、エリオ君！」

「心配すんな、気絶しただけだよ」

菊の助が言う

それに他の一同が集まってくる

「大した奴じゃ、菊の助を相手に勝つ奴が居るとは・・・」

「今でも信じられないのねえん」

「ああ、あの菊ちゃんか負けるなんてよお」

男達も同じように言っていた

「さて、俺達は負けたんだ、あんたらの言う事に従う事にするよ」

「わ・・・分かりました」

キャラロは言いながら少し震えていた

無理もない

勝ったとは言えエリオはボロボロの状態、目の前には菊の助並の強さを持つ男達が居るのだ

その気になればフリードが居てもまず勝てないだろう
そう思っていたのだ

「なあに、わしらあばしり一家は仁義を通す一家じゃ、お嬢ちゃん
の後ろから切り倒すような真似はせんから安心せい」
「ど、どうもです」

老人がそう言ったので少しだが安心したキャラ口である

第3話 極悪一家！その名は『あばしり』 その3

戦いを終えたキャラとエリオは次元反応の起こった地点で出会った極悪一家「あばしり一家」を連れて本部に戻っていた。そして、その事務室の中ではミラ・バレットがあばしり一家と対面していた。

「わしこそがあばしり一家の大黒柱「あばしり駄工門」じゃ」
「そこで僕ちゃんがあばしり一家の長男の「あばしり五工門」ねえん」

「俺はあばしり一家次男の「あばしり直次郎」だ」
「んで俺はあばしり一家末弟の「あばしり吉三」ね」

あばしり一家の男達がそれぞれ自己紹介をした。だが、ミラもキャラも少しだが青ざめていた。無理もない。

目の前に居るのは殺しのプロ集団なのだから。犯罪と言う犯罪に手を染め殺してきた人間数知れず。そんな極悪非道の集団が今目の前に居るのだから。だが、聞いた話によると今は堅気になっているようであり一安心と言える一安心である。

「それでわしらあばしり一家唯一の娘である」
「「あばしり菊の助」だ。宜しく頼む」
「ど、どうも・・・」

ミラは頷いた。

「ふむ、それで、例の少年は無事かな？」

「エリオの事でしたら心配はありません、彼は頑丈ですからすぐに意識を取り戻してくる筈です」

「それは良かった」

駄エ門は安堵した

気のせいかわ菊の助も安堵していた

それを見たキャラコが

「皆さん、本当は優しい人達なんですね」

と呟いた

「なあに、堅気になっちまってから退屈してたせいだよ」

「そうそう、本当は俺達殺しの集団なのにさ、親父がいきなり堅気になるって言い出すから」

「黙れい！あばしり一家唯一の娘菊の助にせめて女の子らしい生活をさせたい一心のことなのじゃ！文句は言わせんぞお！」

ダンと杖を床に叩いて駄エ門が言う

それには流石の五エ門達も黙る

「な、何か複雑な理由がおありなのですね」

「まあお気になさらずに」

心配するミラを駄エ門が手を出して制する

そんな時であった

「す、すみません・・・遅れました」

今しがた目を覚ましたエリオが事務室にやってきた

顔には怪我の跡を思わせる絆創膏が張られている

「おお、エリオ殿！無事であったか」

「はい、少しまだ痛みますが仕事に支障はありません」

そうは言っているが体には包帯が巻かれている

そんなエリオに菊の助が近づくと

「流石だぜ、俺のあばしり八神拳を食らってその程度で済むなんざよお」

「は、はあ・・・」

「全く、この世界にはてめえみたいな化け物が居るのかあ？」

「え、エリオ君が化け物？」

「そりゃそうだぜ、菊ちゃんのおあしり八神拳を食らって生きてる奴なんざ今まで居なかったんだからさあ」

あばしり一家全員がエリオを買っていたのだ

それにはエリオも少しだが気恥ずかしい気分になった

「ところで、此処はわし等の居る世界とは違うと言うのは本当の事なのか？」

「ええ、先の次元反応からして恐らく貴方達は元居た世界から此処に来てしまったのでしよう」

「信じられねえなあ」

「ホントなのよねえん」

「全くだぜ」

皆が言っていた

そりゃいきなり信じると言うのは無理な話である

「じゃが、先のエリオ殿の強さを見るに此処が別世界じゃと言つのは理解出来るのお」

「ご理解頂けましたか？駄工門さん」

「うむ・・・よし！これも何かの縁じゃ！わし等はこれよりエリオ殿の傘下に下り世の為人の為に尽くそうでは無いかあ！」

「えええ！いきなり何ですかあ！」

駄工門の言葉にエリオは驚く

勿論キヤ口も驚く

「そりや良いぜ、俺もお前の傘下につくなら文句はねえぜ」

「ええ！菊の助さんまで・・・」

「僕ちゃんも良いのねえん でも、菊ちゃんは渡さないのねえん」

「あ、あのお・・・僕の話しを聞いて・・・」

「俺もお前になら付いて行っても良いぜ。何せあの菊の助を負かした奴なら文句はねえぜ」

「な、直次郎さんも！」

「これからは宜しくな、エリオの兄貴」

「あ、兄貴いい！！」

吉三の言った一言にエリオは目を点にする

其処へ駄工門が現れる

「左様、これからはわし等あばしり一家はお主の傘下に下るのじゃ、ワシの事は親父とでも思ってくれい」

「んじゃこれからは僕ちゃんが兄貴になるのねえん」

「おう、頼むぜ兄弟」

「な、何でそうなるんですかああああああああああああああああああああああああああああ！！！！」

哀れエリオ・モンディアル

あばしり一家紅一点である菊の助との一騎打ちに勝ったばかりにあばしり一家の頭領を任されてしまったのであった

果たして彼に迫るのは神か悪魔か？地獄か仏か？それは誰も知らないのである

「が、頑張つてね、エリオ君」

「キヤロ・・・はあ・・・」

深く溜息をつくエリオであった

次回予告

駄工門

「神と悪魔が住むこの世界にやってきた極悪一家あばしり一家

しかし其処は世間の厳しい風か、別の所では一人の可憐な少女の元にああなんと言う事が野獣の如き者が現れる

その者は果たして敵か味方か？ああ、それは神のみぞ知る事なり」

次回「人は呼ぶ『バイオレンスジャック』と」

あ、絶景かな絶景かな

第4話 人は呼ぶ『バイオレンスジャック』とその1

場所は変わり此処は豊かな自然が存在する次元世界
其処には一組の家族が居た

ルーテシア・アルビーノとその母である、メガーヌ・アルビーノの
一家であった

現在メガーヌはかつての戦いの後に救助され、今は療養の最中でもある

ルーテシアもそれに同行していたのだ

此処では戦乱も無く平和な世界の為治療にはもっていきいこの場所であると創造博士が手配してくれたのだ

しかし、そんな平和な場所にも戦乱の予兆が訪れた

「そつか、そつちではそんな事件が起こってるんだ」

『はい、ですが問題は無いと思います、我等Dフォースが即時解決いたしますのでルーお嬢様はご安心を』

ルーテシアはモニターに映る女性、トーレと話しをしていた

それは、現在起こっている犯罪事件の話しである

そして、突如起こった次元転移

其処から現れたテキサスマックとあばしり一家
最早只事ではないのだ

そう思ったルーテシアは

「私も行く」

『し、しかし!』

「大丈夫だよ、私だって3年前は皆と一緒に闘ったんだもん、それに・・・あそこは私にとっても大事な場所だから・・・もう傷つけられて欲しくない」

ルーテシアの目には硬い決意にも似た物が見られた
それを見たトーレは黙った

こうなつた彼女を止めるのはまず無理だからだ
出来るのと言えれば彼女の親代わりを勤めた剣造くらいである

『分かりました、では・・・お待ちしております』

「ワガママいつて御免ね、トーレ」

『いえ・・・では、私達も任務に戻ります』

「うん」

そう言つて通信が切れた

するとその後ろには母メガーヌが居た

「また、ミッドチルダに行くの？」

「うん、皆が闘つてる・・・私も皆の力になりたいの」

「そう・・・こんな時、母親は体を張つてでも止める物なのよね」

「・・・・・・・・」

ルーテシアは黙り込んだ

3年前、やつとの思いで再会できた母

その母とまた別れなければならぬ

そんな思いがしたのだ

だが、メガーヌはそんなルーテシアの肩にそつと手を置く

「気をつけてね・・・今はそれしかいえないわ」

「有難う、母さん」

ルーテシアは目に滲んだ涙を軽く拭つて母に抱きついた
そしてメガーヌも抱きしめる

母と子の光景でもあった

「それで、どうやって行くつもりなの？」

「明日の朝には迎えの人がこっちに来るみたいなの、それで私はそれに乗ってミッドに行く」

「そう」

メガー又はそれ以上聞かない事にした

今の自分はまだ本調子ではない

もし本調子であったとしても自分以上の力を持つルーテシアと一緒に居ては足手まといになりかねない
そう思えたからだ

場所は変わり、此処は管理局地上本部

その中の一室ではレジアス・ゲイズ元中將ともう一人の男が話しをしていた

「俺がDフォースに転属？」

「そうだ、頼めるか？ゼスト」

其処に居たのはレジアスの友であり現在はフリーであるゼスト・グランガイツである

「Dフォースはまだ設立されて間もない組織の為人員が不足している。お前のような玄人が居れば少しは手助けになるんだ」

「それは構わんが・・・しかし何故俺なんだ？」

「まあたたき上げで此処までのし上がった俺には頼める奴が少ないからな、お前位しかこんな事頼める奴は居ないんだよ」

「成る程」

現在レジアスは中将の職にはいない

と、言うのも3年前最高権力の三人が実は機鋼帝国の回し者でありそれが居なくなつた為に指揮系統が狂つてしまつたのだ
其処で白羽の矢が立つたのがレジアスである

つまり、彼を最高権力の座に座らせたのだ

本人は嫌がっていたが回りの熱い推薦の末に仕方なく座る事にした
本当に仕方なくである

「フツ、それにしても最高権力者も板についたようだな」

「冗談じゃねえよ！こんなもん窮屈で適わん」

そう言つて今自分が着てる服を軽く引つ張る

サイズが窮屈などではなく単にこの役職が窮屈だつたらしい

「そう言つな。大出世じゃないか」

「俺はお前と同じ前線が良かったんだよ。なのに3年前の戦いのせいで此処までなつちまつた・・・退屈で死にそうだ」

「ま、お前は俺の上司なんだ。少しは上司らしくしてくれよ」

「わあつたよ」

渋々了解する

本当に嫌そうだ

「ああ、そつだ!」

すると何かを思い出したかのようにレジアスが呟く

「ゼスト、お前はまずDフォースに向かう前に此処に行ってくれ」

と言ってレジアスは一枚の地図を見せる

「これは?」

「其処にDフォースに協力してくれる奴が居る、ソイツを拾ってからDフォースに向かってくれ」

「・・・分かった」

「それから、こいつも連れて行け」

そう言ってレジアスが指示を送るとゼストの上空を飛び回る妖精のような者が現れた

「お前は?」

「初めて会うな。私はアギトってんだ。見ての通りユニゾンデバイスだ。宜しくな」

「アギト?お前は確かシグナムの所に居た筈じゃ」

「そのシグナムが現在隊長研修で居ないんだ。だから今こいつはお前と同じでフリーなんだよ」

レジアスが告げる

「成る程、それで俺とコイツでコンビを組めと・・・そう言いたいのか?」

「そつだ」

「分かった。ではすぐに飛び立とう」

「おう、頼むぞ」

ゼストは頷きアギトと共に部屋を出た

レジアスは肩の荷が降りたかのようにシートに背を預ける

「やれやれ、また面倒な事が起きそうだなあ」

そう言ってレジアスは目元を軽く抑えた

第4話 人は呼ぶ『バイオレンスジャック』とその2

ルーテシアは今自室で身支度を整えていた
明日の朝早く管理局から送られて来る予定の魔道士が自分を迎えに
来るそうなのだ

だからすぐにでも発てるように準備を進めていた
と言っても遊びに行く訳じゃないので数日分の着替えとその他常備
品程度である

その為荷物は思った程コンパクトに済んだ

「また、皆に会えるね・・・ガリユー」

そう言つてルーテシアは手に黒い球体のような物を出して軽く摩つた

「今度もまた、きっと厳しい戦いになるかもしれない・・・でも、
私も頑張る、もうあんな辛い思いはしたくないから」

そう言つたのだ
その時であつた

突如部屋の窓の外で次元の湾曲が現れた

「え？」

ルーテシアは窓の外を見た

すると其処から一人の人間が落ちてきたのだ

その人間は真っ直ぐに森に落下する

落下した地点周囲に居たであろう鳥達が騒がしく飛び立つのが見えた

「何だろう？」

疑問に思いルーテシアは直ちにその場所に向かった

「確か此処に・・・」

ルーテシアは次元反応があつた地点に来ていた

其処は深い森であつた

一寸先も木々やツルで見えない程の

その中を手探りで探していたのだ

あの高さだ

下手をすれば怪我をして動けないかも知れない

そう思えたからだ

そう心配して必死に探していたのだ

その時であつた

突如彼女の前に黒い影が現れた

岩？そう思えたが違った

人であつた

それも、大男である

岩のように硬い胸板に鍛え上げられた体

そして鋭い眼光は正に獣でもあつた

そんな大男がルーテシアを見ていたのだ

「あ……あの……貴方は？……」

その大男の眼光に半ば怯えながらもルーテシアは必死に声を出した
すると男はゆっくりとだが口を開いた

「名前などない……只、呼ぶなら……バイオレンスジャックだ」
「バイオレンス……ジャック」

ルーテシアは呟いた

その時であった、突如二人の周囲に数体の奇妙な生き物が現れた
そのどれもが不気味で歪な姿をしていた
地獄に出てくる悪魔を思わせる姿である

「これって……デーモン！」
「俺を追って此処まで来たのか！」

ジャックはそう言って周りに居たデーモン達を睨む
そして、懐から野太いジャックナイフを取り出した

「お前は下がってる、こいつらは俺が倒す」
「待って下さい！人間の貴方じゃ勝てません！」

ルーテシアが止めようと声を掛けた
だが、それを聞いてジャックはフツと笑った

「俺は、お前らのような人間じゃない……こいつらを地獄に叩き
落す存在だ」

そう言ってジャックは猛然と目の前のデーモンに切りかかった
デカイジャックナイフがデーモンの体をいとも容易く切り裂いていく

硬い筋肉で覆われたデーモンをまるで豆腐のようにきってしまおうジヤックの怪力は凄まじかった

それだけではない、ナイフを振るいながら近くのデーモンの頭を掴みそのまま握りつぶしてしまったり

体の一部を持ち上げて豪快に振り回しそのまま地面に叩き付けたりとにかく人間離れた戦いを見せていたのだ

『死ねえ！』

「ムツ！」

突如地面から現れたデーモンの一体がジヤックの胸板に腕を突き刺した

夥しい量の血が吹き出る

普通なら致死量である

「グウツ・・・」

『キヒヒヒ・・・死ね死ね死ねえ！』

狂ったようにデーモンが叫ぶ

そして更に腕を深く突き刺そうとした時であった

「ガリユー、お願い！」

ルーテシアが願うように言い、黒い球体を投げた

するとそれは忽ち姿を変えて元のガリユーの姿になった

そしてジヤックを襲っていたデーモンを蹴り飛ばす

「うおっ！」

ジヤックはそのまま蹴り飛ばされたデーモンの頭部を殴り潰した

頭部がペシャンコになり血が辺りに滲み出る

「こいつは・・・」

「大丈夫、ガリユールは味方です」

「ガリユール・・・それがコイツの名前か？」

奥に居たルーテシアが頷いた

それを見たジャックが今度はガリユールを見る

「変わった生き物だ・・・こんな生き物は今まで見た事がない・・・だが、彼女の目を見るに嘘ではないようだ・・・信用させてもらうぞ」

ジャックの言葉にガリユールは頷いた

そしてそんな二人に再びデーモンが襲い掛かった

だが、デーモンでは相手にならなかった

ジャックとガリユールは二人で群がるデーモンを蹴散らしていったのだ

ジャックが切り裂き、ガリユールが体術で殴り倒す

闘い方は違うが何処か二人は似ているようであった

そんな二人の少し離れた位置からルーテシアも魔弾を放ち援護をする結果としてデーモンは数を減らしていた

『おのれ・・・せめてあのガキだけでも！』

そう言ってデーモンが後ろからルーテシアに襲い掛かった

それに気づいたが遅かった

既にデーモンの牙がルーテシアの首筋に差し掛かった

だが、それは彼女の首筋に突き立てられる事は無かった

何か強い力で後ろに引っ張られている事にデーモンは気づいた

そしてそのままグイッと持ち上げられる

そこに居たのは一人の男であった

「特急便で来たのはどうやら正解だったようだな」

そう言つてデーモンを掴んでいたのはゼストであった

ゼストはデーモンを上空に放り投げると持つていた槍を構える

そしてその槍の穂先にデーモンは落ちてきた

落ちたデーモンは文字通り串刺しとなった

少し痙攣していたがやがて動かなくなった

そんなデーモンをゼストは放り投げる

これが最後であった

辺りにはデーモンの死骸しかない

「大丈夫か？」

ゼストは目の前で転んでいたルーテシアにそつと手を伸ばす

ルーテシアはその手を掴み立ち上がる

其処にガリユールとジャックがやってきた

「怪我は無いか？」

「うん、この人が助けてくれた」

ジャックの問いにルーテシアがゼストを指して言った

ゼストとジャックが互いを見る

「俺はゼスト・グランガイツ」

「バイオレンスジャックだ」

ジャックとゼストが互いに名前を言いあつた

ルーテシアはそんな二人を見てこう思つていた

(何だか、二人共凄く似てるような気が・・・)

気のせいだと思います

第4話 人は呼ぶ『バイオレンスジャック』とその3

「それじゃゼストさんは私を迎えに来たんですか？」

「その通りだ」

戦闘を終えた後、ルーテシアとガリユーはジャックとゼストを連れて家に帰って来た

メガー又はゼストを見て懐かしんだのと、血まみれのジャックを見て倒れそうになったのとは言うまでもない

後、ジャックの傷だが、家に着くと既に傷は塞がっており血の跡を拭くと既に完治していた

なんと言っ回復力の早さなのだろうか

そう思えたのであった

「でも、どうして今日来たんですか？確か来るのは明日の筈じゃあ」

「偶々特急便があったのでな、少しでも早い方が良いと思いますこうして来たのだ、そしたら森の中で血の匂いと戦闘の音が聞こえて来た訳だ」

なんとも偶然の重なりである

もしあの時ゼストが駆けつけていなければ今頃ルーテシアはデーモンの餌食であった

「しかし、問題なのはジャックだな」

「うむ、此処は本当に俺の居た世界じゃないようだ」

ジャックは家の中から外の風景を見た

其処は何も無い地ではあるが平和そのものである

「ジャックさんの元居た世界はどんな世界だったんですか？」

「一言で言えば『地獄』だ」

「穏やかな話じゃないな」

ゼストがそう呟いた

「俺の元居た世界は突如現れた大地震によって滅茶苦茶にされた。その後は殺し合いの世界だった。弱い奴は殺され、強い奴がそれを食らう、弱肉強食の世界だった」

「酷い・・・」

ルーテシアが聞いて身震いする
小さな子供には仕方ないだろう

反対にゼストは黙って聞いていた

だが、その眉間には皺が幾本も出来ていた

「俺はそんな世界でも懸命に生きようとする者達を導いた。その時突如空間に湾曲が現れ・・・気がついたら此処に居た」

「そうだったんですか・・・」

「それで、お前はその後どうするつもりだ？」

「今の俺に行くあてなどない。ならば、こうしてお前達と出会ったのも何かの縁だろう。お前達に協力させて欲しい」

ジャックは言った

ジャックは元々この世界の住人ではない

言い方を変えれば彼は「次元漂流者」なのだ

その為この世界には知り合いもいなければ帰る場所もない
孤独なのだ

そんなジャックにルーテシアとゼストは即答した

「構わん」

「一緒に行きましょう。ジャックさん」

二人の返答にジャックは少しだが驚いた

「良いのか？」

「断る理由などない。それに、今は少しでも戦力が欲しいところだ」

「私も、それにジャックさんは凄く良い人だと思いますし」

「良い人か・・・そう言われるのは久しいな」

ジャックは物思いに吹けるような顔になったが、すぐに元に戻った

「それで、何時此処を発つ」

「今は便が無い、発つのは早くても明日だ」

「そうか」

それを聞いたジャック

だが、その後二人は重大な事をルーテシアから言われる事になる

「ゼストさんとジャックさん・・・今晚寝泊りどうするの？」

「「あ！」「」」

二人は声を揃えた

無理もない

この家は狭いのだ

その上こんな大男二人も家に置ける筈が無いのだ
となると二人に置ける選択肢は一つしかなかった

「すみません、隊長。隊長にこんな思いをさせてしまって」
「気にするな。お前は自身の療養に専念するのが大事だからな」

そう言つてメガー又は外に居る二人に毛布を渡した
二人の出した答え

それは「野宿」であつた
最も、家の近くの原っぱに毛布を敷き草原を敷布団代わりに寝るだけなのだ

「良い世界だ」

ふと、ジャックが呟いた

「子供がこうして笑つて居られる世界・・・こんな世界に俺は生まれ
れたかつた」

「そうか」

「なんとしても、この世界を守つていかないとな」

「その通りだ」

ゼストがそう答える

すると、ジャックがフツと笑つた

「あんだとは気が合いそうだ」

「その様だな」

二人がフツと笑った

その上には満天の星空が輝いていた

場所は変わり、此処は暗くじめじめした研究室
其処ではドクターキュラスが装置を弄り回していた

「ククク、さて・・・そろそろあ奴にワシの偉大さを教えてやろう
ではないか・・・」

そう言つてキュラスは装置を起動させる
するとカプセルの中に入っていた数体の女性が歩み出る

「行つて来い、マリアージュ達！異世界から来た者達を殺せ！そし
て死体を回収して来い！」

『はい、ドクターキュラス様』

「それと、平行してイクスと『魔神』の回収をしろ！良いな」
『了解しました』

そう言つてマリアージュ達は研究室を出て行く
キュラスはそう言つて再び装置に向き直る

「さて、ミッドチルダにはあのDフォースなる組織が居るらしいが・
・・そうさな、奴等にはついさっき完成した奴をぶつけてみるとす
るか」

そう言つてキュラスの目の前には一体の怪物が居た
機械とロストロギアが融合した不気味な怪物であつた

「この・・・メタルビーストをなあ」

キュラスがそれを見て不気味な笑みを浮かべる
その時であつた
突如装置に音が発せられた

それを聞いてキュラスが急ぎ装置を見る
其処には翌日に行われるであろう学会とそれを発表する者の絵が映
し出されていた
其処にはあの兜剣造が居たのだ

「こゝ、コイツは！」

剣造を見た途端キュラスは狂つたように笑い出した

「遂に・・・遂に見つけたぞ！兜剣造！！積年の恨み今こそ晴らし
てやる！」

そついうとキュラスはすぐ其処にあつたボタンを押す
すると近くにあつたカプセルが動き出す
中から現れたのは9歳位の少女であつた
栗色の神を両サイドで束ねたツインテールの髪をしている

「行けい！『FN-01』よ！この男を！兜剣造を抹殺せよ！」
「分かった！」

元気良くFN-01は頷き騎士甲冑を身に纏う

形は10年前のなのと同じ者であったが色が違った

色は白ではなく黒であった

そしてその手にはレイジングハートとバルディッシュをあわせたようなデバイスが握られていた

それを手に悠々と研究室を出て行く

「フハハハ！さて、いよいよ始めるとするか！見ていて下さい！
機鋼王様・・・貴方の偉業をこのドクターキュラスが成し遂げて見
せませすぞお！」

天を仰いでキュラスは叫んだ

そして不気味な笑い声が研究室を包み込む

次回予告

ゼスト

「遂にドクターキュラスの僕であるマリアージュ達が動き出した
そして、ミッドに迫る巨大ロボット「メタルビースト」
更に、キュラスが言ったイクスとは一体何者なのか？」

次回

『動き出す暗雲』

次回もこの小説にテイク・オフ！

第5話 動き出す暗雲 その1

場所は変わり、此処は管理局陸士本部

其処では部隊長のゲンヤ・ナカジマが書類に目を通していた

「光子力・・・超合金Z・・・全く、こうして見るだけでも凄い代物だなあ」

「そうじゃろつそうじゃろつ」

その前には剣造と十蔵が座っていた

特に十蔵は自信満々と言った顔である

「しかし、こんな代物をすんなりと受け入れてくれるとは思えんな」

「確かに、つい数年前まで魔法だけが全てと思っていた物達にいきなりこれを見せても受け入れてはくれないでしょう」

「かもな」

剣造の言葉にゲンヤも頷く

彼も最初はこんなデタラメな物を信じる気にはなれなかったのだ

だが、3年前の戦いを見た時点でその有用性は実証された

もし、この超合金Zを次元航行船の装甲に転用できればどれ程の人員が無事に帰れるか

また、この光子力も魅力的である

微量でありながら膨大なエネルギーを得られる光子力

近年問題になりつつあるエネルギー問題を一気に解決出来る代物なのだ

それ故に悪用されたら恐ろしい兵器になる

しかし、だからと言って手こまねいている訳でもない

これが実用化されれば多くの市民の笑顔が待っているのかもしれない

その可能性の為に剣造は戦っているのだ

「事情は分かった。明日の学会の護衛は俺達陸士が行う。安心してくれ」

「感謝します」

ゲンヤの協力を得れた事により剣造は頭を下げる

「ところで、お宅んとこの娘さん達はどうだい？」

「はは、皆ちゃんちゃん子ばかりですよ」

ゲンヤが聞いた娘とは勿論ナンバーズの事である

あの戦いの後彼女達は正式に剣造の娘となり名前の後に兜と名乗るようになった

そんな訳で剣造は今では12人の娘を持つ身なのだ

「あん時はお前さんも苦労してたよなあ、いきなり娘が出来たから育て方とか俺に聞いてたしよあ」

「あの時は感謝してます」

「ま、男世帯じゃしょうがねえか」

ゲンヤは頷く

もし自分も子供が男だったら同じ苦労をしていたであろうと思っただけだからだ

「そっぴいあゲンヤのどつあんよあ、あれからクイントちゃんとはどつなつとるんじや？」

「な、何故其処で女房の事を？」

「惚けおつてえ、8年間も別れていた妻と再会出来たんじや。あつゝい抱擁とか交わしたんか？それともそのまま寢床で？」

「／／／／／／」

十蔵の言葉にゲンヤは顔を真っ赤にした
恐らく凶星だったのだろう

それを見た十蔵がニヤニヤしている

「おうおう、若いのお・・・ワシの若い頃を思い出すわい」
「何をデタラメを」

隣に居た剣造がふと呟いた
それを聞いた十蔵が睨みつける

「なんじゃ剣造！貴様にワシの何が分かる！」

「あんた若い頃は性欲の塊だったでしょうが！兄弟が私一人だったのが不思議な位ですよ」

「何じゃと！ワシと母ちゃんは一生愛し続ける仲じゃったんじゃぞ
お！」

「そう言っつてしよっちゆう浮気してたのは何処のどなたでしたっけ
え？」

十蔵と剣造が互いに睨み合っている
目線から凄まじい火花が起こっている

「おいおい、ったくあんた等は本当に仲良いんだか悪いんだか分からんなあ」

ゲンヤがそう呟く

「ま、明日はこの近くの会場で行うんだらう？それに此処からなら
Dフォースの隊舎と近い事だし、折角だから娘達に会いに行ったら

「どうだい？」

「それもそうですねえ・・・折角だし会いに行ってみますか」

ゲンヤの提案に剣造は頷く

それを聞いて十蔵が諸手を上げて喜ぶ

「ヤッホー！トーレちゃん達に会えるぞい！」

「お父さんは少しは弁えて下さい。仮にも私達はミッドチルダと地球を繋ぐ大事な役割をしているんですよ。少しはその自覚と言う物を・・・」

「へいへい、分かったからもうこれ以上の説教は御免じゃよお」

手をヒラヒラさせてそう言う十蔵

剣造はそんな十蔵を見て溜息を漏らす

「それじゃ、私達はこれで」

「おう、また明日な」

「はい」

剣造は頷き二人して部屋を出る

ゲンヤはフウと溜息をつく

「しっかし、本当に凄いやなあ、こいつあ」

そう言うってゲンヤは明日の学会で発表予定の光子力と超合金Zを見た

「と、言う訳だ、明日の学会の為に今日はそちらに泊まるつもりで問題ないかい？」

『問題有りません。それにドクター……っと、父上が来て下さるなら妹達も喜んでくれますよ』

言葉の途中で咄嗟にトーレが言い直した
それを聞いて剣造が少し微笑む
まだ自分を父親と思うのに馴染んでいないのだろう
そう思えた

「と、言う訳じゃから一日だけじゃが宜しく頼むぞお」

『はい、十蔵さんもお元気で何よりです』

「うーん、Dフォースの隊長服も様になるとるぞおトーレちゃん」
『有難う御座います』

十蔵の言葉にトーレは軽く頭を下げる

『移動はどうしますか？何なら妹達を迎えに行かせますが』

「嫌、自分の足で行く。慣れない任務で疲れただろう。そんなに気を遣う必要はないさ」

『お心遣い感謝します』

トーレは軽く会釈をする

「ま、そう言う訳だから一日だけそちらに厄介になる」

『お待ちしております。父上』

そう言って通信は切れる

剣造は通信機を仕舞って荷物を持ち道を歩く
夜風が心地よい季節になっていた

「うう、寒いのお」

「もうそんな季節になったのですね」

剣造は何処か懐かしい顔をしていた
勿論十蔵は剣造の肩に乗っていた

「しっかし、あのDフォースが設立されてからもう半年かあ」

「まだまだ部員が不足しておるからのお・・・仕方ないわい」

「それに・・・今起こっている事件・・・」

「確か・・・犯人はマリアージュじゃったかのお」

十蔵は呟く

それに剣造は頷いた

「手口は刃物での切断・・・そして、その中には自身で命を絶った
者も居たそうですね」

「嫌になるわい。全く、自分え自分の命を絶つなんぞ弱い奴のする
事じゃわい!」

十蔵が溜息をつく

「んで、どうするんじゃ?このまま歩いて行くか?」

「歩けば30分も掛からんだろうし、そのまま歩いて行くのも悪くないさ・・・しかし、手ぶらと言つのも悪いなあ」

剣造はそう言って周りを見る
そして、近くの店に目を止めた

場所は変わり、此処はDフォースの浴場
その中ではDフォース隊員のチンク、ノーヴェ、ウエンデイ、デイ
エチ、翔の五名とメリーが入浴していた

「は、今日も月が綺麗ツスねえ」

「ああ、こつ綺麗だと星が見えて良いなあ」

「そうだな」

ウエンデイ、ノーヴェ、チンクの三名がそう呟きながら窓の外に見
える月と星を見ていた

「本当ね、何時見ても此処からの景色は綺麗だわ」

「素敵ナ眺めデース」

翔とメリーも同じ事を呟いていた

「うん、そうだね」

デイエチも同じ事を言っていたが少し元気がない
その理由はメリー以外の皆が理解していた

「まあまあデイエチい。弁慶さんが居ないのは辛いのは分かるけど、
まあ元気出して行くツスよお」

「ワツツ！デイエチサンハ弁慶サンにラブナンドスカア？」

メリーが驚く

それにデイエチが頷く

「ワーオ！アノ弁慶サンニ彼女ガ出来タノニハ感激デェス！」

どうやらメリーは弁慶を知っているらしく、それ故に知り合いに彼女が出来た事に喜ぶ
すると浴場内にアナウンスが鳴り響く

「えー、Dフォース隊員のチンク、ノーヴェ、ウエンデイ、デイエチの皆さま。なるべく早く上がってロビーに集合してねえ。お父さんが会いに来ましたよお」

声はメリーであった

そしてそれを聞いた四人が嬉しそうな顔をする

「パ、パパリンが来たツスカ！」

「父上・・・会うのは久しぶりだなあ」

「お父さん・・・学会とか忙しいのに・・・無理して来なくても良いのに」

「とにかく、早く会いに行きましょう」

「うわーい、お土産なにかなあツス！」

聞くや否や、四人はすぐに浴場を上がる
それを見ていたメリーが驚きの目をする

「アノ子達ノオ父様が要ラシタノデスカア？」

「そうみたいね」

そう言いながらも翔とメリーはまた入浴をするのであった
その頃、男湯では

「あゝあ、何でティアナはこっち来ないんだよお」

「ぼやいても無駄だろう、號」

「今更言ッテテ遅イデエス」

號が一人暗くなっているが凱とジャックがそれを見て溜息をついて
いた

その頃、別部屋では通信を送っていたメリーが隣のテーブルに座っ
ている人を見た

「もう少ししたら来ますよ」

「そうか、わざわざすまないね」

「いやあ、助かるのおマリーちゃん」

テーブルに座っていたのは十蔵と剣造であった
テーブルにはおみやげと思わしき箱包みが置かれていた

「それにしても凄いですよねえ兜博士は」

「ん？何がだい？」

「だって、あんなに大勢の娘達が出来たのに皆貴方を信用している
のですから凄いですよお」

「じゃろじゃろお、流石ワシじゃあ！」

「いえ、貴方じゃなくて・・・剣造さんの事なんですけどお」

何気に酷い事を言うマリーに十蔵はシヨックを受ける

そしてそれを見て苦笑いを浮かべる剣造

その時であった

「うわーい、パパリ〜ン」

突如部屋の扉を開けてウエンデイが出てきた
そしていきなり剣造に抱きつく

「ん？ウエンデイか？それに皆も来たみたいだね」

「すまない、父上。忙しい筈なのにこうしてわざわざ来てくれると
は」

「気にしなくて良い。明日は学会の発表で近くの会場で行うんだ。
そのついでさ」

チンクの言葉剣造はそう言って微笑む

それに続いてノーヴェ、ディエチもやってきた

「やつほうい！ワシも居るぞお！」

「あ、お爺さんも来てたのですか？」

「やつほう、爺ちゃんだあ！」

皆が十蔵を見てまた喜びの声を上げる

そして、今度はトーレ隊長も入ってくる

「父上、お久しぶりです」

「やあトーレ、こうして会うのは半年振りだな」

「はい、お陰様です」

「隊長服が板について来たな」

そう言つてトーレと剣造は握手を交わした

「ん？パパリン、その箱は何スか？」

「これかい？手ぶらじゃ悪いと思つてね、手土産を買ってきたんだ、丁度人数分は買ってきたから號君達も呼んで来たらどうだい？」

「そうですね、そうします」

トーレはそう言つてマリーの側にあつた通信マイクを手に取る

「こちらDフォース隊長のトーレだ。一文字號！橘翔！大道凱！直ちにロビーに集合しろ！5分以内だ！でないと深夜の特訓を行う。

以上！」

そう言つてトーレはマイクを置いた

それを見て思わず苦笑いを浮かべる剣造である

「相変わらずのようだなトーレは」

「あのお方から教わつた事を実践してるだけです」

「鉄也か」

剣造は懐かしむように呟いた
剣鉄也

血の繋がりは無いが自分にとっては息子のような存在である

「あのお方と貴方が居たお陰で、今の私達がいるのです。感謝しています」

「そうか、そう思ってた貰うと有り難い」

「いやあ、照れるのお」

トーレの言葉に十蔵と剣造が笑顔になる

すると部屋に向かって猛スピードで賭けて来る音がした

そして思い切り扉を開く

「い、一文字號三等陸尉以下二名！只今到着しました……って、兜博士……何時の間に」

號達の視線の先にはウェンディに抱きつかれている彼女等の父親であり光子力エネルギーの発表をする予定の兜剣造の姿が其処にはあった

第5話 動き出す暗雲 その2

場所は変わり、此処は港湾警備隊の会議室

其処でスバルとティアナ、そしてルネッサの三人はとある写真を見
ていた

それはギンガと暗黒寺が置いていった写真である

「今回の事件・・・どうにも只の事件とは思えないわね」

「そうだね、A級クラスの魔道士がこうもあっけなく倒されるんだ
から・・・それに」

スバルがそう言っつて自身の右腕を抑える
腕が疼くのだろう

彼女の右腕には悪の魔神が眠っている

そして、左腕には神の魔神が眠っている

その右腕が疼いているのだ

恐らく、この事件は魔神が絡んでいる

もしかすれば、また3年前の事件が起こるのかも知れない

「ティアナ執務官とスバル防災支長が経験したその事件とは・・・

あのマジンガー絡みの事件ですか？」

「そ、オペレーションダイナミックウォーズ。機鋼帝国との最終決
戦をそう言ってるんだ」

「正直、ああして勝てただけでも奇跡だと言えるわ」

「うん、甲児さん達が居なかったら・・・今頃私達はこの世界に居
なかったかも知れない」

スバルが重い顔でそう呟く

「甲児さん？それって・・・もしかして「兜甲児」様の事ですか？」
「そうだよ、兜甲児さん、それに剣鉄也さんに流竜馬さんに神隼人さんに車弁慶さんに宇門大介さんに草薙剣児さん」
「ミッドチルダでは甲児さん達を「伝説の五大魔神」って呼んでるけどね」

「五大魔神・・・質量兵器を用いながらミッドチルダでは英雄として扱われる・・・不思議な事です」

ルネッサが呟いた

するとスバルが指を鳴らす

「違うよルネ、マジンガーは質量兵器じゃなくて「魔神」なんだよ」「魔神？」

「そう、人々の希望と未来を守る為に作られた鋼鉄の巨人。それを私達は皆「魔神」って呼んでるの」

スバルの言葉にルネッサが頷く

そして一同が空を見た

空は真っ暗になっていた

「うわゝ、真っ暗になっちゃったねえ」

「そうね、それじゃそろそろお開きにしましょうか」

「それが宜しいですね」

一同がお開きになる

「あ、そう言えばティアはこれからどうするの？マンション？」
「うん、そうだけど」

「何なら家に来なよ！私今くるがね屋に泊まってるんだよ」

「くるがね屋って・・・あのくるがね屋！」

ティアナの言葉にスバルが頷く
それにルネツサが首を傾げる

「くろがね屋？それは一体なんですか？」

「私達が前にお世話になった人達が経営してる宿なんだ。私は特別に寝泊りに使わせて貰ってるんだ。場所も近場に移ったから凄い通勤が楽なんだよ」

「そうなんだ」

「家の方が良いよ！下手なマンションより絶対良いよ！」

スバルの提案にティアナはうんと悩む
するとルネツサが

「どうします？マンションのキャンセルは可能ですが」

「そうねえ、それじゃ私はスバルのところに行かせて貰おうかしら。
ルネはどうする？」

「私は別行動にします。道中お気をつけて」

「有難うね。ルネ」

ティアナとスバルの前に敬礼をし、部屋を出て行った

「さあ、それじゃ私達も帰りますか」

「そうだねえ」

そう言って二人もまた部屋を後にするのであった

その頃、號達は兜博士と話しをしていた

「しかし何で兜博士はこちらに？」

「明日学会で発表があつてね、場所が近かつたからついでに会いに来たんだ」

「えゝ、パパリン明日帰つちゃうのお」

未だに抱きついていたウエンディが残念そうな顔をしていた

「ワガママ言うんじゃないウエンディ。父上だって忙しい身なのだぞ」

「そうだぞ。と・・・父さんだって仕事が忙しいんだし、警沢言うんじゃないよ」

「ハハツ、構う事はないさ、娘が元気な姿を見ただけでも嬉しいさ」

「ワシも嬉しいぞお！」

そう言つてる十蔵は既に剣造が用意していたケーキを頬張つていたしかしデバイスサイズの為かケーキの大きさがデカイ為千切つて食べている

「明日の学会つて事は・・・いよいよ光子力と超合金Zの実用化に向けての発表ですね」

「ああ、それとこれを発表したいと思つてるんだ」

そう言つて剣造はある書類を見せる
其処には三体のロボットが映っていた

「これは？」

「マジンガーのデータを元に作ったロボットで、名前は右から「ミ
リオン」「パイオン」「ダイオン」なんだ」

「へえ、ミリオンは電磁砲を内臓して、パイオンにはマジンガーZ
のルストハリケーン、その上ダイオンにはプレストファイヤーが内
臓されてるのかあ」

號はロボットの外観を見ただけでそれを理解した

「ほお、外観図を見ただけでそれを見破るとは・・・成長したな、
號」

「へへへ、そうですかあ？」

號は少し気恥ずかしそうな顔をする

しかしトーレは当然だと言わんばかりの顔をしていた

「当然です父上、私が毎日しごきにしごきまくっていますからこれ
くらい出来て当然です」

「ひ、ひでえよトーレ隊長」

余りの厳しさに號は更に小さくなる

それを見て隣に居た翔と凱は笑っていた

「明日はゲンヤ部隊長の率いる陸士隊に護衛を任せてもらってるか
ら安心して良い」

「本当ならDフォースの可愛い子ちゃん達に護衛して貰いたかった
んじゃないがお」

十蔵がそう言って残念そうな顔をする

「すみません博士、我々Dフォースは今ミッドチルダ全域の守備を任されている物でして博士達の護衛に回す戦力が無い為に・・・申し訳ありません」

「いやあ、まあワシも言ってみただけなんじゃよ。じゃから気にしなくても構わんよお」

トーレの謝罪に十蔵は慌てて手を振ってそう言った

「ん？そう言えばウーノ姉さまやクアットロ姉さまの二人は一緒ではないのですか？」

「ああ、あの二人なら今ちよつとばかり調べ物をして貰っておつてのお・・・何なら連絡してみるかあ？」

「そうですね、お願いします」

「んじゃ・・・ハロー！ウーノちゅわん、クアットロちゅわん、十ちゃんじゃぞお。聞こえるっ」

十蔵がいかにも艶かしい声を上げる

すると目の前のモニターに二人の女性が映し出される

『何事でしょう？』

『もおう、十蔵博士つたらあ・・・こちらは今忙しいんですから手短にお願ひしますよお』

其処にはウーノとクアットロが映っていた

「姉さま達・・・お久しぶりです」

『ん？トーレか、久しぶりね』

『うっん、隊長服も様になってるわねえ』
「有難う御座います」

トーレは少し気恥ずかしい顔をする

『あら？そう言えばセツテの姿は？』

『そう言えば見えないわね、確かセツテもDフォース所属だった筈
だけど？』

「セツテなら今別任務中でした・・・恐らくもう戻る頃かと・・・」

トーレが言っているその途中であった

部屋の扉を開き一人の女性が入ってきた
桜色の長髪をした美しい顔立ちの女性である

「あ、お父さん」

「セツテか・・・お帰り」

「セツテ、今戻ったか？」

「はい、只今戻りました。トーレ隊長」

セツテがトーレの前に立ち軽く敬礼する
それにトーレも返す

『あらあら、貴方達姉妹なのに固いわねえ』

「號の手前もあります。姉妹だからと私情を挟む気は無いですから
ね」

「お、俺限定ツスカあ！」

「ああ、私の真似ツス！」

號の言葉にウエンディが抗議するがすぐに號が「真似じゃねえ」と
怒鳴った

「それで、セツテ・・・何か分かったか？」

「駄目だった。例の犯人の尻尾を掴むどころか足跡を掴む事も適わなかった」

「そうか、すまないな・・・こんな時間に捜査をさせてしまったな」

「いえ、これが私の仕事ですから」

トーレの言葉にセツテは軽く言う

「それで、二人の方はどうだい？」

剣造がウーノとクアットロを見る

『こちらでも少しあった程度です』

『マリアージュの件と今回の主犯と思わしき人物の事について少しですが調べられましたわぁん』

「そうか・・・で、その主犯は？」

『全ては分かりませんが、名前はドクターキュラスと言っています』
「な、ドクターキュラスだと！」

剣造は机を叩いた

その顔はとても強張っていた

「パ・・・パパリン？」

「一体どうしたのですか？父上」

「キュラス・・・まさかあの男が・・・」

剣造の顔にはとても怖いものになっていた
その顔の剣造に思わず皆が引き気味になる

『ドクター・・・そのキュラスとは一体』

「ドクターキュラスは・・・あの男・・・機鋼王・・・兜原蔵の愛弟子だった男だ」

剣造の言葉に皆が驚愕する

第5話 動き出す暗雲 その3

ティアナとスバルはある旅館の前に居た
そしてその旅館の看板にはこう書かれていた

『くろがね屋 ミッドチルダ出張所』と

「此処も変わってないわねえ」

「フフン、皆も元気だよお。勿論、ティアナのお兄さんもね」

「あ、そっか・・・兄さん、今此処で働いてるんだっけ」

ティアナの兄ティード・ランスターはくろがね屋で今働いている
蘇生した際に魔力を失ってしまい管理局の戸籍でも死亡扱いされて
しまっている為表だって歩けないので今はくろがね屋の従業員とし
て働いているのだ
しかし顔は利くらしく情報収集の際にはとても頼りになる
そんな兄貴である

「さ、入ろう」

「そうね」

スバルとティアナは重そうな門を開く

中は純和風で作られており和める空間でもあった

それを見てティアナは思わず懐かしいような恥ずかしいような気分
になった

(そう言えば・・・號の告白を聞いたのも此処だったなあ)

「ティア・・・どうしたの?」

「ええ? な、何でもないわよ」

ティアナは思わずそう呟くも顔が真っ赤であった
それをニヤニヤした顔で見つめるスバル
すると其処へ

「やあ、いらつしやい・・・っと、今回は執務官も一緒かあ」

「兄さん・・・せめて名前で呼んでよ」

二人の前に現れた男、くろがね屋の従業員を現る羽織りを羽織った
青年であるティータ・ランスターを見てティアナは少しだけ剥れる
普段は執務官として厳しく接しているがこうして兄の前だと妹らし
い振る舞いをするらしい

「それで、今夜はティアナも一緒に泊まりたいんだけど良いですか
?」

「ああ、機動六課のメンバーなら大歓迎ですよ。それじゃ・・・部
屋へ送りますよ」

従業員らしい言葉遣いでティータは二人を部屋に案内する
するとその道中で

「おや、今夜は執務官殿もご一緒たあくろがね屋創業以来初でやん
すねえ!」

「いらつしやいませ、ティアナ執務官殿」

「いゝらゝつしやゝいゝまゝせゝ」

「・・・(コクッ)」

「おやおや、久しぶりですねえ」

其処に居たのは同じくくろがね屋の従業員であるイタチの安、番頭
のクロス、荒野のジャンゴ、先生、お菊姉さんである

「そう言えば女将さんも居るんですか？」

「そりゃ勿論！」

「元気ですよお」

皆の言葉にティアナは微笑む

そうか、考えてみればこうしてくろがね屋に来たのは実は3年振りだったりする

あの戦いの後、すぐに執務官試験を受けてそのまま実地研修

くろがね屋どころかミッドにすら余り来なくなってしまうっていたのだその為こうしてくろがね屋に泊まるのは久しい物である

そうして部屋に向かっているとその途中の一角で一人の女性にであつた

「おや、随分遅いお帰りだと思つたら、今日はお客さんが一人多いねえ」

「お久しぶりです。女将さん」

「今日は私の部屋で一緒に泊まりたいと思つてるんですけど・・・大丈夫ですか？」

「心配しなさんな。一人どころか十人増えたって平気な位だからさね」

そう言つて此処の女将である錦織翼は持っていた煙管を吹かす相変わらずのようだ

「それじゃ、今夜は宜しくお願いします」

「ああ、それじゃゆっくりしていきな」

翼は煙管を吹かして部屋に戻って行った
そしてまた二人は部屋へ向かう

別世界ではエリオとキャラコがあばしり一家と話しをしていた
そして、その話を聞いていたあばしり駄エ門は

「うおおおおおおお！何と言う良い子なんじゃあああ
あああ！」

駄エ門は大粒の涙を流していた
そしてそれを見ていたエリオとキャラコは苦笑いを浮かべていた

「その若さでありながらその様な素晴らしい少年に出会えるとは・
・それに引き換え・・・」

そう言つて今度はあばしり一家の男連中を睨む

「お前ら情けないぞコラアアアアアアアアアアア！！！」

杖を振り回して駄エ門が五エ門と直次郎と吉三を睨む

三人は正座してその場に座っていた

勿論駄エ門がそうしたのである

「世の中にはこんな立派な少年が居ると言うのにお前らは何じゃ！

少しはこの少年を見習え馬鹿者！」

「くくし、しいません」「」

駄エ門の言葉に三人は只頷くだけであつた
しかし隣に居た菊の助は気にしてなかつた

「はん、何が良い子だい！甘ったれの間違いじゃねえのかあ？」

「菊の助！年頃の女子がそんな事を口走っちゃいけません！」

「へいへい、どうせ俺は男女だよおだ」

そう言つて不貞腐れる菊の助

どうやらエリオに負けたのがまだ気に食わないようだ

そのせいかヘソを曲げてしまつてゐるのだろう

「あのお・・・もしかして・・・僕のせいですか？」

「まあ気にしないでくれい。菊の助が喧嘩で負けたのはお主が初めでじゃからのお・・・まあ勘弁してくれい」

「は、はあ・・・」

駄エ門の言葉にエリオは只頷くだけであつた

あばしり一家はエリオと正式に傘下に下り、今ではエリオをあばしり家筆頭に仕立て上げる事になつたのだ

だがエリオはそれを全力で否定し、仕方なくあばしり一家の大黒柱である駄エ門と兄弟の契りを交わす事で了解を得たのであつた

その頃、別世界、其処はルーテシアとゼスト、そしてバイオレンス
ジャックの居る世界である

空には日が沈み、もうじき夜になる頃である

前回話したのであるが、ゼストとバイオレンスジャックは野宿する
事になった

「明日は早い……」

「そうだな……」

……

会話が進まない

やはり無口な二人では会話が続かないのだろう

そう思っている時であった

「ゴラアアアアア！ゼストの旦那あああああ！あたしを置いて
行くなんて酷いじゃねえかああああ！」

「ムッ、アギト！」

「いきなり高速で飛んでいくからビックリしたじゃねえかあ！」

「す、すまん……」

「誰だ？その……妖精……は？」

ジャックがアギトを指差す

アギトは自分を指差す存在に気づき振り向く
そして

「ウギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

大声を上げて青ざめる
そりゃそうである

何せ怪物のような大男が目の前に居るのだから

「アギト、この男はバイオレンスジャックと言って俺達の仲間だ」

「こここコイツが仲間あ！冗談じゃねえぞ！」

「????そんなに変か？」

どうやらジャックはアギトが何故おびえているのか理解してないようである

それを見てゼストは仕方ないなと思っていた

すると扉を開ける音がしたと共にルーテシアが現れた

「ゼストさん、ジャックさん、晩御飯の準備が出来ました」

「あ！ルールーだあ！」

アギトがルーテシアの元へ行く

「あ、アギト！久しぶりだね」

「うん、おっかさんの療養に付き合っ行って行っちゃまって凄く寂しかったんだぜえ」

「ごめんね」

ルーテシアはそう言ってアギトの頭を軽く撫でる

その光景をゼストとジャックは優しく見守っていた
だが、やはりジャックの顔は怖かった

世界の違う三つの場所

その場所に同時に動き出す陰があった

『目標・・・発見』

『直ちに・・・行動に移ります』

そう呟いたのは目の光の無い美しい女性達

そして、時を同じくしてDフォーース隊舎に迫る巨大な何かもあった

第5話 動き出す暗雲 その4

場所は変わり、此処はエリオとキャラコ、そしてあばしり一家の居る環境保護団体の本部

その中の一室で駄エ門は何かに気づいた

それは自分達を狙っている気配

即ち「殺気」であった

「どうかしましたか？」

駄エ門の顔色を見てエリオが尋ねる

一目見て何かあったのだらうと察したのだ

「エリオ殿！何者かがこの本部に迫っていますぞ」

「ああ、それも只ならぬ殺気を放ってやがる・・・こりゃ、人間の放つ気じゃねえ」

駄エ門と菊の助が言う

二人共杖と刀を持って臨戦態勢をとっていた

また、それは直次郎と吉三も同じであった

「やれやれ、どうやらこの世界でも俺達あ殺らなきゃ殺られる世界のような」

「上等じゃん、だったら遠慮なしにぶっ殺してやろうよ」

「んもうやあねえ、僕ちゃんこういう血生臭いのやなのねえん」

血気盛んなあばしり一家の中で五エ門だけがやる気が無かった

その証拠に今にも逃げ出そうとしていた

・・・女の下着を風呂敷に包んだままで

「って、何風呂敷に包んでるんですかあ？」
「ああ！その中に私のパンツも入ってる！それにミラさんのパンツも！」

どうやらこの世界の女性は皆美人らしく、例え年下でも五エ門のおめがねに適うようである

その為五エ門は隙を見て此処の女性達の下着を奪ったのだろう
流石と言えば流石である

「とにかく、その風呂敷を置いて行って下さい！」

「ええ？何でえ、あ！もしかして・・・君もパンティー欲しいの？」

「違います！良いからそれを置いて行って下さい！」

とにもかくにも五エ門の風呂敷を置かせる事にしたエリオであった

「五エ門！エリオ殿の言う事は聞くのじゃ！」

「ええ、折角の上玉なのにい！」

「黙れい！我等はたった今決めたであろう！エリオ殿の言う事を聞くと！」

「ぶ、しょうがないねえん」

駄エ門に言われては仕方ないと背負っていた風呂敷をそつとその場に置く

因みに風呂敷はパンパンであった

しかも中身は殆ど女性の下着であった

「って、何時の間にこんなに盗んだんですか？」

「なはは、僕ちゃんに掛ければこの位朝飯前よん　しかも此処の可愛い子ちゃん達ガードが甘すぎるのよねえん」

五エ門にとっては此処のガードはノーガードとほぼ同じらしい
その為五エ門にとっては取り放題つかみ放題な状態であったのだ
元の世界では痴漢行為に秀でた五エ門だからこそである

「おい・・・お前らが時間食ってる間によお・・・」

菊の助はとある壁の方を見て呟いた
その直後、凄まじい爆発が起こった
壁の一角が砕け散る

だが、その気配を察していた一同がその壁から遠のいていた為被害
は無かった

そして、砕かれた壁の奥から現れたのは・・・数人の女性であった
それも美女であった

それだけなら大喜びであろう
だが、何か違う

そうだ、あの美女達の目だ
バイザーで覆い隠しているのにも関わらず一同には分かった
その女性達の目には生気の欠片も宿ってはいないのだ
まるで人形のようなのである

そんな女性達が総勢で10人は居た

『目標・・・発見』

『直ちに・・・処分します』

機械的口調で女性達は呟く

すると突如彼女達の腕が液状のように形を変えて鋭利な刃物に姿を
変えたのである

「あれは・・・まさか！マリアージュ」

「む？エリオ殿、それは一体何なんじゃ？」

駄エ門が聞く

それについてエリオが説明しようとした矢先であった

「うつひょん！何て素敵な美人ちゃんなのお！僕ちゃん惚れちゃったもんねえん！」

突如五エ門が女性達の前に躍り出た

目が文字通りハートマークになっている

『攻撃・・・開始！』

そんな五エ門目掛けてマリアージュ達が一斉に切りかかった

一瞬、エリオの脳裏にバラバラになった五エ門の姿が映った

その為に目を瞑った

だが、ふとおかしいと思った

五エ門の悲鳴が聞こえないのだ

それに気のせいかあばしり一家が皆呆れた顔をしている

それに疑問を抱き見てみると其処には

「むおおおお！何と言う魅力的なバスト！これは僕ちゃん今まで見た事ないんだもんねえん」

何と目の前では一体のマリアージュの胸元に顔を埋めてその胸を手で鷲掴みしている五エ門が居た

それには流石のマリアージュも顔色を変えていた

不思議と顔が赤くなっている

人形でも恥じらいは知っているようである

『は・・・離れる!』

途端慌てた口調でマリアージュが手の剣を振るう
だが、その時五エ門は其処には居なかつた
何処へ行つたのだ?
辺りを見回していた
すると

『うっ!』

一体のマリアージュが声を上げた
その後ろには

「むふおおお!この張りのあるお尻!溜まらんですばい!」

其処にはまた五エ門が居た

今度はマリアージュのお尻を撫でている

ご満悦な表情である

『予定変更!その男は蜂の巣にしろ!』

完全に怒つたようである

マリアージュ達は今度は腕を剣から銃に変えて一斉に弾丸を放つ
だが、それを五エ門はいとも容易く弾丸を掴み集めてしまったのだ

『な!馬鹿な!』

「むふふうう、お嬢さん達に武器は似合わないなあ、そんな物騒
な物は壊しちゃわないとねえん」

そう言うと五エ門は指弾きの要領で次々と弾丸を放つ

その全ての弾丸はマリアージュ達の銃に当たる
これでマリアージュ達は銃が使えなくなってしまった

『くっ！』

『止むをえん、剣で奴等を切り殺せ！』

仕方なく銃から剣に変えるマリアージュ達
だが、その時背後に直次郎が立っていた

「そりゃ好都合だ。そっちの方が殺り易いからなあ」

そう言うと目の前のマリアージュの頭部を掴みそのまま目の前で頭部を握りつぶしてしまった

嫌な音が響き渡り潰れたトマトの如く頭の中身が四散しマリアージュが倒れる

それに続いて駄エ門も跳び上がった

「ワシを相手に剣とは・・・身の程を知れい！」

そう言っって持っていた杖を振るう

その中には一筋の刀が仕込まれていたのだ
仕込み杖である

それを振るい次々とマリアージュを切り倒していく

「あばしり一家のあばしり菊の助たあ俺の事だ！冥土の土産に覚えておきやがれ！」

菊の助が叫び刀を振るう

それにより同様にマリアージュ達が寸断される

「ちえ、此処じゃ俺の出番は無いや」

吉三は不貞腐れていた
それもそうである

吉三の得意分野は爆発物である

こんな狭い部屋で使えば巻き添えを食ってしまうのだ
其処は頭の使いようである

そうこうしているとさっきまで10体以上は居た筈のマリアージュ
達は既にガラクタの山にされていたのだ

「けっ、なんでえ。大した奴等じゃないんだな」

菊の助がそう言って目の前のマリアージュの頭部を蹴る

するとマリアージュ達の切断面から黒い液体のような物が流れた
それが何なのかわからないあばしり一家は気にも留めていなかった
がエリオはそれに気づいた

「これは・・・危ない！菊の助さん！」

エリオは咄嗟に菊の助の前に出て防御結界を張った
その直後であった

目の前にあつたマリアージュ達が次々と大爆発を起こしたのだ
それをエリオは一番近くに居た菊の助を身を挺して助けたのだ

「お・・・お前・・・」

「だ、大丈夫ですか？」

痛みを堪える顔をしながらエリオが言った

その背中には恐らく大火傷を負ったのだらう
激しい痛みが走る

それを菊の助が見逃す筈がなかったのだ

「ば、馬鹿野郎！何無茶やってんだ！ガキの癖にしゃしゃりでやがって！アレ位で俺がくたばる筈はねえんだよ！」

「す……すみません……うっ！」

エリオの膝が砕けた

流石に無理をしすぎたのだろう

意識が遠のきそうになる

しかしそんなエリオの体を菊の助が支えた

彼女の女性らしい腕でエリオの体を支えたのだ

「ったく、男つてのは皆馬鹿の集まりだな……けど……嫌いじゃないぜ、俺はそう言う馬鹿がな」

菊の助の腕の中で気を失っているエリオを見てフツと笑いながらそう呟いた

しかし、それを見ていた一同が

「菊の助！おまさかエリオ殿に恋したのではないかあ？」

「な！ななな何言ってるんだよ親父！俺はもう16だぞ！何で俺がこんな3つも年下の奴の事好きにならなきゃならねえんだよ！」

「いやいや、ワシの三番目の女房となんざ20以上年が離れておつたぞお。それに比べたら小さい小さい」

駄エ門が手をヒラヒラさせて言う

すると突然五エ門が泣き出した

「そんなあ！菊ちゃんには僕って言う素敵な男性が居るのにどうしてそんなお子ちゃまの事を好きになっちゃったのよお！」

「黙れ変態兄貴！」

滝のように涙する五工門に菊の助の鉄拳が放たれた

「しっかし、あの菊の助が一端に恋するたあ世も末だぜ」

「本当だね、あの菊姉ちゃんがねえ」

「う、うるせえうるせえ！」

直次郎と吉三の言葉を聞いて更に顔を真っ赤にする菊の助

「エリオ君！大丈夫？」

そんな一同は置いておいてキャラ口が心配そうな顔でエリオの元へ駆け寄る

そんなエリオの背中では酷い火傷を負っており皮膚が爛ただれていた
早急に治療しなければ危険だ

「こりゃいかん！」

「どうすんだよ？治療道具なんか持ってないぜ」

「エリオ君、すぐに治すからね」

キャラ口がエリオの背中に手を合わせると其処から柔らかい光が放たれた

そして背中が爛れが瞬く間に消え去ったのだ

だが、流石に破れた服までは戻せないらしくそのままであったのだが

「あ、有難うキャラ口」

「うん、でも無事で良かった」

目を覚ましたエリオを見てキャラ口が一安心する

そんな二人を菊の助が見ていた
何処か不満げであった

（俺がこいつに恋・・・そんなまさか！相手はこんなガキ・・・でもねえか・・・）

見てみればエリオとの身長差もさほどない

13歳だというのにエリオの体つきはガツチリしており良く鍛え上げられた体は中々の物でもあった

（な、ななな何で俺はこいつを見るとこうなっちまうんだよ！別に俺はこいつの事何にも・・・あああもううざってえ！）

自身の頭が変になってしまった事に焦りを感じる菊の助

そしてそんな菊の助を見て乙女らしさが出てきたなあと安心していい
る駄エ門でもあった

第5話 動き出す暗雲 その5

マリアージュの襲撃は何もエリオ達とあばしり一家の元にだけ来たのではない

それは、此処ルーテシアの居た次元世界にも迫っていたのであったしかし、この時数体のマリアージュ達は知らないでいた

其処には人間離れた奴等が居たと言う事に・・・

ルーテシアの住んでいた家の前でゼストとバイオレンスジャックは横になっていた

何故この二人が外に居るのかと言うと、ルーテシアの居る家は凄く狭いのだ

その為大男二人が家に入れる筈がなく、こうして野宿する事になったのだ

最初はメガーヌも申し訳なさそうな顔をしていたが何せ病み上がりの身である

部下を思うのはゼストなりの優しさでもあるのだ

そしてバイオレンスジャックも野宿は慣れっこなようだ

「空気が美味い・・・汚染がされていないのだな」

「文明が全くない世界だから・・・自然がそのままあるのだろう」

「成る程・・・久しぶりに心が癒される感じになるな」
「そうか」

ジャックの言葉にゼストは頷いた

その言葉の裏には彼が今までどれ程までの地獄を経験してきたかが
おおよそ予想出来た

そのせいかジャックの顔がとても穏やかであった

最初会った時のような獣のような顔ではなく正真正銘人間の顔を
していた

「さて、そろそろ寝るか。明日は早朝の便に乗らないといけないか
らな」

「そうだな・・・ん？」

大地を背に寝ようとしたジャックとゼストであったが、二人はその
時気づいた

自分達の身に迫られている異様な気配に

それは間違いなく殺気であった

しかも一体ではない

恐らく数体は居る

しかもこの殺気はとても異様な物であった

「ジャック！」

「この気配・・・人間じゃないな」

そう言いながらゼストは槍を、ジャックは大振りのナイフを取り出
した

二人は同じ箇所を見ていた

森林の奥である

その目の前の林が突如不自然に揺れ出した

一斉に構えを取る

そして茂みを破って出てきた

出てきたのは数体の女性であった

顔には目を覆い隠すバイザーをしているがそれでも美人である事は見て取れたのだ

しかしその女性には以前と同じように生気が感じられないのだ
その数体の女性達がゼストとジャックを睨んでいた

「ゼスト・・・コイツラは？」

「分からん、だが敵である事は確かなようだな」

「この世界にはこの様な奴等が居るのだな」

ジャックが一人納得したように呟く

そうこうしていると数体の女性達が一斉に二人に襲い掛かって来た

「奴等に時間は掛けられん！手早く片付けるぞ」

「任せろ！」

ゼストとジャックがお互いに頷き合いながら女性達を迎え撃つ

女性達が腕を剣に変形させて切りかかる

が、それをゼストは槍で払い退け、反撃に槍の先端で女性を真横から両断した

両断された箇所から黒い液体のような物を撒き散らして女性は息絶えた

同様にジャックに数体の女性が迫るもジャックはその女性の剣を素手で叩き折り持っていたジャックナイフを使い女性をバラバラに切り裂いた

圧倒的

正に圧倒的な強さであった

数では女性達が勝っていたにも関わらずゼストとジャックの二人には少なすぎたようである

二人の目の前では息絶えた女性の遺体が其処に横たわっていたのだが、その女性の体から流れる黒い液体を見た際にゼストの中である結論が導き出された

「この液体・・・まさか！」

「どうした？」

「ジャック！早く俺の後ろに下がれ！！」

ゼストの言葉にジャックは首を傾げたがすぐに言われた通りにしたそしてゼストは目の前で防御結界を張る

その直後、女性達は凄まじい爆発を起こした

その爆発からゼストは自身とジャック、そしてルーテシア達の居る家を守ったのだ

「やはり・・・あの液体は燃烧液だったか」

「ゼスト・・・今のは何だ？」

ジャックが目の前で起こった光景に驚きの顔をしていた
無理もない

いかに地獄を経験したジャックでさえ女性が一人でに爆発するのを見れば驚きもするのだ

「分からん、だが・・・恐らくこれを作った何者かがそうするよう
に仕向けたのだろう」

「まだ若い女性であったのに・・・惨いことをする」

「ああ・・・全くだ」

二人は爆発して果てた女性達の姿を思い出した

年的にはまだ十代半ばを過ぎたであろう

にも関わらずその女性達を手に掛けてしまった上にその女性達が爆発して跡形もなく消え去ってしまったのだからそれが二人には余りにも居た堪れない思いであった

「ゼストさん！ジャックさん！今のは？」

それからすぐにルーテシア達が家から出てきた

「な、何じゃこりゃあ！」

次に声を放ったのはこの口調から分かると思うがアギトである
メガーヌも同様に驚いている
そんな一同を二人は見た

「どうやら今回の黒幕は俺たちを標的にしたみたいだな」

「どう言う意味ですか？」

ゼストの言葉にルーテシアは首を傾げるのであった

翌朝、時刻的には朝の四時半である

そんな時刻の中、Dフォースの隊舎上空を三機のマシンが飛行して

いた

言わずと知れたゲッターチームである

號、翔、凱の三人がそれぞれのゲットマシンを操り上空で高速で飛行しているのだ

『遅いぞお前ら！それじゃ実戦で撃ち落とされるだけだぞ！』

「す、すみません隊長」

朝からトーレ隊長の言葉が飛び交う

それに號が謝罪の言葉を述べる

「號、急いで合体しましょう」

「それが良いな、これ以上長引かせるとまたトーレ隊長にどやされるのが落ちだしな」

「だから俺限定で言うの止めろっての！」

翔と凱が笑いながら言うのに號が眉を顰める

しかしその会話は通信機に筒抜けであり勿論三人の会話はトーレの耳にも入っていた

『貴様ら・・・そんなに余裕があるなら更にもうワンセット追加しても良いぞ？』

「」「滅相もない！」「」

トーレの言葉に三人は息ピッタリに反応したのであった

『分かったらさっさと合体訓練に入れ！今回は1秒を切れよ』

「了解！んじゃ、行くぜえ」

號の顔に笑みが浮んだ

そしてカ一杯レバーを引く

三機のマシンが一気に上空に舞い上がっていく
そしていざ合体をしようとした矢先であった

『ちよつと待て！レーダーに反応があるぞ！』

「え？」

突如トーレの言葉に號達が驚きレーダーを見た
レーダーには確かに大型反応が出ていた

明らかに可笑しかった

ミッドチルダにはまだ巨大マシンは普及していない

その為大型機の反応があるのはおかしいのだ

あるとすれば大型ロストロギアか或いは未確認の敵である可能性が
あった

『訓練は中断！ゲッターチームは直ちに未確認の敵の迎撃に当たれ
！』

「了解！」「」

ゲッターチームが答え直ちに迎撃に当たる

場所は広大な海原であった

その海原の一点に突如として巨大な水しぶきが上がり何かが現れた
それは異様な物であった

姿の大本は大型ロストロギアであった

だが、その体のあちこちを機械で武装していたのだ
サイボーグロストロギアである

外見は亀のようなロストロギアであるが背中には大型砲台

両腕は巨大なアームとハサミになっており顔には鋭い牙が並んでいた
大きさからして40mはある

かなり大型のロストロギアであった

これ程までの大型ロストロギアを一体何者かがこの様に改造したのかそれは分からなかった
だが、分かる事と言えばそれが明らかに自分達にとっての強敵であると言う事だけであった

ティアナは異様な光景を目にしていた

目の前には幾万と迫る死者の群れ

そんな中、一人敢然と戦いを挑む女性の姿があった

純白の衣服を身に纏いオレンジの長い髪を靡なびかせながら右手に長剣、

左手に丸い盾を持った聖女の様な女性であった

その女性が圧倒的な強さで死者の群れを次々と蹴散らしていく

死者の血が雨の如く降り注ぐ

しかし女性の体には一滴も血が付く事がない

血が付く前に次の敵に向かっているのだ

そしてティアナはその女性を見た

その女性の顔は正しく、ティアナと瓜二つであったのだ

「夢……だったのね」

目を覚ますと其処はくるがね屋の部屋であった

時刻は早朝の五時前であった

職業病であったせいだろうか

いつもこの時間に起きてしまうのだ

しかし今回の夢を見たのは初めてである

純白の服を身に纏いその姿はまるで女神であった

それだけなら只の夢で済ませるのだが、その女神の顔は何と自分自身と同じであったのだ

一体その夢が何を表しているのだろうか

だが、幾ら考えても答えは浮ばないのが現実であり……

「今の死者の群れ……マリアージュに似ていた……それじゃ、あそこで戦っていた女性は一体……」

ふと、ティアナは隣で寝ているスバルを見た

そして、其処で寝ているスバルを見た時ティアナは青ざめた

スバルの顔は真っ青になり非常に苦しそうな顔をしており、彼女の

右腕には悪魔の様な腕が肘より少し上辺りまで侵蝕を進めていたのだ

右腕の悪魔の腕が微かに脈動を打っているのが見えた

まるでその腕事態が生きているかの如くである

そしてその手の甲には赤い文字で魔と書かれていた

「スバル……スバル！」

ティアナはスバルの両肩を掴んで何回も揺らした

意識の無い為か彼女の首が前後に揺れる

それでも彼女の苦しそうな顔は消えず未だにうなされているだけである

「スバル！しっかりしなさい、この馬鹿！」

今度はスバルの両頬をしきりにたたき出した
乾いた物を叩く音が部屋に響き渡る
流石に其処までされたら溜まった物ではなかったのかスバルがゆっ
くりと目蓋を開いた

「ティ……ティア……」

「スバル……あんた大丈夫なの？ 凄いうなされてたけど」

「大丈夫……だけど、何だか凄くほっぺが痛いんだけど……何
で？」

スバルが自身の両頬を抑えたのを見てティアナが視線を逸らした
言える筈が無いのだ

その痛みの原因が自分にあるとは

そしてそのままチラリとティアナはスバルの右腕を見た

スバルの右腕には先ほどのような悪魔の腕は無くなっており元の人
間の腕に戻っていた

だが、あの時ティアナは見たのだ

腕の侵蝕が僅かではあるが進んでいた事に

（もしかしたら……このままじゃスバルは本当に魔神になってし
まうんじゃない……）

ティアナの脳裏に一抹の不安が過ぎるのであった

「以上で説明を終えます。何かご質問のある方はいらっしゃいますか？」

所変わり此処はミッドチルダの学会である

その会場で兜剣造は巨大なモニターに光子力と超合金Zの説明をしていた

そして会場には大勢の学者や管理局の高官達が出席していた

勿論その中にはゲンヤ・ナカジマ、そして兜十蔵も出席していた

「ふあゝあ、退屈じゃのお」

「俺にはチンプンカンプンだぜ・・・確かに眠くはなるな」

そうやってゲンヤと十蔵は揃って欠伸をする

十蔵にとっては今更な説明であり、ゲンヤは意味が分からずの事である

そうなので今の二人はこんな会話ばかりをしていたのである

「ところでゲンヤやお、クイントちゃんは今何しておるんじゃ？」

「部隊が解体しちまってなあ、仕方なく今はギンガの推薦の元でシユールティングアーツの教導官を勤めているさ」

ナカジマ家の母であり8年前に死亡していたと思われていたクイントは現在は所属していた部隊を解体されてしまった為、やる事が無かったのだが陸士部隊のギンガが母クイントのシユールティングアーツを参考にしていたと言うので彼女のシユールティングアーツを習いたいと言う若者が増えた為今ではクイントはそんな若者達に自身の

シューティングアーツを教え込んでいる充実した毎日を送っているのである

しかし読者の皆様は覚えているだろうかクイントは正体を現す前は別の流竜馬の姿をしていたのである

そのせいなのかクイントはたまに流竜馬の姿になってしまっているその条件と言うのが彼女を怒らせる事である

現にゲンヤは以前一回だけ彼女を怒らせた事がある

それはクイントがナカジマ家に戻って間もなくの事であった

「ねえ、貴方」

何時に無く甘い声でクイントはゲンヤを見たそんなクイントを見てゲンヤが頬を赤らめる

「な、何だ？クイント」

「今日・・・何の日か覚えてる？」

「今日？何かあったっけ？」

しかしそんなクイントとは対照的にゲンヤは首を傾げていたクイントは自身の薬指にはめられた指輪を見せた

「ね、思い出した？」

「ん？その指輪がどうかしたのか？」

しかしそれでも気づかないゲンヤ

クイントの額に徐々に青筋が浮かびだして来る

それを見たギンガとスバルが部屋を出て行く

そんな二人を見て一体どうしたのかと思うゲンヤではあったがその時ゲンヤは気づいた

クイントの姿が思い切り変わっていた事に

目の前のクイントは既に美しい女性の姿ではなく、無骨な筋骨隆々で古びた胴着と羽織りを着た男「流竜馬」になっていたのである

「てめええええええええ！マジで忘れたのかああああ！」

「ぎゃああああああああああ！クイントオオオオオオオオ！御免、マジ御免！一体今日何の日だったっけ？」

殴られながらも聞いてきたゲンヤに対し完全に切れたクイント（竜馬）が大声で殴りながら叫ぶ

「今日は俺（私）の結婚記念日だろうがあああああああああ！」

と言つて思い切り殴り飛ばすクイント（竜馬）

姿が変わると口調も変わるらしい

そして性格や戦い方も変わるようである

そう思わせる光景であった

「あの時は死ぬかと思つたなあ」

一人青ざめながら呟くゲンヤであった

そんなゲンヤを見てニヤリとする十蔵ではあつたが其処はスルーさせて貰おう

剣造が説明を終えて質問に答えようとしていた矢先であつた

突如会場の電源が落ちたのである

辺りが漆黒の闇に包まれていく

慌てふためく人達の声が響く

「皆さん、落ち着いて下さい！すぐに電源が戻る筈です」

会場に居た剣造が皆にそう叫び落ち着かせる

すると、突如会場にあったスポットライトが全て剣造に当てられる
余りの眩しさに自身の手で視界を覆う

会場全ての人達も皆明かりのついた剣造の方を見る
そんな時であった

「フハハハハハハハ！遂に見つけたぞ兜剣造！」

「む？」

剣造と会場の人達は一齐に声のした方を見た

其処には一人の少女が立っていたのだ

茶色の髪を両サイドで束ねたツインテールの少女でありその身に纏
っていた服は管理局の白き魔王の服ではあったが色が違いしるでは
なく黒であった

そしてそんな少女が一気に跳躍して剣造の前に降り立つ

剣造はその少女を見た

なのは？嫌、フェイト？嫌違う。どうやら二人を合わせた姿である

「君は一体誰だい？」

「フフフ、良くぞ聞いてくれたわ！私は管理局最強の二大魔道士の
データを元に作られた最強の魔道士！その名も『NF-01』様な
のだああああ！」

大声で名乗りを上げて剣造を指差す

その光景に会場の人達は啞然としていた

それでもって剣造は額に手を当てている始末である

「兜剣造！貴様に恨みはないがこれも我が主の為、此処で死んで貰

う！
「何！」

目の前の少女が剣造を指差してそう叫んだのである
それを聞いて剣造だけでなく会場に居た全ての者達が驚いたのであ
った

次回予告

バイオレンスジャック

ゲッターチームの元へ現れた新たな敵メタルビースト
更に兜剣造の元へ現れ彼を殺すと宣言しだした少女
そして・・・スバルの腕が徐々に侵蝕されていく
ティアナの見た夢とは一体何か？

次回『ゲッターロボ対メタルビースト』

次回もこの小説にテイク・オフ・・・で、良いのか？

第5話 動き出す暗雲 その5（後書き）

作者はバイオレンスジャックを見た事が無いのでこんな感じになっ
てしまった

申し訳ないです

次回はゲッター対メタルビースト戦を主にやっていきます
では

第6話 ゲッターロボ號対メタルヒースト（前書き）

今回から面倒なので分割はしないで一気に書いていこうと思います
ではごっご

第6話 ゲッターロボ號対メタルヒースト

海上でゲッターチームは突如現れた怪物を前にしていた

「どうする?」

翔が聞いてきた

無論それは戦う事を前提にしての問いである

問題はどうかだ

場所は海上

これでは地上戦用のゲッター號では戦力外になるのは必然である

そして空中戦用のゲッター翔もまた心もとない物があった

もしゲッター翔の状態で海中に引き込まれたら一方的になる危険性があるからだ

ならば残る手立ては凱である

「凱、行けるか?」

「任せろ!海中ならゲッター凱の出番だ!」

凱は息巻いていた

嬉しいのだろう

自分に出番が回ってきたのが余程嬉しいからそうなるのである

そう思えるのである

「よし、行くぞ!チエエエンジンゲッターアアガアアイ!」

凱が叫び三機のゲットマシンが上から凱、號、翔の順に合体する

重戦車を思わせる下半身に太い腕、そして豪胆な外観を持つ水中専

用ゲッターロボ「ゲッター凱」である

ゲッター凱が海中に思い切り飛び込む

激しい水しぶきが舞い上がる

その後、目の前一杯に水面の光景が浮かび上がる

それが此処が海中だと言う事を思わせるには充分であった

「よし、久しぶりの実戦だが感度は問題ない！これなら・・・」

凱がゲッターを動かして確認する

こうして実戦で戦うのは実に久しぶりである

訓練で合体しての事は行ったが今回は違う

本物の実戦なのだ

3年前の時と同じあの実戦なのだ

そう凱は自身の中で思っていた

凱は即座に謎の怪物の方を向いた

さっきまで海面に居たにも関わらず物凄いスピードでこちらに迫ってきているのが見えた

「来るか！ならばこれでどうだ！」

ゲッター凱の腰部分にある二本のミサイルが放たれた

ハイブーンミサイルである

海中でも撃てる魚雷にも似たミサイルである

しかし怪物はそれをヒラリとかわしそのままの勢いでゲッターに体当たりを食らわせた

激しい衝撃がコクピットに響き渡る

「ゲウツ！」

凱が声を上げる

そして気がつくとも既に怪物は遙か遠くに居り、またUターンしてこ

ちらに向かつて来ている

「舐めるな！」

今度はそれを迎え撃つかのように両腕を広げる
そして怪物を目の前でガツチリ掴んだ
しかしそのままの勢いで海中を進んでいく
パワーが段違いに高いのだ

「負けるかあ！うおおりゃあ！」

凱が叫び怪物を上空に投げ飛ばす
投げられた怪物が今度は肩にある二本のキャノン砲から巨大な砲弾
を放った

その砲弾はゲッターに直撃こそしなかったが付近で爆発し爆風が襲
い掛かる

「くそお！」

「落ちて着け凱！お前らしくないぞ！」

「す、すまない……」

號たしなに窘められて落ち着く凱

その間も怪物は高速で海中を泳ぎまわっている

「ミサイルが駄目ならこれでどうだ！」

迫り来る怪物に対しゲッター凱が両腕を振り上げて仁王立ちの姿勢
を取る

そして胸の放熱板が光り出す

「食らえ！プレストビィィィィィム！！！」

そして真っ赤な熱線が放たれた
その熱線は真っ直ぐ怪物に向かっていく

ミサイルとは違い速度が速い為かわすのは難しい筈である

そう思えたのだ

だが、その時怪物は予想だにしない事をしたのだ

何と突如背中を向けて甲羅でプレストビームを受けたのである

背中にはまるで鏡のような甲羅が張られておりそれでプレストビームを吸収しているのである

やがて全てを吸収し終わるとその甲羅は先ほどの銀色の甲羅から赤い色の甲羅になっていたので

「馬鹿な！プレストビームを吸収したのか？」

驚愕の顔で凱は見た

そしてその怪物は甲羅で吸収した熱線を威力を増して跳ね返したのである

そのビームはゲッター凱に命中してしまう

「うわああああああ！」

凱が声を上げる

かなりの威力が帰って来たのだ

まさかビームを跳ね返したのには驚かされた

そして続けざまにゲッターに向かって再び怪物が体当たりを当てた
しかも今度はそのまま離れるのではなく両腕でゲッターの腕をしつ

かりと掴みそのまま海中を泳ぎ続けた

そして鋭い牙をゲッターの肩に突き刺す

このまま装甲を食い破って破壊しようとしているのだろう

だが、この時凱は気づいた
それは怪物の腹部である
堅牢な甲羅とは違い腹はブヨブヨしている
簡単に破壊出来そうな位である

「これは・・・よし！それなら」

凱はゲッター凱の脚部にある巨大なドリルを回転させて勢い良く怪物の腹に突き刺した

突き刺された腹から夥しい量の黒い液体と機械の部品が撒き散らされる

さっきまで噛み付いていた牙を離し怪物が悲鳴を上げるとても痛々しい悲鳴である

そしてその拍子に怪物は両腕を離してしまった

自由になった両腕で今度は怪物の腹に拳を突き刺す

右、左、右と交互に拳を突き刺し怪物の腹をかき回していく

怪物の悲鳴が更に大きな物に変わっていた

背中から無数の砲弾が放たれ手足が痙攣けいれんを起こしている
そんな怪物を投げ飛ばし距離を開ける

「よし、トドメだ！ハアアアブウウンミサイル！」

そしてトドメに先ほどかわされたミサイルを放つ

そのミサイルは怪物の腹に命中し内部で爆発を起こし怪物が海中でバラバラになってしまった

辺りに怪物の残骸が散らばる

その前では多少傷だらけになったゲッターロボが居た

肩には鋭い噛み傷があり両腕も挟み跡が出来ていた

そして凱自身も息が上がっており肩が震えていた

「とんでもない化け物だったな」

「全くだ。あのロストロギアをサイボーグ化するなんて、余程の科学力が無けりゃ出来ない芸当だぞ」

「また・・・あの時のような奴等が出てきたのかなあ？」

三人の胸中には今回の敵で苦戦した事と新たな脅威に対する不安で一杯なのであった

剣造と会場に来ていた者達の前で少女は声高らかに宣言した

少女は無い胸を張って自信満々な顔をしていた

恐らく完璧に決まったと思っっているのだろう

だが、実際には・・・

「え、それでは先の説明について質問のある方はいらっしやいますか？」

剣造はそんな少女をガン無視して会場の客達の方を見た
そんな事をされたのだから当然少女はむくれっ面になる

「コリア！人を無視するなあ！」

「悪いねお嬢さん。今叔父さんは忙しいんだ・・・遊んで欲しいな
ら後で遊んで上げるよ」

「違う！私は遊ぶんじゃないからお前を殺しに来たの！少しは怖がりなさいよ！」

「はいはい、あゝ怖い……こんなもんで良いかい？」

明らかに面倒臭そうな対応をした剣造に対し少女が完全に切れる
そして手に巨大な光り輝く剣型デバイスを取り出し両手で持つて構える

「もう頭に来た！こうなつたらこの場でお前を殺す！死ねえ！」

思い切りデバイスを振り上げて剣造に切りかかった

だが、それに対し剣造は軽く溜息をつくと僅かな動作でそれをかわす
かわされた少女はそのまま反対側で倒れる

しかも頭から

分かる人は分かると思うがかなり痛い
鼻っ柱を抑えながら少女が起き上がる

「こ……このお！良くも私の攻撃をかわしたなあ！」

「そうは言ってもそんな鈍い攻撃じゃ当たる方が難しいと思っただ
が？」

怒り心頭で叫ぶ少女に剣造が肩を上げる

すると騒ぎを聞きつけた局員達が会場に入ってくる

「博士！今援護します！」

局員達が一斉に武器を構える

だが、それに対し剣造が彼等に手を翳して止める

「気にしなくて良い。私一人でどうにかなるぞ」

「し、しかし・・・」
「良いから良いから」

尚も渋る局員達に剣造は笑顔を見せる

それを見た局員達が仕方なくデバイスを降ろす

だが、何かありしだいすぐにも突入出来る体制でいるのは間違いない状態にしてある

そしてすぐさま剣造は少女の方を向き直った

「フフン、バカな奴！あのまま他の奴等を突入させればもしかしたら勝てたのかも知れないのにねえ？」

「やれやれ、悪戯する悪い子には少しお灸を据えなければならぬのかな？」

「五月蠅い！お前は私に殺される！」

そう叫んで再びデバイスを振り上げる

だが、今度は剣造はそれを避けずに片手でそれを受け止めてしまった

その拍子に少女は手を離してしまい思い切り地面に倒れてしまう

またもや地面に顔を思い切り叩き付けてしまった少女が鼻を押さえながら立ち上がる

しかしその時少女は自分がデバイスを持っていない事に気づきそれを探し出していた

そして、そのデバイスが今剣造の手の内にある事に気づく

「探し物はこれかな？お嬢さん」

しかし剣造は笑いながら少女に対しそのデバイスを手渡したのだ
手渡された少女は暫く放心状態であったが、やがて自分が遊ばれていた事に気づきまた激しく怒り出す

そして再びデバイスを振るう

だが、結果は同じであった

何度やっても剣造に当たる前にデバイスを手でつかまれてしまうのだ
しかもその度に剣造の激が飛ぶのだ

「もつと脇を締めて振ってみる！それでは隙だらけだ！」

「五月蠅い！」

「振りが大雑把過ぎるぞ！もつと繊細にやるんだ！」

「黙れ！」

「モーシヨンが大きすぎる！もつとシヨートに振るうんだ！」

「黙れ黙れ黙れええええええええ！」

少女にとっては屈辱であった

敵である筈の男に教授を受けるのだからだ

本来は殺す筈の目標に手玉に取られている

これがどれ程悔しいか分かった物ではないのだ

気がつけば少女は肩で息をしているのに対して剣造は涼しい顔をして
ていた

息一つ乱れていない

明らかに力の差が出ていた

それをゲンヤと十蔵は見ていた

「なあ、本当に助けに行かなくて良いのか？」

「気にすんな。あれは剣造の悪い癖みたいなものじゃ」

心配するゲンヤに十蔵が手をヒラヒラさせて言う

それを見てそうなのかと納得するゲンヤでもあった

そして、壇上では今度は剣造が動こうとしていた

「もうお仕舞いかい？それなら今度はこちらから行かせて貰うとす
るぞ」

そう言つて今度は剣造が攻めて来た

一気に距離を詰めて手を広げた右手を振り上げる
やられる！

そう思い少女は咄嗟に目を瞑つた

だが、その直後少女の頬に乾いた音と痛みが走つた
目を開くと、其処には既に手を振り切つている手と剣造の姿があつた
それから自身がビンタを受けたと言ふ事を実感した

「悪い子には仕置きをするのが大人の務め・・・これに懲りたらもう悪さはいかんぞ」

そう言つと剣造は踵を返した

少女は歯を目一杯食い縛つた

自分はドクターに最高傑作と期待を受けていたと言つのにこの始末である

これではあわせる顔がない

そう決断した少女は

「お許し下さい・・・ドクター・・・せめて兜剣造を道連れにでも・・・」

そう言つて少女が自身の中にあるある機能を起動させようとした時であつた

そんな少女の目の前には何時の間にか剣造が迫っていた

「自爆などさせん！」

そう言つて剣造は少女の首筋に自身の手の平をぶつけた
すると少女の中にある変化が起こつた

先ほどまで自爆をしようとしたのだがその機能が狂ってしまったのだ

「お……お前……一体何を打ち込んだんだ？」

「君……マリアージュだろうか？」

「だ、だったらどうした？」

少女が剣造を睨みつける

そんな少女に剣造が言葉を述べる

「悪いが君の体にマリアージュの機能を狂わせる薬を打ち込ませて貰ったよ……これで君は自爆する事は出来ないさ」

「な！これで私を拘束したつもり？」

「嫌、今から君を更正させて貰う」

そう言つて剣造は指を鳴らす

すると少女の体を赤い色のバインドが拘束する

それだけでは無かった

徐々に少女は眠気に襲われた

「な……何……急に……眠く……なつて……」

「ああ、言い忘れたが先の薬には睡眠効果も付加してあったんでね・

・間も無く君は眠つてしまつたろうけどね……まあ君を管理局に引き渡す気はないから安心すると良い」

剣造がニヤリとした顔で少女「NF-01」を見つめていた

そんな剣造を睨みこそしたがやがて彼女はそのまま深い眠りについてしまった

次回予告

剣造

「遂に合流したDフォースメンバー

だが、そんな彼等に迫る脅威

そして、遂に『魔神』が目覚めの雄たけびを上げる」

次回『目覚める魔神』

次回もこの小説にチャンネル・セエツト！

第6話 ゲッターロボ號対メタルヒースト（後書き）

次回はどんなお話になるかなあ？

第7話 目覚める魔神 その1（前書き）

やっぱり長くなるので分割します
変わったりしまくって申し訳ないです

第7話 目覚める魔神 その1

空には雲ひとつない

言ってしまうえば快晴の天気である

太陽が真上にある事から時刻的に正午を指しているのが分かる
その真下では大きな空港の前にとある一団が立っていた

ミッドチルダ国際空港

ミッドチルダにある巨大な空港であり此処から別次元の人達が入りしているのだ

いわばミッドチルダの出入り口とも言える場所なのだ

そしてその出口で待っている一団は他の客達とは一風変わった面子であった

「ほほお、此処が噂の「みつどちるだ」と言う場所かのお」

「へえ、結構華やかな町じゃねえか」

「金目の物とか転がってそうだな」

「美人も居そうなのねえん」

「へへ、壊し甲斐があるってもんだね」

なんとも物騒な物言いをしているのは言わずと知れたあばしり一家の面々である

父駄エ門、長男の五エ門、次男の直次郎、長女の菊の助、末弟の吉三
それぞれが物珍しそうにミッドチルダを見ていた

側から見ると少し危なさそうな一団であるが本当に危ない一団なのだ
何しろ彼等は殺しのプロ集団なのだ

腕利きの殺し屋が束になって掛かっても彼等に勝てるのはまず居ないとされている

正に地上最強の一家なのだ

そしてその近くで少し畏かしこまっているのは環境保護団所属のエリオとキャロである

今回二人が来たのはミッドで起こっている謎の怪事件解決の為Dフオーから直々に協力の便りが来たのだ

元々Dフオーは彼等が所属していた機動六課の系列なので此処は是非協力したいと言う一心でその便りを受け取った

因みにあばしり一家がついてきたのは「このまま放っておいたら何しですか分らないので一緒に居た方が安全」と思ったからであるとまあそんな訳でこうして大所帯になつてしまった訳である

「時にエリオ殿、わし等はこれから何処に向かうのじゃ？」

「もう少ししたら迎えの人が着ますのでそれに乗って隊舎に向かう予定です」

そう言つてエリオは腕時計を見た

時刻は正午の12時きっかりを指している

そろそろ向かえの人が来ても良い時刻ではある

しかしその前にもう一人合流する人が居る

それは・・・

「お待ちせ」

「あ、来た！」

待っていましたかの如く声がした方を向くエリオとキャロ

其処には変わらない姿の少女が居た

紫の長い髪に赤い瞳をした綺麗な少女である

彼女はルーテシア・アルビーノ

知つての通り彼女もまた元機動六課所属のメンバーでありDフオーから招集を受けたのである

それだけならまだ良かった

だが、彼女の後ろには異様な二人が立っていた

一人は分かる

管理局所属の航空魔道士「ゼスト・グランガイツ」である

元管理局所属の部隊「ゼスト隊」の隊長を務めていたが今から十数年前の機鋼帝国との戦いで部隊は壊滅しそのまま解体

ゼスト自身も今はフリーとなっていた

そんな時にルーテシアの召集が掛かったので迎えに来たのがゼストなのだ

其処までは予想は出来た

だが、その隣の大男は全く予想出来なかった

ボサボサの髪に鋭い眼光

尖った歯に全身に出来た古傷

ボロボロになったコートの下には鍛え上げられた筋肉が見えておりサラシを巻いただけである

そして何より驚かされるのはその身長である

パツと見ただけで2mは有りそうだ

そんな大男がルーテシアやゼストと共にやってきたのだ

因みにルーテシアの上を飛び回っている小さな生き物も居たがこれは説明する必要もないかもしれないがしておこう

彼女は「アギト」融合型デバイス、通称「ユニゾンデバイス」の一人であり彼女は本来シグナムとツートップで組んでいたが今シグナムは隊長研修で居らず暇を持て余していたのである

其処でゼストと共にルーテシアを迎えに行きそのまま同行していたのである

「えつと・・・ルーテシア・・・其処の人・・・誰？」

エリオが恐る恐る大男を指差す

その指を大男はジッと見つめる

今にもその牙で食いちぎられるかその腕で握りつぶされそんな勢いである

だが反対にルーテシアは落ち着いていた
そして大男を笑って見ながら言う

「この人はバイオレンスジャックって言うの。だから私は「ジャック」って呼んでるよ」

「そ、そうなんだ・・・」

エリオは納得して再び大男、バイオレンスジャックを見た
やっぱり怖い・・・

何しろ鋭い眼光で見られているのだ
怖くないと言っても怖い物は怖いのだ

幾ら修羅場を潜り抜けてきたエリオと言えどもまだ13である
彼を見て怖がるなど言う方が無理である

「でも、そう言うエリオとキャラの後ろの人達って誰？」

ルーテシアがあばしり一家を指差す

そう、ルーテシアもまたあばしり一家と出会うのはこれが初めてなのだ

すると駄エ門が代表して前に出る

そして軽く咳払いして片足を力強く地面に叩きつけると

「あ、わし等こそがあ天下に名高き極悪一家！その名も「あばしり一家」たあわしらのことよー！」

首を獅子舞の如く回して歌舞伎役者張りの縁起をしてみせる駄エ門だが、案の定の如くルーテシア、ゼスト、アギト、ジャックの一同はポカンとした顔をしている

流石にエリオとキャロで慣れたのか駄エ門も襟の裾を直してそそくさと引き下がった

「えっと・・・極悪一家って・・・」

「あ、え、ええと・・・今はもう堅気だから大丈夫みたいだよ」

恐る恐る呟くルーテシアにエリオが身振り手振りで説明する

そんな中、五エ門はマジマジとルーテシアを見つめる

しかもその視線はかなり嫌らしい視線であった

その視線に悪寒を感じ五エ門を見る

「あの・・・何ですか？」

「ムフフ、僕ちゃんには分かるのねえん！チミはきつと物凄い美人になるのねえん！」

「は・・・はあ・・・」

「だからあ・・・今すぐちみのパンチーを僕ちゃんにおくれ！」

と言いつつ両手を前に差し出して物乞いのポーズを取る

いきなり「パンツをくれ」と言われてしまいルーテシアは半ばフリーズ状態に陥ってしまった

そしてそんな五エ門の頭を菊の助と直次郎が殴りつける

因みに二人共肘で殴ったのだ

「馬鹿野郎！てめえには節操ってもんがねえのか！」

「前は年頃の女もんだったから良かったが今度はガキにまで手を出すのかよ！とことん性根が腐った兄貴だぜ」

「酷いのねえん！其処まで言う必要ないのねえん！」

半ば蔑んだ目で見る菊の助と直次郎に五エ門が涙する

そんな光景を一同は呆れた顔で見ていた

「この世界には・・・変わった輩が居るのだな」

ジャックが呟いた

だが、それを聞いた吉三が手を横に振った

「俺たちや元々此処の世界の住人じゃねえぜ。いきなり此処に飛ばされて来たんだ」

「何！それじゃお前らも俺と同じなのか？」

ジャックが驚きの顔をする

その時クワツと顔が近づかれる

只でさえ怖いのにそれがドアップで来るのだから並みの人間なら卒倒しそうである

あ、現にキャラが今目を回して倒れた

エリオはどうか耐えているが顔が真っ青である

「こ、怖えからそんな近づくなよ！」

「む！すまん・・・」

吉三に言われて渋々顔を下げる

どうやら自覚は無いようである

しかし顔に似合わず良い人っぽいようである

「キャラ、大丈夫？」

「起きて、キャラ」

エリオとルーテシアが気絶したキャラを介抱する

それでやっと目を覚ましたキャラが再びジャックを見た際今度はエリオの影に隠れる

相当応えたようである

「それでエリオ・・・これだけの人達を乗せて行けるの？」

「うーん、結構大勢で来るって連絡はしておいたんだけど・・・流石にこれだけの人数運べるかなあ？」

エリオは事前に大人数で行くとは言っておいた

しかしその時にはルーテシアだけかと思っていた為まさか此処まで増えるとは予想外だったのだ

現に今此処にはユニゾンデバイスのアギトを除き10名居るのだ
しかもジャックは大男なので二人分は必要になる

そうなると11人分乗れる乗り物が必要になる

其処まで計算に入れてなかったと今更ながらエリオは後悔した

「ま、どうにかなるじやろう」

「相変わらず親父は楽観的だなあ」

何処から取り出したか「悪」と書かれた扇子を取り出して仰ぐ駄エ門を呆れた顔で見る直次郎

するとそんな一同に向かって車のクラクションが鳴らされる

何事かと一同が見ると、其処には大型バスが一台こちらに向かっていた

大型バスと言っても実際は通学で使うようなバスである

そしてそのバスの助手席から手を振る女性の姿があった

「エリオ〜〜、キャロ〜〜、ル〜〜」

青いショートカットで緑色の瞳をした女性である

最初その女性は三人を見ていたが、その後ゼスト以外の面子を見た途端目を丸めて

「誰!!」

と驚いた顔をした

そりゃ無理ないだろう

何しろ彼女にとってはゼスト以外の面子と会うのはこれが初めてのなのだから

とりあえずバスを手近に止めて降りる

「お久しぶりです。スバルさん」

「ひ、久しぶり……って、エリオ！大きくなったねえ……ってか、この人達……誰？」

スバルは驚きが二倍になった

一つはエリオの背丈が思っていた以上に伸びて居たこと

もう一つは言わずと知れた見知らぬ者達が居た事

そして、スバルに続きバスから続々とメンバーが降りてきた

「何、エリオまた背が伸びたのね」

「と、言うか……其処の人達は何者ですか？」

今回同乗していたティアナとルネッサもエリオの成長と見知らぬ面子の登場に驚く

だが、見知らぬ面子は他にも居た

「OH、此処デハジャパニーズクレイジーガ居ルンデスネエ」

「モウ、兄サンツタラ失礼ヨオ」

そう、ジャックとメリーも同乗していたのだ

二人は降りてくるなりあばしり一家に対してそう言ったのだ

しかし教養の無いあばしり一家にはそれが馬鹿にされた物だとは捉えられなかった

むしろ変な奴等が出てきたと思っっているようだ
その証拠に

「な、何だ？その西洋かぶれの連中は？」

菊の助がジャックとメリーを指差す

「ハローエブリバデイ！ミーノ名前ハ「ジャック・キング」デース
！『ジャック』ト呼ンデ下サ〜イ」

「私ハ「メリー・キング」ト言イマ〜ス。宜シクデ〜ス」

ジャックとメリーが自己紹介をした

それを見た一同が変な奴が出たなあと思ったのは言うまでもない
するとジャックを見たルーテシアが

「ジャックが二人になっちゃった」

そう呟いた

するとジャックがバイオレンスジャックを見る

「OH、ユーモジャックナンデスカア？」

「そうだ」

「イエエイ！ミーモジャックデエス！同ジジャック同士仲良クシマ
シヨウ！」

「あ、ああ・・・」

ジャックのハイテンションに流石のバイオレンスジャックも少し引き気味であった

そして無理矢理バイオレンスジャックの腕を掴んで握手を交わすジャック

流石アメリカンである

「でも、このままだとジャックが二人居て紛らわしいなあ」

上空に居たアギトが思わず呟いた
するとジャックが指を鳴らす

「ソレデシタラミーノ事ハ『キング』ト呼ンデ下サ〜イ。ミーノフ
アミリーネームデエス」

「それじゃ宜しく。キングさん」

「ナイストウーミーチュー」

これまた眩しい笑顔でルーテシアやエリオ、キャロ、そしてゼスト
やアギトやあばしり一家とも強引に握手をしていくジャック・キング
本当に怖い物知らずである

「はあ・・・まさかあんだ達の所にも同じ様なのが現れたなんてね
え」

「ティアナさん達やルーテシアの所にも来たみたいですね」
「うん」

早速出会い頭であばしり一家とキング兄妹は回りの目そっちのけで
騒ぎ出す

それを見てティアナ、ルーテシア、エリオは深く溜息をつく
その直後であった

ふと、ティアナは自分の腰の下・・・即ち「お尻」の辺りに何者か
の手が触れられた事に気づく

「なあっ！」

思わずデバイスを起動させて振り返る

すると其処には満面の笑みを浮かべる五エ門が居た

「ん〜、良いのねえん！やっぱり少女より大人の女性なのねえん！
こう大人の妖艶な香りがプンプンするのねえん」

そう言つて五エ門はティアナの尻を触つた手の匂いを嗅ぐ

触られたティアナ自身は溜まった物ではない

だが、後ろに居たスバルがティアナの肩の匂いを嗅ぐ

「妖艶な匂いつてどんな匂いなんだろう？」

「スバル・・・あんたも一辺三途の川渡つて見る？」

拳を震わせて赤いオーラを纏わせながらティアナがスバルを睨む

それを見たスバルが真っ青になつて引き下がった

「え、遠慮します！」

思わず後退してそう叫ぶ

すると今度は五エ門がスバルを見る

「むお！何と其処には！」

「え？」

「ボインちゅわ〜ん！」

と叫び五エ門がロンジャンプを彷彿とさせる豪快なジャンプをした
そして飛び降りた先には

『ムニツ』

と言う音が似合う光景がした

そう、其処はスバルの「胸」であった

「ええええ！」

「うおおおお！この感触！そしてこの弾力にこの大きさ！間違いないポイントなのねえ！それもジャンボ級の・・・くうううう！溜まらないのねえん」

正に至福の一時と言わんばかりに顔をグリグリさせる五エ門

だがされてる方のスバルは溜まった物ではないのは事実である

それでも恥ずかしいやら何やらなせいかわ顔は真っ赤でも声が出ないしかし態度には出るもので彼女の右腕がフルフルと震えているのが見えた

ところがそれだけではなかった

何と彼女の右腕には赤黒いオーラが纏わりだしたのだ

そしてその腕が徐々に変質を遂げて黒い悪魔の腕の様なに変わってきた

そして彼女の右目が緑色から赤い色に変わる

「あれは・・・不味い！」

咄嗟にティアナは五エ門を蹴り飛ばしスバルの頬を軽く叩いた

その刺激で元に戻ったスバルはハツとする

その際に腕も瞳も元に戻った

だが、先ほどされた事は覚えているらしく

「うわ~~~~ん！胸触られた~~~~！」

と、涙を流して叫んだそうである

それを見たティアナがよしよしと言わんばかりにスバルの頭を撫でる

「全く、甲児さんの世界の人は口クなのが居ないわね」

「それ、甲児さん達が聞いたら怒りそうですよティアナさん」

何気に酷い事を言うティアナにさりげなくエリオが答える

そんなエリオに「冗談よ」と呟きながらふと隣に居たルネツサを見た
ルネツサはボウツとした顔である一方を見ていた

おかしい

いつものルネらしくない

普段のルネなら勤務中に棒立ちする筈がないのだ

「どうしたの？」

ティアナが隣に立って聞いた

だが、ルネには届いて居ないようである

不審に思いルネの視線の先を見た

其処には五エ門にコブラツイストを掛ける直次郎の姿があった

「イタイイタイ！止めて欲しいのねえん」

「うっせえ！一人で美味しい思いしやがって！てめえみてえなのは
こうしてやる！」

「全く、兄ちゃんももう少し兄ちゃんらしくしてくれよ！これじゃ
俺恥ずかしくて表歩けネエよ」

隣で呆れた顔をする吉三が愚痴っていた

だが、明らかにルネが見てるのは五エ門でも吉三でもなく「直次郎」
であった

ふと、直次郎もルネの視線に気づきルネを見る

「何だ？俺の顔に何かついてるのか？」

「いえ、その……遅いお方ですね……と、思いまして」

そう言つて思わず顔を俯かせるルネ

気のせいか顔が少し赤くなつていたのが見えた
それを見たティアナがまさかと思つた

「もしかして……あの人に？」

其処まで聞いた

だがルネは黙つたままであつた

もつと追求したかつたのだが止める事にした

言いたくなつたら言えば良い

そう思つたからだ

「それで、わし等はこれからどうするんじゃ？」

「とにかくこの後ミッドを一通りご案内します。その後で隊舎に送りしますので」

「所謂観光旅行つて奴か。洒落てるじゃねえか」

「わーい、観光だあ観光だあ」

観光だと言つ言葉を聞いて菊の助は嬉しそうな顔をして吉三は跳び
上がった

そして一同はバスに乗り込む

最後に直次郎が乗り込もうとした時であつた

「あの、直次郎さん」

「あん？何だ」

直次郎が振り返る

其処には先ほどと同じように少し頬を染めたルネが居た

「宜しければ私と一緒にミッドを見て回りませんか？」

『へ？』

ルネの一言に直次郎は勿論その場に居た一同が同じ言葉を放った
だが、すぐに五エ門が止めに入る

「いけないのねえん！この男はこう見えて物凄い変態なのねえん！
油断してる隙をついて後ろからガバアって掴んでそのままベットに
押し倒してそんでもって・・・」

其処までであった

言葉の途中で直次郎の鉄拳が五エ門の脳天を直撃する

「そりやてめえだろうが！」

吐き捨てるように直次郎が言う

その下では目を螺旋状に回す五エ門の姿があった

「ルネ・・・」

「ティアナ執務官・・・勝手をして申し訳ありません」

「良いわ、貴方も此処の所働きづめだったし、少しは気晴らしして
きなさい」

「有難う御座います」

軽く肩を叩いてそう言ったティアナにルネは頭を下げる

そしてティアナは軽く笑みを浮かべてバスに乗り込んだ

その笑顔の意味は「しっかりやりなさいよ」と言う意味であったの

だろう

そして直次郎とルネツサを置いてバスは走っていった
其処には少し顔を染める直次郎とルネが居た

「んでよお・・・何処行くんだ？」

「わ、私が案内します」

ぎこちない対応をする二人である

場所は変わり、此処はとある研究室である

其処ではドクターキュラスが相も変わらず険しい顔でモニターを睨みつけている

「おかしい・・・これだけマリアージュを展開させていると言うのに一向に「イクス」と「魔神」が見当たらない！一体何処に居ると言うのじゃ？」

キュラスがイラ付いた声で叫び鍵盤を叩いた

皺皺の顔に更に青筋が増えて更に皺皺になっていくのが見えた

そんな彼の前にある映像が映し出された

それは、Dフォースの面々が一同に集まっていたミッドチルダ国際空港の映像である

「あれは！まさか・・・しくじったと言うのか・・・おのれえ・・・
こうなれば奴等を先に血祭りに・・・ん？」

其処でキュラスは止まった

それはとある一面を見たからだ

それは五エ門がスバルの胸に顔を埋めた際の出来事である

彼女の右腕が赤いオーラを纏いだし、そのまま悪魔を彷彿とさせる
映像が映し出されていたのだ

それを見た途端、キュラスは豪快に笑った

「見つけた！遂に見つけたぞ！あれこそ間違いなくワシの捜し求めていた「魔神」じゃ！」

キュラスがスバルを見てそう叫んだ

「まだイクスが見つかっておらんがまあ良い、あいつをどうにか覚
醒させて捕らえればワシの計画が更に進む筈じゃ！」

キュラスは笑みを浮かべると再び装置を起動させる

第7話 目覚める魔神 その1（後書き）

次回はあのシーンからです

第7話 目覚める魔神 その2

時刻はそれから過ぎて空には満天の星とまん丸お月様が顔を出す頃
一通りミッドを見終えた一同はとあるレストランに入っていた
店員も初めは大人数に少し驚きはした物のすぐに対応して開いてる
席に全員を押し入れた

其処は流石と言える

だが、その店員はおるか店全体が驚くのは「これから」であった

「美味しい！」

「そうですね！」

出された料理に舌鼓を打つスバルとエリオ

二人の前には山の様に積み重なれた皿が並んでいる

それも十枚や二十枚では事足りない位である

それを見ていたティアナとキヤロは呆れた顔をしており

初めて見る者たちは啞然としていた

更に言えば店の者達は青ざめている

まるで災害だ

店の備蓄の殆どを食い尽くす勢いなのだからだ

しかも二人共またメニユーを見ている

この期に及んでまだ食う気なのだろう

底知れぬ胃袋である

「しっかしあいづら良く食うなあ」

「まあ、元々あの二人は大食らいですから」

呆れながら見る菊の助にティアナがそつと言う

因みに今この中にルネと直次郎は居ない

先にも話した通り二人は今別行動中なのだ
何故かは前の話しを見れば分かると思う

「しかし世界は変わっても飯は美味しいのお」

「父ちゃんの飯とどっちが美味いかなあ？」

「僕ちゃんは断然こっちが美味しいと思うのねえん・・・何しろ美人なウエイトレスさんがご飯を運んでくれるしい」

あばしり一家はそれぞれ出された料理を美味そうに食べている

一人違った考えを持っているがまあ気にしないで欲しい

そんな中、バイオレンスジャックはフォークとナイフの扱いが分からず四苦八苦していた

「使い方が分からないの？ジャックさん」

「うむ・・・普段は獣の肉を千切ってそのまま食ってたからな」

その一言を近くで聞いていた客が青ざめるのを見て一同が慌ててジャックを見る

「じゃ、ジャックさん、此处でその話しは控えて下さい」

「む・・・すまん」

そう言っただけで仕方なくジャックは手づかみでステーキを掴みそのまま引き千切った

まるで獣の食べ方である

その隣では食事を終えていたゼストがコーヒーを呑んでいる
其処は大人を見せる風景である

「しかし前は甲兎達が来たのに今度はとんでもない連中が来たなあ」

机の上でトマトを齧っていたアギトが呟く
確かにそうである

甲児達も言っつてしまえば別次元から来た次元漂流者なのだ
そして今居るあばしり一家とバイオレンスジャックとキング兄妹達
もまた次元漂流者なのだ

「考エテモ仕方アリマセーン」

「ソウデース。明日ハ明日ノ風が吹キマース」

なんともマイペースな二人である

その頃、此処はミッドチルダにある「ベルウィードホテル」のとある一室、因みに会員制である

其処では一人の男が震えてベットのの上に居た

「だ……大丈夫だ！此処なら奴は来ない……さっきの会話と良い……次に狙われるのは間違いなく俺だ！」

男はそう言いながら先ほどの会話を思い出した

それは今から数時間前の事である

【だからさつき局員が来たんだ！俺は例の連続殺人鬼に狙われているんだってよ！】

【落ち着け、まだそうと決まった訳ではないだろう】

男が通信機を片手に怒声を上げる

それに応える男の声は何処か落ち着きのある声である

【いや、違うね！考えても見る！今まで殺された奴は皆あんと関わった奴ばかりじゃねえか！唯一例外だったのはあの『如月博士』だけだよ】

【彼が死んだ事には私も哀悼の意を表するよ】

【はん、何処まで本気なんだか】

男は鼻を鳴らす

だが、明らかにそわそわしている

今にも其処から逃げ出したい一心であるのが見て取れた

【とにかく！俺は暫く身を隠させて貰う！絶対に奴等が手出し出来ない場所にな】

【そうか・・・】

【犯人が捕まってソイツとあんたが無関係だったらまた頼まれてやるよ。それじゃ達者でな！とレディアさんよお】

男は最後に通信している男の名前を呟きながら通信機を切った

そしてそれを懐に仕舞う

「大丈夫だ、此処は会員制・・・奴だってそうそう出てこれる訳が・・・」

男がそう呟いていた直後、激しい爆発が起こった

男は「何だ」と叫び部屋を飛び出た

すると部屋一面火の海であった

そしてその通路を歩くように「奴」が其処に居た

その頃、直次郎とルネッサはベルウィードホテル前を歩いていた

「するってえとお前さんは戦地出身なのか？」

「はい、幼い頃から銃と共に育ってきました」

ルネは自身の過去を思い出し苦い顔をする

それを察したのか直次郎も少し暗い顔をする

「お前も大変だったんだな」

「え？」

「俺もよう、生まれたその日から殺し屋に狙われる日々だ。その為否応無く殺しのテクニクを身につけちまったんだ。気がつきゃあこの手は血まみれよ」

直次郎はそう言って自身の両手を見た
其処にはゴツゴツした大きな手がある
だが、直次郎には見えるのだ

今まで幾万と殺してきた人の返り血が自身の手にベツトリとこびり
ついているのに
そんな直次郎の手をルネはそつと握る

「貴方の気持ち・・・私も良く分かります」

「へ、何か辛気臭い話しになっちまったな・・・さて、そろそろ今夜の寝泊りをどうするか決めねえとなあ」

直次郎が当たりを見回して寢床を探していた
その時であった

二人の目の前でベルウィードホテルの最上階が爆発したのだ

「爆発！」

「あれは・・・」

二人は一目散にそのホテルに向かった
ホテルの下ではホテルから逃げ出す宿泊客とそれを誘導する消防隊の姿があった

「おい、一体どうなってんだ？」

直次郎は手近に居た人間を捕まえて聞いた

男は初めは直次郎を見て驚くも直ぐに落ち着き話した

「ば、爆発だ！最上階で爆発が起こったんだよ！」

「んなこたあ見りや分かる！一体何で爆発したかって聞いてるんだよ？」

「し、知らねえよ！突然爆発したんだ！離してくれよ！こっちまで巻き込まれちまう！」

男はそう言つて直次郎の手から逃れるとすぐさま逃げ出した

直次郎はそんな男には目もくれずホテルの最上階を見る

突然爆発

まさか今回の転移と何か関係があるのかもしれない

そう思つた直次郎はすぐさまホテルの入り口に向かった

「な、直次郎さん！」

「君、危ないからすぐに引き返しなさい！」

そんな直次郎にルネと消防署員が止める為に叫ぶ

だが、それに振り返つた直次郎が

「心配すんな。男直次郎、この程度の炎でくたばる程柔じゃねえよ」

そう言い残して一人ホテルの中に入っていった

「直次郎さん！」

ホテルの中に消えた直次郎を見てルネは再び叫ぶのであった

その頃、レストランで食事をしていたスバル達もホテルの火災を二
ユースで見っていた

「あれって・・・ベルウイードホテル！」

「防災設備は五つ星の筈・・・なのにどうして？」

一同はテレビに映っている映像を見た
そして其処には小さかったがホテルに入って行く男の映像が映し出
されていた

「あれは！直次郎！」

駄エ門がそれを見て叫んだ

「マジかよ！」

「直兄ちゃん一体何考えてんだ？」

「って事はルネちゃんも一緒かも知れないのねえん」

「只事じゃないな」

一同が立ち上がる

「御免皆、私先に行くね」

「私も行きます！ルネが居るんだったら状況確認したいですし」

ティアナとスバルが先に出て行く

「俺達も行くこうぜ、親父」

「うむ、なにやらあのホテルからドス黒い何かが渦巻いている気がするわい」

駄エ門は胸中で嫌な胸騒ぎを感じていた

そして、それは最悪の形で実現した

『次のニュースです・・・ミッド湾岸に巨大な怪ロボットが出現しました！付近の皆様は管理局局員の指示に従って至急避難して下さい』

「か、怪ロボット！」

「こんな時に！」

エリオ達が驚愕の顔をする

そのテレビには巨大なロストロギアとサイボーグの融合体「メタルビースト」が飛来していた

「OH、イヨイヨミー達ノ出番デエスネエ」

「行キマシヨウ！兄サン」

ジャックとメリーの二人も立ち上がる

「って、ジャックさん達あのロボットと戦う気ですか？」

「ノンノンノン、ミー達ヲ舐メテ貰ツチャ困ルデエス！」

「私達ハアノ『テキサスマック』ノパイロットヲシテムゝス。怪口
ボット相手八任せテ下サ〜イ」

心配そうに見つめるキャロとルーテシアに二人は満面の笑みでそう
言った

「ならば俺達はホテルに向かった方がよさそうだな」

「念のためにDフォーに連絡を入れておきます」

そう言つて一同モレストランを後にした

勿論お勘定はしっかり支払つてであるが・・・

その頃、男の前にはバイザーで素顔を隠した女性が歩いてきていた
男はその女性を見た途端腰が砕けてしまった感覚に襲われ倒れてし
まった

「ひ、ひいいい！な、何でお前が此処にい」

『古代遺跡の盗掘屋、ベルカディアとお見受けします。貴方はイク
スの居場所を知っている・・・教えて下さい』

女性は機械的な声でゆっくりとベルカディアと呼ばれた男に問いた

だそうとした
だが、ベルカディアはかぶりを振る

「し、知らねえ！盗掘やってたけどそんなイクスなんてもんは知らねえよお！」

「そうですねか・・・では、貴方は『魔神』の行方を知っていますか？」

話題を変えて女性はベルカディアを見た

「ま、魔神？そんなの伝説の五大魔神の事じゃねえのか？それだったら今あいつ等は地球だろう！後一ヶ月はこれねえよ！」

「違います、私の聞いているのはその魔神ではなく、『神と悪魔の力を併せ持った魔神』を聞いているのです」

「知らねえ・・・本当に知らねえんだよお」

「そうですねか・・・なら、貴方にもう用はありません」

女性がそう言っただけベルカディアにトドメを刺そうとしたその時であつた

「待ちやがれ！」

「ん？」

声がした

振り返ると其処には燃える上着を脱ぎ捨ててさらし一枚とズボン姿の直次郎が居た

「てめえ、あの時俺達を襲ってきた姉ちゃんだな？」

「次元漂流者、あばしり一家の次男。あばしり直次郎とお見受けします」

「へ、覚えてくれて有り難いがよお・・・お前さんにはまた死んで貰うぜ！」

直次郎がそう言っ手から鋭い刃物を出して女性に向かって切りつける

だが、女性はそれを片手で受け止める

「何！」

その光景に驚きの顔を浮かべる直次郎

だが、女性は平然としていた

幾ら力を込めてもこれ以上進みもしなければ戻りもしないのだ

『貴方の抹殺命令も同様に受けています・・・お覚悟を』

「てめえ・・・一体誰の差し金だ？」

『これから死ぬ貴方には関係の無い事です・・・では、おやすみなさい』

そう言っ女性は今片方の腕を變形させて巨大な大筒に変えた
そしてそれを直次郎の胴体に向けた放つ

叫ぶ暇すらなかった

直次郎の体はそれこそバラバラの四散してしまつたのだ

唯一残つた頭部だけが男、ベルカディアの目の前に転がってきた

生首ゴロリの状態である

「ひ、ヒイヒイヒイ！」

生首状態の直次郎を見てベルカディアは目に涙を浮かべる

そんなベルカディアに女性はそつと小振りのナイフを持たせる

『貴方もお眠り下さい・・・安らかに』
「嫌だ・・・助けて・・・」

助けを求めるベルカディアを無視するかのように女性は歩き去って
いく

その頃、ホテル前に付いたティアナはルネと合流していた
ルネは直次郎がホテルに入ってしまった為にかなり動揺していた
だが、それをティアナが叱咤して落ち着かせる
落ち着きを取り戻したルネツサが状況を説明した

「突然爆発・・・まさか、一連の事件に関連してるんじゃない？」
「ティアナ！」

其処へスバルと他の一同が駆けつける

「スバルさん、お願いします。直次郎さんを！」
「うん、任せて！」

スバルは直ちに自身のデバイスを起動させる
そして

そしてそのまま力なく倒れてしまった

「自殺・・・そんな・・・何で・・・」

訳が分からなかった

助かったと思つた直後に自身で命を断つなんて

ふと、スバルはこの手口が一連の事件と関連している事に薄々感じていた

ホテル屋上には先ほど直次郎とベルカディアを葬つた女性が立っていた

「イクスと魔神は見つからなかった・・・しかし抹殺は成功した・・・それだけでも良しとするか・・・」

一人呟いていた

するとそんな女性にオレンジ色のバインドが施される

「捕獲バインド？」

「無駄よ、そのバインドは力じゃ解けない」

振り返ると其処には既にデバイスを起動させて銃口を構えているテイアナの姿があった

『そのようですね』

「抵抗しなければ危害は加えないわ。大人しく同行してもらいましょうか？」

『フフフ、やはり貴方は甘いですね・・・御代わりないようですね。安心しましたよ・・・テラ』

「テラ？一体誰の事？」

突如自身を見て言われた事に驚いた

だが、女性は自分では無く別の誰かを見てそう言ったようである。その証拠に名前が違った

テラとは一体何者なのか？

その時、テイアナは以前見た夢を思い出した。まさか、あの夢と関係があるのでは

そう思えたのだ

その時である、バインドがミシミシと音を立て始めた。女性がバインドを引き千切ろうとしていたのだ

「さっき言った事分からなかったの？力でそれは外せないって・・・」

『確かに・・・』人』の力では無理ですね？』

「え？」

突如意味不明の言葉を口にした女性

すると女性はテイアナの目の前で変貌を遂げ始めたのだ

その体は元の女性的な曲線のある体から刺々しい機械的な体になり、その両腕は更に巨大な悪魔を思わせる腕になり、そして顔はあの

ぞましき顔に変わった

その顔とは……

「デビル……マジンガー……」

ティアナはそう呟いた

大ききこそ小さいが間違はなく目の前に居たのは3年前に機動六課を苦しめた機鋼帝国の切り札であるデビルマジンガーであったのだ

次回予告

十蔵

突如変貌を遂げたマリアージュ

そして同時にミッドに迫るメタルビースト

果たしてマリアージュとは一体

そして彼女達が「イクス」と「魔神」を求める理由とは？

次回『イクスと魔神』

次回もこの小説にマジーン・ゴーン！

第8話 イクスと魔神 その1

目の前で起こった事にティアナは一瞬自身の目を疑った
無理もないだろう

何しろ突然目の前に居た女性が姿を変えておぞましき魔神の姿になったのだから

「まさか・・・マリアージュがデビルマジンガーになるなんてね」

思わずそう呟いた

出来る事なら二度と見たくない魔神ではあった

3年前の戦いで機動六課並びにダイナミックチームを苦しめた悪しき魔神がこうして目の前に居るのだから

大きさは約2m位であろうか

以前に比べれば小さいがその強さを知っている者であればそれは返って厄介極まりない物でもある

そして、今その魔神がこうして目の前に居るのだ

「今の私で対抗出来るか分からないけど・・・」

ティアナは呟き自身のデバイスを構える

その照準は一寸の狂いもなくデビルに向けられる

そして即座に魔弾を放たれた

数発の魔弾はデビル目掛けて飛んでいく

一発は肩に

一発は頭部に

一発は胸部に当たる

だが、そのどれも装甲を軽く焦がす程度でありどれも致命傷にはならない

即座に反撃に備える

だが、様子がおかしい

何故か何時になっても襲い掛かって来ないのだ
不審に思いもう一度デビルを見た
すると其処には異様な光景があつた

『グアアアアガアアアア！』

目の前ではデビルが雄たけびを上げて苦しがつている
まるで自身をコントロール出来ないでいるようだ

「一体・・・どうなつてんの？」

信じられなかった

今までデビルが相手の際にはこのような事はなかったのだ
しかし今目の前ではデビルが頭を抱えて苦しがつている
そして、その装甲の節目からはドス黒い液体が流れ出していた
一瞬血液か何かかと思つたが、その匂いを嗅いだ時、戦慄した

「この匂い・・・まさか！」

そう思つた時には結果は出ていた

即座にデビルが閃光に包まれて爆発を起こす
その爆風にティアナは巻き込まれてしまった

「つつ・・・まさか・・・燃烧液を使つて自爆するなんてね・・・」

肩を抑えながらティアナが残骸となつたマリアージュ・・・もとい、
デビルマジンガーを見た

「はぁ・・・一体どう報告すれば良いのよ・・・逮捕した犯人が突如魔神になってその後黒い液体を体から出して自爆した何て・・・」
一人これから皆に報告する事を呟きながらティアナは黒煙の上がつている箇所を見ていた

ミッド海岸付近に突如飛来した怪ロボット　メタルビーストが飛行していた

しかしそれを迎え撃つかのようにDフォースのゲッターチーム、そしてテキサスマックが飛んできた

「まったく、一日で連続して襲い掛かってくるなんて・・・少しは節操ってもんはねえのかよ！」

「文句を言っても仕方ないわよ號！」

愚痴る號に翔が言葉を投げる

凱は黙っていた

これから起こる戦いに向けて集中しているのだ

「イエエイ！今回ハミィ達ノテキサスマックノ活躍ヲ見セマアス」
「張り切ッテルワネエ兄サン」

テキサスマックを操るジャックとメリーが意気揚々に呟く
今日の前に居たのは一体のメタルビーストである
形状は大型の鳥を思わせるロストロギアでありその翼にはミサイル
そして足に当たる部分には鉤爪の変わりに巨大な人間の腕となつて
いた
そしてところどころには生き物にはない機械のパーツが見られた
それが高速でこちらに向かってきているのだ

「空中戦なら翔！頼むぜ」
「任せて、號」

直ちに三機がフォーメーションを組む
そして一体のロボットになった
赤い戦闘機を先頭にして青い戦闘機を足にした細身の女性型のロボ
ットである
空中戦用のゲッター翔である

「ワオウ！此処ノゲッターロボハベリービューティフルデース！」
ジャックがゲッター翔を見て本音を言った
だが戦闘になつたら即座に対応である

「ファイアア！」
テキサスマックの両手に六発のリボルバーが握られそれを交互に撃つ
全ての弾丸がメタルビーストに向けて放たれる
その弾丸を浴びたメタルビーストの体からマリアージュと同じ黒い
液体が噴出す

「流石ですね。僕も負けてられません！」

翔も強気に答えゲッター翔の腕に装着されたドリルを回転させて突っ込む

『キシヤアアア！』

メタルビーストが雄たけびを上げてゲッター翔に向かってミサイルを放つ

だが、そのミサイルもゲッター翔が回りに纏っていた衝撃波に吹き飛ばされ見当違いの方向で爆発した

「貫けええええええええええ！」

叫び、ドリルがメタルビーストを貫く

貫かれたメタルビーストの体には巨大な風穴が開き、それから少ししてそれは空中で爆発を起こした

海上にはそのメタルビーストの残骸がボロボロと降り注ぐ

「イヤツハア！大シタ事ナイデエス！」

「ソウネ、兄サン」

ジャックとメリーがそう呟いていたがゲッターチームは苦い顔をしていた

「おかしい……前回のメタルビーストに比べたら明らかに弱い」

「もしかして……今回のメタルビーストは僕達のデータを取る為なんじゃ？」

「だとしたら……自分達は少し手の内を見せすぎたのかも知れないな」

漆黒の闇の中、ゲッターチームはそう思えた

「な・・・直次郎さん！」

ルネの前では生首状態の直次郎がスバルの手により運ばれてきた
それを見たルネはこの世の終わりとも思える顔をしていた
しかし・・・

「どうしても良いけどよぉ・・・とつと俺の体直してくれねえか？
これじゃ不便で適わないぜ」
『しゃ、喋ったあああああああああああああ！』

あばしり一家以外の面子が驚く
それは無理もないだろう
何しろ生首状態の直次郎が突如話したのだから
しかも本人は偉く元気そうだ

「ああ、言い忘れておつたが直次郎は全身を機械に改造しておつて
のぉ、頭部さえ無事なら何の問題も無いんじゃない」
「そ、そんな馬鹿な・・・」

駄工門の言葉に一同が啞然としていた
普通有り得ないからだ

しかし目の前に起こっているのが現実なのだ

「そ、そうだ・・・スバルさん、他に人は居ませんでしたか？」

「一人保護したんだけど・・・自殺した・・・」

その言葉に一同が強張った顔をする
同じだ

今まで起こったマリアージュ事件と同じ手口なのだ
すると其処へ少し負傷したティアナが戻ってきた

「ティアナ！」

「御免・・・犯人にやられた・・・」

肩を抑えながら呟くティアナに皆が集まる
幸い少し掠った位で大した傷では無さそうだが、服の所所が少し漕げているのが見える
恐らく例の自爆に巻き込まれたのだろう

「ティアナ執務官・・・お怪我は・・・」

「大した怪我じゃないわ。でも・・・これを言っただけ、信じる？」

ティアナはそう言ってさっきの独り言を皆に話したが、それに疑いを向ける物も笑う物も居なかった

「ティアナ執務官・・・それで・・・今回の事件は終るのでしょうか？」

「恐らく、もつと凄まじくなるかもしれない・・・多分3年前の事件と同じように」

「オペレーション・・・ダイナミックウォーズ」

それを知っている者達が皆顔を強張らせた

また3年前の時のような巨大な事件が起ころうとしているのだからだ

第8話 イクスと魔神 その2

その後、ホテルの消火を終えた一同は当初の目的地でもあるDフォースの隊舎に辿り着いていた

「はあ、懐かしい」

「変わってませんね」

「うん！」

ティアナ、エリオ、キャロの三人は機動六課時代から代わり映えない隊舎を見て歓喜の声を上げた

因みにスバルは港湾警備隊なので事後処理の為此処には居ないので

「ほほお、此処が今日からわし等の寝泊りする場所なのじゃなあ」

「へえ、結構綺麗な建物じゃん」

あばしり一家もこの建物を見て嬉しそうな顔をしていた

因みに直次郎はルネに抱かれていた

何しろ今頭だけなのだ

「うーん、良いなあ直次郎はあ、ルネちゃんの腕の中に居られて」

「羨ましいだろう」

そんな直次郎を羨ましそうに眺める五工門

そして得意気になる直次郎

「此処がそうなんだ」

「そうだな」

また、初めて見るルーテシアとゼストもその建物を見ていた

「しかしジャックの旦那よお、もう少し怖くない顔出来ないのか？」

「む？これでも怖くないようにしてるつもりなのだが・・・」

アギトがジャックの顔を見て言う

本人は精一杯気を使ってるのだが側から見るとやっぱり怖い

「どうでも良いけどよお、さっさと休もうぜ」

菊の助が呟く

それに皆納得する

「まあ、その前に皆に会いましょうよ」

エリオが先導を切って皆を導く

そして入り口を入ったところでは

「良く来たな、お前達」

「ヤッホー、久しぶりッス！」

「元気そうで安心したよ」

「トーレ隊長、それに皆さんもお元気そうで」

其処には現在Dフォースのメインメンバーである元ナンバーズのトーレ、ウエンディ、ノーヴェの三人が居た

「他の皆も居る、折角久しぶりの再会なんだ。会って行け」

「そうですね。そうします」

「トーレ隊長。お世話になります」

キャラが会釈をする
それにトーレが笑みを浮かべる

「フツ、此処では普通に名前で構わんさ。正直まだ隊長と言つのに慣れてない物でな」

その言葉に一同が笑みを浮かべる

だが、そんな三人を見て五エ門がまた暴走しそうになったのだが今回はその前にゼストが釘を刺しておいたので大して暴れずに済んだのであった

そしてDフォースの三人があばしり一家とバイオレンスジャックを見る

「彼等がそうか？異世界から来たと言つのは？」

「はい」

「ふむ・・・鉄也達と同じ世界の人間かと思つたのだが・・・異様な奴等だな」

流石のトーレも彼等の異様な姿には少し驚いたようである

「それにしてもおつきいッスねえ」

「ああ、弁慶やボスよりデカインじゃねえのか？」

ウエンディとノーヴェはジャックを見ていた
と言うより見上げていた

何しろでかさが違うのだから仕方ないのである

「と、とにかく中に入りましょう」

此処で止まっても仕方ないなと皆にそう言い聞かせるエリオであ

った

それから暫くして、スバルは一人帰路についていた

「はあ、すっかり遅くなっちゃったなあ・・・皆もう寝ちゃったかなあ？」

夜道を歩きながらスバルが呟いていた
すると後ろから車のクラクションが鳴る

振り返るとそれはヴォルツ指令の運転する車であった

「よっ」

「ヴォルツ指令！今からお出かけですか？」

「そのお出かけから帰る所だ。夜道の一人歩きはあぶねえぞ、送ってくから乗ってけ」

「え、でも・・・」

「良いから乗れ。人の好意は受けるもんだぞ」

「・・・はい、喜んで」

スバルは笑顔で敬礼して車の助手席に乗る
そして夜道を車が走る

「今回の火災・・・要救助者を助けられなかったんだってな」

「はい・・・目の前で自殺しました」

「自殺か・・・死に方はどうにしろ目の前で死なれちまうのは辛いな・・・ま、今回は殺人事件だ。お前が気にすることあねえよ」

「でも・・・やっぱり目の前で人の命が消えるのは・・・辛いです」

気遣うヴォルツの隣でスバルは暗い顔をしていた

「そりゃきついき。何時まで経っても慣れねえし、慣れても良いわけでもねえ」

「はい」

「それから、明日からお前も本格的にDフォースのメンバーに加わるみたいだな・・・つつつても、半ばナカジマ姉の独断だがな。向こうでもしっかり仲間を引っ張ってやれよ」

「アハハ・・・指揮は苦手ですね。私フロントアタッカーですから」
「それしか出来ない突撃バカじゃ、俺みたいになるのがオチだぞ」

苦笑いを浮かべるスバルに同様に苦笑いを浮かべる

「とんでもないです！指令は私達の誇りですよ！8年前の空港火災救助活動。伝説になってますよ！」

「だが、その伝説的に行いの時に無茶やったお陰で、現場からリタイヤしてこのザマだ」

「でも、指令に助けられたお陰で生きている人達だって・・・」
「助けられなかった奴も居る。今でも夢に見る・・・」

かき消すように呟いたヴォルツの言葉にスバルも暗くなる

自然とヴォルツの顔も影が出てしまった

咄嗟に顔を横に振る

「だあつ、何でこんな話しになつてゐるんだ？バカ二人の反省会なんざ気持ち悪いだけだぜ」

「ああつ、えつと・・・その・・・」

「ま、アレだ・・・向こうでもしっかり頑張れよ。今度は後悔しないようにキツチリ助け出せ！良いな？」

「了解！」

スバルが応える

今度は暗くなく明るい顔になつてゐる
それを見て安堵するヴォルツである

その時であつた

【助けて！】

「え？」

ふと、スバルは聞こえた

誰かが助けを呼ぶ声である

「どうした？」

「指令、今誰か声が聞こえませんでしたか？」

「声？イヤ・・・空耳じゃねえのか？」

どうやらヴォルツには聞こえないようだ

だが、確かにスバルの耳にはハッキリと聞こえたのだ

そして、更にスバルの右腕が反応しだした

「つうつ、う・・・腕が勝手に・・・」

見るとスバルの腕が悪魔の腕に変わり今度は二の腕まで侵蝕が進ん

でいた

「ナカジマ！その腕……」

「指令！すぐに此処から離れてください！」

「お前、何言つて……」

「急いで！今の私は自分でも制御出来ないんです！」

それだけ言うとスバルは車から降りて声のした方へ向かった
車の中に一人取り残されるヴォルツ
数回頭を掻きまわった後

「まったく、苦しんでる隊員を見捨てる指令が何処に居るってんだ！」

一人そう呟き車から降りて後を追いかけた

（今の声……この辺りで……）

スバルは走りながら声のした近辺を探していた
その間も腕の侵蝕は進んでいた

今度はスピードが違う

何時もより早いのだ

そして痛みも全身を駆け巡っている

（くっ……負けるもんか！）

歯を食い縛ってその痛みに耐える

負けてられない

今にも助けを求めている人が居るのだ

倒れてなんか居られないのだ

「リュウコン！」

『あい分かった！』

スバルの声の答えるように左手にリュウコンが現れる
それを握り締めて現場に向かう

其処には一人の少女が倒れていた

金色の長い髪をした綺麗な顔立ちの少女である

そしてそんな少女に迫っていたのは一連の事件を起こしていたあの
「マリアージュ」であった

「やっと見つけましたよ・・・イクス」

「貴方達は・・・私をどうするつもりなんですか？」

「ドクターが貴方を必要としています・・・この世に再び暗雲を呼ぶ為に、貴方の力が必要なのです」

「イヤです！あんな悪魔の所業の手伝いなどしたくありません！」

少女は頑なにそれを拒んだ

だが、そんな少女の腕をマリアージュが掴む

「拒否権はありません！ご同行願います」

そう言つて少女を連れ去ろうとした時であった

「待ちなさい！」

スバルが声を掛ける

マリアージュが振り返る

其処には右腕が肩まで侵蝕された状態のスバルが居た

「魔神の・・・腕」

「その腕・・・まさか！」

マリアージュとイクスがスバルの右腕を見て驚愕した

「一連の事件の首謀者・・・マリアージュ！その子をどうするつもり？」

「貴方には関係ありません」

「いんや、関係あるよ。嫌がる女の子を誘拐するような悪い人を放つてはおけないからね」

スバルはそう言って片手でリュウコンを構える

今のスバルは右腕を動かせないのだ

全く言う事を聞かない

まるで右腕だけ自分の腕ではないようだ

（正直リュウコンを片手で扱うのはキツイかな・・・でも、泣き言は言ってもらえない！）

ルウコンを頭上で振り回してマリアージュを睨む

マリアージュもまた少女をその場に置き両手を鋭い剣状に変えた

「その腕・・・ドクターが探していた「魔神」と確認しました・・・貴方も同行願います」

「断る！私はこの力を悪用されたくない！」

「そうですか・・・ならば暫くの間意識を失わせて貰います」

そう言ってマリアージュが猛然と襲い掛かってきた

二本の剣が同時に振り下ろされる

それをリュウコンで防ぐスバル
激しい火花が舞い散る

「くっ……このお！」

叫びリュウコンを横に振る

その拍子に後ろに飛ばされるマリアージュ
だが空中でバランスを取り直し再度アタックを掛ける
しかし今度はスバルも同様に向かって来た

「龍双弾！」

リュウコンの先端に青い魔力光が集まる
それを横一線に振り数発の魔弾を放った
リュウコンを得たスバルの新しい魔法である
しかしそれをマリアージュは剣で切り払う

「技に切れが有りませんか？それとも腕が痛みますか？」
「くっ！」

完全に見透かされている
今でも意識を失いそうな程の激痛がスバルを襲っているのだ
しかも右腕は全く動かない
片腕だけでリュウコンを扱うのは無理があるのだ

「スバル！腕を戻せないのか？」
「駄目、今回は何かおかしい……全く言う事を聞かない」

リュウコンの言葉にスバルは首を振った
その通りであり本来なら暫くすれば元に戻るのだが今回は戻る気配

が全くないのだ
その上侵蝕の早さが何時もより早い

「貴方も強情なお方だ・・・素直に魔神の力を受け入れればそのよ
うな苦しみから解放されると言うのに」

「お生憎様！私は魔神じゃない！生まれは違っても列記とした人間
だ！」

「人間？馬鹿な事を・・・貴方は私達と同じ・・・嫌、我々の「
オリジナル」の魔神戦士の筈です」

「え？どう言う意味？」

「お喋りは此処までです」

そう言った刹那、スバルのまん前にはマリアージュが居た

そして、スバルの胸にはマリアージュの剣が突き刺さっていた
深く・・・深く・・・

「く・・・はあ・・・」

「真相を知りたければ・・・ドクターにでも聞いて下さい」

下卑た笑みを浮かべるマリアージュ

その前でスバルが苦痛の顔を浮かべる

その後ろでは少女が今やつと目を覚ました

そして目の前の惨状を見て驚愕した

「あ・・・ああ！」

「ご心配には及びません・・・この程度で魔神戦士は死にませんか
らね」

後ろの少女に向かってマリアージュは言う

その前では微かに痙攣するスバルの姿が映っていた

そして左手で握られていたリュウコンを手放す
完全に動かなくなってしまった

「これで回収目的の二つを手に入れられました・・・後はドクター
の元へ・・・」

マリアージュがそう言った刹那であった

自身の手に変貌させた腕を何かが掴んでいたのだ
その掴んでいた腕は・・・先ほどまで動かなかったスバルの右腕で
あった

「なっ！まさか・・・此処まで早く修復するとは・・・」

【随分と舐めた事を言ってくれたな・・・愚図の分際でオリジナル
に手傷を負わせるとは・・・】

明らかに雰囲気が変わっていた

彼女の両目は緑色の瞳から血のように赤い色に変わっていた
そして力任せに自身に刺さっていた剣をへし折る

「ぐあっ！」

【この程度・・・我にしてみればかすり傷にもならん・・・修復な
どあっと言う間に終るわ】

そう言うつと自身に刺さっていた剣を右手で掴むとそのまま後ろに向
かって押し出した

激しい鮮血が背中かた噴出し、それと同時に刺さっていた剣も抜き
出る

カランカランと音を立てて刺さっていた剣が地面に落下する

そして、剣が無くなった箇所では先ほどまであった剣の傷がミルミ
ル内に塞がってしまったのだ

「き・・・傷が・・・」

【フン、この程度で致命傷と思われるでは困るな・・・我は貴様とは違って不死身の魔神・・・この肉体も仮初の器に過ぎんわ！】

スバル？が恐ろしい笑みを浮かべて少女に言う
そしてマリアージュの方を向く

「くっ・・・油断しました・・・まさか此処まで魔神の力が強大だったとは・・・」

【我の力を見くびっていたようだな・・・ならばその片鱗を見せてやろう】

スバルがそう言うのと右腕の侵蝕が更に進み右上半身が魔神の体となった

そしてそれはスバルの顔の右半分も同じであった

彼女の顔の右半分は魔神の顔になっていた

黄色い角

縦に溝のある口

その顔は正しく魔神の顔であった

【ふむ・・・まだ魔神になるのを拒むと言うか・・・まあ、こんな愚図を倒すのだから口の程度で充分だな】

自身の右腕を数回握ったりしながら動作確認をしていた
先ほどとは違い完全に右腕を制御している

「くっ・・・捕獲は無理か・・・ならば！せめて手傷を負わせるだけでも！」

【自爆する気か？だが・・・遅かったな】

「何？・・・う！」

マリアージュは自身の体の変化に気づいた
自爆が出来ないのだ
全く反応しない
一体何故

【分からないのか？我は貴様らの祖先、オリジナルなのだ・・・貴様らの体などとうの昔に弄くっておいたわ】
「くっ・・・」

【愚図は愚図らしく・・・醜く消える！】

そう言つて今度はマリアージュの胸部に魔神の右腕を突き刺す
スバルの時とは違いドス黒い液体が腕に付着していた
マリアージュが目を大きく見開いて痙攣を起こしている
そんなマリアージュを近くに投げ捨てる
完全に機能が停止したようだ
そんなマリアージュに近づくと右腕を翳す

【色々と調べられても面倒なので・・・ゴミは焼却処分とするか】
すると魔神の腕から赤い魔弾が放たれる
それがマリアージュに当たると瞬く間にマリアージュは消し炭と化してしまつた
そして、今度は近くに居る少女に近づくと
少女は多少おびえながらもスバルを見ていた

【ほう、流石は我等を指揮する物だけの事はある・・・我を見て怯えないとは中々肝が据わつてるな】
「貴方は一体何者なんですか？その人ではないのですか？」

【我はこの娘を作った者・・・悪しき魔神・・・そうとだけ言っておくか・・・】

そう言ってる魔神の声が徐々に擦れていく

【ちっ・・・どうやら修復が終り・・・主の意識が戻ったよう・・・だな・・・まあ・・・良い・・・もうすぐだ・・・もうすぐ・・・我は・・・蘇・・・る・・・】

そう言い終わると魔神の気配は消えた
スバルの瞳も赤い色から緑色に戻る

「う・・・いたた・・・やられた・・・急所を・・・って、あれ？」

意識が戻ったスバルはどうやら先の記憶が無いようで未だに自身の胸にマリアージュの剣が刺さっていると思っただけで体はいいしかし見てみると服が少し破けているだけで体の傷はないしかし、侵蝕した体はそのままであった
そして先ほど以上の激痛がスバルに襲い掛かってきた

「う・・・ぐ・・・うあああああああああ！」

激痛に悲鳴を上げてその場に蹲る

その間も侵蝕は進み今度は左半身を侵蝕しようとしている
その証拠に侵蝕の域が徐々に拡大している

「ま、待ってて！」

少女が急ぎスバルに近づくとスバルに向かって手を翳す
その手から柔らかい光が放たれる

その光を体全身に浴びたスバルに変化が起こった
先ほどまで侵蝕していた魔神が徐々に後退していくのだ
顔も元に戻り侵蝕域も徐々に戻っていた
今では右腕だけになっている
しかし、それでも肩まで侵蝕しているのには変わらない
だが、これで激痛は幾分かマシにはなった

「これって・・・君の力？」

「ドクターキュラスは・・・私と・・・貴方を使って再びこの世界を地獄に変えようとしています」

「地獄に・・・」

「お願いです！悪しき魔神の力に負けないで下さい！貴方が人間である限り、きつと貴方は魔神に打ち勝てます！」

「あはは・・・自信ないけど・・・頑張つて・・・みる・・・」

そう言い残した後、スバルはその場に倒れた

「あ・・・あの・・・起きて下さい！お姉さん！」

少女が必死にスバルを揺さぶる

すると其処へ多少遅れながらヴォルツが駆けつけた

「ナカジマ！」

「あ・・・貴方は？」

「簡単な言えばコイツの上司みたいなもんだ・・・って、嬢ちゃん
は？」

「えっと・・・名前はイクスつて言います」

「イクスカ・・・悪いが手を貸してくれ。ナカジマの奴完全にグロ
ッキー入っちゃってるから急いでDフォースに運ばねえと」

「は、はい！」

ヴォルツがそう言ってスバルを抱えて車に向かう
イクスもそれに続いた

戦いの一部始終をドクターキュラスは見ていた

「フフフ・・・どうやら目覚めは近いようだな」

一言そう言つとキュラスは玉座を思わせる椅子に座る

「ククク、間も無く実現しますぞ機鋼王様・・・貴方の目指した世界を・・・この私を実現してみせます！」

キュラスは目の前に飾られた機鋼王こと「兜原蔵」の絵に向かって
大声で叫ぶのであった

次回予告

スバル

「イクスのお陰で魔神の侵蝕が治った
は、良かったあ
でも別の場所だと機械の竜が出たんだって！
つて、ええ！竜！！！」

次回『その名は『大空魔竜』』

次回もこの小説にテイイク・オオオフ！！！！

第9話 その名は『大空魔竜』 その1

此処はDフォースのキッチン

其処でキャラロがシチューの仕込みをしていた
と言ってももう完成間近ではあるが

「スバルさん、きつとお腹を空かせて来るから一杯作っておかない
と」

「しっかしお前って料理上手いよなあ」

キャラロの手際のせさに菊の助が見ほれていた

「菊の助さんは料理とかしないんですか？」

「しねえ。殺しはするんだけど俺はどうにもこの「りょうり」って
のが苦手だ」

「大丈夫ですよ、頑張ればきつと上手くなります」

「嬉しい事言ってくれるねえ」

キャラロの言葉を聞いて菊の助が少し頬を染める

「おかしいなあ・・・」

「どうしたの？エリオ君」

「うん、あれから何度か通信を送ってるんだけど、一向にスバルさ
んに繋がらないんだ」

「きつと忙しいんだよ」

「だと良いんだけど・・・」

エリオは胸中で何処か嫌な予感がした
これが思い過ごしであれば良いのだが

そう思えた

しかし、その思いは打ち砕かれるのであった

「おい、お前ら大変だ！」

「ど、どうしたんですか？ノーヴェさん」

「スバルの奴、ヴォルツの旦那に抱えられてやってきたぞ！かなりグツタリしてる」

「ええ！」

一同は驚いた

「幸い外傷は無いみたいだけど、すげえ衰弱してるみたいなんだよ・
・今ティアナが見てるみたいだよ・・念のためにお前らも来てくれ」

「分かりました」

「行こう、皆！」

場所は変わりDフォースのスバルとティアナの居た部屋ではスバルがベットで寝ていた

最初はかなり衰弱していたが今ではそれなりに顔色も良くなっていた

「スバル・・・やっぱり、あんたの右腕・・・」

ティアナはスバルの右腕を見た

意識が無い時にスバルの右腕は悪魔の腕となっている

その腕は既に肩まで侵蝕が進んでおり右腕の殆どが魔神の腕となっていたのだ

しかし今は沈静化しているらしくそのお陰かスバルの顔も苦痛に歪んではない

「う・・・うう・・・」

「スバル！」

スバルの声がしティアナがハツとした

また悪夢にうなされているのか

そう思えた

だが、そんな事は無く・・・

「う～～ん、もう食べられない～～、でも後3杯だけ～～」

心配したティアナとは裏腹にどうやら彼女は夢の中でかなり満腹になるほど食ってる様子である

そんなスバルを見たティアナの額には幾つもの青筋が浮び

「この馬鹿スバル！」

怒声と拳骨は同時であった

そしてスバルが短い奇声を上げて飛び起きる

「あ、ティア・・・おはよう」

「おはよう・・・じゃないわよ！今何時だと思ってるの？」

「え？・・・ああ！そうだ！私確かマリアージュと戦って・・・それだ・・・」

スバルの記憶は其処で途切れていた

彼女の中には自身が魔神化した記憶が無いのだ
まるで其処だけが抜き取られたかのように

「あの・・・」

するとそんな二人の元にひとりの少女が歩み寄った

どうやらあの時マリアージュから助けた少女のようである
その少女がスバルを心配して見に来たのだ

「あ・・・君は・・・」

「あの時は・・・有難う御座います・・・その・・・お体は大丈夫ですか？」

「うん、もう大丈夫だよ。こう見えて私って結構頑丈だから」

そう言っただけで少女に向かって笑みを浮かべる

それを見た少女がほっと安堵する

「ま、こいつは元々それが自慢だったからね」

「あ、ティアその言い方酷い、まるでそれしか取り得が無いみたいじゃん」

「あらそう？てっきりそうだと思ったんだけど？」

「あうう・・・ティアが虐めるう」

すっかり意地悪顔になったティアにスバルが萎れてしまう

そんなスバルの頭に少女が手をそっと乗せて摩る

「落ち込まないでスバルさん」

「エへへ、どうも有難う・・・でも、何で私の名前知ってるの？自己紹介したっけ？」

「いいえ、ヴォルツさんと言う人から教わったんです・・・あ、自己紹介が遅れましたね。私はイクスと言います・・・イクスヴェリアと言う名前なのですが長いのでイクスと呼んで下さい」

「うん、宜しくねイクス」

イクスと名乗った少女にスバルは笑みを浮かべる

ティアナも同様に笑うが内心影があつた

（イクス・・・何処かで聞いたような・・・後でオットーに調べて貰う必要があるわね）

ティアナは今其処には居ない仲間の事を思い出した

此処は聖王教会

其処でお勤めをしていたかつての仲間が居た

デイドとオットーである

デイドは現在教会の人達の世話をしているシスターでありオットーもまた同じである

そして、今オットーは教会騎士のカリムの所に居た

「成る程ね・・・そう言う訳で今から無限書庫に行くのね」

「はい、その間貴方の護衛はディードにお任せしております」

「うん、気をつけてね」

カリムは笑顔でオットーにそう言う

二人も元機動六課所属のメンバーであるが、今はこうして聖王教会に居るのだ

そして、それはもう一人居た

「遠征中のシャツハとセインは大丈夫かしら？」

「シスターシャツハは大丈夫だとは思いますが・・・姉はどうでしょう？・・・何せあの性格ですから・・・」

「あらあら、肉親にそんな事は言っではいけないわよ」

「すみません、騎士カリム」

素直に頭を下げるオットー

それを見てまたカリムは笑った

「とにかく、道中気をつけてね」

「はい、行って来ます」

そう言っただけオットーは部屋を出る

そして軽く溜息を付く

「やれやれ、こんな時に陛下か兄上が居てくれれば心強いんだけどなあ」

オットーは現在ミッドに居ない二人の事を呟いた

だが、居ないのであれば仕方ないとすぐに諦めて今回の移動場所

ある無限書庫に向かった

その頃、広大な砂漠をひたすら歩く一団が居た
そして、その先頭には二人の女性が居た
二人共同じシスターの服を着ている

シスターシャツハとシスターセインの二人である
シャツハは額にうつすらと汗を流しているが平然と歩いている
だが、セインはかなり辛そうな顔である

「あゝ、暑い」

セインが舌を出して手で顔を仰ぎながらうな垂れていた
そんなセインを見てシャツハが溜息をつく

「何情けない声を出してるんですか？他の巡礼者がたは皆無駄口一
つ叩かずに歩いていてはありませんか」

「んな事言ったってさあ・・・この暑さは都会っ子にはキツイっす
よ！・・・大体何でこの時代でわざわざ砂漠を歩かなきゃならない
んですかあ？」

「何を言ってるんですか！巡礼と言うのは自分の足で歩いてこそ意
味があるんですよ！」

「は〜い・・・」

返事をしながらもセインは後ろの巡礼者を気に掛けていた

「さっきからどうしたのですか？後ろの巡礼者達を仕切りに見てますか？」

「あ……うん……ちよつとね……」

シャツハの問いにセインは返答に渋る

それに首を傾げるシャツハ

そんな時であった

セインが後ろの何かに気づき歩みを止めた

「シスターシャツハ！ちよつとストップ」

「どうしました？」

「御免、ちよつと荷物降ろすよ」

セインは荷物を降ろして巡礼者達の方へ走った

突然シスターが来たので巡礼者達は驚いた

だが、そんな人達にセインは心配掛けないように笑顔で対応し目的の場所に辿り着いた

其処には一人のご婦人が居た

「其処のご婦人！具合悪そうだけど大丈夫？」

「いいえ、私は大丈夫で……」

そう言った途中で女性は倒れてしまう

巡礼者達は慌てるがセインは落ち着いて対応した

「やっぱり……少し休む？無理ならあたしが背負うよ」

「い、いえ……平気ですよ」

セインの心遣いに婦人がやんわりと断ろうとするがそれを見た周りの巡礼者達が心配に声を掛ける
すると其処へ異変に気づいたシャツハが駆けつける

「次の休憩はもうすぐです。シスターセイン、背負って行ってあげなさい」

「あいよ」

セインは頷いて婦人を背負う

シャツハはセインの荷物を持つとしたがセインはそれを自身の胸に抱えて歩き出す

婦人はセインに感謝の言葉を投げかける

セインはそれを笑ってこころええた

「元気に聖地に着かなきゃ折角の巡礼が台無しだよ」

そう笑って言ったのだ

するとシャツハが念話でセインに話しかける

（貴方が見てたのはこのご婦人？）

（ああ、あたし他の人よりズームから・・・一応皆の観察をね）

（そうだったのですか・・・無駄に怒ってしまいましたね、ですが
そう言う事でしたら早めに言っておきなさいね）

（うーん、そう言うの苦手なんだよねえ）

（ですが、私も気を付けませんといけませんね）

シャツハとセインが互いに笑いながらそう言った

そして間も無く次の休憩ポイントに辿り着いた時であった
巡礼者達は水を飲み食事を取って各々休息を取っていた

勿論シャツハとセインも同じであった

「はふ、生き返る」

「お疲れ様です、シスターセイン」

「へへ、それほどでも」

シャツハに褒められて少し頬を染めるセイン

その時であった

そんな一同の上空に突如空間の歪みが起こった

「あれは！」

「まさか！」

「心当たりがあるのですか？シスターセイン」

「鉄也兄貴達が来た時と同じ現象だよ！」

セインは思い出すように言った

そう、それこそかつて鉄也達がこの世界に来たのと同じ現象であったのだ

そして、その中から現れた者は・・・

『キシャアアアア！』

其処から現れたのは見覚えのある化け物であった

白亜紀に存在したトカゲの化け物「恐竜」に機械を融合させたサイボーグであった

「メカザウルス！」

「そんな！恐竜帝国はもう滅んだ筈じゃあ！」

「恐らく、次元の狭間に居た残党でしょう！シスターセイン、私は困になりますから早く巡礼者達を安全な場所に！」

シャツハはそう言ってバリアジャケットとデバイスを起動させる

「一人であんな化け物と戦う気？」

「今の貴方は武器を持ってません。戦えるのは私だけなんですから貴方は・・・」

「分かりましたよ！でも気をつけて下さいね。貴方にもしもの事があつたら騎士カリムが悲しみますからね」
「努力します」

一言そう言い残してシャツハはメカザウルスに向かつていった
セインはシャツハに言われた通り巡礼者達を安全な場所に避難させる
最初は慌てていた巡礼者達であつたがセインの誘導に従つて避難を始める

その向こうではシャツハが一人メカザウルスと格闘を行つていた
と言つても相手は30mはあるであろう怪物である
身長差がありすぎて中々決定打にならないでいた

「今此処で私が食い止めなければ！ヴィンデルシャフト！」

シャツハがデバイスのカードリッジを起動させる

葉莢が飛び出て魔方陣が展開する

そしてデバイスに魔方陣と同じ色のオーラが纏われる

「烈風一陣！」

そしてそれを思い切りメカザウルスに向けて叩きつける

メカザウルスの眉間にその一撃を食らつたメカザウルスは数歩退く
だが、それでもメカザウルスには致命傷にはならないらしく再び咆哮を上げる

「効かない！くっ……」

決定打にならない事に舌打ちをするシャツハ

そんな彼女に向かってメカザウルスの強靱な尻尾の一撃が襲い掛かる

「ぐあっ！」

それをヴィンデルシャフトで防ぐも威力を殺しきれず地面に激突する
砂煙を舞い上げてそれがシャツハを覆い隠す

「くっ……この……」

肩と額から血を流しながらもよるよると立ち上がるシャツハ

しかしメカザウルスの一撃を食らいかなりのダメージを負ったのは
間違いない

そんなシャツハを見下ろしてメカザウルスが雄たけびを上げる

そしてトドメを刺そうと歩みを進める

そんな時であった

その上空に再び同じ現象の時空の歪みが現れた

そして其処から現れたのは巨大な竜の戦艦であった

「また恐竜のメカ！新手？」

一瞬そうかと思えたがどうにも違うと思えた

その証拠に目の前の竜の戦艦はメカザウルスを吹き飛ばしたのだ

吹き飛ばされたメカザウルスは地面に転げる

そしてシャツハを守るようにその竜の戦艦は前に立ちはだかったの
である

「み・・・味方？」

シャツハの前には一隻の巨大な竜の戦艦「大空魔竜」が其処に居た

第9話 その名は『大空魔竜』 その2

巨大な竜の戦艦「大空魔竜」は目の前にメカザウルスが居た
メカザウルスが目標をシャツハから大空魔竜に変えて襲い掛かる
だが、大空魔竜は上空に舞い上がりその攻撃をかわす
そして大空魔竜の胸辺りのハッチから巨大ロボットの上半身と下半
身が飛び出すそして今度は何と竜の顔が飛び出したのだ
その三つが上空で合体して一体のロボットになった

「ガイキング、合体完了！」

ガイキングと名乗った巨大ロボットがメカザウルスの前に降り立つ
大きさはメカザウルスより二回り位大きい
そんなロボットが目の前に居た

「食らえこのトカゲ野郎！」

ガイキングの中から男の声がした
竜馬に似た声である

そんな声の男が叫びながらメカザウルスに掴みかかった
腕と腕が互いに交差して力比べになる

パワーは互角らしくお互い其処から一步も動かない

「力は互角か・・・だが！」

そう叫んだ直後、ガイキングが両腕を後ろに動かした
その拍子にメカザウルスは前のめりになってしまう
そしてそんなメカザウルスにガイキングのヘッドバットが決まる

「戦いはパワーだけじゃないぜ！」

額を押さえて倒れるメカザウルスにガイキングが指差して言った
その目の前でメカザウルスがヨロヨロと立ち上がる
相当効いたようだ

「まだまだ！そう簡単に終らせねえぜ！」

立ち上がったメカザウルスに対しガイキングの両目が輝く

「食らえ！デスパアアサイトオ！」

ガイキングの瞳から光線が放たれる

その光線がメカザウルスの胸部に辺り貫く
だが、まだ倒せる域ではない

「ちっ、以外としぶとい奴だぜ！」

ガイキングのパイロットである青年が呟く
その瞬間、メカザウルスの口からミサイルが放たれる
爆煙がガイキングを覆う

だが、その中から出てきたのは無傷のガイキングが立っていた

「そんなもんでガイキングが倒せるか！」

青年が叫び拳を硬く握り締める

「行け！カウンタアアアパアアンチ！」

唸りを上げてガイキングの腕がメカザウルスに向けて放たれる

その腕がメカザウルスの頭部を吹き飛ばす
頭部を失いながらもよたよたとこちらに向かってくる

「ならトドメだ！」

ガイキングの胸の竜の顔から黄色いエネルギーが現れる

それを左手で掴み猛然と振りかぶる

まるでピッチャーが渾身の一球を投げるようである

「食らえ！俺の必殺魔球！ハイドロブレイザーアアアア！！！！」

青年の叫びと共に唸りを上げて飛び出すハイドロブレイザー

それをメカザウルスは真正面から直撃する

その結果閃光が辺りを包みやがて爆発した

辺りにメカザウルスの残骸が散らばる

その残骸を見て回りに居た巡礼者達とシャツハ、それにセインは安堵する

そんな中、巨大な竜である大空魔竜が彼女達の前に降り立つ

『其処の方々、我々はこれより安全な場所へ向かいます。どうかこの大空魔竜にお乗りになって下さい』

其処から老人の声が響く

それに対しセインとシャツハは互いを見合うもこのまま巡礼を続けるのは危険と判断したのかその誘いに乗る事にしたのであった

「危ない所を助けて頂有難う御座います。聖王教会シスターを代表して礼を言います」

此処は大空魔竜の艦内

そのブリッジに当たる部位である

その中で代表してセインとシャツハがこの中に居た

そしてその中には先ほどの老人と青年の他にも数人居た

「紹介が遅れたね。私はこの大空魔竜の設計者である大文字です。

そして彼がガイキングのパイロットをしてる」

「ツワブキ・サンシローです。いやあ美人なお嬢さん達だなあ宜しく」

サンシローと呼ばれた青年が頬を掻きながら言う

「うわあ、竜馬さんと同じ声だ」

そこでセインが気づく

「え？俺と同じ声の人が居るのかい？」

「ううん、今は居ないけど私の知り合いに貴方と同じ声の人が居るんだよ」

「へえ、そいつは是非会ってみたいね」

サンシローがそれに興味を持つ

途中で話しが逸れたが続いて続々と自己紹介を始める

「大空魔竜のオペレーターを担当してますフジヤマ・ミドリと言います」

「大空魔竜のメインパイロットをしているピート・リチャードソンだ」

「システム担当のサコン・ゲンです。宜しく」

「おいらはコンバットフォースの剣竜パゾラーのパイロットのヤマガタケって言うぞ。宜しくな」

「同じく翼竜スカイラーのパイロットをしているファン・リーと言います」

「僕は魚竜ネツサーのパイロットをしているハヤミ・ブンタと言います」

ブンタの名前を聞いた途端セインの顔が変わった

「え？あのハヤミ・ブンタさん！」

「知っているのですか？シスターセイン？」

「知ってるも何も、素潜りの達人で人食い鮫を倒した人なんだよ！」

セインが興奮しながらブンタの武勇伝を語る

それを聞いてブンタが少し気恥ずかしそうな顔をする

まさかこの異世界にまで響いていたとは驚きである

「へえ、お姉さんブンタさんの事良くしってるね・・・あ、僕はハチロー、大空魔竜の手伝いをしています」

最後にハチローが自己紹介を終える

「聖王教会所属のシャツハ・ヌエラと申します」

「んで、私も同じ聖王教会所属のシスターでセインって言います」

「聖王教会？何だそりゃ？」

サンシローが首を傾げる

無理もない。サンシロー達はこの世界に来たばかりの為世界の用語などが全く分からないのだ

仕方なくシャツハはこの世界の事や魔法について話した

「信じられんな」

ピートは魔法と言われて眉を顰めていた

当然だろう。普通の人間なら魔法と言って信じる人間などそうそう居ないのだ

「けどよおピート、シャツハさんが嘘言ってるようには見えないぜ」

「だが、だからと言ってお前はそれを信じるのか？」

「ま、現物を見せて貰えれば信じられるかもな」

サンシローが笑いながら言う

それを見て一同が確かにと頷く

「それでシャツハさん、我等はこれから何処に向かえば宜しいですかね？生憎この世界の地理が全くない物です」

「それでしたら私が指示する場所に向かって下さい。其処に聖王教会があります」

「それってあんたらが居る教会だろう？」

「うひよお、きつと可愛い子ちゃんが一杯おるぞお！」

ヤマガタケが飛び上がる

それを見て一同が笑う

「それでは大文字博士、直ちに大空魔竜をそのポイントに移動させます」

「頼むよ、ピート君」

かくして、大空魔竜は一路聖王教会へ向かうのであった

第9話 その名は『大空魔竜』 その3

大空魔竜はシャツハの指示の元聖王教会に降り立ち、大空魔竜メンバーは降り立っていた

其処にはシャツハ、セインとそして、デイドとカリムが居た

「シスター達と巡礼者の方々を救って頂き有難う御座います。私が此処聖王教会騎士のカリム・グラシアと申します」

「私はシスターセインと同じシスターのデイドと申します」

カリムとデイドが自己紹介をする

それに大文字達も同様に自己紹介をする

「いやあ、しかしこの世界ってのは美人が多いんだなあ。俺っちもうメロメロだなあ」

「おいヤマガタケ！カリムさんやデイドさんの前で鼻を伸ばすなよ！みつともないだろうが！」

鼻を伸ばすヤマガタケをサンシローが軽く小突く

「いい加減にしるお前等、お前等のせいで大空魔竜クルー全員が馬鹿の集まりだと誤解されたらどうすると言っんだ？」

そんな二人にピートが釘を刺す

「な・・・何だか甲児さん達に似た人達ですね」

「そうなのです。私は会った事が余り無いので分かりませんが」

デイドの言葉にカリムは苦笑いを浮かべる

「それでカリムさん、此処は貴方の言うとおり異世界だと言うのですね？」

「はい、その通りです大文字博士」

大文字の問いにカリムが頷く

それを聞いて立派なヒゲの生えた顎を摩る

「うむ、すると我々の居た地球とは違うらしいのですなあ」

「ま、どうでも良いじゃん。元の世界じゃもう大空魔竜の役目を終えた後なんだからよお」

サンシローがそう呟く

その言葉の通りである

サンシローの居た世界ではその星を滅ぼそうとした強大な勢力である「ダリウス帝国」を見事打ち破り、今回で大空魔竜を封印しようとしていたのである

その為に一同がこうして集まった矢先に突如現れた次元転移に巻き込まれたのである

「しかし魔法とは・・・益々興味深い。是非この目で見てみたい物です」

「また始まったよ。サコン先生の悪い癖が」

目を輝かせているサコンに皆が呆れる

「それで、カリムさん・・・この近くで何か部隊と呼べる物はありませんか？」

「それでしたら是非Dフォースに向かって下さい」

「Dフォース？」

「近年結成された特殊戦闘部隊です。其処には貴方達のように鋼鉄の巨人を操る物達が戦っています」

「驚いたな、この世界にはロボットも居るんだな」

てつきり魔法だけの文化の世界かと思つたがどうやら巨大ロボットの技術もあるのだなと感心していた

「成る程、それでしたら我々は今からそのDフォースに向かいます」
「へへ、どうやらまたガイキングの出番みたいだな」

大文字は頷きサンシローを拳を鳴らしていた

「やれやれ、折角本業に戻れると思つていたのだがなあ」

ファン・リーがそう愚痴を漏らしていた

「まあ良いじゃねえか。この世界には美人ばかりだし。もしかしたらそのDフォースにもとびきりの美人が居るかも知れないしよお」
「ヤマガタケさんは相変わらずですねえ」

ブンタが一人そう呟いていた

「まあ良いじゃないんですか？またこうしてコンバットフォースが勢ぞろいしたんだから」

「アハハ、また皆一緒だね」

ミドリと八チローもまた嬉しそうに呟く

その頃、オットーは無限書庫でマリアージュ、そしてドクターキユラスについて調べ物をしていた
しかし流石無限書庫なだけはありかなりの資料の山があるため中々見つからない

「うーん・・・中々見つからないなあ」

オットーが資料の山に目を通しながら呟いていた
出てくる物と言えばマリアージュが起こした事件や他に関係ない物ばかりである
欲しい情報ではない
それに表情が徐々に険しくなっていく
そんな時であった

「ん・・・これは・・・」

其処には比較的新しい資料があつた
だが、題名は霞んでおり読めないでいた
とりあえずそれに目を通す
すると其処には驚くべき物が載っていた

『マリアージュ・・・それは1万年前にアルハザードに降り立った
2体の魔神がぶつかりあつた際に死亡した多くの人間を取り込んだ
結果出来上がった不完全な魔神戦士。それ故にマリアージュ達は魔

神になる事が出来る・・・しかし不完全であるが故に魔神となった
マリアージュは制御が効かず暴走し、最終的には自滅する。それを
防ぐには完全な魔神戦士のコントロールが必要になる』

「マリアージュの正体は・・・不完全な魔神戦士・・・」

オットーがそう呟いた

そして、他にもあった

『また、そのマリアージュを統括出来るように生み出された存在・・・
・冥王……である』

名前と思わしき部分だけが擦り切れて読めなかった

だが、それから思うにマリアージュを完全に制御するには冥王と完
全な魔神戦士の存在が必要なようだ
そしてその次のページでは

『ドクターキュラス・・・兜原蔵の一番弟子であり、ロボット工学、
遺伝子工学の権威であった科学者。そしてマジンガーの事故の際に
彼はこの世界に転移してしまう』

「これが・・・ドクターキュラスとマリアージュの・・・」

其処にはマリアージュの正体とドクターキュラス、そして冥王につ
いて記されていた

次回予告

オットー

遂に分かったマリアーシュの正体

その頃、イクスと共にマリンガーデンに来ていたメンバーに再びマリアーシュの刃が迫る

次回『迫り来る魔の手』

次回もこの小説にテイク・オフ！

第10話 迫り来る魔の手 その1

訓練区画でスバルとノーヴェの二人が組み手を行っていた拳と拳による激しい打撃戦を行っている
しかし分かると思うが二人共デバイスを装備してない
あくまで素手での組み手である

「はあああああ！」

「うおおおおお！」

二人が雄たけびを上げて打撃戦を行う
そしてトドメの一撃にとお互いの渾身の一撃が互いの顔面で止まる

「どうやら回復は順調のようだな」

「うん、有難うねノーヴェ」

組み手を終えた二人がお互いにフツと笑う
今回の組み手はスバルの回復を確認する為の者でもあった
その為ならギンガかノーヴェが適任である
しかし現在ギンガは暗黒寺と捜査中であり留守なので現在Dフォー
スに居るノーヴェが適任であった
作りこそ違うが二人は何処か似てるのだ
戦い方も、顔色も同じなのだ

「ま、でも暫くは復帰出来そうにないけどね」

「休暇と思っておけば良いんじゃないのか？」

「うん、何もしないってのは私苦手なんだよなあ」

休暇とは言え何もする事が無ければ退屈なだけだ

やはり自分は現場で居た方が性にあつのだろうか
そう思えた

「あ、そうだ！イクス達は今何処に居るの？」

「ああ、イクスなら・・・」

此処はミッド海岸に出来た最新のレジャーランド『マリナーガーデン』
其処でイクスとエリオ、キャロ、ルーテシア、吉三、アギトのメン
バーはマリナーガーデンに居た

272

「へえ、此処が最近出来たれじゃーらんどって奴なんだな」

「そう言えば吉三はこう言つとこ来んの初めてだったっけな」

「けど・・・良いんですか？僕達だけで来てしまつて」

エリオが少し心配そうな顔になる

が、アギトは手をヒラヒラさせて平気そうな顔をしていた

「良いって良いって、イクスだって何時までも狭い部屋の中に居た
んじゃ気が滅入っちゃうだろう？だからたまにはこうした息抜きも
必要なのさ」

「そうですね、イクスもまだまだ子供ですし・・・」

「でも、羽目外しすぎたら駄目だよアギト」

アギトの理由にキャラも賛同するがルーテシアが釘を刺す
それにアギトが頬を膨らませる
どうやら不満そうだ

「あの・・・良いんですか？私なんか一緒に居ても？」

「ああ、気にすんなつての、どうせDフォースは昨日の出撃で機体の整備で忙しいスクランブル要員は全員待機指令だし、因みにあたしらは今日はオフだからこれは生等な行いなのだよイクス君」
「なあに気取つてんだか？」

軽く咳払いをするアギトに吉三がツツコミを入れる

その後、激昂したアギトが炎を放とうとするもエリオとキャラとルーテシアの三人が必死に止める

「てめえ、一辺燃やされたいかあ」

「良いぜ！その変わりその小さい体をバラバラにしてやるよ」

吉三も顔に巻いた布を取る

だが、その手をイクスが掴む

「え？」

「乱暴は駄目」

「あ・・・わ、分かった・・・」

イクスに手を掴まれてしかも真顔でそういわれたせいか吉三の頬が少し赤くなる

無理もないのだ

イクスも吉三も年は似たような物だし、何より彼女は結構美人な部類に入るのだ

将来が楽しみである

「さあさあ、折角の休みなんだ！パアツと騒ごうぜえ」

「って、結局アギトさんが行きたかっただけじゃないんですか？」

エリオの言つとおりであつた

一方で、そんなエリオ達の遙か後ろではゼストとバイオレンスジャツクの二人がそつと後をつける形になっていた

「何故一緒に行動しないんだ？」

「俺達が一緒では気が休まらないからな、だが何時奴等が襲つてきても対応出来るようにこうして少し遠目から見える範囲に居た方が
良い」

ジャツクの言葉にゼストが返す

それにジャツクは頷く

納得したようだ

だが、今の二人の格好は普段の格好ではなく・・・

「ねえママア、あそこに変な格好した叔父さん達が居るよお」

「しっ、見ちゃいけませんよ！」
「・・・・・・・・」

そう、今二人は犬の着ぐるみと兎の着ぐるみを着ているのである
因みに犬がゼスト、兎がバイオレンスジャックである

その頃、ティアナとルネツサはDフォーエス内でオットーと会話して
いた

勿論今オットーは此処には居ない

聖王教会から通信を送っているのだ

『以上が僕が調べた事です』

「有難うね、オットー」

「しかし、あのマリアージュが1万年前に起こったゴッドマジンガ
ーとデビルマジンガーの戦いの折に偶然生まれた者達だったとは正
直驚きです」

「かもね、でも今のマリアージュは恐らくそれをドクターキュラス
が改良した物だと思うわ」

『僕もそう思います』

オットーも納得した

「それじゃオットーは引き続き調査をお願いしても良い？」

『僕は大丈夫ですよ・・・あ、それから』

「何？」

『マリアージュを調べていたら妙な物を見つけたんです』

「妙な物？」

ティアナは首を傾げる

オットーは目の前にその妙な物と言われる一枚の写真を見せた

其処には、純白の布と美しい装飾の施された鎧を身に纏ったオレンジ色の髪的女性が映っていた

そして、その女性は何とティアナと同じ顔をしていたのだ

「これって・・・」

「ティアナ執務官と似ていますね」

『名前は「テラ」、かつて約4千年前のミッドチルダに突如現れたマリアージュに対し敢然と戦いを挑んだ女性です』

「4千年前！」

その数字をティアナは聞いてある事を思い出した

それは、スバルが過去に飛ばされた時も確か4千年前である

それはつまりスバルに何らかのかかわりがあるのではないだろうか
そう思えたのだ

「オットー、そのテラについて何か詳しい事柄は残ってない？」

『残念ですが・・・只父親の名前は残っています』

「父親？」

『はい、彼女の父親は「ザル」と言う青年らしいんです・・・只、
彼女が生まれる前に父親は死亡してしまっただけなんです』

「お決まりの展開ね」

ティアナはフウと溜息をつく

やはり情報が少ない

一体彼女は何者なのか？

そして、

（あの時、マリアージュは私をテラと呼んだ・・・私と何か関係があるとしても言っの？）

ティアナはかつて拘束したマリアージュが自身をそう呼んでいた事を思い出す

自身もまた無関係ではないのだなと内心そう思っのであった

第10話 迫り来る魔の手 その1（後書き）

ザルと言う名前・・・何処かで聞いたような
知りたい人は前作をチエキラア！

第10話 迫り来る魔の手 その2

マリンガーデンを歩いていたのはエリオ達だけでは無かった。その頃、中を歩いていたのは一組の親子連れである

「どうだいはがね？マリガーデンに来た感想は」
「……………」

父親の言葉に娘は不満そうな顔をしていた。それもそうである。彼女は実の娘ではない。

付け加えるなら彼女は本来この男の命を狙っていたのだ。兜剣造・
・この男の。

「何度も言わせるな！私はNF・01と言う名前があって断じてはがねと言う名前じゃない！」

「それは君の型番だろう？名前じゃない」

「そりゃそうだけど……………」

「それに、君も気に入ってそうな顔してるみたいだけど？」

完全に剣造に心の内を見透かされていた。

何故こうして歩いているかと言うと、それはあの時の学会の後にまで遡る…

「こ……此処は……」

「おや、目を覚ましたみたいだね」

目覚めると其処は見慣れぬ部屋であった。そして、自分がその部屋の一角にあるベットの上で寝かされていた事に気づく。

更にはその自分の目の前には標的である兜剣造、そして二人の女性が自分を見ていた事であった。

「き、貴様ら！私をどうする気だ？尋問しても無駄だぞ！そうなる前に自爆して……」

「それは無理だな」

「え？」

「さっきも言ったが君の体はもうマリアージュじゃない。言うなれば魔力が少し高い普通の女の子さ」

剣造の言うとおりであった。さっきから形状変化や自爆の指示を出していると言うのに一向に体に変化がないのだ。

どうやらあの時打ち込まれたクスリのような物が原因なのであろう。

「特に外傷もありませんし、もう動いても大丈夫でしょう」

「でも嬉しいですわあ、私達にまた新しい妹が出来たんですもの」

「はあ？ど、どう言う事だそれは？」

「言っただけでなかったね、今日から君は私の養女と言う事になったんだ

よ

「なにいいいいい！」

驚愕の顔をする。だが、そんな少女に剣造は続ける。

「因みに何時までもあんな型番だけじゃ辛いから名前も考えた・・・
これからは「兜はがね」と名乗りなさい」
「ふ、ふざけるなああああああああああああああああああ！」

と、言う訳である。

「絶対・・・ぜえったいお前なんか殺してやる！」
「はいはい、頑張りなさい」

はがねの宣言も剣造には何処吹く風である。
それを聞いて再びはがねが悔しそうに地団太を踏む。すると、そんな剣造とはがねの前にエリオ達の姿があった。

「あれ、剣造さん」
「やあ、君達も遊びに来たのかい？」
「ええ、そんな所です」

エリオは答える。剣造はその中に居た見慣れない少女を見る。

「うん？君は誰だい？」
「始めまして、私はイクス・・・イクスヴェリアと言います」
（イクス！・・・確かドクターが探していた少女もその名前だった

ような)

「今回はオフなんで皆で遊びに来たんです」

「成る程ね、それは私とはがねと同じだねえ」

剣造が言う。それに聞きなれぬ名前を耳に入れて一同が首を傾げる。するとその隣では明らかに不満そうな顔をしている少女が居た。髪型は幼い頃のフェイトと同じツインテールだが髪の色はなのはと同じ栗色である。

しかし、この少女何処かで見えた気がする。そうだ、彼女はまるで「高町なのは」と「フェイト・テストアロツサ」を合わせたような少女なのだ。

そんな少女が剣造と二人で居たのだ。

「剣造さん、その人は？」

「彼女は私の養女でね、名前は『兜はがね』と言う」

剣造がはがねの背中をそつと押して紹介する。

だが、とうのはがねはムスツとした顔のまま口を開こうとはしないている。かなり不機嫌である。

そんなはがねを見てエリオ達は苦笑いを浮かべるのである。

「お久しぶりです、剣造博士」

「ルーテシアか、お母さんは元気かい？」

「はい、順調に回復してます。剣造博士のお陰です」

ルーテシアは笑顔で答えた。それを見て剣造もホツとなり笑顔になる。

メガーヌ・アルピーノ。ルーテシアの母親であり、元管理局所属の魔道士であった。

しかし、今から約11年前・・・部隊長であるゼスト・グランガイ

ツ率いる「ゼスト隊」が機鋼帝国の前線基地を発見し、攻撃を仕掛けた。

だが、この時にはまだマジンガーは居らず、当然対機鋼獣装備も開発されておらず、結果は惨敗・・・ゼスト隊は壊滅してしまっただ。

そして、メガー又はそのまま機鋼帝国に捕らえられ非人道的な実験のモルモットとして使用される事になった。

そんな母親の姿を幼いルーテシアは見ていたのだ。もし、あのまま時が経っていれば彼女の心は間違いなく崩壊していた。

だが、そんな彼女を救ったのは他でもない「兜剣造」であった。彼は仮初の肉体に憑依し其処で悲しみに暮れるルーテシアを見た。

彼女の悲しみを振り払ってあげたい。そんな思い一心で剣造は戦った。しかし、彼一人では力が足りず結果として彼自身も瀕死の重傷を負い、自らをサイボーグに改造したのだ。

それから皆も知つての通り地下に施設を建設し人知れず機鋼帝国と戦っていたのだ。それから数年経った時、甲児達が現れたのだ……甲児達が現れてから戦況は逆転した。機鋼獣を蹴散らせる存在、鋼鉄の鎧を身に纏い圧倒的力で敵をねじ伏せる無敵の巨大ロボット、魔神・・・ミッドチルダは甲児達の介入により機鋼帝国を壊滅させるに至ったのだ。

だが、本当の黒幕は機鋼帝国ではなかった。本当の黒幕とは、剣造の祖父「兜原蔵」が作り出した悪魔のマジンガー「デビルマジンガー」であった。

デビルマジンガーは次元転移の際に自我に目覚め、その際に自身の中に居た兜原蔵を脳だけにし操り人形とさせ、自身の手駒である機鋼帝国を作らせたのだ。

何故デビルマジンガーが機鋼帝国を作ったか・・・その理由は単なる暇つぶしである。デビルは自身の欲求を満たす為だけに機鋼帝国を作り多くの命を失わせたのだ。

そして、デビルマジンガーは人類の作った最強にして最後のマジン

ガーである「マジンカイザー」と、それを操る「兜甲児」と最後の戦いを挑んだ

デビルの力は圧倒的であり、マジンカイザーも敗北を喫してしまった。だが、マジンカイザーの体内にはジュエルシード事件の折にマジンガーZに力を与えたジュエルシードが埋め込まれていたのだ。ジュエルシード・・・本来その人の願いを歪んだ形で叶えてしまうと言う恐ろしいロストロギアである。だが、それも強く、純粋な願いであればジュエルシードはそれに応えるのだ。

そして、ジュエルシードが叶えた願い・・・それは、マジンカイザーに再び立ち上がる力を与える事であった。

その願いを受けたマジンカイザーと兜甲児は立ち上がりデビルマジンガーを打ち破る事が出来たのだ。

その後、甲児達は元の星「地球」に帰っていった。今回の戦いで双方が得た物は、魔神の伝説、そしてお互いの貿易である。

「もうあの戦いから既に3年は経つんだな」

剣造は柄にもなくその様な事を呟いた。自身は別に爺臭いと言う気は無い。だが、そう思えただけなのだ。

それを見ていたエリオ達は思わず含み笑いを浮かべる。年甲斐にもない事を言っただけか？嫌、剣造の顔でその様な事を言われたので笑ってしまったのだろう。

今の剣造の顔は20代位の青年の姿である。そんな姿で爺臭い事を言われれば笑ってしまうのも無理はないのだ。

皆が笑っているのを見て剣造が首を傾げていた。

「そんなにおかしい事を言っただかい？」

「いえ、只剣造さんのその顔で言われると似合わないって言うかなんて言うか・・・」

正にその通りである。全く似合わないのだ。
そういうのは爺の言う台詞である。皆がそう思えたのだ。

「ま、何わともあれ折角の休みなんだ、パアツと騒ごうぜ」

吉三が手を振り上げて言う。殺しのプロと言えども其処はお子様なようだ。その証拠に目の前で動いているアトラクションに目を輝かせている。

これこそ正しく真正銘子供と言える反応である。

そんな吉三を引き連れて一向はアトラクションを歩き回る。

だが、この時まで誰も気づいていなかった。彼等を上空から見ている存在に……。

「あれがイクスです」

「ほお……冥王と呼ばれるからどの様な猛者かと期待していたのだが……只の子供なのだ」

マリアージュの報告に隣に居た男はそう感想を漏らした。

どうやら彼の胸中ではイクスヴェリアとはそれ程までに恐ろしい存在だと思われていたそうである。しかし目の前を歩いていたのはまだ10代初期とも思える子供であったのだ。

「だが、我々の目的の為には必要不可欠な存在ではあるな」

「では、手筈通りに？」

「うむ、メタルビーストを動かし、その隙にイクスを奪え」

男が命じる。それにマリアージュは頷き姿を消した。

命令を終えると男はイクスの隣を歩く男「兜剣造」を見下ろしていた

「フフフ……因果な物だな、こうして私を見る事になるうとは」

男がそう言葉を漏らしていた。その男の顔は紫の髪をし黄色い瞳をした好青年の顔であった。だが、その男の目には光の輝きが無く、まるで人形のようにもあつたのだ。

生気の無い瞳でもその顔つきは兜創造と全く同じ・・・嫌、性格には創造の仮初の体「ジェイル・スカリエッティ」と全く同じ顔をしていたのだ。

第10話 迫り来る魔の手 その3 (前書き)

お久しぶりの更新です

第10話 迫り来る魔の手 その3

格納庫では作業スタッフの一同が慌しく動き回っている。作業に使うつなぎが油などで汚れて真っ黒になっている。彼等は今ゲットマシンとテキサスマックの二体の整備を行っているのだ。

謎の敵「メタルビースト」の襲来。それが原因でこうも作業員達が慌しく動き回っているのだ。いつもならこの様に忙しく動く事はない。簡単な点検作業を終えればそれで済むのが最近であったのだ。だが、今回は明らかに違う。戦闘を行い現にゲットマシンは装甲から部品に至るまでかなり痛んでいるのだ。その為作業員達は慌しく動いているのだ。パイロットは戦場に立って戦うのと同じように作業員達も此処では戦場なのだ。一瞬の気の緩みがパイロットを死に追いやる危険性もある。彼等は片時も気を逸らす事が出来ないのだ。

それにしても・・・

作業員達はゲットマシンの傷をマジマジと見てそう呟いていた。明らかに傷の出来方が異様なのだ。過去に起こった機鋼獣でさえこれ程までの傷を負わせる事は無かったのだ。しかし今のゲットマシンの各所には巨大な歯型がついていた。大きさからして20〜30メートルはあるのを連想させられる。巨大な鯨に噛まれたっただけの傷は出来ないだろう。

それ程までに今回現れたメタルビーストは強力なのだろう。

「しかし、今回の敵のめたルビーストってのは相当な奴なんですね……」

作業員の一人がそう呟く。彼が呟くのも無理はない。3年前の機鋼帝国との戦い「オペレーションダイナミックウォーズ」以降ゲットマシンは更なる戦いに備えて装甲等を強化されたのだ。しかしそ

れをこつとも容易く破る相手は相当な者である。

「それ程までに今回の相手は強大だつて事だろう。無駄口叩いてないで作業を進める。こうしてる間にもまた奴等が来たらそれこそ事だぞ」

現場監督の激が飛ぶ。それを聞いて作業員達も手を早めるのである。彼等も内心不安に駆られているのだ。ゲッターロボを此処まで傷つける敵の出現に…

それと平行して異世界から来た謎のロボットであるテキサスマツクの整備も行っていた。異世界から来たロボットなのだがその技術は不思議な事に今修理を行っているゲッターロボと比較的似た技術構造をしているのだ。その為に整備もし易いのである。

「何時見ても変わった姿のロボットですねえこいつは…」

ある作業員の言葉の通りである。まるで旧時代のテキサスに居たガンマンを思わせるデザインである。皮のジャケットにカウボーイハット、そして両腰に備え付けられたリボルバー式の拳銃等、明らかに作った物の趣味が出ているとも思える代物である。アメリカを知らない者があれを見たら間違いなく勘違いを起こしそうである。

「実力は外見とは比例しないって事だろう」

しれつとした顔で作業員が呟く。その通りであった。昨夜襲い掛かったメタルビーストもゲッターロボと共に戦ったお陰で倒す事が出来たのだ。もしあの時テキサスマツクが居なければ苦戦を強いられていたであろうと思われる。

だが、この時誰もが予想はしていたのだ。これから先にきつと3年前のような戦いが起こると言う事を…

イクスは一人困惑していた。回りでは皆マリナーガーデンに来たの
ではしゃいでいる。しかしそんな中自分はとても申し訳ない気持ち
で一杯であった。そもそも自分は場違いではないのだろうか。そう
さえ思えたのだ。

何しろ自分は彼等とは何の脈絡も無いのだ。それなのに自分がこ
うして一緒に居て本当に良いのだろうか？。そう思っていたのだ。

「どうしたんだ？そんな湿気た顔して」

困惑するイクスの前をアギトがヒラヒラと舞いながら見る。そん
なに気になる顔をしていたのだろうか。見るとエリオ達も心配そう
にイクスを見ていた。

「私…皆さんと会ってまだ日が浅いのに、こうして皆さんと一緒に
居て良いのかと思ってしまいました…」

申し訳なさそうにイクスが言う。だが、それを聞いてまずアギト
が大声で笑う。気持ちの良い笑い声であった。腹の底から笑ってい
るのだ。そして笑った後は真剣な顔でイクスを見た。

「そんなの気にすんなよ。お前はあたしらの仲間を助けてくれたん

だ。それに、同じ釜で飯食ったんだからもうお前はあたしらの友達ダチみたいなもんさ。だから気にすんな。今日は思いつきり楽しむ事だけ考えれば良いんだよ」

アギトがそう説明する。それを聞いたイクスは胸の内にあつたわだかまりが取れた思いになりやがて困惑した顔から笑顔に早代わりした。とても綺麗な笑顔である。それを見てアギトもうんうんと頷く。

視線を移すと後ろでは吉三が顔を少し紅く染めていた。どうやらイクスの笑顔を見て思わず頬を染めてしまったのだらう。気持ちは分からないでもない。

吉三も年頃の男の子である。そしてイクスは年は幼いでも綺麗な顔立ちをしているのだ。黄金色の髪が風に靡きそれを手でそつとどかす仕草などかなり絵になる。自分の心臓の鼓動が早まっているのを吉三は一人感じ取っていた。そして、そんな吉三を見て一人ニヤニヤするアギトが居た。

(おうおう、一丁前に青春してんじゃねえか)

アギトが吉三を見てそう思っていた。

案外この二人はお似合いなのかも知れない。そう思っていたのだ。そんな時であった。

「やあ、君達」

「あ、剣造さん！」

一同の前に剣造が現れた。

そして皆が剣造に近づこうとしたが、イクスがそれを拒んだ。

「どうしたんだ？イクス」

「この人・・・さっきの人じゃない！」
『ええ！』

イクスの言葉に皆が驚き、剣造を見た。

「・・・残念だったな。もう少しで労せずイクスヴェリアを手に入れられる所だったのになあ」

「てめえ！一体何者だ！」

吉三が懐から布を取り出して構える。

だがそれよりも早く吉三の肩を鋭い剣が貫いた。

「ぐああ！」

「フッフ、知ってるぞ。その布は爆発性の布。それをこんな所で使われては面倒なのでなあ」

それは剣造と同じ顔の男の手が變形して剣状になり吉三を貫いた物であった。

「貴方、ドクターじゃない！ドクターはとっても優しい人だった！
貴方誰？」

「ククク、言ってしまうはその男のオリジナルとでも言っておこうか。さて、無駄話は此処までだ！イクスをこちらに渡して貰おうか」

そう言つて男はもう片方の手を変形させる。

その手は巨大なガトリング砲となった。

「上等じゃねえか！てめえにイクスは渡さねえ！」

傷口を押さえながら吉三は布を手取る。

「アギト！ガリユー！行くよ」
「おう！」

ルーテシアの言葉にアギトは頷きガリユーは無言で構える。

「やれやれ、面倒な事だ」

男が呆れた顔でそう呟いていた。
そんな時であった。

「皆さん！離れて下さい！」

駆けつけたエリオがザンクーガを構えて切りかかる。
それを男が変形させた剣で受け止める。
激しい火花が舞い散る。

「面倒だな、まだ居たのか？」

「貴方は剣造さんに化けてイクスを奪う気だったんですね！」

「化ける？違うなあ、私はそいつのオリジナルだと言っただろう？
この体は元々私の物だったのだよ」

男がそう言って自身を指す。

そしてガトリング砲から無数の弾丸を放つ。
それを皆がかわす。

「このお！」

弾丸の雨をかまし斬撃を薙ぐ。

男はそれを回避しようとしたが間に合わず掠める。

掠った箇所からは赤い血と機械のパーツらしき物が見えた。

「ちっ、油断していたか」

「抵抗しないで下さい！そうすれば貴方にも弁護の機会が必ず・・・」

「五月蠅い」

男はそう言つと両手の変形を溶く。

其処には鋭い爪の生えたグローブが嵌められていた。

そして、それをクイツと動かす。

すると全員に赤いバインド糸が絡みついた。

「ぐっ、こ・・・これっつて！」

「て、てめえ！一体何しやがった！」

動けない吉三達が男を睨む。

だが、男は歯牙にも掛けない。

「さてと、それでは・・・」

動けないメンバー達を他所に男はイクスに近づく。

だが、

「待て！」

「それ以上その子に近づくな！」

遠くから見ていたジャックとゼストがイクスの前に立つ。

因みにもう着ぐるみは脱いでいた。

ゼストは槍を構えジャックはナイフを抜き放っていた。

「邪魔な奴等だ！纏めて片付けるとするか」

男はそう言っただけで頭上で指を鳴らす。すると激しい振動が辺りに響き渡った。

かと思うと男の足元から巨大な機械の怪物が現れた。

「メタルビースト！」

「忍ばせていたのか！」

「その通り！切り札は最後までとっておく物なのだよ」

メタルビーストの上で男が勝ち誇った顔で言う。

その下でメタルビーストが咆哮する。

「させん！」

だが、其処へ一体の魔神が殴りかかった。

それは創造の操るエネルギーであった。

「ほう、貴様が私の劣化コピーか」

「貴様・・・貴様アルハザードで死んだ筈？何故此処に居る？」

「フッフ、よみがえらせてもらったのだよ。あのお方になあ」

男が狂った笑みで言う。

それを聞いた創造の顔が強張る。

「まさか・・・アイツも・・・」

「どうだかな？それは貴様自身の目で確かめる」

男がそう言っただけでメタルビーストがエネルギーに襲い掛かった。

創造もメタルビーストと激突する。

だが、パワーの差が有りすぎる。その為エネルギーがぶっ飛んでしまった。

「ぐうっ！何てパワーだ！」

「馬鹿な奴だ。今までのメタルビーストは只のデータ取得用に過ぎなかったのだよ。最早貴様等の魔神では勝てないのさ」

男の言葉に剣造は驚く。

その時、イクスの元へ何かが駆けつけてきた。

「え？」

「捕まえましたよ、イクス！」

「しまった！まだ居たのか！」

イクスをNF-01が捕獲していた。

「はがね！お前・・・」

「本来は剣造の命を奪うのが目的であったが、この際イクスだけでも持ち帰るだけだ！」

「行かせるか！」

「お前等の相手はこいつらだ！」

そう言つて二人の前に大量のデーモンが現れた。

「はがね！止せ！」

「黙れ剣造！次こそはその命を貰い受ける！その為にイクスは頂いていく！」

「ざけんな！イクスを返しやがれ！」

吉三が叫ぶ。

そしてバンド糸を引き千切ろうと力を込める。

「無駄な事を」

その光景に男は笑った。

そしてその男の横にはがね、嫌NF-01が浮んでいた。

「行くぞ、ドクターに最高の手土産が手に入ったのだ。後はこいつに任せれば良い」

「そうだな」

そう言うと二人はイクスと共にその場から姿を消した。

「い・・・イクス・・・ちつきしょおおおおおおおおおお
おおお！！！」

吉三は叫んだ。

無力な自分を嘆くかのように・・・

第10話 迫り来る魔の手 その3 (後書き)

続きます

第10話 迫り来る魔の手 その4

剣造の胸中は複雑であった。

娘と思つて接してきたはがねが突如離反しイクスを連れ去ってしまったのだから。

「はがね・・・何故・・・」

心から信頼を寄せていた剣造にとってこれは痛手であった。

かつてはそんな事はなかった。だが、この世界に転生してから恐らく自身も甘くなつたのだろう。

『グオオオオツ！』

だが、今の問題は目の前のメタルビーストだ。

明らかにパワーが今までのメタルビーストの倍以上はある。

ましてエネルギーはマシンガーよりも前に作った簡易型である。

改良されているとは言えメタルビーストと真正面からぶつかるのは分が悪すぎた。

しかしだからと言って逃げる訳にはいかないのだ。

此処で逃げればマリンガーデンに来ている客達に被害が出る。

何としても自分が食い止めなければならないのだ。

「ドクター！」

起き上がるエネルギーを見てルーテシアが叫ぶ。

「君達は下がってる！こいつは私がやる！」

剣造は彼等にそう言って再びメタルビーストを見る。

「一人で勝てるのかよ!」

「分かん。だが、やるしかあるまい」

覚悟を決めて剣造が操縦桿を握り締めてエネルギーを突進させる。

それをメタルビーストは真っ向から受け止めた。

両の手が互いにぶつかり合い力比べが始まった。

レスリングの組合の要領だ。

しかし、圧倒的なパワーに徐々にエネルギーが押され始める。

「くっ……ならば!」

剣造がボタンを押す。

すると胸の放熱板から熱線が放たれた。

プレストファイヤーである。

『ゴワアッ!』

プレストファイヤーを浴びたメタルビーストが苦痛の声を挙げる。

その証拠に装甲が徐々にだが溶け始める。

しかしそんな時、エネルギーの背後から激しい衝撃が伝わってきた。

振り返ると其処にはもう一体のメタルビーストが居た。

「二体居たのか!」

剣造は挟み撃ち状態になった事に舌打ちする。

『ガアアアッ!』

前に居たメタルビーストが咆哮した。
かと思うとその口から強烈な熱線を吐き出してきた。

「ぐうっ！」

剣造が声をあげる。

熱線はエネルギーの胸部に当たる。

装甲が溶け出し放熱板が歪に曲がり始める。

これ以上食らえば危険であった。

「やむをえんか！」

剣造は両手を離し一旦上空に避難する。

しかし其処へ背後に居たメタルビーストが襲い掛かって来た。

鋭い鉤爪をエネルギーの肩に食い込ませて頭部目掛けて嘴を叩きつける。

それを右腕でガードする。

『クワアアア！』

鳥型メタルビーストが咆哮する。

するとその前方を先ほどのメタルビーストが飛行して待っていた。

そのメタルビースト目掛けてエネルギーを放り投げる。

前方に居たメタルビーストがエネルギーの胴体目掛けて鉄拳を叩きつけた。

エネルギーの放熱板は音を立てて砕け散り胸部装甲はグニヤリと凹みそのまま地面に叩きつけられた。

「ぐっ、っ……強い……桁違いのパワーだ……」

額から出血した剣造が二体のメタルビーストを見る。

メタルビーストは剣造とエネルギーにトドメを刺すべく押し寄せた。だが、そんな時であった。

上空を高速で飛行する三機の大型機の姿があった。

ゲットマシンだ。

「遅くなりました！行くぞ、翔、凱！」

「何時でも良いよ」

「自分も大丈夫だ！」

號の言葉に翔と凱が頷く。

「地上戦なら俺の號で行くぞ！チェンジゲッター號！！！」

號が叫び、三機のゲットマシンが空中で一つになる。

青い機体のゲッターロボ號である。

ゲッター號が大地に降り立ち二体のメタルビーストを見る。

「気をつけるんだ號！奴等のパワーは今まで以上だぞ！」

「了解！だったら先手必勝だ！」

號がそう言ってナックルボンバーを放った。

だが、それを迎え撃つかのようにメタルビーストも両腕を飛ばしてきた。

お互いの腕は激しくぶつかり合う。

しかしナックルボンバーは軌道をずらされ敵の腕はゲッター號の体に直撃した。

「がはっ！な、なんてパワーだよ！」

信じられなかった。
ゲッター號がパワー負けしたのだ。

「ならこれならどうだ！」

今度は背中のファンを手にとって投げつけた。

ブーメランソーサーである。

しかしそれもメタルビーストの口から放った熱線を受けてドロドロに溶けてしまった。

「つ、つええ……今までのメタルビーストとは比べ物にならない位つええ」

號が戦慄した。

今まで戦って来たメタルビーストより遥かに強いのだ。
其処へ遅れて来たテキサスマックが現れる。

「OH！ゲッターガ苦戦中デエス！援護スルデエス！」

テキサスマックが上空からマックリボルバーを放つ。

しかしそれを鳥型メタルビーストが羽を飛ばたかせて弾丸を弾く。

「WHY！ミーン弾ガ弾カレタデエス！」

ジャックが驚く。

そんなテキサスマックに向かって鳥型メタルビーストが口から放ったリング状の光線をまともに食らってしまいそのまま地面に叩きつけられた。

「アウチ！」

「兄サン！アレハ超音波光線ヨ！気ヲツケテ！」

メリーが叫ぶ。

だが、そんなテキサスマックに向かって鳥型メタルビーストが更に音波砲を放ってきた。

「OHNO！コノママジャバラバラニナツテシマウデス！」

「兄サン！何トカシテヨオ！」

明らかに苦戦しているテキサスマック。

そしてそれはゲッター號も同じであった。

「野郎！だったらこれはどうだ！マグフォースサンダー！」

ゲッター號が背中から雷撃を放つ。

マグフォースサンダーである。

メタルビーストはそれを一身に浴びる。

しかしケロツとした顔をしている。

「ま、マグフォースサンダーが効いてない！」

號が驚愕する。

そんなゲッター號に向かってメタルビーストが肩からタックルをぶつける。

ゲッター號の装甲がグニヤリと曲がり後方に押し飛ばされる。

「こ、この野郎！」

「號、熱くなるんじゃない！冷静になるんだ！」

「凱の言つとおりよ！落ち着いて號！」

熱くなる號に翔と凱が叫ぶ。
しかし號にそれを聞いてる余裕など無く、只がむしゃらに突っ込もうとしていた。

地上では拘束されて動けないルーテシア達を守るようにゼストとバ
イオレンスジャックが多数のデーモン達と戦っていた。
だが、数が明らかに多すぎる為押され気味であった。

「はあああー！」

「うおおおおー！」

ゼストとバイオレンスジャックが咆哮する。
槍の一閃とジャックナイフの一突きでデーモンを倒す。
しかしその度にデーモン達の攻撃が二人に襲い掛かる。
デーモンの攻撃が二人の肉を裂き、血が噴出し、苦悶の表情が二人
の顔に表れる。

「くっ、数が多い」

「その上、こいつら明らかに強さが増している！」

戦っている二人は分かっていた。
以前戦ったデーモンよりもこいつらは強いのだ。

『ゲゲゲエ！殺せ殺せ殺せえ！』

デーモンが狂った笑みで狂った声で笑う。

「く、くそお！こんなもののせいであえ！」

吉三は吠えながら自身を拘束しているバインド糸を必死に引き千切るうとしていた。

それはエリオ達も同じであった。

だが、その糸はかなりの強度を誇っているらしく千切れる気配が全くない。

其処へ数体のデーモン達が飛びかかってきた。

デーモン達の狙いは……

「キャロ！ルー！」

キャロとルーテシアであった。

『ゲゲゲエ！まずは女から血祭りに挙げてやらあ！』

デーモン達がそう言って尖った牙を輝かせる。

「いかん！」

「させるか！」

ゼストとバイオレンスジャックが迎撃に向かおうとした。

だが、そんな二人を背中からデーモンの一撃が襲い掛かった。

「ぐあっ！」

「ぬおっ！」

腹を貫かれ出血する。

即座にそのデーモンを切り倒し迎撃に向かおうとするもその時には既に遅しであった。

デーモンの牙が正に今二人の命を刈り取るうと迫っていた。

その距離は既に目と鼻の先であった。

二人は叫ぶ事も出来なかった。

もうすぐ自分はあるの牙で命を刈り取られるのだ。

そう思っていたのだ。

だが、その時であった。

ブオオオオオオン！！！！

突如そんな音が響き渡った。

バイクの音だ。

すると二人に迫っていたデーモンに向かって一台のバイクが突進してきたのだ。

『ゲボオツ！』

デーモンが声を挙げて吹き飛ばされる。

その光景に皆は驚いた。

だが、もつと驚いたのは、そのバイクに跨っているのは何と女性であったのだ。

女性は華麗なバイクテクニックで次々とデーモンを吹き飛ばしていく。

「ホホホホ、そんな程度じゃこの荒野の走り屋と言われた私の相手じゃないわね」

『んだてめえ！人の邪魔しやがってえ！ぶっ殺してやるう！』

怒り狂ったデーモンの一斉砲撃が女性の跨っていたバイクに集中する。

バイクがそれを浴びて爆発炎上した。

デーモン達がやったと言った顔をした時であった。

爆炎の中から白銀の鎧を身に纏った女性が現れ目の前に居たデーモンをその拳で貫いた。

『な、なんだとお！』

『い、一瞬で姿が変わった！』

エリオは見えていた。

爆発する寸前女性が一瞬で姿を変えたのだ。

そして白銀の女性が次々とデーモンをなぎ倒していく。

それを見たゼストとバイオレンスジャックが立ち上がる。

「ふっ、あそこまで凄まじい戦いを見せられたらこちらも血が滾ってきたな」

「ああ、この程度の傷で倒れていては情けないからな」

お互いにフツと笑いながら武器を構える。

また、それはエリオと吉三も同じであった。

負けていけない。

そんな思いが二人に凄まじいパワーを与えてくれたのだ。

そして、二人を拘束していたバインド糸は音を立てて切れた。

「よっしゃあ！さつきまで好き勝手やってくれた礼だ！たっぷり食らいやがれ！」

「ザンクーガ！行くぞ！」

吉三は布を取り出してデーモンを吹き飛ばし、エリオはザンクーガを使い敵を切り刻む。

白銀の女性はデーモンの真ん中で多数のデーモンと戦っていた。

『面倒だ！一斉に飛び掛れ！』

デーモン達が一斉に女性に飛び掛る。

夥しい数のデーモンに押し倒される女性。

そしてデーモンの鋭い爪が女性の肉を引き裂く・・・

かに見えたがデーモン達は驚愕した。

何と其処に女性の姿は無かったのだ。

『あ、あの女何処アマ行きやがった！』

デーモン達が辺りをキョロキョロして女性を探した。

だが、その時中に居た一体のデーモンが回りのデーモンをその鋭い爪で引き裂いたのだ。

『ギャア！貴様デーモンじゃないな！何者だ！』

デーモン達が仲間を切り裂いたデーモンを見た。
するとそのデーモンが高らかに笑う。

「ホホホホ！地獄の土産に教えてやろう！」

”ある時は荒野の走り屋”

”ある時は白銀の戦乙女”

”ある時は裏切りの悪魔”

「しかしてその実体は・・・」

デーモンがそう言って空に飛び上がる。
そして叫ぶ。

「ハニーフラッシュユ！」

するとデーモンの姿から女性の姿に戻り、赤い髪に青と赤のピッチリなスーツに身を包み細身のサーベルを持つ美しい女性の姿になっていた。

「愛の戦士『キューティーハニー』さ！」

サーベルを構えてキューティーハニーがそう名乗る。

「ハニー！まさか、亡き如月博士の娘と言っ」

ゼストがハニーの名を聞いてそう言った。

「そう、私の父さんはお前達に殺された！私は父さんの遺言に従ってこの空中元素固定装置を守る為お前達と戦う！」

キューティーハニーが強く宣言してデーモン達を切り裂く。
形勢は一気に逆転した。

ゼスト、バイオレンスジャックに加え、エリオ、吉三、そしてキューティーハニーの介入によりデーモン達が全滅するのは時間の問題であった。

苦戦を強いられていた號達にも援軍が来た。
それは巨大な機械の竜であった。

「な、何だあのデカイ恐竜は！」

「あれは！大空魔竜！」

劍造がそれを見て名前を叫んだ。

すると大空魔竜の頭部が飛び出し中から上半身と下半身が飛び出し合体する。

「ガイキング！合体完了！」

合体したガイキングが地上に降り立ちメタルビーストを蹴り飛ばす。

「助太刀するぜ！」

「誰だか知らないけど助かる！」

ガイキングを背に號がそう言う。

また、テキサスマックを攻撃していた鳥型メタルビーストにも大空魔竜から現れたコンバットフォースが攻撃を仕掛ける。

その攻撃を浴びてメタルビーストは怒り狂った声を挙げる。

「ナイスタイミングデェス！」

それを好機と見たジャックがテキサスソードを構えてメタルビーストを突き刺す。

刺されたメタルビーストが苦しみの声を挙げて爆発した。もう一体のメタルビーストにはゲッター號とガイキングが挑んだ。

「デスパールサイトオ！」

ガイキングの目から光線が放たれる。

しかしそれをメタルビーストは両手をクロスして防いだ。

「チツ！頑丈な野郎だ！」

「其処のあんた！別々に攻撃しても駄目だ！此処は同時に攻撃しよっぜー！」

「よし、乗った！」

號の提案にガイキングのパイロットであるサンシローは頷く。そしてお互い最強の必殺武器を放つ。

「火の玉魔球だ！ハイドロブレイザー！」

「食らえ！プラズマサンダー！」

ガイキングのハイドロブレイザーとゲッター號のプラズマサンダーがメタルビーストを直撃し爆発した。

辛くも勝利を収める事が出来た事に號達は安堵する。だが、そんな時であった。

上空一杯に高らかに笑う男の姿が映し出された。

「あれは！ドクターキュラス！」

『フハハハハ！愚かの人類ドモよ！良く聞け！貴様等の時代は終わった！これよりこのワシが世界を支配する時代がやってくるのだ！』

諸手を挙げてドクターキュラスはそう言う。
その映像を皆は黙って見ていた。

『今日よりワシはドクターキュラスを改めこう名乗る。我が名は【プロフェッサーランドウ】ワシの率いる【新生機鋼帝国】がこのミッドチルダを地獄に変えてくれよう！覚悟するがいい！』

そう宣言して笑いながらプロフェッサーランドウの姿は霧の如く消え去った。

それを見た一同は何も言えず、只黙ってその場に立っているしか出来なかった。

イクスを奪われ、各々が傷つき、そして新生機鋼帝国が立ち上がった。

戦いのゴングは今正に鳴り響いた。
そう思わせる光景でもあった。

第10話 迫り来る魔の手 その4（後書き）

次回予告

サンシロー

「ドクターキュラス改めプロフェッサーランドウの宣戦布告が告げられた。

それと同時に各地に強化されたメタルビーストが出現しやがった！上等じゃねえか！売られた喧嘩は買ってやる！絶対にてめえら新生機鋼帝国なんかはこの世界を渡しはしねえぞ！」

次回『凶悪！新生機鋼帝国』

次回もこの小説にスイイッチオオオオン！

第11話 凶悪！新生機鋼帝国 その1

戦闘を終えた一同は大空魔竜に乗り込みDフォース隊舎に向かった。
いた。

その中で一通りの自己紹介と世界の事情を話し合った。

「しかしとんでもない世界に来ちゃったなあ。まさかあんな奴等が居る世界だなんて」

サンシローが言うとしてもない奴とはプロフェッサーランドウの事である。

「そうね、私も始めて見た時は驚いたわ」

「嫌、僕は寧ろ貴方に驚きましたよ！」

エリオはそう言って隣に居る女性『如月ハニー』に対してそう言った。

「あら、女性の秘密を詮索するのはタブーなのよ棒や」

「ご、御免なさい…！」

思わず反射的に謝ってしまうエリオ。

そんなエリオを見てフツと微笑むハニーではある。

「君はあの如月博士のご息女なのかい？」

「はい、貴方が兜剣造博士ですね。お話は父さんから聞いてました」

「そうか、だが・・・如月博士は・・・」

「ええ、殺されました・・・マリアージュに」

ハニーは拳を握り締めて悔しそうにそう言った。
それを聞いて皆言葉を失う。

どう言えば良いか分からないのだ。

だが、一番その中で沈んでいたのは吉三であった。

目の前でイクスを攫われたために言葉が無かったのだ。

今の吉三は片腕をギブスで固定してある状態だ。

「だが、これでドクターキュラス・・・嫌、プロフェッサーランド
ウが動き出すな」

「イクスを手に入れたキュラスは何をするつもりなんですか？」

「それについては隊舎に戻ってから皆に説明した方が良いでしょう」

「余り説明する気になりませんね」

エリオが渋った言い方をする。

「渋っても仕方ないだろう。なってしまった物は仕方ないのだから
な」

「ゼストの言うとおりで。それに、奪われた物は奪い返せば良い。
それだけの事だ」

胴体に包帯を巻いたゼストとバイオレンスジャックが言う。

「何か、旦那達が言うとすげえ様になるよなあ」

アギトが呆れながら見ていた。

「だけど、これでゲッターがまた修理に出さないと不味い状態にな
つちまつたなあ」

「そうだね。僕達だけでミッドを守れるだろうか？」

號と翔が不安になる。

「二人とも何言ってるんだ！自分達は決して諦めない事を竜馬さん達から教わった筈だろう！」

そんな二人を励ますかの様に凱が言う。

それを聞いて二人は頷く。

そうだ、今の俺達には落ち込んでいられる余裕なんてない。前に進まねばならないのだ。

少なくとも大空魔竜に乗っている者たちはそう思えた。

「とにかく、まずは一旦戻ろう。作戦を一から練り直さなければ」

薄暗く、不気味なカプセルが浮んでいる部屋の中にイクスは連れてこられた。

その隣にはイクスを連れてきた張本人である兜はがねことNF-01が立っていた。

「主、ご要望のイクスを連れてまいりました」

NF-01が跪いてそう言った。

だが、それに対しプロフェッサーランドウは彼女に近づくと持って

いた杖で彼女の頬を思い切り叩いた。
叩かれた頬が赤く腫れ、彼女の口から血が流れる。

「この愚か者！ワシが貴様に命じたのは兜剣造の抹殺じゃ！それを貴様は奴の元でぬくぬくと生き恥を晒し居って！」

「も、申し訳ありません・・・」

ランドウの言葉にNF-01は只齒噛みしてそれに耐えた。

その横ではそんな彼女を見てほくそえむマリアージュとなった男『
ジェイル・スカリエッティ』が居た。

「まあ、仕方ないのではないんですか？所詮は失敗作。こうしてプロフェッサー様の手駒として使われるだけ有り難い事じゃありませんか」

「それは貴様とて同じであろう。ワシがアルハザードで見つけた貴様の残骸を集めてこうしてマリアージュとして蘇生させてやったのだからなあ」

「ククク・・・感謝していますよ」

スカリエッティは不気味な笑みを浮かべる。
それを見たイクスは恐怖した。

「貴方達は・・・貴方達の目的は一体何なのですか？私を一体どうするつもりなのですか？」

「なあに、貴方様のお力でマリアージュ達に更なる力を与えて欲しいだけの事ですよ」

イクスの問いにランドウが答えた。

それを聞いたイクスが強い瞳でランドウを睨んだ。

「私が・・・私がそんな悪事に手を貸すとお思いですか？」
「嫌でも貸してくれるようにするさ」

そう言つてランドウが指を弾く、すると彼女の両脇を抱えて二体のマリアージュが抱え挙げる。

「は、離して！離して下さい！」

「フハハ、無駄な事よ！貴様は我等の壮大な計画の生贄となつて貰おう」

高らかな声でランドウは笑つた。

その笑い声を背中で受けながらイクスは何処かへ運ばれていった。

「これで残るは魔神を手に入れるだけですな」

「何、いずれ奴から来るであろう。其処を狙えば良い。それに、もう間も無く魔神は復活するだろう。その時こそ我等の神のご降臨なされる時なのだ・・・クククク・・・はアアアアアアアッハッハッハッハ」

天を見上げてランドウが笑つた。

それを見てスカリエッティも同じように不気味な笑みを浮かべる。

そんな二人を静かにNF-01は見ていた。

するとランドウが彼女の存在に気付き、何回も彼女を蹴り飛ばした。

「この愚か者め！よりによつて創造の元へ居たとは・・・貴様など廃棄処分にする予定だが・・・創造は貴様に心を開いておる。貴様はこれより攻めてくる兜剣造を抹殺するのだ」

「・・・・・・・・」

ランドウの言葉にNF-01は答えない。

不審に思ったスカリエツティが彼女の目の前に手を翳して何回か往復させた。

だが、それでも無反応であった。

「やれやれ、どうや先の蹴りが彼女の意識を断ち切ったのだろうな」

「ふん、まあ良いわい！それより猛もつ間も無くだな、」

ランドウがこれでもかと言える程の不気味な顔でそう言った。

第11話 凶悪！新生機鋼帝国 その2

「吉三！大丈夫じゃったか？」

大空魔竜がDフォーエス隊舎に辿り着くや否や、駄エ門は吉三の傷を見て号泣しそうになった。

「心配しすぎだつての親父。これくらいかすり傷だよ」

「ですが、まさかマリアージュがこうも大胆に動くとは」

「ああ、私も完全に迂闊だった。すまない」

剣造が深く謝罪した。

そもそもイクスが攫われた原因は彼が連れていたはがねにあったのだ。

元々敵方であった彼女をどうにか人間らしい生活をさせてあげたい。そう思い彼女を連れてきたのだ。

だが、それが災いとなり彼女はイクスを連れ去ってしまった。

今の剣造の中には後悔の念で一杯であった。

「ドクターは悪くないよ。悪いのはあのプロフェッサーランドウだよ」

「そうだ、悔やむのは何時でも出来る。今は奴等の目論見を断つ事を考えるのが先決だ」

ルーテシアが涙目で剣造に訴え、ゼストがそんな剣造の肩に手を置いてそう言った。

それを聞いた剣造が頷く。

「しかし、問題はゲッターだな。今では明らかに戦力不足なのは事

実だ。どうにかして強化出来れば良いんだが」

「難しいのお・・・製作者の隼人は今居らんし、強化パーツを作るうにも時間が無いわい・・・ったく、こんな時にアイツが居ればのお」

十蔵がフワフワと浮びながら頬杖を掻いていた。

「くそお、こんな時に真ゲッターが早乙女研究所にある何てよお！」

號が手を叩いて悔しがった。

と言うのも今ミッドと地球は分断された状態なのだ。

お互い次元トンネルを通つての交流が可能なのだが、今は丁度そのトンネル内が非常に荒れている時期の為次元航行船での移動が困難なのだ。

その上、魔神の殆どが地球に戻ってしまっていた為に圧倒的に戦力不足でもあった。

現在戦える魔神と言えばゲッター號とテキサスマックとガイキング位しかない。

しかもゲッター號とテキサスマックは先の戦いで深い傷を負ってしまった。

暫く出撃は見合わせた方が良い。

魔道士も同じく戦力不足でもあった。

かつての隊長陣、副隊長陣はミッドを出払っており、其処を突くかの様にプロフェッサーランドウは進撃を開始したのだ。

しかも今のDフォースは設立直後の為部隊員も殆ど居ない状態なのだ。

ハッキリ言つて戦力が足りな過ぎる。

異世界から来たあばしり一家やバイオレンスジャック等が居てもとも足りないのだ。

何せ相手はあの機鋼帝国を名乗っているのだ。

そうになると大型兵器も多数配備している筈だ。
その上にあのマリアージュである。

「まさか・・・」

「どうした？ティアナ」

ティアナが驚愕の顔をしたのを皆が見た。

「以前オットーに調べてもらったんですが。マリアージュとは、不完全な魔神戦士なんです。それで、その魔神戦士を操作出来るのが・・・イクスだと」

「それって、つまり・・・奴等がマジンガーになるって言うのか？」
「ええ、そうよ・・・それも、最強最悪のマジンガーに」

その言葉を聞いたDフォースのメンバーは凍りついた。
最強最悪のマジンガー。それを聞いて脳裏に浮ぶのはあの姿である。
漆黒の鎧に悪魔の翼を背中に持った正に悪魔の如き魔神。

『デビルマジンガー』

「私も以前この目で見たわ。マリアージュが私の目の前でデビルマジンガーになった。でも、あの時は制御が不完全だったせいかなその場で自爆したけど・・・もし、あれを完全に制御出来たとしたら」
「とんでもない相手ですね」

キャラがそう呟いた。

それに面々も同じく頷く。

彼等は知っていたのだ。

デビルマジンガーの恐ろしさを。

デビルマジンガーの強さを。

かつてオペレーションダイナミックウオーズでマジンガーを苦戦させた最強最悪の魔神。

デビルマジンガー。

あの時は甲児の操るマジンカイザーが居てくれたお陰で全滅させる事が出来た。

しかし今はそのマジンカイザーが居ないのだ。

即ち自分達でそのデビルマジンガーに挑むしかないのだ。

そしてそれは即ち3年前に起こったオペレーションダイナミックウオーズ以上に熾烈な戦いを予感させるのに充分であった。

「どうでも良いけど、貴方達私の事忘れてない？」

会話に参加してなかったハニーが不満そうに呟いた。

それを聞いて一同が一斉にかぶりを振る。

だが、はっきり言わせて貰おう。

すっかり忘れてました。

玉座を思わせる場所にイクスは座っていた。

嫌、座らされていたと言った方が妥当である。

「何をやっても同じです！私は貴方達の愚かな野望に加担する気はありません！」

『ほざいておれ！どの道貴様はワシには逆らえんようにしてやる』

モニターに映っていたランドウが勝ち誇った笑い声を上げる。今、イクスは手足を玉座に固定され動けない状態であった。

そんなイクスの体中に管のような物が取り付けられる。

そして頭には奇妙な形の被り物が被らされた。

其処からイクスの脳内に電流の様な物が流された。

そしてそれは同時にイクスの全身に激しい痛みとなって現れた。

悲痛の声をイクスは挙げた。

とても痛々しげな声である。

だが、それを聞く者はランドウとジェイル・スカリエッティ。そしてそのすぐ側に居るNF-01だけであった。

「まけ……ません……私は……貴方達……なんかに……
……絶対……」

『しぶといな、ジェイル！パワーを最大にしろ』

『しかしそれでは最終的に彼女の精神が崩壊する危険性があるので
すが？』

『構わん！どの道使い捨ての道具に過ぎん！崩壊したら捨てれば良
い。それだけであろう』

『それもそうですね……では』

ジェイルは納得して装置のパワーを最大にする。

ヘルメットから肉眼で確認出来る程の量の電流がイクスに流れ込ん
だ。

両目を大きく見開き体を大きく揺らして更に大きな声で悲痛の叫び
を挙げる。

それを見てランドウとスカリエッティは笑みを浮かべた。

だが、その中で只一人、NF-01だけは苦しみを噛み潰す顔を浮
かべていた。

やがて、電流が消えた。

かと思うとゆつくりとイクスが顔を上げる。

しかし、その瞳に生气は宿っていなかった。

ドロリと濁った瞳、そんな瞳をしたイクスをランドウは見ていた。

『さあイクス、貴様の閲兵であるマリアージュ達を無敵の機械魔神

『マジンガー』に変えるのだ！』

「分かりました・・・魔神戦士達よ・・・今こそ弱き衣を脱ぎ捨て、魔神の姿となれ」

イクスが念じるかの様にそっと唱える。

そしてイクスの目が輝く。

その変化は直ちに現れた。

ミッドチルダ中に潜伏していたマリアージュ達の殆どがその姿を変えたのだ。

脆弱な人間の姿を捨て、強靱で強大な姿。マジンガーの姿となったのだ。

『フハハハハ！成功だ！わしの無敵の軍団の完成だ！それ、世界中に向けてメタルビーストを送り出せ！最早ワシに勝てる輩等最早この世に居ないのだ！全てを滅ぼしてやれい！』

『フフフ、お言葉のままに』

ランドウの言葉にスカリエッティは承諾し、待機していたメタルビーストを全てミッドチルダ全域に放った。

放たれたメタルビースト達は各地で破壊活動を行う。

正に地獄絵図とはこの事であった。

新生機鋼帝国の進撃は直ちにDフォースに告げられた。

「まさか、ミッドチルダ全域にメタルビーストが出現するなんて！」

「しかも首都クラナガンからは大量の・・・デビルマジンガーが出現しました」

「ワッツ！デビルマジンガーデスツテエ！」

初めて聞く単語にジャックは驚く。

そして、その映像が映し出された。

其処には等身大のサイズで暴れまわるデビルマジンガーの姿があった。

大きさは等身大だがパワーは今までのと同じ位であった。

「冗談じゃないツスよ！あんな化け物と戦わなきゃならないんスカ？」

「何弱音吐いてんだウエンデイ！機動六課の時だってあたしらアレくらい切り抜けてきたじゃねえか！」

「ノーヴェの言うとおりだ！鉄也達が居ない今こそ！我等がこの世界を守るんだ！」

トーレがダンと机を叩いて宣言する。

それに皆が言う。

「首都クラナガンには幸い巨大兵器は居ない。ゲッターとテキサス

マック、そしてガイキングは各地に散ってメタルビーストの迎撃に当たった方が良いでしょう」

「よっしゃあ！メタルビーストなんざ俺達が蹴散らしてやるぜえ！」

サンシローが腕を鳴らして言う。

「で、ですがゲッターとテキサスマックの修理がまだ完全には終わってませんよ！」

「シャーリーさん！そんな事を言ってる場合じゃないぜ！世界の一大事なんだ！だったら俺達だって命掛けで行くぜ！」

「その通りですよ！僕達だって伊達に地獄の特訓をしてきた訳じゃないんです」

「竜馬さん達だったら迷わず出撃した筈です！自分達も同じ思いですよ！」

シャーリーの言葉にゲッターチームの三人が言い出る。

「ミー達モユー達をHELPスルデェス！」

「世界八達ツテモ同ジ仲間デェス！一緒ニ戦イマシヨウ！」

ジャック・キングとメリー・キングの二人も同じ意見であった。

「よし、それならお前達は大空魔竜で現地に運ぶ！だが、その後は皆バラバラで援護は期待出来ない。孤軍奮闘状態だ！それでも行くか？」

ピートの脅しの効いた言葉が辺りに響く。

だが、それで怯む者など此処には居なかった。

「ピートさんよ。俺達はハナツから命がけだぜ！そんな程度の脅し

で怯んでたらゲッターチームなんて大層な看板背負ってられませんよ」

號が言う。

それを横目でティアナは見ていた。

「ん？何だ」

「暫く見ない内に随分な事言うようになったわね號」

「まあな、早くお前のアレを貰いたいからな」

號は笑顔でそう言った。

だが、その直後ティアナの鉄拳が號の顔面に叩きつけられたのは言うまでもない。

「何人前で恥ずかしい事ほざいてるのよこの馬鹿！」

顔を真っ赤にしたティアナがそう言う。

それを見ていたメンバーの一部がニヤリとした。

「へへ、ティアナって號チンと仲良かったんスねえ」

真っ先に言葉を放ったのはウエンディであった。

それを聞いたティアナが更に顔を赤くする。

「お喋りの時間は其処までだ。残った我等は首都クラナガン各地に散ってデビルマジンガーの排除を行う。管理局の航空魔道士達も援護してくれるかも知れんが余りあてにするな！良いか、私達の戦いの後には人類の未来が掛かってるんだ！絶対にこの戦いかつぞ！」

『はい！』

トーレの言葉に皆が頷く。

「それなら我等あばしり一家も協力しよう！あそこまで名指して喧嘩を売られて背中を向けたんではあばしり一家の名折れと言うもんじゃ！」

「けどよお親父い、直の兄貴はどうすんだ？まだパーツが直ってねえぞ」

「この際しようがあるまい、ワシらだけで行くぞ」

あばしり一家の直次郎は前回の戦いで頭部以外を破壊されてしまったので現在修理中なのであった。

今はルネが付きっ切りで修理をしている。

「直次郎さんはルネに任せます。彼女の腕なら心配はありませんし」

「ま、ティアナのお墨付きなら心配要らないな」

「もう一辺顔面に鉄拳食らいたい？」

拳を握り締めて號に尋ねる。

それを聞かれた號が全力でかぶりを振った。

これ以上殴られるのは勘弁願いたいのだ。

「エリ才殿、我等も共に戦う覚悟ですぞ！」

「有難う御座います。駄工門さん」

「ヘン、男がそんな簡単に頭下げんじゃねえよ！みっともねえぜ」

「あ、す……すみません」

菊の助の言葉を受けてエリ才が頭を上げる。

それを見て菊の助もニヤリとする。

「良いか、こんなトコで死んだらあたしは許さないからな！絶対生

きて帰って来いよてめえ」

「勿論です！僕にはまだやらなきゃならない事が沢山あるんですから此処で死ぬ気なんてありません」

菊の助の言葉にエリオは笑って返す。

「俺も協力しよう。この世界をあんな奴等に渡す訳にはいかない」

バイオレンスジャックも同様の意見であった。

「有難う。ジャックさん」

「感謝するぞ、ジャック」

「あんがとうよ、旦那」

ルーテシア、ゼスト、アギトの三人がバイオレンスジャックに礼の言葉を言う。

「気にするな。お前達は俺にこんな素晴らしい世界を見せてくれた。そのささやかな礼みたいな者だ」

フツとバイオレンスジャックは笑った。

気のせいかなその時の彼の笑顔はとても優しい笑顔に見えた。

「だったら、この私も協力するわ」

如月ハニーも同意見であった。

「マリアージュは私のお父様を殺した憎い敵。でも、今はこの世界を守る為に戦うわ」

「ハニーさんも辛い事があつたんですね」

デイエチが悲しそうな目でハニーを見た。

「気にしないで。今の私には皆と一緒に戦う事だけよ」

「余り気負いし過ぎない方が良く。それでは無駄に命を落とす事になりかねんからな」

チンクがハニーにそう言った。

それにハニーは頷く。

「念の為に聖王教会にも援護を要請しますか？」

「いや、あそこは市民達の避難場所にもなる。シャツハやディード達はあそこの防備に専念してもらった方が良くだろう」

「と、なると騎士カリムとシャツハ、それにセインやディード、それにオットーも戦列から外れる事になるな」

「流石にナンバース全員集合とはいかないが、それでも弱気は禁物だ。普段から行ってきた厳しい訓練を思い出してみろ！」

トーレが力強く言った。

それを號達は思い出した。

途端に青ざめる。

相当厳しい訓練をしてきたのだろう。

「それらを乗り越えてきたお前等なら絶対この程度の戦い切り抜けられる！自信を持って！」

最後にトーレはそう言ったのだ。

そんな時であった。

扉を勢い良く開けて誰かが入ってきた。

「まったく、お前のせいで遅れちまったじゃねえか暗黒寺！」

「うつせえ！何でも俺のせいだよ！」

「あ、ヴォルツ指令にヤクザ警官！」

「誰がヤクザじゃ！これでも俺は列記とした刑事じゃ！」

ノーヴェの言葉に暗黒寺が怒鳴る。

「暗黒寺さん、暗黒寺さんが居るって事はギンガさんも？」

「ああ、妹を見に行ってるよ」

「トーレ、スバルは参加させるのか？」

「今の状態ではとても無理だ。魔神化の影響のせいかまだ治りきってない状態だ。下手に出しても足手まといにしかならんだろう」

「厳しいねえ、ま、しょうがないっちゃあしょうがないか」

帽子の唾を降ろして暗黒寺が言う。

「だが、その方がナカジマ妹にも良いかもな。またあんな状態になつたんじゃ今度こそ本当の魔神になっちまう」

「なあなあ、その魔神になると何が不味いんだ？」

吉三が尋ねる。

異世界から来た者は良く分からないのだ。

「ああ、そう言えば知らなかったわね。スバルはね・・・」

ティアナが事情を説明しようとした時であった。

突如上の階から激しい振動が響き渡った。

部屋全体が激しく揺れ、電灯がいたり消えたりしていた。

「今・・・上の階から！」

「上って・・・確か！」
「スバル！」

ティアナはいの一番に上の階に向かった。
それに皆も続く。

扉を蹴り破って部屋の中に入る。

しかし、其処に居たのはボロボロの状態のギンガであった。

「ぎ、ギンガさん！スバルは？スバルは一体・・・」

「ナカジマ姉！一体どうしたんだ？」

「み・・・皆・・・スバルが・・・スバルが魔神になりかけてる」

「ど、どう言う事ですか？」

『恐らく精神にまで侵蝕が始まったんだ』

疑問に思う一同の元へモニター越しに剣造が言う。

額に包帯を巻き破損したパーツを交換した直後なせいか機械の部分が露出している。

「それって・・・まさか！」

『イクスだろう・・・イクスが何らかの方法でマリアーヂュをマジ
ンガーにしたのと同じようにスバルにもその兆候が現れたんだ。こ
のままだと後数時間で完全に魔神になってしまうぞ』

「ちっ、嫌な事が立て続けに起きやがるぜ」

「最早一刻の猶予もないな。各自分散して敵の迎撃に当たるぞ！テ
ィアナ。お前はスバルを追え。敵は私達が片付ける」

「すみません、トーレさん」

トーレに軽く頭を下げてティアナは部屋を後にした。

「行くぞ！我等Dフォース初めての総力戦だ！貴様等気合を入れて

いくぞ！
『おお！』

その頃、直次郎の置かれている修理室の中ではルネが武装のチエックを行っていた。

「直次郎さん、私も行って来ます」

動かない直次郎にルネは言った。

「正直、私はこの平和な世界を恨んでいました。そして壊そうとも思っていました。ですが、貴方と出会って、貴方の心の中を聞いて、私は目覚めました。今から私は、生きるために戦うのではなく、守る為に戦います」

そう言っつてルネは部屋を出て行った。
それから直ぐに直次郎が目を開いた。

「こりゃあ・・・オチオチ寝ていらんねえな」

首だけの状態の直次郎がそう呟くのであった。

崩壊した町の中を一人、スバルは歩いていった。

既に右半身は魔神の侵食を受けており、顔半分は魔神の顔になっていた。

スバルはふと、侵蝕された自身の右上半身を見た。

黒き鎧が其処にあった。

だが、痛みは全く無い。

それが逆に彼女に不安を募らせた。

痛みがあるなら耐える事が出来る。

だが、痛みもなく侵蝕が進む事にスバルは不安を覚えた。

まるで、徐々に人間の心を失っていくかのようなのである。

現に、今のスバルは何も考えて居ない。

只、目の前に映る者を破壊する事しか頭に無いのだ。

そんなスバルの前に夥しい数のデビルマジンガーが立っていた。

敵意をむき出しにした状態のデビルがスバルを睨んでいる。

「コワス・・・クロス・・・スベテ・・・」

緑色の濁った瞳で敵を睨みながらスバルがそう呟いた。

今のスバルに人間らしい感情など無く、只・・・破壊と殺戮に支配された悪魔の魔神に近い状態になっていたのだ。

第11話
終

第11話 凶悪！新生機鋼帝国 その2（後書き）

次回予告

人間としての心を失ったスバル。今彼女を支配しているのは破壊の衝動だけである
徐々に蝕まれていく体。
そして再び降臨する邪神。

次回『蘇る邪神』

次回もこの小説にテイク・オフ！

第12話 蘇る邪神 その1 (前書き)

新生機鋼帝国 対 Dフォース

ミッドチルダを賭けた一大決戦、再び!!!

第12話 蘇る邪神 その1

「チエンジゲッタアアア號！」

ゲッターチームが一体のゲッターロボになり大地に降り立った。その体の各所はまだ傷の治っていないのを頷かせる傷跡であった。そして、その眼前には夥しい数のメタルビーストが其処に居た。

「凄い数だな」

「何だ？今更ビビったのか？號」

「誰に言っただよ凱！」

「無駄口は後にしましよ。それよりも」

翔が目の前に居るメタルビースト軍団を指した。それに二人も頷く。

「ああ、こいつら全員蹴散らす！行くぞお！」

號の叫びと共にゲッター號が大地を掛ける。

それを迎え撃つかの如くメタルビースト軍団も向かって来た。

「ナツクルボンバー！」

両手を組んでそれを放つ。

食らったメタルビーストは胴体をぶち抜かれて爆散した。しかしその後から更に迫る。

「マグフォースサンダー！」

今度は背中からのファンから高圧電撃を放つ。
それにより更に多くの敵が倒される。
だが、敵の勢いは留まる事を知らなかった。
遂には至近距離での殴りあいになった。

「うおおおおおおお！」

號が雄たけびを挙げる。

そしてゲッター號の拳が振りぬかれる。

拳を受けたメタルビーストが顔面をバラバラにされて部品を撒き散らす。

だが、その間も四方からメタルビーストの攻撃が襲い掛かる。

メタルビーストの爪がゲッターの装甲を引き裂き、拳が砕き、牙が噛み砕く。

「ぐうっ・・・負けるか！ゲッターがてめえら如きに負けるかよお！」

號が叫ぶ。

そして四方から襲い来る敵に敢然と立ち向かった。

「イイイイイハアアアアア！ミィ達ニ任セナサ〜イ！」

テキサスマックがマックリボルバーを器用に操り次々と敵を撃ち抜く。

しかし、こちらにも数が半端ない量であった。

「SHIT！メリー、後何発残ッテル？」

「モウソクナニ残ッテ無イワ兄サン！」

「ガッデム！」

舌打ちするジャック。

それでも打ち続ける。

弾切れを起こすその時まで。

ガチン……

突如リボルバーから嫌な音が響いた。
弾切れである。

ライフルも撃ち尽くし現在テキサスマックに残弾は一発もなかった。

「メリー、コウナツタラインファイトデース！」

「OKヨ兄サン！ヤツチャイマシヨウ！」

ジャックの提案にメリーも賛同する。

そしてマックリボルバーをテキサスソードに変えてメタルビースト軍団に斬りかかった。

肩口から真つ二つにされるメタルビースト。

しかしその直後にメタルビーストの攻撃がテキサスマックの片腕を引き千切る。

「アウチ！背中カラ攻撃ナンテマナーガナツテマセンネエ！」

そう言つて横薙ぎにソードを振るう。
横一線に並んでいたメタルビースト軍団の胴体が横にずれてそのまま爆発した。

しかしそれでもメタルビースト軍団の攻撃は続く。

「ミー達ニLOSEはアリマセーン！絶対ニ勝ちマス！コノ手ニヴイクトリーヲ掴ムンデエス！」

「ソウヨ！頑張りマシヨウ兄サン！」

ジャックとメリーが互いに言葉を交わす。

お互い不退転の覚悟でメタルビースト軍団と戦う。

「カウンタアアアパアアンチ！」

メタルビースト軍団にガイキングの巨大な腕が放たれる。
それを食らったメタルビースト軍団がその場に四散する。

「きやがれメタルビースト！この俺とガイキングが蹴散らしてやる
！」

サンシローがそう言った。

その後胸部の恐竜の顔の目の部分が赤と青の光を放つ。

「食らえ！ザウウウウルガイザアアアア！」

そしてそれを放った。

超音波砲のザウルガイザーである。

ザウルガイザーを浴びたメタルビースト達が機械の残骸を撒き散らして爆散する。

だが、倒されたメタルビーストなどには目も暮れず一心不乱にガイキングを目指す。

「野郎！カウンタアアアクロオオス！」

膝に付けられた赤い十字のカウンタークロスを手に取りそれを振るい敵を切り裂く。

そして近くに居た敵にガイキングの巨大な角を突き刺して電撃を浴びせる。

パライザーである。

しかし数が余りにも多すぎる。

攻撃する度に自身も反撃を受けてしまう。

何時しかガイキングもあちこち傷を負いボロボロの状態になっていた。

「まだまだ！9回裏2アウトからの大逆転を見せてやる！」

野球で言う起死回生の逆転の事を言うサンシロー。

彼の目には明らかな闘志が宿っていた。

それは大空魔竜も同じであった。

迫り来るメタルビースト軍団に内臓武装で挑む。

しかし戦艦な為に小回りが効かない為その周囲をコンバットフォー

スが守るように迎撃を行う。

「博士！数が圧倒的です！このままでは大空魔竜と言っても・・・」
「弱音を吐いてはいかん！我等は何としてもこの戦いに勝利しなければならぬんだ。皆最後の最後まで諦めたら駄目だ！」

大文字博士の激が飛ぶ。

いかにボロボロになろうと傷つこうと力尽き倒れるまでその闘志は消える事はないのだ。

Dフォースのメンバーは首都クラナガンに来ていた。

その前には大量の軍勢、そう『デビルマジンガー』が闊歩していた。その通り道には大勢の管理局局員達が迎撃を行っている。

しかし、彼等の放つ魔弾はデビルの装甲の前には無力であった。

足止めどころか噛ませ犬にもならない。

全く持って無力であった。

「駄目だ！全く効いてない！一旦下がれ！」

「何言ってるんだ！コレ以上下がれば市民達の命が危ういんだぞ！」

「だがどうするってるんだ！このままじゃ俺達が危ないんだぞ！」

局員達が怒鳴りあう。

すると、その中を疾風の如く何かが駆け抜けた。

見るとそれは黒い胴着を着た大男であった。

背中に『竜』と書かれた羽織を羽織り後ろで髪を束ねている。

そんな大男が一蹴りでデビルを蹴り飛ばす。

「てめえらビビッてんじゃねえ！男なら最後まで戦い抜きやがれ！」

局員達の方を向いて流竜馬は言った。

そして再びデビル軍団の方を向いて一人その軍勢に挑んだ。

また、別のところでは更に大量に現れたデビル軍団に挑む若者達の姿があった。

「てやあああああああああ！」

大太刀型デバイスのザンクーガを振るいデビルを切り裂くエリオ、そしてダンビラを振るって同様に蹴散らす菊の助が居た。

「へっ、やっぱり喧嘩はこう派手じゃねえと面白くねえや！」

「菊の助さん、無理しないで下さい！奴等は強敵ですから！」

エリオが菊の助の気を使ってそう言う。

だが、それを聞いた菊の助は鼻で笑った。

「誰に物言つてやがる。腐ってもあばしり一家に生まれた菊の助。こんなガラクタなんざに負ける程落ちぶれちゃいねえよ」

菊の助の言葉を聞いてエリオはフツと笑った。

どうやら心配は無用だったようだ。

そんな二人にデビルが一斉に飛び掛った。

「フリード！」
「キユクウウ！」

だが、その軍勢を巨大な炎が焼き払った。見ると巨大化したフリードに跨ったキャロが居た。竜を操り二人を助けたのだ。

「有難う、キャロ！」
「うん、エリオ君も無理しないでね」
「分かったよ」

頷きザンクーガを構える。
それを見た菊の助はほんの少しだが暗い顔をしていた。

また、こちらでは両手両足に光子に輝くブレードを纏ったトーレが高速でデビル軍団を切り裂いていた。
その姿はまるで一騎当千とも言える強さであった。

「伊達に剣に部隊を任された訳じゃない。お前等如きに負ける程私はおちぶれてはいない！」

視線を強張らせて拳を硬く握り締めてそう言い放った。
彼女のISであるライドインパルスで高速移動をしながら敵を切り裂いているのだ。
その直ぐ近くでは両手にスティンガーを構え放つチンクの姿があった。

「兄上が居ない今、この世界は我等が守る！」
宣言しデビル軍団にそれを放つ。

爆発が起こりデビルが吹き飛ぶ。

だが、それでも数は一向に減る傾向を見せなかった。

「数では上か・・・仕方ない。こうなったら」

チンクは覚悟を決めて自身の目を覆っていた眼帯を取り外した。

そして目を開く。

其処には機械的に作られた瞳がついていた。

その瞳が光子の色を放ち始める。

「父上も最初は反対していた物だ、光子の輝きを受けるが良い！光子カビーム！」

チンクの目から光子の閃光が放たれた。

紛れもないそれは光子カビームであった。

それを放ちそのまま横に薙ぐ。

するとデビル軍団は胴体から真っ二つに切り裂かれた。

大量のデビルを葬った後、チンクは肩膝をつく。

そんなチンクにトーレが駆け寄る。

「大丈夫か？チンク・・・それはお前のエネルギーを大量に消費する物だ。無闇に使うな」

「分かっています。ですが、今はそれを使う時だと思い使用しました」

肩で息をしてチンクが答える。

確かに光子カビームは強力だがその分消費エネルギーが半端ではないのだ。

マジンガーならともかく戦闘機人で放つには限界がある。

だから創造は取り付けるのを渋っていたのだ。

今のチンクでは数発しか撃てない上に一度撃つた後に暫くチャージが必要と言う欠陥だらけの切り札であった。そんな二人にデビル軍団が周囲を囲む。

「数では圧倒的に向こうが上か・・・だが、我等Dフォースをその程度で倒せると思わない事だ！」

「Dフォースはマジンガーだけじゃないと言うのを貴様等に教えてやろう！」

お互いに背を預け合いながら二人が言い、そして迎え撃つ。

第12話 蘇る邪神 その1（後書き）

その2へ続く

第12話 蘇る邪神 その2 (前書き)

大変お待たせしました
ではどうぞ

第12話 蘇る邪神 その2

「うおおおおりゃあああ！」

雄たけびを上げながらノーヴェは自身のナックルとスパイクでマリ
アーヂュを倒していく。

しかし数が多い上に殆どのマリアーヂュがマジンガーと化している
為に苦戦は必死であった。

「くそっ！嫌な姿してやがるなあこいつら」

ノーヴェが愚痴るのも無理はない。

今のマリアーヂュ達の姿はかつて起こった戦い『オペレーションダ
イナミックウォーズ』の際に機鋼帝国の主力兵器であった『デビル
マジンガー』と酷似しているのだ。

その為管理局の魔道士達の殆どは怖気付き戦力にならない状態であ
った。

現状で戦えるのはDフォースのメンバーだけであった。

「全くもう、肝心な時に管理局は役に立たないツスねえ！」

ウエンディが愚痴りながらもマリアーヂュ達と戦いを続けていく。

「ウエンディ！今は愚痴るより戦う方が大事だよ」

「確かにな、ディエチの言う通りだな」

ディエチの言葉にノーヴェは頷く。

「確かにそうね。今は戦う方が先みたいね」

ハニーもそう言いながらシルバーフルーレを振り、マリアージュと戦っていく。

それでもマリアージュの数が圧倒的ではあった。

「くっ……あの顔だけは何度見ても慣れるもんじゃないな」

ノーヴェがデビルマシンガー状態のマリアージュを倒しながら呟いていく。

そんな彼女のデバイスに徐々にだがヒビが入りだしていた。

それはディエチやウエンディ、またハニーの武器も同じであった。敵の数に対し武器の耐性が保たなくなりだしてきたのだ。

「ねえねえ、これってもしかしてかなりヤバイ状況じゃないんスか？」

「かなり……かな？でも危ないのは事実だね」

ウエンディの呟きにディエチは頷く。

「でも、諦めたら其処でお仕舞いね。皆此処がふんばりどころよ」

ハニーが皆を鼓舞する。

それに頷き戦い続ける。

また、別の場所でも戦いは続いていた。

「わしこそ天下に名高きあばしり一家の大黒柱『あばしり駄エ門』じゃ！命の惜しくない奴は掛かって来いやあ！」

駄エ門が仕込み杖を使いマリアージュ達を切り裂いていく。そんな中、あばしり一家の長男五エ門は嘆いていた。

「何泣いておるんじゃ五エ門？」

「どわあつてえ！マリアージュつてのが来るって言うからてつきりまたあの時のようなバインバインのナイスバディのおにゃのこちゃんかと思ったらあんなゴツイのになってるんだもん！もうやだあ！」

どうやら五エ門はマリアージュがデビルマジンガーになってしまった為にセクハラ行為が出来ない事に嘆いているようである。

それを見た駄エ門は深く溜息をついた。

「情けない。天下に名高きあばしり一家の長男がセクハラ行為とは」「どうでも良いさ！おいらはさつさとこいつ等ぶっ飛ばしてイクスを助けに行きてえんだ！」

自慢の爆発性の布を振るい吉三が言う。

「ほおう、吉三よ。お主あのイクスとか言う娘に惚れよつたなあ？」

「わ、悪いかよ？」

「いやいや、お主も男。その様な感情を持つても可笑しくはないわい」

駄エ門がそう言って微笑む。

そして、こんな風に異世界の女性に惚れた息子がもう一人居る事を駄エ門は思い出した。

「ま、奴の事じゃから問題はなかるう」

駄エ門は呟き再び戦いに集中するのであった。

別の市街ではルネツサが銃器を手に持ちマリアージュに戦いを挑んでいた。

（この空気・・・やはり私には戦場でしか生きられないのかしら・・・）

内心溜息をつきながらも敵を撃ち抜いていく。

だが、撃つていく内にマガジンの弾を撃ちつくしてしまいすぐさまマガジンの交換を行う。

しかし、その一瞬の隙にマリアージュ達が一気に距離を縮め、腕を剣に変えて切りかかってきた。

幸い自身の体が切られる事は無かった物の持っていた銃を真っ二つにされてしまった。

完全に丸腰状態になったルネに向かいマリアージュ達が一斉に襲い掛かる。

だが、その時のルネの心境は何処か落ち着いていた。

これで自分は死ぬ。

不思議と恐怖は無い。

むしろこれでもう人を殺す事がないのだから寧ろ安心出来た。

だが、そんなルネに向って何かが飛んできた。

かと思うとマリアージュの殆どが吹き飛ばされていく。

「え？」

「大丈夫か？ルネ」

其処には以前頭部だけであつた筈の直次郎が居た。しかし、その体は全身機械の体の状態であつた。

「な、直次郎さん！でも……一体どうして？」

「親父に聞いたろ？俺は頭さえ無事なら体はどうにでもなるんだよ。それによ……」

直次郎はそこで頬を掻く。

気のせいかな直次郎の頬が赤くなつてる。

「良い女にや武器は似合わないぜ」

「良い……女？ですか？」

「ああ、お前は俺が今まで出会つた女の中で飛び切りの良い女だ」

直次郎がズケズケと言う。

それを聞いたルネの顔がトマトの如く真っ赤になる。

その間もマリアージュが攻めて来るのだが、その度に直次郎に蹴散らされていく。

恋する乙女が強いと言うように恋する男も強いようだ。

次々と敵マリアージュを蹴散らしていく。

「良い女にや銃は似合わない。それより良い女は好きな男の手を握つて欲しいもんだぜ」

「好きな男ですか……ですが、私に人を愛する資格などありません」

「おいおい、随分悲観的じゃねえか？一体なんでだよ？」

「以前お話した筈ですよね・・・私は戦場で生きてきたと・・・それは即ち多くの命を奪って来た事になるんです」
「それを言ったら俺だって殺し屋だったんだぜ？それこそ星の数程人を殺してきたんだ。それに、俺の体を見る」

直次郎はそう言って自身の体を見せる。

其処には全身機械の体があった。

戦闘機人よりもかなり機械的な体である。
それを直次郎はルネの前に見せたのだ。

「この通り、俺の体は機械の体だ。だけどよお。この人を愛する心は俺にだってあるんだ。そしてそれに資格なんざ要らないんじゃないかねのか？」

「な、直次郎さん・・・」

「それになあ、もしお前に人を愛する資格なんざねえって言う奴が居たら、そしたらそんな奴あ俺が叩きのめしてやる！だから安心して人を愛してみるよ」

「・・・有難う・・・御座います」

直次郎の前でルネはそういう。

その目にはうつすらと零れ落ちる熱い雫があった。

その雫を直次郎の手がそつと拭う。

「言い忘れてたぜ。良い女は笑ってる顔が最高だったな」

「そうですね・・・だったら、良い男は好きな女を放って置かないで下さい」

「お！・・・おう」

ルネのその言葉を聞いて直次郎は再び頬を掻く。

そんな二人の回りにマリアーシユ達を取り囲むように集まっていた。

直次郎とルネは互いに背中を預けあう形で陣取る。
ルネはホルスターからハンドガンを取り出して構える。
直次郎は両手からブレードを展開させて構える。

「ま、惚気る前にまずはこの邪魔者を片付けるとするか！」
「そうですね！」

二人はそう言っただけでマリアージュ達と戦いを始める。

別の市街ではルーテシアとアギト、そしてゼストとバイオレンスジャックが戦っていた。

「うおおおおお！」
「うがああああ！」

と、言ってもパワーアップしたゼストとバイオレンスジャックの前にマリアージュ達の残骸が築かれていく。

それを見ていたルーテシアはともかく、アギトは青ざめていた。

「な、何だよ！何なんだよあの二人は！まるで化け物じゃねえか！」
「アギト、それは酷いよ。ゼストもジャックも只強いだけだよ。それを化け物って言ったら駄目だよ！」

どうやらルーテシアは見慣れたらしく余り驚いていないらしい。
しかしこんなを見慣れると言うのも案外未恐ろしいのだが。
そうこうしている間に回りのマリアージュは既に残骸となっていた。

「そつちは大丈夫か？」

「こつちは片付いたぞ」

「早あああ！」

既に残骸の山となったマリアージュの上でゼストとジャックが立っていた。

ゼストは自身のデバイスを、ジャックはジャックナイフを手に鬼神の如き姿で立っているのであった。

常人が見たらまずトラウマになる事間違いないだろう。

第12話 蘇る邪神 その2（後書き）

その3へ続く

第12話 蘇る邪神 その3

Dフォースと新生機鋼帝国との戦いは熾烈を極めていた。数では圧倒的に新生機鋼帝国が勝っているのだ。

メタルビースト、そしてマリアージュである。

メタルビーストは元々大型ロストロギアを捕獲してサイボーグ改造を施しただけなのでコスト的にも安く大量生産が可能なのだ。

そして、それはマリアージュも同じであった。

オリジナルを除き殆どのマリアージュは人間の死体から再生された存在である。

故に管理局の殉職者が増えれば増える程マリアージュも増えるのだ。

そして、増えたマリアージュはそのままイクスの命を受けて邪悪なる魔神『デビルマジンガー』へと姿を変えるのだ。

しかし、今までマリアージュがデビルマジンガーへと姿を変えなかったのは理由があった。

それは、マリアージュはイクスが居ないままデビルマジンガーへ変貌すると自身の制御が行えず数分後には自壊してしまうのだ。

その為にプロフェッサーランドウはイクスを欲したのだ。

そして、それらすら凌駕する者こそオリジナルの魔神なのだ。

今、ミッドチルダは大量のデビルマジンガー軍団と戦っているのだ。しかし、それに対してミッドチルダにはあの伝説の五大魔神が居ない。

そして、現在ミッドと地球を繋ぐ次元の穴は次元流が不安定でありこちらに来られない状況なのだ。

それを予測しての犯行であったのだ。

戦力的には圧倒的にこちらが不利なのは言うまでもない。

何しろあれから3年は経ったと言うが管理局の体制は未だに変わって居ないのだ。

それも、3年前の戦いの復興に時間を有し過ぎてしまいそれどころでは無かったのも理由となる。

しかし、だからこそ彼等Dフォースが設立されたのだ。

Dフォースは機鋼帝国のように人知を超えた強敵と戦う為に組織された部隊であるのだ。

現在このDフォースが新生機鋼帝国との激闘を行っている。

Dフォースこそがミッドチルダの最後の希望なのだ。

燃え盛る町の中をテイアナはひたすらに走っていた。

相方であるスバルを追っての事である。

背中にスバルの愛用のデバイスであるリュウコンを背負って両手に自身のデバイスであるクロスミラージユを構え戦場を疾走する。

「まったく、あの馬鹿は！デバイスを置いたまま出て行くなんてどうかしてるんじゃないの？」

【我にも皆目検討がつかん。主が我を置いて行く事など今までなか

ったのだからな】

背負われているリュウコンが呟く。
その通りなのだ。

スバルは3年前の戦いで降リュウコンを大事にしている。
それは、かつて自身を救ってくれた初恋の男性の形見だと言っている。

ティアナ自身もチラリとだが見た事がある。

青い髪の優しそうな少年であった。

名前は『ゼノン』。

今から四千年前のミッドチルダで出会った少年である。

その頃には同様に地上を攻めて来た機械の神々と戦いを繰り広げていたのだ。

だが、その際にスバルが敵の攻撃に遭い重傷を負ってしまった。

今の時代では治療出来ないと判断したゼノンは自身の体と融合してスバルを救った。

だが、それは同時に自身の命を投げ出すと言う行為でもあった。
スバルを救う為に自らの命を投げ捨てる。

そんな事が出来る人間は果たしてこの今の時代に居るだろうか。
嫌、恐らくは居ないだろう。

ゼノンの様な武人は今の時代には恐らくはそう居ない。
だからこそスバルは彼に惹かれたのだろう。
そう思えた。

そう思いながら走っている時であった。

ピルの町並みから外れ広い場所に出た。

どうやら広場の様だ。

其処には無数のデビルマジンガーが残骸となつて転がっていた。そして、それを足げにしている存在が居た。スバルだった。

「スバル！」

ティアナが声を掛ける。
そして近づく。

だが、途中で歩みを止めた。
スバルの姿を見たからだ。

「・・・・・・・・」

声が出たのでスバルは振り返る。
その姿はおぞましい物であった。
既に体の殆どがデビルマジンガーに侵蝕されており、残っているのは右半分の顔だけであった。
その最後の部分にも徐々に侵蝕が進んでいる。
その証拠にスバルの瞳は赤くなつており濁った色をしている。

「スバル！スバル！！」

必死にティアナが呼びかける。
だが、それにスバルは答えない。
それどころか、左半分の魔神の顔は明らかにティアナに敵意を向け
て睨んでいる。

既に完全に意識を支配されたのであろうか。
では、何故スバルの顔が半分だけ残っているのか。
疑問に思っていたがそれを思考する間などなかった。

「くっ！」

デビルの鋭い爪の一撃がティアナに向けて放たれる。空を切る音がした。

咄嗟に後ろにステップして下がる。

前髪が数本ティアナの前を過ぎる。

後少し後退が遅れていたら彼女の顔と胴体は離れ離れになっていたであろう。

思わず固唾を呑む。

その間にもスバルの連撃は繰り返される。

そのどれもが一撃必殺の威力を誇っているのだ。

何しろ相手は完全なオリジナルのデビルマジンガーなのだ。

マリアージュが変身した紛い物のデビルとは訳が違う。

大きさこそ人類と同じだが戦闘能力は甲児が戦ったデビルとほぼ同等なのだ。

それが今ティアナの前で猛威を振るっているのだ。

「スバル・・・あんた何やってるのよ！」

デビルの猛攻をかわしながらもティアナは諦めずにスバルに呼びかける。

それに意に返さずスバルは攻撃してくる。

それでも構わずにティアナは続ける。

「あんた、何負けてるのよ！あんたはそんなに弱かったの？そんなデビルマジンガー如きに負けてるようじゃ！甲児さん達に笑われちゃうじゃない！」

「・・・！?・・・」

ティアナの放った言葉にかすかにだがスバルは反応した。どうやらまだ微かにだがスバルの意思が残っているようだ。まだ希望はある。

まだ諦める訳にはいかない。
そう思いティアナは更に呼びかける。

「何時ものアンタはどうしたのよ！何時ものあんただったらそんなのに負ける訳ないじゃない！それでも私の相棒なの？」
「……！！……」

また微かにだが反応があった。
しかも今度は少しだが顔が動いた。
良い調子だ。
思わずそう思いながらも続ける。

「早く戻って来なさいよ！皆が待ってるのよ！」
もう少し。もう少しだ。
ティアナが祈るようにスバルに呼びかける。
だが、その時であった。

『五月蠅イゾ虫ケラガ！』

突如スバルの口からその言葉が放たれた。
かと思うとティアナの胴体にとつもない痛みが走った。
魔神の太い足で蹴りが放たれたのだ。
かなり吹き飛ばされそのまま地面に崩れ落ちるティアナ。
呼吸が一瞬止まる。

かと思うと一気に酸素が全身に入って来て咽った。
数回咳をして涙目になりながらスバルを見上げている。

其処には、スバルは既にいなかった。
全身をドス黒いオーラに包まれた悪しき魔神が其処に居たのだ。

『サツキカラ聞イテイレバ耳触リナ事ヲ言イオツテ。無駄ナ事ダト
言ウノ二人間トハ1万年経ツテモ愚力ナ物ダ』

「1万年・・・まさか・・・あんたは！」

ティアナは脳裏に嫌な予感がした。

突如として現れた真なるデビルマジンガー。

そして甲児から聞いた言葉『種は撒いた』と言う不可思議な単語。

それらはある予想を連想させた。

それは、スバルこそがデビルマジンガーの言った『種』だったと言
う事なのだ。

『ソウ、アノ時貴様等愚力ナ人間共ニ倒サレタデビルマジンガーヨ』

最悪な答えが其処にはあった。

あのマジンカイザーですら一度は倒したデビルマジンガーが今日の
前にいるのだ。

そうであった。

スバルは元々デビルマジンガーが作り出した魔神戦士なのだ。

即ちデビルマジンガーの一部なのだ。

こうなる事も既に予測出来た筈だったのだ。

しかしそれをティアナは心の何処かで否定してたのかも知れない。
認めたくない。

スバルが悪魔になる姿を。

スバルが悪しき魔神になる姿を。

心の何処かで否定し、認めないでいたそのツケが今回ってきたのか
も知れない。

デビルがティアナをあざ笑うかの様に呟いてから1秒も経たない後であった。

一気にティアナとの距離をゼロ距離まで縮めたデビル。

それにハツとするティアナではあったがその直後彼女に向かって巨大な腕が振るわれているのが見えた。

咄嗟に両手をクロスして防御結界を張る。

デビルの腕は易々と防御結界をブチ破りそのままティアナを上空へ殴り飛ばす。

両手が痺れる。

想像以上の威力である。

思うように腕が動かないのだ。

そう思っている時であった。

ティアナに向ってデビルの腕が真っ直ぐ伸びてきたのだ。

その腕はそのままティアナの細い首を掴むとそのままの勢いで地面に叩きつける。

「くあつ！」

苦痛の為に声が漏れた。

それを気にせずデビルは今度はティアナをビルの壁に向って叩きつける。

叩きつけられたビルは砕けその中にティアナが入っていく。

ビルの壁が砕かれる音が辺りに響き渡る。

そのまま腕を横に振るう。

すると腕と共にティアナもビルの壁を突き破っていく。

やがて腕を元の長さに戻していく。

その腕には全身スタボロの状態になり血まみれの姿となったティアナがグッタリとしていた。

微かに意識はあるだろうが既に虫の息でもある。

『クカカカ、脆イ物ダナ人間！コノママソノ細イ首ノ根ヲヘシ折ッ
テヤロウ』

そう言つてティアナの首を握っていた腕に力を込める。
ミシミシと嫌な音が辺りに響いていく。

だが、その時であつた。

グサリ！

そんな音が響いた。

かと思うと、デビルの腕には一本の槍が刺さっていた。
銀色に輝く綺麗な装飾を施された神々しい槍であつた。

「ウグオア！」

槍が刺さつた痛みには思わずデビルはティアナを手放してしまふ。

そのまま地面に膝をつくティアナ。

その前でデビルは自身の腕に刺さっていた槍を引き抜いた。

『コ・・・コノ槍ハ・・・マサカ！』

「それは、私の槍よ！」

そう言つと突然デビルの前でティアナは立ち上がった。
おかしい。

既に意識が無く立ち上がれる状態では無い筈である。

にも関わらず彼女の瞳は未だに輝きを失つておらず、闘志が燃え上
がっているのが見て取れた。

そして、デビルの腕から持っていた槍を奪い返すと、そのままの勢
いでデビルを蹴り飛ばした。

あべこべに吹き飛ばすデビル。

『バ・・・馬鹿ナ！何故貴様が此処ニ居ル！・・・【テラ】よ！』
デビルは驚いた。

其処には既にこの世に居ない筈の女性が居たのだ。

姿こそはティアナであるが中身が明らかに違う。

彼女はかつてこのミッドチルダに攻めて来たマリアー・ジュ達に勧善と戦いを挑んだ一人の女性。

その名を【テラ】と言った。

「今は彼女の体を借りてるだけよ。それより、また貴方が出てくるなんてね、いい加減懲りたらどうなの？」

『フン、屑人形相手ニ健闘シタ貴様如キガ我ニ説教力？偉クナツタ物ダナ』

「貴方に言われても嬉しくないわね。それよりも、貴方が体としているその娘は彼女にとって大切な相棒なの。悪いけど返して貰うわよ」

『ヤツテミロ！出来ル物ナラバダガナア』

「後悔しても知らないからねえ！」

ティアナことテラは叫び槍を振るう。

デビルマジンガーも自身の両腕を振り翳して向い立つ。

燃え盛る広場の中で二人が今激しくぶつかり合うのであった。

第12話 蘇る邪神 その3（後書き）

次回予告

剣造

「私はまだ諦めない。はがね・・・必ずお前を奴の呪縛から解き放つてみせる」

次回「娘よ・・・」

「はがね、自分に正直になるんだ！」

第13話 娘よ…

Dフォースと新生機鋼帝国との戦い。

それらが巨大なスクリーンの中で展開されていた。

そして、それをご機嫌に眺める者が居た。

新生機鋼帝国の王であるプロフェッサー・ランドウである。

「フハハハハ、愚かな奴等よ。所詮メタルビーストやマリアージュなどは捨て駒も同然。変わりなど幾らでも作れる。だが、今のワシの狙いは管理局本部。あそこを潰せばこの世界の未来は終る」

プロフェッサー・ランドウの狙いは正しくそれであった。

市街にメタルビーストとマリアージュの大部隊を展開させてその迎撃にDフォースを向わせる。

その隙に地上本部に攻撃を仕掛け陥落。

そうすれば管理局は総崩れとなる。

それでは流石のDフォースといえども後ろ盾を失い打ち倒すのは容易くなると思う筋書きなのだ。

いかに強力な敵でも頭を潰せば倒れる。

それは生き物でも組織でも同じととれるのだ。

「ククク、連中の泡を食った顔が楽しみですなあ」

「フン、全くじゃ」

隣に立っていた男ジエイルが笑いながら言う。

それにランドウは頷いた。

「さて、それじゃ害虫駆除を始めるとしよつか」

ランドウはそう言って手元のボタンを押す。

管理局の地上の守りの要とも言える場所『管理局地上本部』。その上空に突如巨大な戦艦が降り立った。プロフェッサーランドウの操る新生機鋼帝国の要塞である。

「見る！やはり此処はもぬけの空よ！メタルビースト全軍を出撃させい！この場で彼奴等の息の根を止めてやれい！」

ランドウが命じ、要塞から多数のメタルビーストが表れた。その数は数える事が馬鹿らしくなる程でもあった。それらのメタルビーストが一斉に本部に攻撃を仕掛けようと襲い掛かる。

だが、その第1陣であった前衛のメタルビースト軍団が突如何処からの攻撃を受けその場で爆散した。

「な、なんじゃ！何事なのじゃ！」

「こ、これは・・・」

「どつしたのじゃ！」

「ぶ、プロフェッサー・ランドウ！本部上空に機影が・・・それもかなりの数の・・・」

「何ー！」

ジェイルの言葉を聞いたランドウが青ざめる。
そしてカメラを上空に向ける。

其処には出撃したのと同じだけの数のロボットが居た。
タイプは3タイプあった。

両足がなく腕が先端状に尖っているロボット。

寸胴型の大型ロボット。

細身のロボット。

その3タイプが居たのだ。

「どうやら間に合ったようだな」

「ああ、このまま戦いに乗り遅れるかと冷や汗が流れたぜ」

「でも、ちゃんと美味しい所は取れたみたいよ」

「その様ね」

3機のロボットの操縦者とも思える者達が会話をしていた。

「な、何だあのロボット達は！ワシはあんなロボットなど知らないぞ！」

『その通り。何しろたった今完成した部隊なんだからな』

「！……！！！」

通信を割り込んで声がしてきた。

声色はジェイルと同じ声であった。

ランドウは汗ばんだ顔でモニターを動かす。

其処には地上本部前で腕を組み仁王立ちしているエネルギーが居た。

「剣造……これは貴様が作ったロボットだと言うのか？」

『そうだ、地上とミッドの科学力を結集して作り上げたマシンガー軍団のロボット達。その名も『ダイオン』『バイオン』『ミリ

オン 『だ』

創造が3機のロボットの名前を言う。

それらがマジンガー軍団としてミッドの守りの要となるロボット軍団でもあった。

「伝説の五大魔神が居ない時を狙ったみたいだったが、流石にマジンガー軍団が居るとは計算外だったようだな」

ダイオン の操縦者の『小出正雄』こいでまさお は慌てふためくランドウ達を笑うように言った。

「ミッドの守りはマジンガーやゲッターだけじゃないんだぜ！俺達人類全員が守りの要だって事をためえらは忘れてたみたいだな」

バイオン の操縦者の『東しゅん』あづま も同様に言い放った。

「今まで私達が受けた痛み、全部利子付きで返してあげるわ！」
「覚悟しなさい！新生機鋼帝国」

ミリオン の操縦者である『ローリィ』と『ロール』は怒り心頭でメタルビースト軍団に向って叫ぶ。

「行くぞマジンガー軍団！お前達の怒りを奴等に叩き込め！」

最後に創造がマジンガー軍団に激を飛ばす。

それを皮切りにマジンガー軍団の攻撃が始まった。
出鼻を挫かれたメタルビーストは完全に遅れてしまった形となつてしまった為かマジンガー軍団の攻撃で半分以上削られてしまった。

「おのれ、たかが雑魚ロボット如きに何を苦戦しておるのだ！さつさと叩き潰せ！」

「雑魚かどうかはこれを見て言え！ブレストファイヤー！」

ダイオン が背中 of 放熱板を前面に回して熱線を放った。

それはマジンガーZの主力兵器であったブレストファイヤーである。

「マジンガー軍団にはそれぞれマジンガーの武器を内臓してるんだよ！こっちはこれだ！ルストハリケン！」

バイオン の胸の縦溝に掘られた部分からは猛烈な酸を含んだ風が吹き付けられる。

「行くわよ！ロール」

「任せて！ローリイ」

二人の乗ったミリオン の顔部分が開き、その中から光子力電磁砲が発射された。

3機のロボットから放たれた攻撃はそれぞれメタルビーストを蹴散らしていく。

しかもその総数が100体以上いるのだ。

上空は完全にマジンガー軍団の独壇場であった。

そして、地上でも同じであった。

改修されたエネルギーZは地上から迫るメタルビースト軍団を次々と千切り倒していくのだ。

辺りにはメタルビーストの残骸が積み重なっていく。

その光景をランドウは歯噛みして見ていた。

「おのれ・・・おのれええ、兜剣造！」

座っていた椅子の肘掛に思い切り拳を叩きつけてランドウが怒りの声を上げる。

メタルビースト軍団の全滅は火を見るより明らかでもあった。次々と数を減らしていくメタルビースト軍団。

剣造は地上から新生機鋼獣帝国の要塞を見上げていた。

「どうした！プロフェッサー・ランドウ！威勢が良いのは口先だけか？」

「おのれ！こうなればワシ自ら奴にトドメを・・・」

「お待ち下さい。あの様な死に損ない如きにランドウ様が行く必要などありません。それより死に損ないには死に損ないをぶつけましょう」

「！・・・NF-01の事か？」

ランドウの言葉にジェイルは頷く。

「どの道使い道のない失敗作です。最後に剣造を殺せれば御の字でしょう」

「その通りじゃ！もうあのような出来損ないに使い道などない！さっさと向わせろ！後で奴は廃棄処分すれば良い」

「はい」

ジェイルは不気味な笑みを浮かべてニヤリとした。

「ん？」

剣造の目の前では要塞の中から一つの小さな人影が降りてきた。それは剣造が一番見覚えのある人であった。

「はがね……」

剣造が名前を呟いた。

それは自身が彼女に与えた名前であり本当の名前ではない。それでも剣造はその名で彼女を呼んだ。

そんな彼女が剣造の……エネルギーの前にやってきた。

剣造はすぐさまエネルギーからパイルダーを切り離し大地に降り立つ。

目の前には虐待を受けたのかボロボロの姿のはがねが居た。

「はがね……その姿は……」

「……死ねえ！兜剣造おおお！」

はがねは叫び持っていたデバイスを思い切り振るう。

剣造はそれを後ろに飛び退いてかわす。

掠った上着の襟部分が微かに斬れる。

「何故だ！はがね！お前は何故其処までされて奴に従うんだ！」

「黙れ！今の私にとってあのお方と生きることこそが全てなんだ！

私は……私はあのお方に作られた命なんだ！」

はがねが叫び更に激しくデバイスを振るう。

それに対し剣造は直撃を避けるようにかわし続ける。

だが、全てかわす事は出来ないらしく徐々にその体にも傷が入りだしていく。

「私にとって、ランドウ様の命令こそが生きる意味なんだ！命令されずに捨てられたら私は何のために生まれてきたのか分からなくなっちゃうのよ！」

思いの丈を剣造にぶつける。

その目からは熱い雫が零れ落ちていた。

「あんに……あんた何かに私のこの思いが分かるって言うの？
分からないわ！分かる筈がない！あんた何かに……あんた何かに作られた私の気持ちなんて……」
「分かるさ」

激しい攻撃を受けながらも剣造ははがねに言う。

その顔は彼女を哀れみ、そして慈しむような優しい父の顔であった。

「お前のその心と体の痛み……私は良く分かる」

「知った風な事を言うな！お前に何が分かるってんだ！私は本来此処には居ない命なんだぞ！」

「それは、私も同じだ」

「え？」

剣造のその言葉にはがねの攻撃が止まった。

巨大な大剣型のデバイスの刃が剣造の前で止まる。

「私は……一度死んだ人間だ」

「そんな……じゃあ、何で此処に……」

「妻が……翼が私にもう一度生きると言ったのさ。だから私は私

が出来る事をしているんだ。それはお前だって同じはずだ」

「ど、どう言う事？」

「意味のない命などない。お前がこうして此処に居ると言う事はお前は何かをする為に生まれたと言う事だ。お前がこうして私の前に現れたのは決して無意味な事じゃない。だから、そんな悲観的な事を言うんじゃない」

剣造が言う。

その剣造の言葉をはがねは只黙って聞いていた。

反論の言葉など見つからない。

この男はそれ程までの道を歩んで来たのだ。

そんな男を自分は殺せるか？いや、出来ない。

そう悟ったはがねは自身の思いでデバイスの刃を降ろす。

そんなはがねの両肩を強く剣造が掴んだ。

彼の顔が、目がはがねの目の前に映る。

「はがね、何時までも殻に閉じこもってるんじゃない！自身のやりたい事をやれ！お前のその命は誰の物でもない。お前の物なんだ！だからお前がやりたい事をして好きなように生きて良いんだ」

「私が・・・やりたいように？」

動揺するはがねに剣造は頷く。

自分自身のやりたい事をやる。

そんな事今まで考えた事すらなかった。

何をしたいのだろう。

何がしたいのだろう。

今のはがねにはとても難しい難題でもあった。

だが、その答えは難題であれば良いのであろう。

簡単に答えが見つかって面白くない物だ。

だったら、長い時間を掛けてゆっくりと解いて行こう。

そう剣造は言いたいのだった筈だ。
そう思った時、はがねの瞳からは再び熱い雫が溢れ出るの
が分かった。

「なんで・・・何でなの？・・・どうして、私はもつと早く・・・
もつと早く貴方に出会えていれば・・・」

「今からでも遅くない。お前の人生はまだ始まったばかりなんだ。
お前の人生はこれからなんだ。だから・・・」

言葉の途中で剣造ははがねの瞳の涙をそつと拭った。
そして優しく微笑みながらはがねの頭をそつと撫でる。

「だから、今はお前のしたい様に生きれば良いんだ。もうその『N
F-01』と言う名前は捨ててしまえ」
「け、剣造・・・」

微笑みながら言う剣造にはがねは言う。
少しだが口をパクつかせて何かを言おうとしていた。
何処か恥ずかしがっているのか中々いえないうでいた。
そして、ようやく決心がついて真剣な目をする。

「お・・・お・・・」

そんな時であった。

彼女の胸に激しい痛みが走った。

鋭い何か背中から胸へと突き抜けていく痛みであった。
そして、それは剣造も感じていた。

「ぐうっ！」

「あぐっ！」

剣造とはがねは声を上げる。
そして自身の胸を見る。

其処には銀色に輝く鋭い刃がはがねの背中から突き刺さり胸を突きぬけそのまま剣造の胸板を刺し貫いていたのだ。

貫いた箇所から真つ赤な血が滴り落ちて見えているのが見える。

剣造ははがねの後ろに居る邪悪な存在を見た。

其処には、自身と同じ顔をしたジェイル・スカリエツィが不気味な笑みを浮かべていたのだ。

「所詮は役立たず。ま、足止め位にはなったか・・・」

そう言うのと刃を抜く。

抜かれた直後、はがねがその場に倒れた。

剣造も胸の激しい痛みのためか方膝をつく。

刺された箇所を押さえながら剣造はジェイルを睨んだ。

「き・・・貴様・・・」

「何を怒ってる？所詮はそいつは失敗作に過ぎん代物だ！変わりなど幾らでも作れる。言わば壊れた機械みたいな物だろう？」

そう言いながら剣を元の手に戻す。

そして目の前で倒れたはがねの頭に自身の足を乗せて踏みつける。

グリグリと動かし汚物を踏み潰すかの様にはがねの頭を踏みつけていた。

そんな時であった。

はがねの頭に乗せていた足を剣造の手が掴んだ。

「????、何の真似だ？」

「その足を・・・退ける！」

「何？」

「はがねは・・・はがねは貴様等の失敗作でも機械の部品でもない！この私の、大切な娘だ！それを足蹴にするなど言っているんだあ
あ！」

叫びそのままジェイルの足を持ち上げて投げ飛ばす。

飛ばされたジェイルは空中で体性を戻し地面に降り立つ。
その前に創造は立つ。

「こりや驚いた！まさかお前程の男がそんな失敗作の為に怒るなんてなあ」

「言った筈だ。はがねは失敗作ではなく、この私の娘だとなあ」

「クハハハハハ！こりや傑作だ！その失敗作が娘え？だったらその娘と仲良くあの世に送ってやろう！これこそ私の最高の慈悲だよ！」

下卑た笑みを浮かべながら再び手を剣状にして創造に襲い掛かる。

創造はそのジェイルの放った突きの一撃を遭って避ける事も捌く事もせずに真っ向から受けた。

再び胸板に剣の一撃が突き刺さり背中を突き刺さる。

そして、お互いがゼロ距離にまで近づいた時であった。

ドスツ！！！！

そんな音が響いた。

見るとジェイルの首筋には創造の腕があり、その腕からは細い注射針のような物が首筋に突き刺さっていた。

その針の中から何かが送られてくるのがわかる。

それは、彼自身にとってはとんでもない物でもあった。

「き・・・貴様・・・何を私の中に・・・」

「あの時、はがねに打ち込んだのと同じ物だ・・・但し、濃度は数十倍に凝縮してあるがな」

そう、今ジェイルに打ち込んだのは対マリアージュ用の劇薬であった。

量を調節すればマリアージュの機能を一時的に麻痺させる事が出来る。

はがねに打ち込んだのはその一時的な麻痺程度の威力であった。しかし、今ジェイルに打ち込んだのはその数十倍の濃度でもある。

「が・・・かは・・・ぐあ・・・」

突如としてジェイルが苦しみ出す。

剣造の胸に突き刺さっていた剣も何時の間にか手に戻っていた。

その両手で喉を押さえて激しく苦しみ出す。

体中の体組織が徐々に崩壊を始めているのだ。

その証拠に外皮が溶け出し、口からは抜け落ちた歯や嘔吐物が流れ出てくる。

その光景を剣造は見ていた。

「だ・・・だずげで・・・ぐで・・・い・・・いのぢ・・・だけ
は・・・」

「はがねの様な悲しい命を生み出さない為に・・・死ね」

助けを求めるジェイルを尻目に剣造は冷たく言い放ち踵を返す。

そんな剣造の背中に向かってジェイルは手を伸ばす。

だが、その手が剣造に届く事はなかった。

既に足はどろどろに溶けてしまい、そのまま徐々に体全てが溶けてゲル状になっていく。

やがて視界もドロドロになっていく。

そして、最後に伸ばした手も、全てがドロドロになってしまった。
最早この世にジェイル・スカリエツィと言うマリアージュは存在しなくなってしまうのだ。

「はがね！」

剣造はそのままの足取りで倒れたはがねをそっと抱き起こす。
微かに息はしている。

だが、明らかに急所を刺されたのか虫の息である。

「わ・・・私・・・もう・・・駄目・・・なんだね・・・」

「喋るな！そんな傷すぐに治してやる！だから・・・」

「良いよ・・・自分の体だもん・・・分かるもん」

剣造の顔にそつと手を当ててはがねが言う。

そんなはがねの手を剣造はしっかりと掴んだ。

「ねえ、剣造・・・貴方の事・・・お父さんって・・・言って良い？」

「ああ・・・ああ！良いとも、お前は私の娘だ！だから当たり前だろう？」

頷く剣造を見てはがねは嬉しく微笑む。

だが、そんな口から夥しい量の吐血が出た。

吐き出された血がはがねの服を紅く彩っていく。

更に息が荒くなってきた。

「ね、ねえお父さん・・・最後に・・・私のお願い・・・もし、もしまた名前のない子供を引き取る時が来たら・・・その子に私の名前・・・『はがね』ってつけてね・・・お父・・・さ・・・ん・・・」

・・・」

それが最後のはがねの言葉であった。

そう言い終わった後、剣造が握っていた手の力をそつと緩める。

するとその手から滑り落ちるかのようにはがねの手が落ちる。

そしてそのままダランと重力に従って下に落ちた。

「はがね・・・何故だ・・・何故、お前が死ななければならぬんだ・・・くっ！」

剣造は既に動かなくなったのはがねを見た。

そして泣いた。

かつて、妻を失い、そしてまた、こうして娘を失った。

剣造の胸にはまるで突き刺さるような心の痛みが走った。

そして、徐々に冷たくなっていくのはがねの遺体を、剣造は強く、強く最後に抱き締めたのであった。

まるで、今生の別れを惜しむかのように・・・。

第13話 娘よ…（後書き）

次回予告

悲しみに暮れる創造

しかしそんな彼等に容赦なく襲い掛かるメタルビーストの軍勢！

残りの戦力全てを投入してきた新生機鋼帝国相手に満身創痍のDフ
オースは徐々に追い詰められていく。

そんな彼等の元に現れたのは、待ち望んでいた、一筋の希望であっ
た。

次回

「集いし『希望』達」

次回もこの小説にチャンネルセエツト！！！！

第14話 集いし『希望』達 その1

「報告します！ジエイル・スカリエツィ並びにNF-01の反応が消失しました」

「フン、しくじったか・・・まあ良い。所詮は使い捨ての駒よ」

部下の報告にプロフェッサーランドウは鼻を鳴らす。

彼にとってはジエイルすらも捨て駒でしかなかったのだ。

「それより見ろ！憎きDフォースももう間もなく倒れるのではないか？」

ランドウがモニターを見る。

其処では世界各国で戦うDフォース所属のロボット達の姿が映し出されていた。

そのどれもがかなりの損傷を受けていた。

「見ろ！もう我等の勝利は決まったも同然じゃろうが！」

「ですが、我等の被害も甚大です！もし奴等に切り札があった場合覆される恐れが・・・」

「何を馬鹿な！頼みの五大魔神は今地球に居る上に次元の渦が安定せん状況でこれないと言うのだ。これ以上奴等に応援など来る筈がない！無駄な心配をしてる暇があったらさっさとあのDフォースを叩きのめせ！」

「は・・・はっ！」

ランドウの言葉を受けて部下は走り去る。

それを見送るとランドウは再びモニターを見る。

「ククク、もうすぐだ・・・もうすぐ機鋼王様の果たそうとした夢が叶う・・・万が一奴等がメタルビーストを倒したとしても、ワシにはこいつがある。最強にして最後の切り札がなあ」

そう言うと彼の目の前には一体の魔神の姿が映し出された。

『テラ・・・やはりその娘は貴様との繋がりがある娘であったか』
「ええ、そうよ。彼女は言ってしまうえば私の遠い子孫に当たるの」
『なるほどな、道理で異世界の住人である筈のその娘に【魔神の魂】が宿っている訳だ。これで納得が行ったわ・・・だとしたら余計にその娘ごと貴様を葬らねばならないな』
「それは無理よ。貴方を倒し、マリアージュを倒し、この世界の過ちを正す」

そう言うとティアナの体を借りたテラは自身の槍を構える。
それを迎え撃つかの様にデビルマシンガンも構える。

(これって・・・一体どうなってるの?)

(貴方がティアナちゃんね?)

(え?誰ですか?貴方は・・・)

何がどうなってるのか分からない状況であった。

この体はティアナ自身の体だと言うのに全く別の人間の意志が動いているのだ。

そして自身はまるで精神体にでもなった気分であった。

そんなティアナにテラが語りかける。

（突然の事をしてしまつてごめんなさいね）

（貴方・・・もしかして、テラ？あの数千年前にマリアージュとたつた一人で戦つたつて言う・・・）

（随分懐かしい事を覚えているのね。そうよ、あの時私は死者の群れと戦つたわ・・・そして、信じられないと思うけど、貴方は私の遠い子孫。つまり、孫にあたるのかしら？）

（ま、孫ですか・・・）

確かにいきなり言われても信じられないと言つた方が正しい。

だが、不思議とティアナの中に驚きは無かった。

初めて映像を見た際にそう思えたのだ。

何かしら彼女とは関わりがあると。

（それでね、ティアナちゃんに頼みたい事があるの。今から私がデビルマジンガーと戦うわ。だから、その間にあのマジンガーのボディになつてるスバルつて娘に必死に呼びかけて）

（スバル！まだスバルは無事なんですか？）

（辛うじてつて所ね・・・でも、これ以上は保たないわ。徐々に侵蝕が進んでるからこのまま放つておいたら確実に彼女はデビルマジンガーになつてしまう。そうさせない為にも貴方は必死に彼女に呼びかけて）

（分かりました。やってみます）

（宜しい！それでこそ私の孫よ）

ティアナの対応にテラは頷き満足した顔をする。
そして、フツとテラの姿が消えるとまた元の光景にが映し出された。
目の前にはあの忌まわしきデビルマシンガーが立っている。
しかしその中にはまだ微かにだがスバルが生きていると言っただ。
絶対に助け出してみせる。
大切な相棒を・・・

ゲッターロボ號は多数のメタルビーストとの激闘を繰り広げていた。
機体の各所は既に傷ついておりエネルギーも底を尽き掛けている。
絶望的と言えば正にそんな状況なのだ。

「不味いぞ號！このままだと後1分も保たない内にゲッターが動かなくなるぞ」

「くそお・・・だったらその1分間にこいつら全部叩きのめしてやる！」

凱の言葉に無茶振りを言う號。

目の前にはそれこそまだ数十体のメタルビーストが居るのだ。
それを残り1分で片付けるのは正直言って無理な話である。
だが、そんな時であった。

「おうおう、相変わらず向こう見ずな事してんだなあ號！」

「何おう！つて・・・その声はヴァイス先輩！」

声がした方を見上げる。

其処には見慣れない1機の飛行メカがあった。白を基調とした巨大な戦闘機である。

「待たせたなヒヨッコ共！逆転の秘策を持ってきたぜ」

「ヴぁ、ヴァイス先輩！それって一体何スか？」

「神隼人さんがもしもの時の為に残してくれたゲッター號の強化パーツ『Gアームライザー』だよ」

「Gアーム・・・ライザー」

ヴァイスが名前を言う。

するとGアームライザーが號の上空に差し掛かると機体を分離させて號の体の各所に装着される。

腕に、足に、胴体に強化パーツが装着された。

すると、みるみる内にゲッターロボのエネルギーが上昇しているのが分かった。

「こ、これって・・・エネルギーが溢れてきているの？」

「ヴァイスさん！このGアームライザー・・・もしかして」

「その通りだ凱！このGアームライザーには真ゲッターロボにも使われたゲッター線増幅装置が内臓されてる。これであの切り札も使えるってわけだよ」

「そんな訳だから思い切りやっちゃいなさい」

「おう、分かったぜ・・・ん？」

意気揚々とする號であったが先ほど奇妙な声が聞こえた為に首を傾げた。

見るとヴァイスの居るコクピットにはもう一人誰か居るのだ。

良く見ると、それは女性であった。

「って、ドゥーエさん！何やってんすか！あんた諜報部員じゃなかったの？」

「だって、こっちの方が面白そうじゃない？それに世界の危機つて時に諜報なんてやってられないわよ」

（すげえさっぱりした性格だなあ）

ドゥーエのズケズケした言い方に號はただただ頷くだけであった。

「な、なあ翔、凱・・・もしかしてヴァイス先輩って、ドゥーエさんと出来たのか？」

「僕にも分からないけど・・・多分そうなんじゃないかなあ？」

「自分もそう思う・・・前の戦いでもヴァイス先輩はドゥーエさんと組んでたし・・・案外良い仲だったりして」

「お前等何無駄話してんだ！さっさと片付けろっての」

ゲッターチームの予想話をヴァイスの激が打ち消した。それを聞いてハツとした號は頷く。

「てへ、そうでした・・・そんじゃ行くぜ！ゲッターロボ號のとおきの切り札。出る！『聖剣 ソードトマホーク』」

ゲッターが左手を天に翳して叫ぶ。

するとその手から巨大な光の球体が現れそれが徐々に形を成して行き、やがて一本の剣となった。

それを手に持ち振るう。

「出来た・・・このGアームライザーがあればソードトマホークが使えるのか・・・よっしゃあー！こうなりやこつちのもんだぜ！」

號の言う通りであった。

Gアームライザーのお陰でパワーアップし、ソードトマホークを得たゲッターロボは正に無敵であった。

迫り来るメタルビーストを次々と切り倒しなぎ倒していく。

先ほどまで50体居た筈のメタルビーストは既にリーダー格の一体を残していた。

其処には寸胴型でゲッターの2倍はある巨大を誇るメタルビーストが居た。

「こいつがリーダー格か・・・しかしでかいなあ」

「このゲッターが25mなのに対して、向こうは60mはある・・・そりゃでかく見える筈よ號」

「だが、戦いはでかさじゃない！それを教えてやれ號」

「任せておけて！行くぜ！」

號が叫びゲッターが飛翔する。

それを迎え撃つようにメタルビーストが大量のミサイルを放つ。そのミサイルを次々とソードトマホークが切り裂く。

「トドメだ！ソードクラアアアッシュ!!!」

トドメの一撃にとソードトマホークの縦一閃が放たれる。

ゲッター號の目の前でメタルビーストは縦に真っ二つになり、そして爆発した。

「どうでえ！メタルビースト共！俺達ゲッターチームの力思い知ったかあ！」

残骸になったメタルビーストに向って號が吠える。

しかし残骸なので勿論答える事はないのだが。

「ねえ、こんなところで油売ってて良いの？」

「良いわけないって。號！さっさと他の所に行くぞ」

「あいよう！チェンジゲッターアウト！」

號は頷き直ちに3機のゲットマシンとGアームライザーに分離した。そしてその場所を後に飛び立つのであった。

時を同じくして、テキサスマックの場所にも変化はあった。弾薬を使い果たし格闘戦を行っていたテキサスマックの元へ一隻の船がやってきた。

「だ〜っはっはっは！待たせたのおおぬし等！」

「OH！BIGナ鯨ガ空ヲFLYシテマス！」

ジャックが驚くのも無理はない。

目の前には巨大な鯨をもした戦艦が飛行しているのだから。

そして画面一杯には頭のいかれた老人の姿が映し出されていた。

「ほれほれえ、武器なら腐る程あるわい！好きなだけ使わんかい
！」

「GOOD！兄さん！ソレナラ使ワセテ貰イマシヨウ！」
「OKヨメリー！早速USEサセテ貰ウデス！」

テキサスマックは鯨型戦艦の上に乗る。
すると其処から大量の武器が現れた。

もう武器、武器、武器の山である。
大型ガトリング砲やミサイルランチャーやそれも目移りしそうな程の武器が現れたのだ。

「ぎゃゝゝつはつはつは！遠慮する事はないぞい！徹底的にばら撒いてやれい！祭りじゃあ！」

「イエエイ！フィーバーデス！」

其処に居た老人「敷島博士」の言葉どおりにジャックは叫び武器を取り手当たり次第に発砲しまくる。

回り一面的だらけなので撃った弾が必ず敵に当たるのだ。
その為メタルビーストの残骸が次々と落下しては大地に積もっていく。

「ほれほれえ、ワシからも贈り物をしてやろう！超大型ミサイルの雨を食らえい！」

敷島博士も装置を操作する。

すると鯨型戦艦の側面から大量のミサイルが発射されたのだ。
放たれたミサイルの雨が更にメタルビーストを残骸に変えていく。
どうやら鯨戦艦の中は武器の宝庫の様だ。

次々と武器が転送されてくる。

更に其処へ応援に駆けつけたゲッターチームも到着した。

「お、おいおい・・・何だありやあ？」

「あの鯨戦艦・・・もしかしてスカイホエールじゃ？」

「まさか、スカイホエールはオペレーションダイナミックウォーズの際に大破した筈だ」

凱が言う。

かつて機動六課メンバーが使用していた大型戦艦スカイホエールはオペレーションダイナミックウォーズの際に大破してしまい、それを早乙女博士が持ち帰りコスモフリーダムとして再利用していると言う話を聞いた事があるのだ。

では目の前で暴れている鯨戦艦は一体なんなのだろうか？

「馬鹿もんが！こいつはワシが独自に作り上げたコレクションを仕舞う倉庫みたいなもんじゃわい！」

どうやら敷島博士はこの世界では質量兵器が没収されると言うので独自に作った大型戦艦の中に閉まっていたようなのだ。

まあそのお陰でこうして形勢逆転が出来たと言うのだが・・・ハッキリ言ってかなり危ない爺さんである。

「って、話には聞いてたけどかなり危ない爺さんだなあ」

「そう？私は面白そうだけど」

敷島博士のはっちゃけっぷりにヴァイスは青ざめるが反対にドウエは楽しそうに見ている。

どうやら此処ではゲッターが戦うまでもなく片がついたようである。

「ちえっ、俺達の出番は無しか」

「ノンノン、YOU達ノ出番はマダアル筈デェス」

残念そうに舌打ちする號にジャックは言う。
するとまたメタルビーストが現れた。
かなりの数である。

「此処は俺達に任せてお前達は管理局地上本部へ援護に行け！あそこ
に新生機鋼獣帝国の親玉が居るらしいぜ」

「分かりましたよジャックさん・・・ん？今ジャックさんまともに
喋りませんでした？」

「OH、何言ッテルンデスカア？日本語良く分カリマセエン」
「な、何なんだ？」

聞き間違いであったのだらうかと思いつつも號達は急ぎ管理局地
上本部を目指した。

ゲッターロボとテキサスマックがメタルビーストを蹴散らしたと言
う報せは大空魔竜のメンバーにも伝わっていた。

「凄いわ！皆破竹の勢いで敵を蹴散らしているわよ！」
「当たり前だ。それが奴等の強さなんだろう」

皮肉を言うピートだが彼自身Dフォースのメンバーを信頼している
のだ。

だからこそそう言った皮肉も言えるのだろう。

「その通りだ！それこそが彼等の底力なのだろう」

「そうですね、それはそうと・・・お前は何時までそんな奴等と戦ってるつもりだ？サンシロー」

これは好機とばかりに。ピートはガイキングのパイロットであるサンシローに皮肉を投げかける。

それを受けたサンシローは勿論激怒した。

「冗談じゃねえや！こんな奴等相手に手間取るガイキングじゃねえ！今から俺とガイキングの奥の手を見せてやる！」

サンシローが叫ぶ。

するとガイキングが大の字になり顔に変化が起こった。

「フェイイイイスオオオオオオープン！」

ガイキングの顔を象っていた装甲が剥がれ、中からは明らかに凶悪そうな第2のガイキングの顔が現れた。

其処から放たれた攻撃は正しく凶悪な攻撃であった。

「これで目ん玉潰れる！アブシヨックライイイトツ！」

ガイキングの顔から眩い閃光が放たれる。

それは周囲に居たメタルビーストの視界センサーを一時的に無力化してしまう程の強烈な光でもあった。

そして、目が眩んだ隙に次なる攻撃が行われた。

「お次はこれだ！ガイキングミサイイイイル！」

ガイキングの鼻に当たる部分から夥しい数のミサイルが発射されたのだ。

それこそ正しく雨霰であった。

それらがメタルビースト軍団を飲み込んでいく。

「ピート！トドメの『アレ』行くぞお！」

「了解だサンシロー！大空魔竜、ポリューションプロテクト発動！」

ピートが叫び装置を操作する。

すると目の前で大空魔竜は丸まりの様な姿にはや代わりした。

そしてその大空魔竜とガイキングが合体して一体になる。

「行くぞ！デスファイヤアアア！」

ガイキングの口から猛烈な勢いで焰が吹き上がる。

そのまま大空魔竜が縦に大回転しながらメタルビースト軍団に向けて突っ込んでいく。

「トドメだ！大空魔竜火車カッターアアア！」

水車、嫌正しく火車の如き勢いで大回転しながらメタルビースト軍団に向って突撃していく。

進路上に居たメタルビースト達はそれに巻き込まれてしまいこれまで見事な残骸に変えられてしまった。

気がつくとも周囲に居たメタルビーストの殆どが火車カッターに巻き込まれて残骸と成り果てていたのであった。

「相変わらず恐ろしい技だなあアレ・・・」

「ただだよお、それじゃ何であれを使わないんだ？もったいぶって

使わなかったじゃねえか？」

「確かに威力はあるんですが・・・あれだけ高速で回転するので中で悪酔いする方達が続出するらしいですよ」

「うげっ、そりゃ使わん方が良いな」

ブン太の言い分にヤマガタケは青ざめ、リーは溜息をつくのであった。

第14話 集いし『希望』達 その1（後書き）

その2へ続く

第14話 集いし『希望』達 その2

ゲッターチーム、テキサスマック、大空魔竜戦隊が次々とメタルビーストを蹴散らしている頃、こちらDフォーでも戦況が変化していた。

当初は余りの数に押され気味であったメンバーだが、ゲッター達の朗報を聞き戦意が向上し、徐々にだが敵を押し返していたのだ。

「はあああああ」

「食らいやがれ！あばしり八神拳！」

ある場所ではエリオがザンクーガを振るいデビルマジンガーと化したマリアージュを切り裂き、菊の助のあばしり八神拳が敵を打ち砕く。

「ルーちゃん。一緒に戦おう！」

「うん！」

キヤロとルーテシアが互いに最強召還を行い眼前のマリアージュを蹴散らしていく。

因みにヴォルテールも百天王も大きさがマジンガー並なのは驚きである。

「あばしり一家が大黒柱、このあばしり駄エ門！まだまだくたばる気は無いわい！」

「俺も同じだぜ親父！あばしり一家が末弟、あばしり吉三の特性爆薬を食らいやがれ！」

「あゝあ、皆熱血してるのねえん、でもどうせなら僕ちゃん可愛い子ちゃんのパンチイが欲しかったのねえん」

駄エ門の仕込み刀が敵を切り刻み吉三の特性の布が敵を弾き飛ばす。その中で何故か五エ門がいじけているのだが其処は触れないで置く。

「フツ、我等も負けてられないな。ジャックよ」

「ああ、俺の名はバイオレンス・ジャック！」

「我が名はゼスト・グランガイツ」

「貴様等にとっては、悪魔よ！」

ゼストとジャックが互いに名乗り迫り来る敵を次々と切り刻んでいく。

「リボルバアアクパイク！」

ノーヴェのスパイクがマリアージュの頭部を吹き飛ばす。

其処へ更に数体のマリアージュが襲い掛かる。

だが……

「突っ込み過ぎッスよノーヴェ！」

「少しは私達の分も残して置いてよね」

そのマリアージュをウェンディとディエチの砲撃で撃破した。

「そんな気が回るかよ！欲しけりや自分で取りな」

「言ったッスねえ！それじゃ誰が一番多く倒せるか競争ッスよお」

「やってる場合なの？」

張り合うノーヴェとウェンディにディエチがやんわりとツッコミを入れた。

「フツ、妹達も奮起しているみたいだな」

「ああ、こうなれば私達も負けてられないな」

「皆に負けられないように頑張りましょう」

妹達や異世界の住人、更に元六課のメンバーの奮起を見たトーレとチンク、そしてギンガにもまた闘志が湧き上がってきた。

トーレはISライドインパルスを使用し高速で敵を切り裂き、チンクもまたISランブルデトネーターを使い爆発させたり、眼帯で覆っていた目に仕込んでいた光子カビーム発射装置から光子カビームを放つ。

ギンガもまたリボルバーナックルを駆使して敵を打ち砕く。母から受け継いだ力である。

「フフ、若い子達には負けてられないわね」

「あらあら、それじゃまるで私達が叔母さんみたいね」

クイントとハニーが互いに含み笑いを浮かべながらも敵を蹴散らす。

シューティングアーツ、そしてフルーレで敵を蹴散らしていくのだ。

「直次郎さん、私達も頑張りましょう！」

「おう！お前が後ろに居てくれりゃ負ける気なんざこれっぽっちも感じねえぜ！」

ルネと直次郎が互いに背を預けながら笑い会う。

そして迫り来るマリアージュを蹴散らしていく。

その光景を管理局の局員達は見ていた。

「す・・・凄え・・・」

「あれが、Dフォースの実力なのか・・・」

局員達は只驚くしか出来なかった。
最凶を誇ったあのデビルマジンをDフォースのメンバーが次々と撃破していくのだ。
そして、一同はその足取りを皆管理局地上本部に向けて進撃していたのだ。

最終決戦は間も無く終焉に向っている事は誰もが予想できた。

その頃、新生機鋼城の玉座に鎮座していたプロフェッサーランドウは苛立っていた。

映し出される映像にはどれもこれも惨敗の映像が映し出されているからだ。

「ええい！何をしているか！相手は既に瀕死の雑魚共ではないか！何故そんな奴等に蹴散らされるのだ！」

「お、お言葉ですがプロフェッサーランドウ！Dフォースの者達は皆鬼神の如き勢いでして、我等だけでは到底適いません」

「言い訳など聞きたくない！貴様等が不甲斐ないせいであろうが！」

部下の弁解に叫び持っていたワインを投げつける。

中に入っていた液体が部下に付着する。

再び鎮座するランドウ。

だが、その時彼の顔には笑みが浮んでいた。

「だが、奴等の快進撃もこれまでよ……これを見る」

そう言うところ、ランドウが移したのはミッドチルダを中心にした次元世界の図面であった。

そして、その周囲には無数の点が点滅していた。

その数はおよそ数十万であった。

「これだけの数のメタルビーストが次元世界中に待機しているのだ。もしこいつらが一気にミッドに攻めて来たらどうなる？」

「おお！さしものDフォースと言えども跡形も残りませんなあ」

「その通りよ！奴等に教えてやるわ！誰がこの世界の支配者かをなあ！全軍攻撃開始！目標ミッドチルダ首都クラナガン！全てを根絶やしにせよ！」

ランドウが立ち上がりそう命じる。

だが、その時図面に異変が生じた。

突然点滅している点が徐々に減り出したのだ。

それも怒涛の勢いで。

「な、何じゃ？何が起こったのじゃ？」

「わ、分かりません！」

ランドウも部下も何が何だか分からない状況であった。すると別の部下が慌てた顔でやってきた。

「た、大変です！敵襲です！敵の奇襲です」

「何！馬鹿な！その敵とは一体何なのじゃ！」

「そ……それが……」

説明を求めるランドウの横でその部下は凍り付いていた。まるで恐怖に支配されたかのように。

その顔を見てランドウも悟った。

今メタルビーストを襲撃しているものは常軌を逸した存在なのだ。

「ま・・・まさか・・・」

「プロフェッサーランドウ！映像が受信されました！移します」

部下が受信した映像を映し出す。

すると其処にはとんでもない光景が映し出された。

一面に映し出されるのは残骸と化したメタルビースト軍団。

そしてその上に立つのは一体の魔神と一人の魔道士であった。

魔神は黒を基調としたボディに丸みを帯びたフォルム。

V字の放熱板を胸に頂いた偉大な勇者であった。

また、魔道士は白を基調としたバリアジャケットに栗色の髪を両端に束ねたツインテール状の髪型をした女性であった。

「プ、プロフェッサーランドウ！別の場所の映像も受信出来ました」

次々と映像が映し出される。

だが、そのどれもが同じ映像であった。

一面残骸と化したメタルビースト。

その上に立つ魔神と魔道士。

炎のせいで真っ黒に映っているがそのフォルムから見るとそれが何者なのかランドウには安易に想像出来た。

今、一番彼が会いたくない者達である。

そう、最強の魔道士達に伝説の五大魔神である。

「ば、馬鹿な！奴等は今地球に居る筈！それに次元空間の安定にはあと一ヶ月を有する筈！なのに何故じゃ？」

ランドウの言う通りである。
地球とミッドを繋ぐ次元空間は半年に一度の内に次元空間が安定するのだ。

その為その時意外では行き来が出来ないのである。
それを見越してのランドウの計画であったのだ。

だが、今日の前でメタルビースト軍団を蹴散らしたのは紛れも無く彼等なのだ。

そして、図面の点滅はやがて、全てが消え去ってしまった。

もうミッド以外の次元世界にはメタルビーストは一体も存在して居ない状態なのだ。

「あ……有り得ない……こんな事が……」

ランドウは目を丸くしたまま席に深く座り込んでしまった。

その頃、ミッド以外の次元世界に居たメタルビーストを蹴散らしたメンバーは集結していた。

「数はそれなりでしたけど、大した事ありませんでしたね」

白い魔道士が皆に言う。

「まあな、所詮は烏合の衆って事だろう」

偉大な勇者が笑みを浮かべながら言う。

「ま、私等が集まったら誰も勝てへんわなあ」

夜天の魔道士が多少鈍った言葉で笑いながら言う。

「その通りだ。僕達が集まれば倒せない敵なんてないのさ」

宇宙の王者が頷く。

「そうそう、私達つてば最強よねえ」

巨大な斧を持つ閃光の魔道士が自信たっぷりに言う。

「ああ、俺達のチームワークのなせる事さ」

「フツ、今日はやけにリーダー風が心地良いぜ」

「ハツハツハ、相変わらずだなあ」

一際大きい赤いロボットに乗った三人が互いに言い合う。

「これで、周辺のメタルビーストは倒せたみたいだな」

「ま、この程度の奴等に苦戦する様な奴等じゃねえだろう」

「フフ、あの子達ももう立派に成長した物ね」

「ああ・・・そうだな」

「と、なると・・・私達の役目は此処だけのようですね」

守護騎士達が口々にそう言い合う。

「ま、別に良いんじゃないやねえの？俺としちゃあもうちつと暴れたかったけどよあ」

「本当にもう、少しはあんたも自重しなさいよ」

鋼鉄神に乗った青年とその援護を目的とした飛行艇を操る女性の会話が飛び交う。

「大丈夫だよな。きっと皆負けなないよ」

「ああ、俺もそう信じているさ」

鎌を持った同じく閃光の魔道士が鉄の城の顔の横に浮びその操縦者に寄り添いながら言う。

かなりお熱い関係のようである。

「さあて、俺達は此处で見物としゃれ込むか。成長したあいつらの強さを見る為にさ」

魔神皇帝に乗った青年がそう言いながら眼前に浮ぶ星、ニッドチルダを見た。

デビルマジンガーとテラの二人は未だに激しくぶつかりあっていた。

デビルの鋭い爪が猛威を振るう。
テラはそれを持っていた槍で捌く。
かわされた爪がそのまま地面を抉る。
ゾツとする光景であった。

だが、それでもテラは怯まずに槍による攻撃を続ける。

「はあああああ！」

『ぐおわああああ！』

互いが雄たけびをあげながらぶつかりあう。

爪と槍がぶつかり合い激しい火花を散らす。

その間、意識だけの状態になったティアナはデビルの奥で眠っているスバルに必死に呼びかけていた。

(スバル！・・・スバル！いい加減起きなさいよ！何時まで寝てるつもりなのよ！)

(・・・・・・・・)

必死に呼びかける。

だが、そんなティアナの願いも空しくスバルは一向に返事をしない。

『無駄だ、この娘の体も魂も既に我の物だ！元よりこいつを作ったのは我なのだ！我の所有物であるのだ』

そんなティアナに対しデビルマジンガーが笑いながら言う。

「違う！彼女は・・・スバルちゃんはお前の物じゃない！彼女の命は、魂は彼女自身の物よ！お前なんかの所有物じゃない！」

(そつよ、あんたは黙ってなさい！)

二人が叫び槍による打撃がデビルの横顔に直撃する。
思わずよろけるデビル。

だが、その直後尻尾の先端がテラに向って襲い掛かって来た。

「ぐっ！」

咄嗟に体を捻ってかわす。

だが、頬を掠ったのかうつすらと赤い血が滲み出る。

『くだらん戯言を・・・こいつは我が作り出した我のコピー。魔神戦士なのだ。我がもしも倒された際に復活する為の入れ物に過ぎん！それを仲間だと？友だと？相棒だとお？笑わせるな屑共が！』
（そんな事ない！あいつが・・・スバルがどんな存在だろうと私には関係ない！スバルは・・・私の大切な相棒よ！）

（・・・ティ・・・ア・・・）

その時であった。

微かに・・・微かにであったが声が聞こえた。
間違いなくスバルの声である。

（スバル・・・スバルなの？）

（ティア・・・御免ね・・・結局皆に迷惑掛けちゃって）

スバルが泣きながら謝罪する。

だが、それに対しティアナはかぶりを振る。

（今更何言ってるのよ！あんたが私に迷惑を掛けるなんてしょっちゅうじゃない。もう慣れたわよ。それより何時までそんなところに居るつもり？さっさとそんな奴を追い出して戻ってきなさいよ！）
（え？良いの？私・・・あのデビルマジンガーが作り出した・・・）

(うつさい！馬鹿の癖にグチグチ言うんじゃないの！)

(あうう・・・)

いきなり馬鹿扱いされた事にスバルは多少悲しくなる。

だが、その後ティアナにそつと言われた。

(あんたが何者だろうと関係ないわ。あんたは私の大切な相棒よ。あんたが居なきゃ締めりが悪いのよ。私達は二人で最強なんだからだから・・・さつさと戻って来なさいよ)

(ティア・・・うん！)

嬉しそうにスバルが頷く。

その時であった。

テラの目の前に居たデビルマジンガーに突如変化が起こりだした。突如体中から眩い光が放たれたのだ。

『ば・・・馬鹿な！貴様は我の所有物の筈？その所有物が我に逆らうのか？』

(もう、私はお前何かのいう事は聞かない！私は、私の意志で生きる！だから・・・お前はさつさと出て行けえ！)

『ふざけるな！紛い物の命の癖に最強の魔神である我に逆らうか？愚かにも程があるぞ』

(紛い物だろうと何だろうと、この命は私の物だよ！お前の物じゃない！そして、この世界もお前なんかに渡しはしない！)

(グチャグチャ言ってないでさつさとそいつの体から出て行きなさい！この悪魔！)

気がつけばテラもまたデビルの眼前に立っていた。

そしてその顔を思い切り殴りつける。

その痛みはデビルに伝わった。

顔面にヒビが入る。
光がやがて全身から噴出していた。

『おのれ……おのれええええええええええええええええ！』

デビルの断末魔が響く。

そしてデビルの意識が消え去った。

かと思うとそんなスバルの前に一人の少年の姿が映し出された。
そう、今までスバルを影ながら守ってきてくれた少年であった。

(ゼノン……)

(スバル、どうやらデビルを克服したみたいだね)

(うん、皆のお陰だよ)

スバルが笑って言う。

それにゼノンも笑い返す。

(そうか、それじゃ……今度こそお別れだ)

(え？どうして)

(これ以上僕が君の体に居る訳にはいかないんだ。でないと、僕は君を苦しめてしまう)

(ゼノン……)

スバルの頬を伝って涙が流れる。

別れが惜しいのだ。

そんな涙をゼノンが指を遣って拭う。

(大丈夫さ、僕が居なくても、君は戦っていていける……それに、前に言ったと思うけど、僕は今新しい命を得たんだ。だから今生の別れじゃないよ)

(うん、ゼノン・・・何時か、何時か絶対に会うからね)
(うん、僕はずっと待ってるよ)

そう言い終わるとゼノンの姿は光と共に消えていった。
そしてその光がやがてスバルを覆い尽くしていく。

どれ位経った後であろうか。

眩い閃光がティアナの視界を塞ぐ。

しかしその閃光も徐々に弱まっていくな。

そして、消える。

その跡からは、スバルの姿があった。

右腕には相変わらず侵蝕状態のリボルバーナックルがある。
だが、以前の様な禍々しさは感じられなかった。

「スバル！」

ティアナがスバルの名を呼ぶ。

それに応えるようにゆっくりとスバルが目を開く。

「ティア・・・」

「スバル！」

無事に帰ってきた。

それを知ったティアナは力一杯スバルを抱き締めた。

「テイ、ティア・・・痛いよお」

「え？あ、ご・・・御免・・・つい」

「いやあ、ティアも随分良い物持つてるよねえ。それに、もしかしてそっちの趣味があるの？」

戻った途端これである。

目の前にはニヤニヤしながらこちらを見るスバルの姿がある。

それを見たティアナは苛立ちを感じ・・・そして。

ゴン！

そんな音が響いた。

見るとティアナの手からは煙が上がっており、スバルの脳天にはタ
ンコブが出来上がっていた。

「ふざけるんじゃない！次は殴るわよ！」

「もう殴ってるじゃん！ティアの意地悪！」

涙目になりながらスバルが叫ぶ。

だが、ティアナは一向に鼻を鳴らすだけである。

（フフ、二人共仲が良いのね）

（テラさん！）

そんなティアナの中からテラの意識が抜き出て来た。

どうやら役目を終えてこれから戻るようである。

(頑張りなさい、貴方は私の自慢の孫娘なんだから)
(はい、貴方が戦って来たように、私も力一杯戦います)

その言葉を聞いたテラは満足したのか、そのまま天に昇っていった。彼女の、四千年に渡り続いてきた戦いはこれで終わったのだ。そして、その戦いは新たな命に受け継がれたのだ。

「スバル・・・戦える？」

「勿論！バリバリ戦えるよ」

ティアナの前ではスバルが拳を叩きつけて気合充分なのを訴える。それを見たティアナの顔に笑みが浮ぶ。

「それじゃ、行きましょう・・・合言葉・・・分かるわよね」

「勿論、私とティアの合言葉・・・そして、魔神の合言葉だよね」

ティアナは頷く。

そして二人はガツチリと腕を握り締めあう。

強い眼差しをしながら二人は天を向いて叫ぶ。

その合言葉こそ魔神を呼び、人間から超人になる為の合図である。その合言葉は・・・

「マジイイイイイソゴオオオオオオ！」

第14話 集いし『希望』達 その2（後書き）

次回予告

遂に逆転したDフォース。

だが、プロフェッサーランドウは最後の切り札を用意していた。

そして、消えていったデビルマジンガーの行方は・・・

人類はデビルマジンガーとの戦いに終止符を打てるのだろうか？
今、最後の戦いが幕を降ろす。

次回『魔法少女リリカルなのはDYNAMIC 新章！マリアージ
ユ編』

最終話「未来へ」

次回もこの小説にマジン・ゴー！

最終話 未来へ その1

Dフォースのメンバーは皆管理局地上本部に辿りついていてた。そして、その面前の上空には巨大な空に浮ぶ禍々しき城があった。あれこそ新生機鋼帝国の要塞である新生機鋼城なのだ。

「へっ、大将自ら出て来たってか？ぶっ飛ばし甲斐があるじゃねえか！」

「油断しないで下さいね菊の助さん！相手はあの機鋼帝国です」

意気揚々とする菊の助にエリオがそう言う。

「又ツハツハツハ、心配性じゃのおエリオ殿は！心配無用！わし等は誰にも負けんわい！」

「その通りさ、俺は早くイクスを取り返したいんだ」

隣に居た駄エ門と吉三が笑っていた。

皆同じである。

負ける気がする者など誰一人として居ないのだ。

既に上空では残り少ないメタルビースト軍団とマジンガー軍団が激闘を繰り広げていた。

そして、地上ではマリアージュ軍団を地上部の魔道士達が応戦していた。

「怯むんじゃない！管理局の底力を侵略者共に見せ付けてやれい！」

先陣を切ってマリアージュを蹴散らすのはレジアス中将である。両手に大型バズーカを軽々と持ちそれで敵を吹き飛ばしていく。

未だに現役でも通じそうな強さである。

「フツ、あれなら問題は無さそうだな」

「うひゃあ、あの叔父さん凄い元気なのねえん」

「普通中将って言ったらふんぞり返ってる雰囲気なのにあの叔父さんは元気ツスよねえ」

レジアスの奮起している様に皆は只驚くばかりであった。
そして再び機鋼城に視線を戻す。

「んで、どうやってあそこに行くんだ？」

「空を飛べるのってゼストだけだよなあ？んじゃゼストに乗って行くしかないのか？」

「無茶言つな！幾ら俺でもこれだけの人数を背負って飛べる訳ないだろう」

流星のゼストも無理があるようである。

すると其処へ創造の操るエネルギーZがやってきた。

「心配するな。お前達は私のエネルギーが連れて行く。手に乗るんだ」

そう言つてエネルギーが一同の前に手を下ろす。

その手に一同が飛び乗る。

するとエネルギーの両腕がそのまま新生機鋼城に向けられる。

「あ……あのお……創造さん？新生機鋼城に行く方法って……まさか……」

「ああ、この手しかあるまい……ロケットパアンチ！」

創造の策・・・それはエネルギーの両腕を機鋼城に向けて放つ。

『うぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああ！！！！』

その際全員が大声で絶叫したのは言うまでもない事なのだが。
そしてそのまま新生機鋼城の壁をぶち抜き一同は中へ入る事に成功
したのであった。

「た、大変ですプロフェツサーランドウ！Dフォースのメンバーが
内部に侵入しました！」

「フン！内部に配備されているマリアージュを全て投入せよ！貴様
等も全力で奴等を食い止める！」

そう言うランドウは席を立つ。

「まさかな・・・いよいよアイツを使う時が来ようとはな」

ランドウがそう言うて映像の端に映った物を見る。

其処には黒いシルエツトしか映っていなかったが、確かに巨大な何
かが映っていたのであった。

「ククク、まあ・・・テストには打ってつけか・・・この最終兵器『アイアンカイザー』を・・・」

「んだよお！此処はまるで迷路じゃねえか！」

道を行く菊の助が呟く。

一同が走るのだが中はまるで迷路であった。

正しく侵入者を阻むかの様に・・・。

「おいルネ！お前この城の地図とか持ってないのか？執務官補なんだろう」

「無茶言わないで下さい！執務官補だからって万能じゃないんですよ！」

直次郎の言葉に言い返す。

「ねえルーちゃん。ルーちゃんでも分からない？」

「御免なさい、流石の私でも其処までは・・・は！」

一同の前では無数のマリアーヂュが現れていた。それもかなりの数である。

「なんじゃあ？まだ居ったのか？しつこいのお」

「でも此処のマリアージュは皆可愛い子ちゃんなのねえん」

どうやら此処のマリアージュはデビル化していないらしく元の女性のままであった。

となると五エ門の本領発揮である。

「むひよひよ〜！パンチイちょうだ〜い」

マリアージュ軍団に向って五エ門が飛び込んでいく。

そして次々とマリアージュの下着と言う下着を盗んでいく。

すると盗まれたマリアージュが顔を真っ赤にして蹲ってしまった。

「えっと・・・何したんですか？」

「どうやら、マリアージュの女性だったと言う事らしいな」

「流石兄貴だぜ」

「よおし、野郎ども五エ門に続けい！」

先頭に行く五エ門を筆頭に一同は次々と襲い掛かるマリアージュを退けていく。

そして何時の間にか五エ門の背中には巨大な風呂敷が背負われている。

勿論その中にはマリアージュから奪った下着が山ほど入っているのだが。

「ぬふふ〜ん、大量なのねえん」

「正直、あいつが兄貴だと思つと情けなくなってきた」

「た、大変ですね菊の助さん」

「あたしらももし兄貴がいたとしてもあんな兄貴は嫌だな」

「それは同感ツス」

一同が頷く。

その間も五エ門は襲ってくるのが女性なら無類の強さを誇っていた。もう殆どコイツに任せても大丈夫なんじゃないのか？と思える位である。

しかし最深部へ向う内に徐々にマリアージュ以外の物も現れだしていった。

それは小型化したメタルビーストであった。

以前機鋼帝国が小型機鋼獣を製造したのと全く同じ物である。

だが・・・

「今更そんなのが出てきても怖くないツスよお！」

「その通りだ！我等の道を阻むなら容赦せん！」

その際には他のメンバーが切り込み小型メタルビーストを蹴散らしていく。

最早彼等の進撃を止められる者は居なかった。

そうしていると何時しか一同は広い空間に出た。

其処は所謂動力炉のようである。

目の前には巨大な機械が音を立てて動いているのが見える。

「これがこの城の動力炉ってか？」

「上等じゃねえか！さっさとぶっ壊してこんな城落としてやらあ」

直次郎が言い腕を变形させる。

そして变形させた腕からミサイルを放とうとしたのだ。

「待て！この動力炉からは膨大なロストロギア反応がする。此処で爆発させたら地上本部が壊滅してしまうぞ！」

直次郎の攻撃をトーレが止める。
彼女の言うとおりであった。

この新生機鋼城の動力には実は大量の『レリック』が使用されている。

下手に刺激を与えればそれこそ地上本部のみならずクラナガン一帯が吹き飛ぶ危険性がある。

「じゃあどうすりゃ良いってんだ！このまま黙って指を啜えてみるってのか？」

「そうじゃない！何処かに停止装置がある筈だ！それを探すんだ」

「チツ、面倒な話だぜ。俺達にや向かない仕事だな」

菊の助が頭を掻く。

「解除なら私が出れます」

「頼んで大丈夫か？ルーテシア」

「うん、大丈夫」

ゼストの問いにルーテシアは頷く。

「ならその間俺達が援護しよう。敵は一匹も通さん」

「頑張つてね、ルーちゃん」

「うん！」

皆が言う中、ルーテシアが動力炉の前に置かれた装置に近づく。そして内部システムを確認する。

「良かった、ミッドの技術が使われてる。これなら私でも解除できる」

安堵し、ルーテシアがシステム停止の為の操作を行う。
だが、そうはさせまいと続々とマリアージュと小型メタルビースト
が押し寄せてきた。

「させん！」

「お前達の相手は俺達だ！」

しかしそれを迎え撃つかのようにDフォースのメンバーが迎撃する。
忽ち激しい攻防戦が展開した。
放たれる魔弾。
切り裂く斬撃。
舞い上がる下着の山・・・え？

「ぬふふ〜ん 大量なのねえん」

「まだやってるよ、あの人・・・」

「気にするなディエチ。気にするだけ無駄だからな」

呆れるディエチの肩を叩きチンクが目の前に居る敵に向かい光子力
ビームを放つ。

「このままじゃ埒が明かない・・・ザンクーガ！フルドライブ」

エリオが叫びザンクーガが了解した。

するとザンクーガの形が元の細身の太刀から野太い大太刀に姿を変
える。

そしてそれを両手に持ち一気に横薙ぎに振るう。

「うおおおお！斬空剣！」

その一撃は横一列に居た敵を一瞬の内になぎ払った。とてつもない光景である。

「くっ・・・威力は凄いいけど・・・扱い辛い・・・」

しかし放った直後、エリオはヨロヨロとしていた。

威力は相当なのだがまだ本人が扱いに為れていないのだ。

其処へ再び襲い掛かる小型メタルビースト。

だが、それを後方から放たれた火球がそれらを燃やし尽くした。

エリオはそれが誰が放った者が分かっていった。

「あ、有難う！キャロ」

「エリオ君、無茶しないでね」

「う、うん／＼」

キャロの言葉に思わずエリオは頬を染める。

それを見ていた菊の助は何処か寂しい思いがした。

「立派な者じゃな、エリオ殿は」

「あ、親父・・・」

そんな菊の助の隣でマリアーヂュを切り倒していた駄工門がエリオを見て呟いた。

「彼はわし等以上の苦勞をしてきたと言うのに、それを微塵にも感じません。立派な子じゃ・・・将来が楽しみじゃのう」

「ああ、あたしにゃ釣り合いが会わねえな」

「ん？どう言う意味じゃ菊の助」

「な、何でもねえよ！それよりさっさと片付けようぜ」

駄エ門に対してそう言い放つ菊の助。

だが、そう言つて後ろを向いた際に彼女の目の辺りから光る何か
零れ落ちるのを打エ門は見ていた。

「菊の助・・・その思いがやがてお主を強くするじゃろうよ」

それは、菊の助が始めて感じた初恋であり、また失恋でもあった事
を駄エ門は分かつたのである。

父親として、娘が成長していくのは嬉しい限りである。

だが、その過程に悲しみがあつた時にはその時には父親が優しくし
てやるのだが、時として放つて置くのもまた親心なのである。

「時にジャックよ。お前はこの戦いが終つたら、どうするつもりな
のだ？」

敵を蹴散らしながらゼストがジャックに尋ねた。

その問いにジャックは敵を倒しながら考えていた。

「分からん、この世界は俺の居た世界ではない。それに、元の世界
には俺の仲間など居ない。俺は孤独だ」

「ならば、俺達の元へ来るか？俺達と共にこの世界を守る為の剣に
なつてもらえるか？」

「良いのか？俺の様な者が来て・・・」

ジャックはゼストの申し出に戸惑いを感じた。

だが、それに対しゼストは笑つて言った。

「気にするな。お前の目を見ればお前がどんな人間か検討がつく。

眼光は鋭いがお前の根は良い奴だからな」

「フツ、それはお互い様だろう」

「確かにな」

互いに笑い会うゼストとジャックなのであった。

「お父様、もうすぐ仇が討てます。待っていて下さい」

ハニーがそう呟きながらマリアージュをフルーレで切り裂く。すると其処へ小型メタルビーストが上空から襲い掛かって来た。

「ハニーフラアアアッシュュ！」

咄嗟にハニーは首についていたハート型のマークに手を当てながら叫ぶ。

眩い閃光が彼女を包み込む。

それと同時にメタルビーストの攻撃が振り下ろされる。

だが、金属音と共にその攻撃は遮断された。

何故かと言うと、其処には白銀の甲冑を纏った女性が立っていたからだ。

「その程度の攻撃では、この鎧は砕けないわよ！はあ！」

そう言つて回し蹴りでメタルビーストを吹き飛ばす。

そして再び変身する。

その姿はなのはに似たようなバリアジャケット姿であった。

「空中元素固定装置にはこんな使い方もあるのよ」

そう言い、彼女の回りには無数の魔弾が生成されて放たれる。

放たれた魔弾は次々にメタルビーストを貫いていく。

貫かれたメタルビーストはそのまま崩れ落ちてしまった。

「お父様。お父様が下さったこの力で、私は戦います！力の限り」
拳を握り締めてハニーはそう誓った。

「ライドインパルス！」

「光子カビーム！」

トーレの手足に備わったインパルスブレードが敵を切り裂き、チンクの右目に取り付けられた発射装置から光子カビームが発射される。

「うはあ、流石トーレ姉とチンク姉ツスねえ」

「ああ、あたしらも負けてんねえな」

「でも、だからってツツコミ過ぎないでねノーヴェ」

二人の戦い振りを見てノーヴェとウェンディがやる気を出すが見事にそれに対しデイエチが釘を刺す。

「フォローも余りしたくないようなのだ。」

すると、目の前に襲い掛かろうとしていたメタルビースト達が突如横から放たれた攻撃により真つ二つにされた。

そして、其処に降り立ってきたのは。

「セツテ！」

「遅くなりました。今外ではマジンガー軍団ならびに大空魔竜戦隊が集結しています。勝利は目前です」

「そうか、後はこの動力炉を止めれば我等の勝利だな」

トーレはそう言って装置を動かしているルーテシアを見た。
と、それと同時にあった。

突如動力炉の動きが停止するのを感じた。

「お待たせしました。動力炉の無力化、完了しました」

額の汗を拭いながらルーテシアが皆に言う。

それを聞いたその場に居た一同が諸手を上げて喜んでいた。

戦いは終わったのだ。

皆正にそう思えた。

だが、その時であった。

「フハハハハハハ！諸君、無駄な努力ご苦労であったなあ」

一同が声のした方を見る。

それは動力炉の上である。

其処には一人の老人が立っていた。

「貴様！プロフェッサーランドウ！」

「てめえが親玉か！覚悟しやがれ！」

直次郎が叫び腕の銃を放とうとする。

「おおっと、ワシを狙うのは勝手じゃが、下手するとこの子がどうなっても知らんぞお」

そう言うランドウの腕の指す方からゆっくりと降下してきた。

それは玉座らしき物に座らされ、ぐったりとしたイクスである。

「な！イクス！……てめえクソ爺！イクスに何しやがった！」

吉三が叫ぶ。

だが、それに対しランドウが大声で笑っていた。

「なあに、この娘の力を利用しただけじゃよ。最も・・・今となつては殆ど利用価値が無いのじゃがなあ」

「だったらイクスを返しやがれ！」

「それは出来ん相談じゃなあ。この娘にはまだまだ役に立って貰うのじゃからなあ」

そう言うとランドウが指を鳴らす。

すると突如として激しい振動が辺りを襲った。

皆口々に「何だ！」「地震か？」と叫びだす。

だが、その振動が何なのかすぐに理解出来た。

それは動力炉の中からであった。

停止した筈の動力炉が突如再び動き出したのだ。

それもかなり危ない方向に。

「貴方・・・一体何をしたの？」

「決まっておろう。自爆装置じゃよ。どの道この世界が手に入らな

いのなら破壊するまでよ。このクラナガンも・・・ミッドチルダも・

・・・全て破壊してくれるわ」

「馬鹿な！そんな事したら貴様とて死ぬぞ？」

トーレの言うとおりである。

だが、ランドウは未だに微笑んでいた。

その訳とは・・・

「フッフ、ワシには取っておきの切り札があるのよ。見よ！ワシが作り上げた最強の魔神！その名も『アイアンカイザー』を！」

突如としてランドウの後ろから巨大な巨人が降って来た。

紅く不気味な雰囲気を漂わせる魔神であった。

それこそがランドウの切り札であるアイアンカイザーであった。ランドウはそれに自身と、そしてイクスを乗せる。

すると、そのままアイアンカイザーは天井をブチ破って出て行く。

「ガハハハ！ 貴様等愚か者はこの城と運命を共にするが良い！」
「待て！ このクソ爺！ イクスを返しやがれええええええええええ！」

吉三が叫ぶ。

だが、その声はアイアンカイザーに、ランドウに届く事はなかった。どんだん揺れが激しくなっていく。このまま此処に居るのは危険なのだ。

「不味い！ 急いで此処を出るぞ！」

「でもどうやって出るんスかあ？ またあんな迷路みたいなのを走って戻ってたら時間がなくなっちゃうツスよお！」

皆が不安と絶望に打ちひしがれそうになっていた。

だが・・・

「皆さん、私の振動破砕でならこの床を打ちぬけます」

「ギンガ、出来るの？」

クイントの問いにギンガは頷く。

そして、自身の瞳を戦闘機人特有の色に変えて魔力を増大させる。

「ぶち抜け！ 振動拳！」

叫び、床に拳を叩きつける。

するとその拳を中心にヒビが入って行き、やがて砕けた。

下は丁度ミッドの首都が見えた。

だが、其処で皆ある事に気づいた。

「なあ、どうやって俺達着地するんだ？」

『あー！』

そう、前にも言ったがこのメンバーの中で飛べるのはゼスト位なのだ。

従って……

『うわああああああああああああああああああああ！』

皆大声を上げながら落下していく。

このままでは地面に激突してお陀仏である。

だが、其処へ一隻の次元航行船が現れ一同を落下から救った。

「ダツハツハツハ！どうやら間に合ったようじゃのお」

「本当よねえ、全くDフォースの子達は後先考えない子が多いから」

「愚痴るのはその辺にしておきなさい、クアットロ」

その航行船を動かしていたと思われるウーノ、クアットロ、そして十蔵がそれぞれ会話をしていた。

その船のお陰でどうにか助かった一同だが、再び機鋼城を見上げる。其処には怪しく光り輝く機鋼城、そしてその中から出て来た禍々しい魔神の姿があった。

『聞けい！愚かな愚民共よ！貴様等はワシの申し出を断りわしに逆らった！よって、貴様等は今から処分する！一人残さずにだ！この星と共に滅するが良い！ウハハハハハハハハ！』

勝ち誇ったかのようにランドウは笑った。

それに対しエリオ達は只悔しがるしか出来なかった。
そんなアイアンカイザーに対しマジンガー軍団、そしてゲッターと
大空魔竜戦隊が押し寄せる。

「何だあいつは？」

「何処かマジンガーに似てるけど・・・違うぞ」

「気をつけて！あの巨人からは想像出来ないエネルギーが検出されてるわ」

「私達のロボットの軽く数十倍はあるわよ」

マジンガー軍団を扱っていたメンバーがそれぞれ会話を交わす。

それは正しく恐ろしい者でもあった。

「フハハハハ！羽虫ドモが！蹴散らしてくれるわ！」

ランドウが強きに叫ぶ。

すると両腕から突如ガトリング砲が現れ、其処から雨の如く弾丸がばら撒かれる。

「不味い！全機散開！」

大出が叫び一斉に散る。

だが、間に合わなかった他のロボットは瞬間に蜂の巣にされて爆散した。

「な、何て威力だ！」

東がそれを見てゾツとしていた。

「野郎！」

サンシローが叫びガイキングがアイアンカイザーに向って殴りかかる。

だが、その拳をアイアンカイザーは涼しい顔で受け止めた。

「噂のガイキングもこの程度か？弱いのお」

ランドウが笑みを浮かべる。

そしてそのままガイキングを蹴り飛ばした。

「グハッ！」

声を上げるサンシローであったがすぐに体制を戻す。

だが、その時アイアンカイザーは次なる攻撃を行っていた。

両肩から黒い稲妻を放ち、それを辺りにばら撒いたのだ。するとどうだろうか？

突如として機体が皆引っ張られるかのように地面に激突したのだ。

「は、博士！これは・・・」

「重力だ！あのロボットは重力を操る力を持っているんだ」

ピートの言葉に大文字が応える。

「ハッハッハッハッハ！苦しめ苦しめ！貴様等をそのままペシャンコにしてくれるわぁ！」

ランドウが笑いながら圧殺されるメンバーを見ていた。

だが、その時であった。

突如彼方から高速で何かが飛んできた。

かと思うとそれは一瞬の内にアイアンカイザーを殴り飛ばした。

「な、なにい！」

ランドウは驚きながらも自身を殴り飛ばした不届き者を見た。それはアイアンカイザーと同じく禍々しさを持つ巨人であった。だが、そのフォームは何処か見覚えのある姿であった。蝙蝠の様な翼を持ち胸には赤い放熱板。太い手足に特徴的な顔。

間違いなく、それは『マジンカイザー』と同じ姿であった。

最終話 未来へ その1（後書き）

その2へ続く

最終話 未来へ その2

「な、なんなんじゃ・・・あれは！」

突然の乱入者の出現にランドウは驚いていた。

目の前には明らかに悪魔を思わせる姿のマジンガーが居たのだが、そのマジンガーからは一切禍々しさが感じられない。一体何故なのだろうか？

「な、何をしておるのじゃ？デビルマジンガー！貴様はワシの命令を聞いて下に居るゴミ共をさっさと始末するのじゃ！」

「冗談！そんな頼まれたってやらないわよ！」

目の前にマジンガーから女性の声が響いた。
ティアナの声である。

「そうそう、あんたみたいなド悪党の言う事なんか聞きたくないもんね！」

それに続いて今度はスバルの声も響いた。

「な、何じゃ？違う声じゃと？一体どうなっておるのじゃ？」

「二人で操縦しているのよ！このマジンガーはちよつと曰く付きみたいだね、私達二人でしか動かせないみたいなのよね」

操縦席に居るティアナが言う。

操縦席の中は前後のシートが用意されており、今の所スバルが後部座席に、ティアナが前部座席に座っている。

「おのれ・・・つまりは貴様はワシの敵と言う事じゃな！生意気な小娘共め！そんなデビルマジンガーもどきでこのアイアンカイザーを倒せると思うでないわ！」

「だったら試して見る？」

「ほざきおつたな？後悔させてやるわあ！」

ランドウの言葉を皮切りに2体の魔神が激しくぶつかりあう。空中で互いの拳がぶつかり合い辺りが振動する。

空気が震えるのを辺りに居た者達はその肌で感じていた。

その間も激しくぶつかりあう二体。

だが、徐々にだがアイアンカイザーが押されているのが見えていた。

「おのれえ！吹き飛ぶが良い！アイアントルネード！」

「ルストストリイイイム！」

アイアンカイザーが口から猛烈な風を放つ。

それを打ち返すかのようにデビルマジンガーからも猛烈な風が放たれた。

互いから放たれた風は空中でぶつかり合いやがて爆発した。

その威力は凄まじく数分の間閃光が放たれる程であった。

「グッ・・・ならば！」

ランドウが苛立ち操作を行う。

するとアイアンカイザーの腹部に内臓されていたミサイルが姿を現す。

「これだけのミサイルの雨じゃ！マジンガーといえども一溜まりもあるまい！死ねい！」

ランドウが叫びそれと同時に雨の如くミサイルが降り注がれる。それをスバルとティアナは見ていた。だが、二人共慌てた様子は無い。寧ろ余裕である。

「どうする？大技で一気に叩き落す？」

「まさか、此処は私に任せておきなさい」

スバルの問いにティアナが鼻を鳴らす。

すると操縦席から銃型のコントローラーを取り出す。

するとデビルマジンガーも胸に取り付けられた二丁の拳銃を手に持つ。

「ブレストリガー、セット！この数年で上がった腕前、見せてあげるわよ！」

自信たっぷりに言うティアナ。

その瞬間、流れるような動きで空を飛びまわりながら迫り来るミサイルをその手に持った銃の弾丸で撃ち落していく。

それも的確にミサイルの信管を狙ってである。

最早神業とも言える光景であった。

雨の如き降り注いだミサイルがおよそ数十秒の内に全て残骸と化してしまったのだ。

そして目の前には銃口から吹き出る煙を手で振るって払い除けるデビルマジンガーの姿があった。

そして操縦席では笑みを浮かべるティアナが居た。

「ティア、凄おい！何時の間にそんなに腕上げたの？」

「まあ、執務官やってると何時の間にか此処まで腕上がったちゃう物みたいね」

スバルが感心するのに対し少し気恥ずかしそうに頬を掻きながらテイアナは言う。

その面前ではアイアンカイザーに乗ったランドウが憤怒の如き思いで操縦桿を握っていた。

「おのれ・・・おのれおのれおのれええええええええ！射撃戦が駄目なら直接叩き壊してくれるわぁ！」

ランドウが叫び、アイアンカイザーが二本の剣を取り出し猛然と向かって来た。

「接近戦なら私にやらせて！ティア」

「へましないでよスバル」

二人は軽く言葉を交わしあう。

すると操縦席が一回転し、スバルが前部座席に、ティアナが後部座席に移動する。

するとデビルマジンガーも手に持っていたブレストリガーを元の位置に戻す。

そして背中から棒状の武器を取り出す。

「準備は良い？リュウコン」

『何時でも行けるぞ、主よ』

スバルの問いにリュウコンは答える。

そしてデビルマジンガーもまたアイアンカイザーに向かって突進した。

「この剣の錆にしてくれるわぁ！」

「残念だけど、其処は私の距離だよぉ！」

アイアンカイザーの剣が届くよりも前にデビルマジンガーの棍がアイアンカイザーを攻撃した。

最初は脇腹に、そして次に両腕に直接突きを放つ。

その威力の前にアイアンカイザーは思わず持っていた剣を手放してしまう。

「こっからが本番！うりゃうりゃうりゃあああああああ！」

スバルが叫び、それに呼応するかの様にデビルマジンガーが目にも留まらない速さで連続して突きを放ってきたのだ。

その連撃の前にアイアンカイザーは成す術なく全身に食らいそのまま吹き飛ばされる。

吹き飛ばされたアイアンカイザーは新生機鋼城の城壁に叩きつけられる。

「グフウツ・・・お、おのれえ・・・」

吐血するランドウ。

だが、その前では余裕のデビルマジンガーとそれを操縦する二人が居た。

「あはは・・・ちよつとやり過ぎたかなあ？」

「この馬鹿！中にはイクスが居るのよ！イクスにもしもの事があったらどうするつもりなのよ！」

「ご・・・御免」

ティアナの怒声にスバルが縮こまる。

縮こまったスバルは放って置いてティアナはモニター越しにアイアンカイザーを分析する。

何処にイクスが囚われているか調べる為だ。

「分析完了！どうやらイクスは玉座ごと胸部に居るみたいね」

「だったら胸板引き千切ってイクスを取り出した後はあのでっかいお城ごと叩き壊さないかね」

拳を鳴らしながらスバルが操るデビルマシンガーが一気にアイアンカイザーに迫る。

だが、その時二人はありえない者を見た。

それは、人の居ない筈の新生機鋼城の、それもアイアンカイザーの間近に一人の男性が立っていたのだ。

「え？逃げ遅れた人？」

「まさか！だったらあんな所で突っ立つてる訳ないでしょ？」

スバルの問いにティアナが叫ぶ。

その間も二人の視線はその男性に釘付けであった。

すると、男性はゆっくりとした足取りでアイアンカイザーに近づいた。

「き……貴様は……」

「フッフ……ご苦労だったなあ……ドクターキュラス……嫌、今はプロフェッサーランドウだったかな？」

男性は不気味な笑みを浮かべながらアイアンカイザーを、そしてプロフェッサーランドウを見下ろしていた。

その視線に、そしてその男性を見たランドウの顔が一気に強張っていく。

「貴様……何故……何故貴様が此処に居る……トレディア！」

ランドウが叫んだ。
確かに、その男性の名前を呼んだのであった。

『……アディアア……と……』

最終話 未来へ その2 (後書き)

その3へ続く

最終話 未来へ その3

「そんな・・・そんな事が・・・」

無限書庫で調べ物をしていたオットーは恐ろしい物を見つけてしまった。

それは、マリアージュと関連性の高いと言われているトレディアについて調べていた時であった。

彼の資料を見つけて調べていたらそれは恐ろしい物を見つけてしまった。

思わず息を呑むオットー。

其処には正に信じられない真実が記されていた。

「もし、これが本当なら・・・もし、トレディアが生きていたら・・・彼は・・・」

オットーの顔が青ざめる。

だが、今此処には彼女以外誰も居ない。

そう、この真実を知ったのはオットー只一人なのだ。

丁度その頃、スバルとティアナの操るデビルマシンガーとプロフェッサーランドウの操るアイアンカイザー。

その間に割って入るかの様に現れたのは一人の男性であった。

「き・・・貴様・・・貴様はトレディア・・・馬鹿な・・・貴様は確かにわしの手で殺した筈・・・」

「ああ・・・確かに死んださ・・・一度はな」

「何？どういうことだ？」

「ククク・・・分からないのか？お前は俺を利用したみたいだが、最初からお前は俺の手の上で踊っていたに過ぎないのさ」

青ざめた表情のランドウにトレディアは不気味な顔で言う。

「ちよつと、どう言う事よ？私達にも分かるように説明しなさいよ！」

蚊帳の外状態だったティアナ達がトレディアに問い詰める。

するとトレディアの視点がアイアンカイザーからデビルマシンガーに向けられる。

「ほう、それが貴様の出した答えか？やはりな・・・思ったとおりだったよ」

「え？どう言う事？」

「まだ分かってないのか？3年前のあの時、デビルマシンガーは兜甲兎に言った筈だ。『種を撒いた』とな」

「ええ、聞いたわ・・・でもその種であるスバルは自分の意思でデビルの意思を跳ね除けた！もうデビルはこの世に居ないわ！」

勝ち誇ったように言うティアナに対し、トレディアは盛大に笑った。

「ククク・・・全くその通りだ。まさかこつも上手く事が運ぶとはな」

「ど、どう言う意味なの？」

「分からないのか？お前は只の『隠れ蓑』だったんだよ」

その一言を聞いた二人の脳裏に電流が走った衝撃を受けた。

あのスバルが只の隠れ蓑だったと言っただ。

だが、そこで疑問は生まれる。

では、本当の種は一体何処に・・・

「まさか・・・まさか！」

「そう、この俺が本当の『種』だったのさ」

トレディアが自身の胸に手を当てて言う。

その時の笑みはとても不気味であったと言う。

「そんな・・・トレディアが・・・」

その頃、母艦の中でその真実を知ったルネは驚愕した。

「どうしたんだルネ。あのトレディアと知り合いなのか？」

「トレディアは・・・私がまだフォルスに居た頃、両親の居ない私

に戦い方を教えてくれた恩師でもあり・・・また、私にとっては父親でもある人でした・・・ですが、彼は4年前にマリアージュに殺された筈・・・それが何故？」

画面の向こうには見間違える筈のない、トレディアの姿が映し出されていた。

そして、トレディアがスバル達に自身こそが種であると明かしたのだ。

そして、画面の向こうでは信じられない光景が展開していた。

何と、先ほどまで人間だったトレディアの姿が一変して巨大な悪魔の姿となったのだ。

『クカカカカ、頃はよし。マリアージュ共と此処に居るランドウがメタルビーストを用いて多くの人間を殺してくれたお陰で負のエネルギーの充填に事欠かなかったわ』

『貴様・・・最初からワシを利用していたと言うのか？』

『今更気づいたのか？機鋼王と良い貴様と良い、全くこれ程までに利用し易い手駒は居ないぞ』

そう言うと巨大になった魔神はアイアンカイザーを片手で持ち上げる。

『や、止める！何をする気じゃ？』

『折角だ、最後まで俺の役に立たせてやる・・・お前の肉体とそのアイアンカイザーを頂くぞ』

魔神は言う。

すると体が徐々にアイアンカイザーと同化していくのが見えた。

その中で、ランドウは悲痛の叫びを上げた。

ランドウ自身にも魔神の狂気が迫っているのだ。

『ギャアアアアアアアアアアアアアアア！痛い痛い痛い！苦しい
いいいいいいいい！』

『フハハハハ！全てを委ねろ。そうすれば痛みなど感じない。最
も、抗つても貴様の命運は決まっているがなあ』

苦しむランドウに魔神が言う。

そして、間も無くランドウの悲鳴は聞こえなくなった。

目の前には禍々しいオーラを放つアイアンカイザーの姿がある。

スバルとティアナの前に現れた魔神はアイアンカイザーと同化し今
二人の前に立っていた。

「さて、復活を遂げた以上イレギュラーである貴様は用済みだ。俺
の目的の邪魔になるから・・・消えて貰うぞ！」

「好都合ね、此処であんたを倒してこの因縁に決着をつけさせて貰
うわー！」

「そつだよ！もう私はあんたの玩具じゃない！この命は私自身の命
なんだ！」

二人は叫び、それに呼応してデビルマジンガーがアイアンカイザー

に向って殴りかかる。

だが、その拳をアイアンカイザーは涼しい顔で片手で受け止めた。そしてそのままの威力を武器に新生機鋼城の城壁にデビルを叩きつけたのだ。

激しい振動がコクピット一杯に伝わる。

「あうっ！」

「ぐうっ！」

思わず二人が声を上げる。

それから間髪入れずにアイアンカイザーが再び拳を叩きつける。完全に城壁にめり込んだ状態のデビルを残しアイアンカイザーは上空に飛び上がる。

「所詮紛い物等この程度よ・・・死ねい！」

アイアンカイザーが両肩の装甲版を開き其処から黒い稲妻を放つ。それを諸にデビルは浴びてしまう。

「うあああああああ！」

全身に走る激痛に二人は声をあげてしまう。

稲妻を浴びているデビルだが、反撃する事も出来ずなすがままの状態であった。

「待てこの野郎！」

だが、そのアイアンカイザーを後ろから何者かが吹き飛ばした。

「何？」

「ご……號！」

それはゲッター號であった。
幸いまだ動けるゲッター號が助太刀に来たのだ。
吹き飛ばされバランスを崩したアイアンカイザーの隙を縫いゲッター號がめり込んだデビルを引っ張り出す。

「無事か？ティアナ」

「な、何とかねえ……」

號の心配にティアナは笑って応える。

「ちよつとお！私の心配はないのお？」

「お前は心配要らないだろう。元から頑丈なんだし」

「酷っ！號つてばティアナが好きだからってティアナばっか心配してえ」

頬を膨らませて怒るスバルだが號は大して気にしていない。

「ふん、今更雑魚が一匹増えたところで結果は同じ事よ」

「何おう！俺を雑魚呼ばわりするのは俺を倒してからにしゃがれ！」

いきなりアイアンカイザーに雑魚呼ばわりされた為、號が怒りを露にする。

そんな號の操縦するゲッターロボの隣にティアナ達のデビルマシンガーが並び立つ。

「號、相手は貴方だけじゃ勝てない相手よ！此処は協力して戦いましょう」

「ああ、分かった」

ティアナの提案に號は頷く。
そしてデビルマジンガーは構えてゲッター號はソードトマホークを
取り出す。
アイアンカイザーはそんな2体の前に悠然と立っていた。
明らかにその姿からは自信を感じ取れた。
2対1でも充分勝てる。
そう思わせる風貌である。

「俺が先に行く。お前等はティアナは援護の方を頼むぜえ！」

「分かったわ、けど無理しないでよね」

「え？何・・・俺の事心配してくれんのか？ティアナ」

モニター越しに號の笑みが伝わってくる。

その笑みを見ると途端にティアナの緊張感の糸が途切れるのを感じ
た。

だが、同時に苛立ちも感じるのであったりする。

「馬鹿！何言ってるのよ！翔や凱の事を心配してるのよ！あなたの
事なんかこれっぽっちも心配してなんかないからね」

「冷てえなあ。俺達恋人同士だろう？もうちっとは俺の事労わって
くれよお」

「うっさい！さっさと行け！」

「へいへい」

頷きながらもソードトマホークを構えてアイアンカイザーに向い立
つゲッター號。

「下らん三文芝居に付き合うつもりはない。貴様等纏めて地獄へ落
ちろー！」

「うつせえ！落ちるのはてめえだ！」

號が叫ぶ。

それに呼応してゲッターがソードトマホークを振るう。

アイアンカイザーはそれをあろう事か素手で受け止めてしまったのだ。

どうやらアイアンカイザーの装甲はゲッターのソードトマホークでは破壊出来そうにないようだ。

「無駄だ！その程度の鈍らでは俺の体に傷をつけられんぞ」

「だろうな。じゃあこいつはどうだ？」

そう言った。

その直後、アイアンカイザーの目の前からゲッター號の姿が消える。

その後ろに居たのはデビルマシンガーであった。

両腕をアイアンカイザーに向けて構えている。

その腕の肘から前部分が高速で回転しだす。

そして放たれた。

真っ直ぐアイアンカイザーに向って飛んでいく。

正に連携プレイであった。

放たれたと思っただ直後にはアイアンカイザーの両肩にはデビルの放った両腕が叩きつけられていた。

そしてそのままアイアンカイザーの両腕を吹き飛ばす。

そのまま天を伝って両腕がデビルの元へ戻る。

砕かれたアイアンカイザーの腕の部分からは流血の如く黒いオイルが流れ出す。

「やったぜ！腕が無けりゃこいつあ只の木偶の坊だ！」

「油断しないで號！それにあの中にはイクスが捕まってるのよ！間違っても撃破しちゃう駄目だからね」

ティアナが釘を刺す。

それに號は頷いた。

だが、その時アイアンカイザーに変化が起こった。砕けた筈のアイアンカイザーの腕の部分からは無数の触手の様な物が生え出した。それがやがて腕の形を成し、やがて腕となった。

しかも以前よりも太いう腕に鋭い爪を生やしていたのだ。

「な！再生したつてのか？」

「無駄だと言っただろう？愚かな人間共め」

「何・・・あれ・・・凄く、恐ろしいよ」

「翔の言うとおりだ。自分もこれ程恐ろしい思いをしたのはあの時以来だ」

目の前にアイアンカイザーを見た時五人の脳裏にはあの時の戦いが浮かび上がった。

3年前のオペレーションダイナミックウォーズの際に甲児が戦った真デビルマシンガーである。

モニター越しではあったがその威圧感は充分伝わっていた。

それが今は目の前に居るのだ。

その威圧感は半端なものではない。

「號・・・僕達・・・あいつに勝てるの？」

「馬鹿野郎！弱気になるな！俺達がコイツを倒さなきゃミッドは終りなんだ！気合入れろよ皆」

弱気になるメンバーに號が檄を送る。

だが、その號の強気すらかき消すかの如くアイアンカイザーの攻撃が始まった。

「さっきのお返しだ！二人揃って食らえ！」

そう言うとアイアンカイザーの鋭い爪を生やした腕が唸りを上げて飛んできた。

轟音と共にその両腕がゲッター號とデビルマシンガーに向かって来る。

その右腕はゲッター號の左腕を切り裂き、左腕はデビルマシンガーの右脇腹を切り裂いた。

恐ろしい力である。

あのデビルの装甲ですら紙の様に切り裂いてしまつのだ。

それ程恐ろしい敵が目の前に居るのだ。

「まだまだこれからだぞお」

腕を戻してすぐにアイアンカイザーは向かって来た。

それも恐ろしい速度である。

ゲッター號とデビルマシンガーの間に割って入るようにつ突っ込んできたアイアンカイザーはそのままデビルとゲッターの頭部を掴みそのままのスピードで新生機鋼城の城壁に叩きつけた。

『うああー！』

皆が声をあげる。

それ程の衝撃が伝わつたのだ。

更に飛び上がると、アイアンカイザーは装填されていたミサイル全てをゲッターとデビルに向けて放つ。

夥しい程の爆煙と衝撃。

それらが一気に辺りに広がった。

「フハハハハ！碎ける！碎けてしまえい！」

アイアンカイザーに寄生したトレディアが笑う。
やがて爆煙が晴れる。

其処には傷だらけになりボロボロの状態になってしまったゲッターとデビルの姿があった。

「ぐ……そお……」

額から血を流し脇腹を抑えながら號が唸った。

抑える脇腹にはコクピットのパーツであろう物の破片が突き刺さっていた。

其処から血が止め処なく流れ出ている。

『ご、號……生きてる?』

『生きてたら返事しろ……號!』

「ば、馬鹿野郎!勝手に人の事を殺すな……生きてるよ……この通り……な」

モニターに映る同様にボロボロの翔と凱に號は笑って言う。

だが、號の場合笑っていられる状態ではなかった。

その証拠の顔色がかなり青い。

それはティアナとスバルも言えた。

「スバル……生きてる?」

「な……何とか……でも、腕が動かない」

スバルが動かない肩を抑えて呟く。

どうやら先の攻撃の際に負傷してしまったようだ。

「あなたは腕か……あたしは足が動かないわ……さっきの攻撃

の際の爆発で・・・足をやられちゃってね」

そう言ってるティアナの足はコクピット内の爆発により負傷してしまい動かせない状態になっていた。かなり危険な状態でもある。

「ククク、さて・・・そろそろ終りにさせて貰うとするかあ！」

トレディアが言う。

そしてアイアンカイザーの頭上に黒く巨大なエネルギーの塊を作り出す。

恐らくそれを機鋼城ごとぶつけようと言うのだろう。

もしあれがそのまま機鋼城にぶつかってしまえばそれこそレリック全てが起爆してしまいミッド全域に被害が出てしまう事は明白である。

止めなければならぬ。

だが、デビルマジンガーもゲッター號も既に持てる力を尽くしてしまい打つ手無しの状態であった。

「畜生・・・此処まで来て・・・これで終りかよ」

「悔しいわね・・・私達じゃ・・・甲児さんの様にはいかないのね・・・」

「御免・・・皆・・・」

五人がそれぞれ諦めの表情が浮かび上がる。だが、その時であった。

【諦めないで下さい。皆さん】

皆の脳裏に声が響いた。

それはイクスの声であった。
イクスが五人に声を送っているのだ。

「この声・・・イクス！イクスなの？」

【はい、私は今アイアンカイザーのコアの中に居ます。それで、一時的にですがアイアンカイザーの動きを封じることが出来ます】

「ほ、本当なのか？」

號が尋ねる。

もしそれが出来ればかなりのチャンスだ。

【はい、ですが・・・そうすれば私はコアと直結してしまい出られなくなります】

「そ、そんなあ！そんなの駄目だよ！イクス・・・イクスは絶対に助け出すから」

【ですが、もう他に方法はありません・・・貴方達は動かなくなつたアイアンカイザーを機鋼城の動力炉まで運んで下さい。そして、其処で全てのエネルギーを叩きつけるんです。そうすれば私が機鋼城ごとアイアンカイザーとれリックを次元の彼方に飛ばします】

「他に・・・手は無いのね？」

遭えてティアナは尋ねた。

それに対し、勿論の如くイクスは頷く。

それを聞いたティアナは覚悟を決めた。

「スバル。合図が来たら最大出力で行くわよ」

「しょ、正気なのティア！もしそんな事したらイクスの命が・・・ティアはイクスを助けたくないの？」

「助きたいわよ！でも、他の方法が無いのよ！甲児さん達は次元の外に居てこっちに来れないし、大空魔竜も中破して動けない・・・」

今戦えるのはもう私達しか居ないの……だから……覚悟を決めなさい」

何時に無く厳しい目つきでティアナが言う。

その目を見たスバルが息を呑んだ。

最早この手しかない。

覚悟を決めるしかない。

そう悟ったスバルの肩から力が抜けた。

そして数回深呼吸をする。

「分かった……やる」

「よし、それでこそ私の相棒よ」

ティアナはスバルに向かって親指を立てる。

その時のスバルの目は涙で滲んでいた。

「聞いたでしょ？ 號」

『ああ、だが本当に良いのか？』

「ええ、他に手が無い以上……この手でいくしかないわ」

『そうか……お前が決めたんならそれに付き合っぜ』

號は快く頷いてくれた。

それを聞いて少しホツとする。

そしてゲッター號とデビルはアイアンカイザーに並び立つように空に舞い上がった。

「愚かな、まだ諦めないと見えるなあ」

「当たり前だ！ 人間ってのはしぶとい生き物なんだぜ」

「そう言う事。良く覚えておきなさい」

「下らん、ならばその人間を全て駆除するまでよお！」

トレディアアが叫びエネルギーの玉を投げつけようとした・・・正にその時であった。

突如アイアンカイザーの動きが止まった。

イクスだ。

イクスがコアの活動を一時的に止めたのだ。

だが、その時のイクスの体には無数のコードが突き刺さっている。今、イクスはアイアンカイザーの同化しているのだ。

「ぐう・・・うううう！」

イクスの全身に激しい痛みが走る。

アイアンカイザーの拒絶反応のせいである。

イクスは歯を食い縛りその痛みに耐える。

「スバル・・・さん・・・ティアナ・・・さん・・・ゲッターの・・・皆さん・・・早く！・・・早く！」

願うようにイクスが叫ぶ。

「行くぞ！」

「ええ！」

互いに頷きゲッターとデビルはそれぞれアイアンカイザーを掴む。そしてそのまま新生機鋼城へと突っ込んでいく。

「な、何を馬鹿な真似をする気だ！止める！止めるおおお！」

「うつせえ！てめえは黙ってみてろ！」

「そつよ、私達人類の最後の足掻き・・・特と見て為さい！」

號とティアナが叫びそのまま機鋼城の城壁を破り中に入っていく。壁を破りその先に辿り着いたのは機鋼城の動力炉であった。その動力炉にアイアンカイザーを叩きつける。

「ぐおおああ！貴様等・・・まさか・・・だが、そんな事をすればミッドは救えても貴様等も吹き飛ばすぞ！」

「へっ・・・覚悟はとつくに出来てるさ」

「私達の命でミッドが救えるって言つのなら・・・」

「安いもんだよ」

「僕もそう思うよ」

「自分も異論はない」

五人は皆頷く。

そして、ゲッター號とデビルマシンガーそれぞれがエネルギーを最大出力にまで上げていく。

「これで最後よ！」

「跡形も無く吹き飛びやがれ！」

『インフェルノブラスター！』

『ゲッタービーム！』

窓の外には新生機鋼城が突如眩い閃光を放つのが見えた。それは視界を瞬く間に真っ白に染めていく程の強い光であった。皆は一斉に目元を隠す。

「おい、どうなったんだよ！イクスは・・・イクスはどうなったんだ？」

「ランスター執務官！無事でしたら応答して下さい！」

「スバル！スバル！・・・お姉ちゃんの声に伝えて！」

「號！翔！凱！ゲッターチーム！貴様等応答しろ！」

皆が通信機に向かって叫ぶ。

だが、彼等の叫びも空しく閃光が止んだ時、其処には何も無くなっていた。

只、夜明けを告げる日の出が其処にあっただけであった。

*
*
*

こうして、ミッドを揺るがした第2の戦い……その名も『マリアー
ージュ事件』は幕を閉じた。

だが……その犠牲は……余りにも大きかった……

第15話
終

最終話 未来へ その3 (後書き)

次回はいよいよ感動のエピローグです

エピソード（前書き）

長い間有難う御座いました
これにて新章！マリアージュ編も完結いたします

エピソード

マリアージュ事件が集結して早数ヶ月・・・

辺りではメタルビーストやマリアージュにより破壊された土地の復興で人々が目まぐるしく動いているのが見える。

人の力とは凄まじく、どんなに破壊されようとすぐに立ち直ろうとするのだ。

それこそが人間の強さなのかも知れない。

だが、建物は直せても、死んだ人は戻らない。

物は作ればまた再生できるが、人は再生出来ないのだ。

此処はミッドチルダの墓場。

其処にはルネが墓の前に立っていた。

「マリアージュ事件以降、墓参りに中々来れず申し訳ありませんでした」

墓に一言侘びを入れて、そつと花束を置く。

今のルネの服装は管理局の制服ではなく私服姿である。

と、言うのも、あの戦いの後、トレディアとの関係を知った上層部はルネをこの事件の重要参考人として身柄を拘束しようとしたのだが、それをDフォースのメンバー、そしてクロノ提督の計らいで管理局の除隊と言う形で済まされたのである。

だが、何時また管理局の魔の手が彼女に襲い掛かるか分からないのである。

その為、ルネはこのミッドを去る事を決めたのだ。

「これから・・・私はフォルスに向います。紛争地帯とは言え、あそこは私の故郷です。出来れば、復興の手助けをしたいんです」

墓に語りかけるように呟くルネ。

そんな彼女の瞳は強く輝いていた。

希望に向って突き進める強い目。

そんな目を彼女はしていたのだ。

「心配ですか？大丈夫です。私一人で行く訳じゃありません。心強い『彼』と一緒に来てくれます」

ルネがそう言って振り返る。

其処にはルネの言う『彼』が立っていた。

「よう、こうして会うのは久しぶりって奴かな？」

其処には何故か正装した姿の直次郎が立っていた。黒いスーツにネクタイを締めて、何故か頬を赤く染めながら頭を掻いている。

「どうやら柄じゃないのだろう。」

「ま、安心して寝ててくれよ。俺と一緒に居るんだ。こいつにやあ傷一つつけさせねえよ」

「有難う御座います。直次郎さん」

墓に向って宣言する直次郎に向ってルネは微笑む。それを見た直次郎もまた笑みを浮かべた。

「さて、んじゃそろそろ行くとすつかあ・・・次の便逃すと次は何時来るか分からねえからな」

「はい、そうですね」

時計を見て直次郎が呟く。

それにルネも頷き立ち上がり、墓を後にする。

ふと、ルネは振り返り再び墓を見た。

其処には墓の主である人物の文字が刻まれている。

その人物の文字を見ながらルネは別れの言葉を述べた。

「行って来ます・・・『トレディア・トラージェ』・・・親愛なる我が恩師よ」

戦いを終えた者達が皆力強く明日に向って歩みを進めている。
それはここでも同じである。

「どうした？お前等の実力はそんな物か？」

此処Dフォースの隊舎前の広場では相変わらず隊長のトーレの檄が
飛ぶ。

激戦を繰り広げたと云うのに彼女はすぐさま責務に戻ったのだ。
自分に休んでる暇などない。

少しでもあの男に追いつきたい。

そんな思い一心でトーレは仕事に打ち込んでいるのだ。

だが、打ち込まれている新人達は溜まった物じゃないのは事実であ
ったりする。

そして、その中には同メンバーのノーヴェとウェンディの姿もあっ
た。

「ぜえ……ぜえ……つたく、トーレ姉、最近熱入り過ぎじゃね
えの？」

「しょ……しょうがないツスよ。トーレ姉つてば最近更に熱くな
つちやったまいたいツスから」

汗だくになりへ口へ口状態の二人がトーレを見て愚痴る。
だが、その光景をトーレが見逃す筈がなかった。

「お前等！愚痴る暇があるならもう200周走って来い！」

「「鬼い！」」

トーレに向って叫ぶ二人。
今日もDフォースでは新人達のしごきが続いていた。

「しっかりとお主も頑丈じゃのお、マリアージュに胴体突き刺された
つちゅうのに生きとるのは凄まじいわい」

「フツ、私はサイボーグですからね。そう簡単には死にませんよ」

十蔵の愚痴に剣造がフツと笑う。

戦いの後剣造はすぐさまメディカルルームへ直行となった。

何しろ胴体には風穴が開いている上にまた片腕がなくなっていたの
だから。

「で、それは分かるのですが・・・何故私が此処に？」

剣造が疑問に思うのも無理はない。

何故なら今剣造が居るのは凶悪犯を収容する留置所の中なのだ。

「あらあん、だってドクターこうでもしないと無理するじゃないで
すかあ」

「これも休養です。暫く其処で休んで下さい。幸い設備は整ってい
ますので不自由はないと思います」

「だからって留置所はないだろう。せめて病室とかはないのか？」

「お主が逃げ出したり無理しないようにと言つウーノちゃんの計らいじゃ。お主は黙つて其処で療養しとれ」
「はあ……」

十蔵の言葉に仕方なく頷く剣造であった。

結局剣造は数ヶ月の間傷が自然完治するまで留置所に入れられる事となった。

本当ならパーツ交換で済むのだが普段から働き詰めだった為休養も兼ねての事らしい。

やがて十蔵たちも帰り中には剣造一人となった。

特にやる事もないので剣造はしかたなくベットに横になり天井を見上げる。

すると、脳裏に浮ぶのは幼くして散っていったはがねの事であった。

（はがね……約束は守ろう。次に名前の無い子を引き取った時には……その子にはがねと名づける。だから……安心して眠ってくれ）

心の中でそう剣造は呟いた。

すると、そんな剣造に徐々に睡魔が襲い掛かって来た。

ゆっくりと、ゆっくりと……剣造は目蓋を閉じる。

「そうですか、大空魔竜戦隊は正式にDフォースに入隊するのですね？」

「ええ、この世界に来たのも何かの縁でしょう。私達の力がお役に立てるのでしたら是非ご協力させて下さい」

此処聖王教会では今騎士カリム、シャツハと大文字博士が話しをしていた。

内容は大空魔竜の事についてである。

時空管理局でもあれ程の高性能な戦艦は保有しておらず、やはり喉から手が出るほど欲しいのは確実である。

だが、あくまで大空魔竜は人類の防衛の要であり戦争の道具ではない。

しかしこのままにしておけば確実に接收されるのは目に見えている。其処で思いついたのがDフォースへの入隊である。

現在人手不足のDフォースには嬉しい話でもあった。

「それにしても、私も最初あの大空魔竜を見た時には肝を冷やしました」

「いやあ、驚かせて申し訳ない。しかし我々も貴方達の使う魔法とやらを始めて見た際には驚きましたよ」

部屋には三人の笑い声が響き渡っていた。

場所は変わり、大空魔竜の格納庫では同様に話が行われていた。

「へえ、って事は皆Dフォースの仲間入りって事になるんだ」

「ああ、元の世界に帰れるみたいだけど俺達コンバットフォースの力がこの世界に役立つってんなら喜んで力を貸すぜ」

セインの目の前でサンシローが胸を叩く。

「僕達も協力しますよ」

「ああ、この世界も満更悪くないしな」

「へへ、それに可愛い子ちゃんが多いし、俺嬉しい」

ブンタとリーも乗り気でありヤマガタケに至っては嬉しさの余り鼻の下が延びまくっていた。

「あゝあ、だらしのないなあヤマガタケの兄ちゃんは。鼻の下なんか伸ばしちゃって」

「フフ、良いじゃない。凄く嬉しそうなんだから」

そんなヤマガタケを見てハチローとミドリが笑みを浮かべている。

「それじゃ、これから共に戦う仲間になるんですね」

「これからも宜しくお願いします」

オットーとデイドが丁寧にコンバットフォースのメンバーに言葉を交わす。

それに皆が応える。

こうして、新たな仲間が加わるのであった。

出合いがあれば別れもある。

それは必然なのである。

「そうか、どうしても行ってしまうんだな」

「ああ、俺の居場所は此処じゃない・・・俺はやはり戦いの場こそ相応しいからな」

此処はゼストとバイオレンスジャックが始めて出合った場所である。あれからジャックはゼストの誘いを断り次元世界を渡り歩く事を決めた。

平和な世界は彼には余り馴染まないようだ。

それにはゼストは少し残念そうであったが仕方ないと思う事にした。

「もし、また会えた時には、一杯奢ろう」

「フツ、楽しみにしているぞ」

そう言い互いに握手を交わす。

そんな二人に季節の変わり目を伝えるかの様にそよ風が吹き付ける。その二人を遠くからルーテシアとメガー又親子は見詰めていた。

「男の人って良いなあ、ああして友情を深められるんだから」

「何言ってるの？貴方ももう少ししたら運命の人との出会いがあるのよ」

「え？そうなの？」

疑問に思うルーテシアにメガー又はコクリと頷いた。

「違えねえや。ルールーって結構美人だからその辺の男共が群がるぜえきつと」

上空に居たアギトが笑って言う。

「ええ、それはちょっとやだなあ」

アギトの言い分にルーテシアは少し嫌そうな顔をした。

それに再び笑みを浮かべる一同。

そんな一同の横でガリユーは只じっと立っていた。

青空の下、時は平等に進んでいく。

此処はミッドチルダ国際空港。

其処には今次元航行船が出港準備を進めている。

そして、其処には仲間の旅立ちを見送ろうとメンバーが揃っていた。

「本当に良いのか？菊の助よ」

「ああ？何がだよ親父」

空港の中であばしり一家大黒柱である駄エ門は菊の助に尋ねた。

「お主、エリオ殿の事が好いとおったじゃろう？別れになって
も良いのか？」

「へッ、良いんだよ。これが今生の別れって訳じゃねえし・・・そ
れに、アイツには俺よりもっとお似合いの奴が居るからよ」

菊の助が鼻を擦りながら言う。

それを見た駄工門はニツコリと笑う。

するとそんな菊の助の後ろでは道行く女性客からパンツをせしめる五工門の姿があった。

「こるああ！何をしとるか貴様はあ！」

「だあってえ今日でお別れになるんなら今の内に此処の可愛い子ちゃん達のパンチ貰つとかないと損じゃない」

「ふざけんな糞兄貴！最後までらいビシツとしやがれ！」

怒った菊の助に殴り倒されて蹲る五工門。

その光景を見て吉三は呆れ果てていた。

「情けねえなあ、これが俺の兄貴なのかよ」

「まあそう言うなつての」

呆れる吉三の頭に直次郎が手を乗せる。

その隣には勿論ルネの姿があった。

「うーうー、良いなあ直次郎はあ。そんな可愛い子ちゃんと一緒にいられるんだからさあ、僕ちゃんも可愛い子と一緒にあんな事やこんな事したあい！」

「てめえはそのスケベ心を失くせ！」

暴れる五工門にそう言う直次郎。

そして、それを見てメンバーの皆が笑みを浮かべていた。

「まったく、まるでくろがね屋の連中みたいだぜ」

「あら、私あの人達結構好きよ」

ヴァイスが彼等を見て呆れた顔になっている横でドゥーエが率直な意見を述べる。

「極悪一家とは聞いていたが、案外親しみ易い連中だったな」
「そうですね、ですが・・・それだけに別れが残念です」

チンクは彼等を見て苦笑いを浮かべ、セツテは別れを惜しんでいた。

「さて、それじゃ行く前に・・・ほれ、吉三」
「あん？何だよ親父」

吉三の背中を駄エ門が押す。
それに難癖をつける吉三。

「何言つとる。折角なんじゃ、彼女を誘ってきたらどうじゃ？」
「え？良いよ。別に・・・」
「馬鹿もん！男ならビシツと決めてみせい！でなけりやお主一生後悔するぞ！ほれ早く行けい！」
「へいへい」

駄エ門の檄に吉三はぶっきらぼうに答える。
そしてそのままの足取りでメンバーの中を掻き分けていく。
その先には一人の少女が立っていた。
年は吉三と同じかそれより少し小さい位の綺麗な少女である。

「よ、よう・・・来てくれたんだな」
「・・・うん」

少女と吉三が互いに頬を染めながら話をしていった。

「ど、どうよ・・・体の方は」

「問題ないよ。あれから私の中にはもうマリアージュ関連の物はなくなっちゃって、今はもう普通の女の子になりましたから」

「そっか・・・そりゃ良かったぜ」

少女の言葉にホッとする吉三。

そして、数回深呼吸をして再び少女を見る。

「あ、あのよお・・・お前、住む宛てとか、その・・・育ててくれる宛てとかあるのか？」

「え？・・・今の所は無いです。暫く施設暮らしだと思っ」

「そっか・・・だったらよお・・・そのお・・・ええと・・・」

指をもじもじさせて答えを渋る吉三。

回りでは早く応えろと視線で送る物も居る。

そして、意を決して吉三が口を開いた。

「良かったら・・・お前も一緒に来ないか？」

「・・・良いの？」

「ああ、何しろ俺の家族って皆血の気が多いからよお、お前みたいな可愛い子ちゃんが居た方が潤いがあるって言うか落ち着くって感じなんだよなあ」

「フフツ・・・面白いね」

「な、笑う事あねえだろう！」

顔を真っ赤にして怒る吉三を見て少女はまた笑い出した。

それには吉三もタジタジである。

爆発物を扱わせたら右に出るものが居ない吉三でも少女の前だとまるで子供である。

「有難う、吉三君……でも、それだったら……ちゃんと私の事、名前で呼んで」

「あ、ああ……一緒に行こうぜ………イクス」
「はい」

吉三が名前を呼びそつと手を差し伸ばす。

それをイクスがそつと握り締めた。

二人の小さな手が今硬く握り合ったのである。

「若いつて良いねえ、エリオ君」

「キャ、キャロ……僕達も充分若いと思うけど(汗)」

キャロの言葉にエリオは苦笑いを浮かべていた。

やがて、別れが済みあばしり一家達とバイオレンスジャックは次元航行船に乗った。

「さて、これで俺も親父達とはお別れだな」

「わしらはきままな旅じゃ。ま、観光みたいなもんじゃのお」

「うひひ、お金なら管理局からたんまり貰っちゃったもんねえん。もう一生遊んで暮らせるもんねえん」

五エ門がそう言つて通帳を見せる。
其処には収まりきらないほどの額が記名されていた。
勿論先の戦いの功績である。

「じゃが、遊んではばかりではいかんぞお！堅気になつたからには外に出て働くのもまた人の道なのじゃ」

「面倒臭えなあ」

「頑張ろつ。吉三君」

「お、おう・・・まあ、イクスがそう言うなら頑張つてみるか」

「何でえ吉三。イクス絡みだとなことんお前弱いなあ」

「うっせえ！」

菊の助に小突かれて不貞腐れる吉三。

それを見て笑う一行である。

「ん？そう言えば如月の娘はどうしたんだ？」

ジャックが辺りを見回していた。

「さあなあ、戦いが終わったときには置手紙一枚置いてどっかに行つちまつてたし」

菊の助がそう言つてその時の手紙をジャックに見せる。
其処にはこう書いてあった。

『皆と戦えた事を私は誇りに思います。』

ですが、この世の悪が減びた訳じゃありません。

私は別の世界に居るであろう悪を倒しに一人旅立ちます。

何時かまた会える事を楽しみに待っています。

如月八二一』

そう書いてあったのだ。

「まるで嵐の様な娘だな」

「そうじゃのお」

一同がそう言い会い懐かしむ。
すると、突然艦内放送が鳴り響いた。

『皆様、おくつろぎ中のところ誠に申し訳ありませんが、どうぞ窓の外をご覧になって下さい』

と、放送が流れたのだ。

なんだなんだと客達が窓の外を見る。

勿論あばしり一家やジャック達も同様であった。
すると其処には彼等を驚かす光景が映っていた。

「へ、あいつら・・・凄え見送りの仕方しやがって」

菊の助が笑う。

そんな彼女の視線の先には、デビルマジンガー、ゲッターロボ號、テキサスマックの三機のロボットが手を振って見送りをしていたの

だ。

それはこれからの彼等の旅の無事を祈るのと同時に、またいずれ会える日を楽しみと言う意味での現れなのかも知れない。

それを見た一同は笑顔でそれを見送った。

そして、やがて次元航行船は次元の彼方へと消えていった。

その光景を彼等が見送るのであった。

戦いは終わった。

だが、この世の悪が滅んだ訳ではない。

悪は人知れず牙を研ぎ澄ませ、君たちに襲い掛かってくるだろう。

だが、悪を恐れてはいけない。

悪がある所、必ず正義があるのだ。

皆が悪に屈しない限り、正義は必ず応えてくれる。

人は、無限の可能性を秘めているのだ。

そして、神にも、悪魔にもなれる存在こそが・・・もしかしたら人間なのかも知れない。

「どうでも良いけど今回甲児さん達やなのはさん達出番殆どなかったね」

「こらスバル！何余計な事言ってるのよ！」

『魔法少女リリカルなのはDYNAMIC』

新章！マリアージュ編』

完

此処では何故スバル達が生きていたかは記載しません。

いずれ『ショートDYNAMIC』の方に載せますので楽しみに

また、あとがきで新小説の告知を行いますので楽しみに

エピローグ（後書き）

新小説予告

リリカル魔神伝説 第3弾

戦いは終わった

だが

伝説は終わらない！

新たな敵・・・その名は『魔神獣』

驚異的な力を持つ彼等に挑むのは若き少年と『Z』の名を受け継ぐ
魔神

今、新たな魔神伝説が幕を開ける。

『真マジンガー 衝撃! Force 編』

近日公開

お楽しみに

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2299r/>

魔法少女リリカルなのはDYNAMIC 新章！マリアージュ編

2011年8月27日15時37分発行